亡国の奴隷王女

シオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
亡国の奴隷王女

【Ｎコード】
Ｎ１４３６Ｗ

【作者名】
シオ

【あらすじ】
異世界トリップ落ちた先は何と王妃の腹の中！？
王女は予言を残し、予言は達成されリニムは滅んだ。
そしてひょんなことからオルキスの王子にリニムの幼き魔女と噂される魔女が自分であることがばれてしまう。
「民を助けたくば、我が奴隷となるがいい」
美少女の中にいるのは青年剣士？
俺が王女なんて冗談じゃない！奴隷だってまっぴらだ！
第二章、砂漠の王国、王都陥落編入りました。

1（悪魔の子）

太古からその国はあると言われている、深緑の国リニム。
国の回りは緑が豊かに生い茂りはするが、決してその大地は住みやすく豊かとは言い難い大地が広がっている。
地盤は固く、田畑を耕すのも難しい大地。それでいて柔らかな土は全て木々が生い茂り、我がものであるとその土地を、全て覆ってしまっているのだ。
木々を伐採してしまうのは容易だろうが、果たしてそれでも良いものか――リニムはその木々らに守られるようにしてひっそりとある国である。
そこは迷いの森。決して他国の者に易く攻め入らせないようにと築かれた天然の砦だった。
だからこそリニムの民はどんなにその土地が欲しかろうと、決して森を切り裂いて土地を得ようとはしない。
天然の要塞と化した迷いの森に覆われたリニム、その周囲を取り囲むようにしているのは険しい山々だ。まるで剣山にも見える鋭利な山々がそびえたっていた。
その山に背後を守られ前面は迷いの森に守られ、リニムはひっそりとだが確実に、栄え続けてきた。
この大陸で最も栄え続けてきた歴史ある国、それこそがリニム王家、そしてリニムという小国家なのである。

今日はそのリニムの王女の生誕祭になる。
都は大いに賑わい、どこも活気づいていた。
何せリニムでは、王族は五つの生誕祭を迎えて初めて名を冠され、一人前の王族と認められるのだ。
新たな主を抱けるとあってか、民はどの顔も嬉しげに華やいだ笑みを浮かべていた。男たちは酒を浴びる様に飲み、女達は歌い、踊

る。
周辺諸国によるリニムへの包囲網が着々と築かれつつあるにも関わらず、国中がその日一日、明るい話題で溢れ返っていた。
まるでそのことを頭から振り払おうとするように。

祭壇の前に引き出されたのは今日、五つの誕生日を迎えるリニムの王女だ。
彼女にまだ名はない。
今日、今まさに名を冠される王女は、そのためか緊張した面持ちをしていた。
貴族の男は王女の小さな背中を見つめ、細い猫の髭のような髭を撫でつけ口を開いた。きらきらしい衣装も相まって、そうした仕草が妙にしっくりときていた。

「盲目の王女と言うことですからな、さぞ魔力は高いのでしょうな」
「ええ。これでリニムの勝利は確固たるものと決まりました」

開戦間近と言うこともあってか、貴族たちは王女に希望を見出そうとしているようだ。
王女を見守る姿は全員、誇らしげであった。
ただし、それはただ一人だけ、王妃を除いてだったが。
この国では周辺諸国の者達よりも、魔力を持つものが数多く存在していた。
その中でも王家が特別の力を持つのはこの国の者であれば説明されるまでもなく知りえている事実だった。
彼ら王家の者達はその魔力の質もさることながら、その大きさも他の類を見ないまでに桁はずれのものだった。
現王もその前の王も、魔力は途轍もないほどのものを持っていた。

更にこの話はこのリニムにのみ伝わる話であるが――魔力とは、身体の欠損を持つものにそれを補うためになのか、神から更に欠損部位を補ってあまりあるほどの巨大な魔力を授けられるとの言い伝えがあった。そしてそれは今まで、外れたことのない事実でもあったのだ。

王家、そして盲目として生まれてきたこの王女に、それはもう、国中の民どころか、王もそうだ――嫌が応にも国中の期待は高まっていた。

盲目と言うこともあってか、手を引かれ、祭壇を上がる王女の姿はどこか頼りなく映る。

だがそれも、強大な魔力を秘めているとなれば別だ。これよりもいつ開戦するか分からないとなれば、戦力となる人間は弱い五つの王女であろうとも、必要だ。

他国ならばいざ知らずここリニムには、魔力さえ供給出来る人間さえいれば、他国の有象無象など、一斉に薙ぎ払うことの出来る『武器』がある。だからこそ、王女の秘めた魔力そのものが、今、国中から望まれていたのだ。

兵器として必要とされる王女。誰もそのことを疑わないリニムの者達。あまりにもそれは異様な空間が広がっていた。

王もまた、新しき王族を迎えることのできる喜びに胸を高鳴らせながら祭壇を見つめる。

兵器として求められる王族。けれど王はそれが自分の責務だとしっかりと認識していた。

幼き目の前の王女も戦時下と言うこともあってか、そう遠くない日にそれを受け入れることになるのだろう。僅かにそのことを親として申し訳なく思うが、こればかりは王家の者として生まれてきたものの責務である。受け入れて貰うほかない。

王は自分の子だと言うのに、大きく育ってから顔を見たのは初めてだった。

とても愛らしい姫だと思った。

なんという名を授けるか、今日この日まで王は悩み続けていた。
そしてひとつの名前を胸に抱き、王はその名を呼べる時を待っていた。
早くその名を呼びたいと、願うあまり王には周囲がその時、見えなくなっていた。
その日、異常な程に顔色を悪くしていた妻である、王妃のことすらも、その視界には映ることはなかったほどに――
祭壇の上に祭られ、目の見えない王女の前に引き出されたのは透明な宙に浮かんだ球体だった。
王家の血に、そして魔力に反応するように出来たその球体は、王女の頭よりも二回りも大きな珠である。
その珠に触れればたちどころに祭壇からは光が溢れる――はずだった。

「さあ、これに触れなさい……王女よ」
「……分かった」

王女は天使のような外見を持つ、大変可愛らしい少女だった。
母親である王妃によく似た射干玉のような黒髪を持ち、黒曜石のような瞳は、この世界には珍しい稀有な宝玉だ。
――と言っても、瞼をきっちりと王女は閉じてしまっており、その宝玉を見ることは適わない。侍医が稀なる宝玉よと言挙げし、それにより瞼の奥に秘された王女の美しい瞳の話は伝わったに過ぎなかった。
赤毛や金髪など、色素の薄い頭髪を持つ者のほうが多く存在するためか、酷くその色彩は目立つ。
その顔立ちは愛らしく、まるで甘い砂糖菓子のような可愛らしい少女だ。だが、それでいてどこか世を達観したような、年齢にそぐわない成熟した空気を纏っている、不可思議な空気を放つ少女だった。

なんとも不思議な魅力に溢れた王女だと、王宮の奥深くに今日まで秘されて育てられてきた王女を貴族たちは評した。

王女の目の前に浮遊するその珠に、王女は介添えの者に腕を伸ばされつつ、手をそっと触れて行くと、たちまち珠からは光が――どうしたことか、溢れて来ない。

「どういう……ことなのですか？」

「……光が溢れないとは」

どういうことなのかと貴族たちが口々にざわめき始めると、王は表情をみるみるうちにその面より欠落させていくと、思いだしたかのようにばっと首を巡らし、隣に座る王妃の顔を食い入るように見つめた。

そして隣に座る王妃の顔色を見て確信したのだ。

「おのれ、貴様ッ！！」

「……き、きゃあああ！！」

王妃が悲鳴をあげるのも構わず、そのほっそりとした華奢な手首を掴みあげると、豪奢な椅子から引きずり下ろす。

そして王はまるで物のように王妃のことを王女の前へと放ってみせた。――終いに王は、王妃と王女を捕まえよと、怒りに身を震わせ近衛兵へと大喝するがごとく声を発したのだ。

今までリニムの王族に魔力を持たない者は生まれたことがないと聞く。

更には盲目という、身体的な欠陥を持って生まれてきた王女に、これが無いなどとはそれこそ、有り得ないことなのだ。

だがしかし、今、それは現実に起こっている。

これが指す事実、それは――

「――王妃は不義を犯した！そしてこれは――不義の子よ！王女を殺せ！不義密通の穢れた娘だ！我が騎士よ、今すぐこれを――断罪せよ！！」

怒りもあらわに王は自らの私兵たる近衛兵へそう命ずると、彼らはややも躊躇う動きを見せたが、我が主の命令ならばと近衛兵は王妃と王女を直ぐ様捕らえ、王の前へと引きずり倒し、首を並べ立てた。――とは言っても王女は盲目と言うこともあってか、王女を捕らえる近衛兵は実にやりにくそうにしていた。力もあまり入れられぬようだった。

上体を床石に押し付けられた王妃は真っ青な顔をして不義などしてはいないと喚き立てるが、王は冷たい顔をしたままに王妃の首を撥ねよと激昂している。最早王妃の言葉など耳には入らないようだった。

「お待ちください、王よ！わたくしはそのような……貴方様を裏切るなど……不義など犯しておりませぬ！この娘は……悪魔の子なのです！王、私は何もそのような……貴方様を裏切ってなど……どうか……どうかわたくしに慈悲を！！」

王妃は自分の無実を叫び、そしてあろうことか王女を悪魔の子と蔑んだ。

果ては王女の命の代わりに自らの命乞いを始めたのだから王はこれにあきれ果てたものだった。

明確な証拠が今出たばかりだと言うのにも関わらずに、よくもまあぬけぬけとこのようなことを言えるものだ。

王を謀ったばかりか、王の子でないとしても己が生んだ姫であることは間違いないというのに王妃には母としての情すらないのか。

王は王妃への愛情が、すっとその瞬間にまるで夢にでもかけられていたかのようにうっそりと瞬時に消えていくのを感じた。

それと同時に激しい怒りがふつふつと、煮え滾る様に湧き上がってきた。

王女の魔力はこの国を救うはずだった。それが今まさに裏切られたのだ。

それは王妃が不義を犯したということ以上に王を打ちのめしていた。

王女は悪魔の子であるからとしきりに叫び、だからこそ魔力がないのだと。自らに非は何ら見当たらず――王妃はなおも叫び続けた。

王女はそのような王妃の姿に何かを感じたのか、王女の目は何も物を見ないはずだろうに、彼女はその幼い姿で、まるで老いた老僕のように重苦しい溜息を吐きだし、軽く首を横に振った。まるで王妃のそのような醜い姿を見慣れているとでも言うように。

王女はこのような事態だというのに、まるで生きることを諦めてもいないのか、どうにかしてこの窮地から脱することを目まぐるしくも考え続けていた。周囲は王女の様子を哀れとは思いはするも、まさかそのようなことを考え続けているとは嫌でも思うまい。齢五つの少女が、このような窮地に立たされて、何が出来ると誰が考えられよう。

物を見ない目であるがゆえに、必死になって周囲の気配を探り、警戒の穴がないかと王女は探し続ける。

だが、王女に運命はかくも無情なようだ。

警備に穴は無く、そして、王の出した命令のお陰で出来あがった警戒の波もまた、穴の無い隙の無いものだった。

ぎりりと王女は歯がみした。

どうすればいい？どうすれば逃げられる？

王女は必死になって思考を巡らせるも、条件はあまりにも厳しいものがあった。

元の手足の長さがあればまた話は違ってくるだろうが、この寸足らずの手足ではどうか――王女にとって今回のこれは、あまりにも条件が悪すぎた。

「醜いな、王妃よ。せめて潔く不義を認め、相手の男の名を言えばまだ考えたものを……」

残念でならないとでも言うように、王は首をゆっくりと、それでいて重苦しく振って言う。それを聞いても王妃はそんなものはいないのだから答えようがないと叫ぶと、今度は矛先が変わったらしく、半狂乱で狂ったように自らを押さえつける近衛に無礼者と、口から血泡を噴く勢いで叫んだ。誇り高い王妃は、床に抑えつけられ衆目の目にこのような形で押さえられることをよしとしない。

叫び続けたためにいつの間にか王妃の口端からは血が零れていた。喉が切れてしまったのだろう。

今では血どころか泡までふいていたために、それはいつの間にか血泡という形になって彼女の口の端を汚していた。

王女はそんな王妃をまるでその目の中には灯りが映っているように、ひたと王妃へと顔を向けておもむろに口を開いた。

「アデレイド王妃。せめてあなたも王族の端くれとして、もう少し潔い姿を見せて欲しいものだな。見っともないとは思わないのか。口から泡をふき、唾を飛ばして髪を振り乱して――まるで物語に出る悪鬼のようではないか。恥ずかしいとは思わないのか」

目に光が灯っていないからだろう、王妃が泡を吹いていることは分かったようだが、よもや血泡とは気がつかなかったらしい。僅かにも血の匂いさえも感じ取れないほどにそれはごく少量の血が混じっているだけの血泡である。それだけ僅かな血であれば、それも無理のないことであるが。

その物言いは齢五歳の少女にしては、あまりにも弁がたち過ぎているように見えた。

閉じられた瞼の奥からじっと王妃を見据えて語る王女の姿に、本

当に彼の人は目が見えていないのかと疑う貴族の者も現れるが、王女の目が見えていないことは王女の生まれて直ぐの侍医の監察により分かったことだ。

「王女は生まれながらの全盲であらせられます。このような宝を得られたリニムの王室に置かれましては……」

粛々と至宝と思いこれを愛でるよう、慈しむようにと国中に発せられたのだ。

王女が盲目であることは侍医の診断により、周知の事実であった。だが、その動きはどれを一つとってみても、盲目らしからぬものだった。

王女のこの物言いに、肩を押さえつける近衛兵の腕を押しのける勢いで吠えたのは王妃だ。

憎しみに怒りに、燃えたぎった目を向けて王妃は自らの腹を痛めて産んだ我が子を睨みつける。

「このっ……悪魔の子っ！お前の所為でわたくしは！……お前など産まねば良かった！お前など……産まねば良かったのだ！！」

2（振り下ろされた切っ先を止める者）

儀式の間は王妃と王女以外の者はあまりの禍言に怖れを成したのか、誰も彼もが声を失ってしまったようだ。

見ているだけで手も出せないどころか、声を上げることすら忘れてしまったらしく、たった五つの王女を、母とはいえ、このようにおぞましい悪鬼と化した王妃の前に置いておいたままにするのだからそれは知れよう。

けれど元よりも王の命令があるため、誰も手だしなど出来なかったであろうが――何にせよ王妃は、その醜さを全面に押し出して王女を衆目の最中で詰り続けるのだった。

「悪魔の子め！悪魔の子めがっ！！お前の所為で！わたくしは……あああああああっ！！」

たっぷりとしたスカートの裾をまるで癇癪を起したかのように、引き倒されたままにばたばたとけたげて王妃は泣いた。

けれどその涙は決して哀れとの涙ではなかった。それも、王女を哀れと思ったのではなく、自らを哀れと感じたのでもなく、ただただ王女への怒りゆえににじむ涙であった。

それを感情の色の全く滲むことなく見据え続けていた王女は、最後にこう告げた。

「本当にお前は醜いな」

その言葉はどう聞いていても、愛らしい声とは裏腹に、若い男のそれにしか聞こえなかった。

うんざりだとでも言うこの声に、王はもう自分こそがうんざりだとでも言うのか、近衛兵に王妃をまず断罪するようにと疲れた声で

命じ、そして次に無慈悲にも、王女を――と命じた。

「……」

王女は王から伝わる怒りを全身でひしひしと感じると、打つ手を探し、思考を巡らせ続けた。

王妃のように命乞いをしても無意味なことは見えずとも肌で嫌でも感じ取れた。許しは得られないことを理解していた。

王の怒りは凄まじい、逃げねば確実に殺されるだろう。

王女はこんなわけのわからぬところで死ぬなどまっぴらだった。

生きて俺は戻らねばならないんだ。

王妃へと近衛の兵士だろうが、刃を構えたことが分かった。

すらりと鞘から抜き放たれた刃の音が、一か所でかちりと静止したのだ。

「ひっ！！……い、いやあああっ！わたくしは何もしていない！わたくしは……王！わたくしの王！どうか助けて！」

半狂乱の王妃の声に、真剣の刃が鞘から抜き出された音に、周囲の緊迫した空気を肌で感じ取るだけでも十分に過ぎるほどだった。

王妃がこのまま死ねば、次は自分の番だろう。

このままで、済むものか。

いいや、済ますものか。

王妃の頭上に刃を振り被ったのが気配で分かると、王女は自らを取り囲む近衛兵の数、位置、その動きを探る。

背後に一名、のみか。

舐められたものだとも思うものの、それもまた仕方ないか、とも思った。

他者の目から映る己の姿は、ただのか弱い五つの童女だ。たった一人の近衛兵で制することが出来ると思うことは、何ら間違いでは

ない。
ただそれが、普通の童女ならば、だが。
王が腕を一本、頭上にすっと持ち上げると、

「殺せっ！」

冷酷に言い放つのと同時に、腕を空を切る様にして真っ直ぐ振り下ろした。
瞬間のことだ。王の腕の振りに合わせる形で王妃の上にある刃が、ひゅっと風切り音をさせて振り下ろされた。
王女はその瞬間、動いた。
王妃の上に死が降り注ぐ。

「……きゃあああああああっ！！」

つんざくような声が上がり、次はごろんと首の落ちた音、そして血飛沫の上がった音が続くはず――と考えていたが、そんな王女の考えは鈍い音に遮られた。
それはがきんという刃と刃がぶつかる衝撃音だった。

「……王、お止めください。このような無益な殺生は」

王女の耳に飛び込んできたのは、落ち着きの中に押し殺した怒りを滲ませる、男の声だった。
一瞬の後、王はこの言葉に遅れるようにして怒りをあらわに叫ぶ。

「アイアンバッハ……貴様、我に歯向かうかっ！」
「王、どうか私の賢き王よ。私の話をお聞きください」

王の眼前に引き倒された王妃の上に降り注ぐ刃を、その男は腕一

本で受け止めると、そのまま上段に払いのけるようにしてこれを弾き飛ばしてしまったようだ。それは凄まじい力だった。
刃を跳ね飛ばされてしまった近衛兵は、刃を腕から吹き飛ばされた時にどうやら腕を痛めたようだ。使い物にならなくされてしまったらしく、痺れたように両腕をだらりとさげて呻いている。
これを見て王は男に対しても怒りを覚えたらしい。
だがそれは、王だけではなかったようだ。

「――アイアンバッハ様、国王陛下に歯向かうのですか！」

どうやらこれをもって近衛兵が一人残らず殺気立ってしまったようだ。
それも当たり前だろう、近衛兵の腕から刃を弾き飛ばし衆目の中で刃をその腕からもぎ取ってしまったのだ。
剣は騎士の魂だ。いや、それは彼らの命と言っても差し支えないだろう。
それをこの男はあろうことか力任せに弾き飛ばし、もぎ取ってしまったのだ。
近衛兵の面目は今や丸つぶれだった。
騎士の精鋭たる近衛師団、その所属であるという彼らの誇りはいかばかりのものだったか――それを男はただの一撃でやすやすと打ち砕いてしまったのだ。
だが、そんなことに男は構いもしなかった。
なおも男は続ける。

「王、どうかお止めください。お二人を何も殺さずとも良いではありませんか」
「くどいっ！！」

王は男の胸を指さし近衛兵へと更に命じた。

「この男――アイアンバッハにも死を……」

命ずる、とは王は言わせては貰えなかった。

いつの間にか王の横にまできていた、幾重にも纏った衣擦れの音がうるさく音を奏る男――恐らくは相当の地位にいる者なのだろうが――が、それは拙いと王へと進言してみせたのだ。

「国王陛下……彼の者は国の窮地を何度も救った英雄に御座います。それを何の罪をおかしたわけでもないこの状況で王妃と重ねて切って捨てるわけには……そのようなことをなさいますれば後々面倒なことになりましょうぞ」

思いとどまる様にとひっそりとした声で進言したのは文官なのだろう――それも大臣職にある者のようだった。

王に真っ直ぐに進言しにいく度胸とそれに伴う位を声で王女は覚えた。目が見えない代わりに、使える知識は全て使わなくてはならなかった。

あの声、あの足音、そして気配――覚えたぞ。

王女は声の主達の気配、そして足捌きを頭の中に叩き込んでいく。

それは王妃のもの、近衛兵のもの、国王のもの、大臣のもの――

そして、どこかで見知った男のもの。

王はぎりぎりと顎がすり減るほどに歯ぎしりを漏らすと、大臣がなおも続けようとする声を遮り「もうよいわ！」と遮り叫んだ。

「アイアンバッハ、ルヴァリエ騎士団、団長職を解任。並びに騎士位を剥奪」

そんな、という声が方々より上がったが、当の本人である男はと言うと、特に目立った反応を返そうとはしなかった。然もあらんと

いうことなのか、男はじっと王の次の言葉を待った。
男は沈黙したままに王を見据え続け、そして左右に居る王妃と王女を庇い続ける様にその場に跪いたままだ。
そんな男を見て王は腹立たしいのか、更に怒りのままに続けて述べた。

「王妃アデレイド・クレモナ・リ・リニアン。そして――」

と告げて、ちらりと王女の方へと目を向けて見れば、驚くような状況がそこには待っていた。
王女が近衛兵から剣を奪い、どうやったのか、逆にその鎧に包まれた巨躯を打ち果たしていたのだ。

3（王女の予言、そして滅びの王）

そも問題は王女が近衛師団の者を打ち果たしたことよりもなによりも、いつ、剣を奪い取ったのか、そのことのほうが王は余程気になった。

「……これは一体どういうことか」

怒りを感じるよりも、ただただ何が起こったのかも分からずに王は呆然と、王女の足元に倒れる近衛兵へと質問を向けるも、近衛兵も何が何やらといった様子である。

王女は明後日の方角を見つめることもなく、男へと視線をつきつけたままに、王へと人を食ったような笑みを浮かべて口を開いた。

「その女の言うとおりだ。俺がこんな生き物なのは、その女の所為じゃない。元から俺はこうなんだ」

元から、とは、一体何のことなのか。

王は不義の子とは言え、一応は今日まで己の子と信じていた子に、有り得ないほどの不気味さを感じながらも喘ぐようにお前は一体何者かと尋ねて見せた。それは、儀式の間に集まった全ての者達が抱く疑問でもあった。

「俺か？俺は――いや、止めておこう」

王女はつまらなさそうに周囲を睥睨するように首を巡らせ、そして、最後にまたひたと男を見つめ、言った。

「お前の名は、アイアンバッハでいいな？」

男は言った。

「ええ、私の名は、アイアンバッハ。今までもこれからも、いつまでも貴方様のアイアンバッハで御座います」

男は王の前に跪きながらも、王女の声に反応するように、更に深く頭を垂れた。

それを受けて王女は言葉みじかに良しと返すと、王へと宣言するのだ。

「王よ、これより俺はお前に予言をくれてやろう。これより後三日、他国は我が国リニアに向けて進軍してくるだろう。それも一所からくるものではない。迷いの森を抜けてくるものがあり、ゴダール山脈を越えてくるものがあり……それらは全て、我が国リニアから出奔した、下級貴族の先導でくるだろう。お前が放逐せよと命じた輩のようだ。お前をやつらは憎んでいる」

この言葉に王は馬鹿なと声を上げた。どれもこれも、信じがたいことだったからだ。否定したかったことでもあった。

「放逐を命じたのはあれらが法を犯したからである！それをよもや事もあろうにリニムへと反旗を翻すなど……！」

「信じる信じないは王、お前に任せよう。元リニアの者の手引とあらば、迷いの森は容易く攻略出来、更にゴダールはヴィラゲリアの者を使い、攻略してくるようだ。何も対策をせねば、このリニムは一年もたたずに叩き潰されてしまうだろう。今、俺や王妃、そしてアイアンバッハを手にかけることよりも、余程先にやることがあるのではないか？」

王女に淡々とこう諭されるように言われ、王はたじろいだ。
今は確かに開戦間近とも言われているが、それをどうして、王族に数えられる前の者達の籠められる宮――選王宮から一歩たりと出たことのない王女がこれを知っているのか。
そも疑問は他国の情報すら知りえない王女が何をもってこれを言っているのか。王は理解に苦しんだ。
そして、気でも触れたのか、とも思ったが、そもそも王女は触れる気があるどころか、視界そのものすらなく、籠められていた選王宮から一歩も出た事が無く、それで何を知ろうと言うのか。
情報を先ず知りえない身であったことが先ず肝心である。
更にそこをもって視界もなく、他者からの接触もなく、足もまた、当たり前だがない。
王はそこまで辿りつくと、ごくりと生唾を飲み込んだ。
齢五つの童女の姿が、今や何故か、異様に巨大にその目には映った。

「俺を殺すもいいだろう。だが、三日だ。三日は待て。開戦するかしないかをとっくりと観察してみてからでも俺の首を刎ねるのは遅くはなかろう。それにだ、愛妾がどうやら俺の弟を孕んだようだな。ひと月ないしふた月で弟も生まれるだろう。俺が不要と言ったとて、そのような時に不幸は避けるべきだ。違うか？」

違わない、違わないのだが――王はそれこそぞっとしたようだった。
この時代、孕み腹の内を透かし見ることなど不可能だ。
旧時代の魔力を持ちえた王族ならばまだしも、そこまでの透視能力を使うことの出来る王族が生まれることは、この時代まずない。
そこにきてまさか愛妾の存在まで知っているとはと驚愕したのもあったが、まさか腹の中の子の姿まで知っているとはと愕然とした。
それが本当ならば、まごうことなく王女は傑出した王族の者とな

りえただろう。
だがしかし、王女に魔力は存在しない。
王族の血は、彼女の中に一滴たりと入っていないのだ。
それが王には悔しかった。
先ほどの言葉を全て信じたとして、全てが王女の言うとおりになったとしても、王は王女を殺さなければならない。
冷えた頭になった途端、何故か王には王妃の言っている言葉が信じられた。
私は悪くはない。この子供は元よりこのままだったのだと。
王女も言っていた。王妃は悪くは無い。元よりも俺はこのような存在なのだと。
本当に、王女の言う通りだったとしたら――？
王は拳をぐっと握り締めた。

「俺を殺すか殺さないか――それもよくよく考えることだ」

頭を冷やせ、王よ。
王女はアイアンバッハを伴って、王宮の奥深くに位置する忘れ去られし塔へと自ら足を踏み入れた。
そこは、入った者は二度と出ることの適わない獄。
次に王女がそこから出るのは、一月後のことだ。
その日は王女の、公開処刑の日だった。

＋＋＋

王女の予言の通り、戦火は瞬く間に広がっていった。
リニムは小さな村から城下町に至るまで、その全てが蹂躙の限りをされ尽くしていった。

王も兵士もこれに徹底抗戦の構えを見せるが敗戦は紛れもない事実だ。

残る道は降伏か、それとも死兵となって最後の一兵までもが命を賭して戦うか、二つに一つだった。

二つに一つ、リニムの兵士はこれを選び取ることとなる――そう、全兵力を賭してこれを一人でも多くの民を逃がす為にと戦うことにしたのだ。

王女の言う通りだった、そう呟きながらも王は血を吐き腹を押さえながら足を運ぶ。

城にあと数刻もすれば敵兵士は辿りついてしまうだろう。そうなってからでは遅いのだ。

「誰にもこれは、渡せぬのだ……！」

遠くから火の燃え盛る音が聞こえる。街が焼かれているのだろう。

我が民は今まさに蹂躙されているのだろうか。そう思うだけで王の心は引き裂かれんばかりだった。

我は国を――愛するリニムを、民を、守れなんだ！

息も絶え絶えに進む王の前に、火矢が突然窓を割って飛んできたのを見れば、思わず息を飲んだ。数刻などとは言わず、もう直ぐ傍まできているのだ。敵兵士は。

「早く、しなければならない」

これが最後のこの国の王としての仕事なのだから。

リニムの近衛師団の者達は、そのことをよくよく知っていた。

だからこそ、国王の操る魔兵器を降りてなお、あれを！と、誰もが叫んだ。

あれを他国へと渡してはならないからだ。

「皆、済まぬ……」

王を送りだす顔は、どれもこれも笑っていた。

あれを破壊しなければならないのは、リニムの者であれば、十二分に理解出来たからだ。

リニムの中枢に居るものであれば、誰もが理解できることだからだ。

王を送りだすために、一体何人の若人が散っていったのだろうか。

「我も……そう遠くない未来にお前達の元へと行こう……だから、暫し我の身体よもってくれ……」

王の向かう先は、リニム王宮の最奥、王立図書館だった。

4（漆黒の髪を持つ王女）

馬上の人である精悍な顔つきの男は、目の前で起こった出来事に僅かに顔を歪めて舌打ちを打つ。
確かに多少なりとそうなるかもしれないとは、予想はしていた。
だがしかし、その規模は男の予想を遥かに超えて巨大なものだった。

「爆死、か……リニムの王よ、お前は愚かだ」

民を見捨て、城ごと爆破して自らも死ぬとは、愚かとしか言いようが無かった。
降伏すればまた違った道も開け様に――

「だがしかし、その死にざま、天晴れだ」

敵に捕まることをよしとしない、その潔い死にざまは素直に好感が持てた。
巨大な火に頬を嬲られるが、男はそれを肌に受けて好ましそうに微笑んでさえ見せた。
同じ敗者となるのであれば、自分もああなりたい、ああなるべきなのだ、そう思った。
火の勢いが、そのままリニムの王の生き方そのものに見えた。あれこそは男の死にざまよと、何故か羨ましく、いや、いっそ眩しくさえ見えたのだ。

「アンセム様！火がこちらまできます！お下がりください！」

男は火の勢いを見て、確かにこれは一度態勢を整える必要ありと

見たようだ。外套をばさりと翻し、手綱を引いて馬首を返すと配下の者達に号令をかける。

「……分かった。――お前達、ここは火の手が来る！一旦引くぞ！」

「ははっ！」

リニムの苔と蔦の這う白亜の城は、建国以来初の戦火に見舞われた。

その火は七日七晩燃え続け、城をほぼ、跡形もなく消し去ってしまった。

残ったのは、幾ばくか残された民と、そして捕虜となっていた兵士。そして、城の最奥、そこに自ら囚われていたこの国の文官達だ。ただし、文官達は身を守るすべとして、下手に口を開こうとはしなかった。ただの下働きの者と全員が黙って口を噤んでいた。

その時のことだ、

「この国の文官をしていた者はあるか」

そんな声掛けがあった。

中立国であるオルキスの者であるとの口上を持ち、この問いを投げかけてはみたものの、皆一様に怯えた眼差しを向けていた。

誰ひとり、この呼びかけに応えるつもりはないようだ。

敗戦しただけでも民としてはこの後どうなるのかという不安が付きまとうだろうが、それどころか今回の場合は敗戦だけではなく、国が滅んだとみていいだろう。

王家の血筋は途絶えたと聞く。

王の直系である王女、そして王子、二人ともに見当たらずとなると――最早国の旗印すら亡きものとされてしまったと、リニムの者達は声すら失い泣きくれているのだ。そこにこの質問ではこの反応も無理も無かった。

何ともやりにくいものよとオルキスの兵士は声掛けを続けていくが、一向に文官と思しき者達は出て来ない。
あまりにも反応が無いのを見れば兵士達の中から、こんな声すら出てきた。
それは疑っても仕方ない話だった。

「王家を根絶やしにしただけでも問題だと言うのに、まさか内情を知ってそうな文官まで全て死に絶えてしまったと言うのだろうか」

この度の戦争は、リニムに隠されたあるものが必要だったからだ。
それは王家により秘匿され、そしてそれを文官も知っている『はず』なのだ。
だと言うのによもや勢い余ってそれら全てを諸共殺してしまったのでは、今回の戦争をした意味がない。
兵士達は一様に、無意味な殺戮をしてしまったことに怯え、そして落胆していく。
そんな兵士たちを見かねた男がすっとリニムの者達の前へと進み出ていくと、息を一つ吸い込み、誰ぞあるかと声を張り上げた。

「リニム王室へとただ仕えていた下女でもなんでも良い、誰かあるか！文官、武官、女官、神官――誰でも良い。リニムの王室に伝わる書物。王立図書館に納められていた書簡に目を通したものは誰でもいい、いないか！」

王家の者でなくとも、秘密にかかわる手掛かりが必要なのだ。
オルキスの兵士達は、リニムをこれ以上蹂躙されているのを見たくは無かった。
だからこそ、リニムを攻めた国々を押さえ、我らが交渉事をとした。
だと言うのに、ここで誰もいないとなれば、一人一人拷問にかけ

てでもと他国の者達はするだろう。
それほどまでにリニム王立図書館に秘蔵されていた書簡は重要なものだった。
どうか、どうか、誰でもいい、出てきてくれと祈るような思いだった。
男の願い、それが通じたのか、男の眼前で人垣が割れて行く。
山のように築かれていた人垣は、一人、また一人とその身をずらして割れていくと、最後に現れたのは一人のまだあどけない少女だった。
少女は薄汚れた布を被せられてその顔は窺い知れないが、男にしては髪が異様に長かった。
布から零れおちる髪の黒さはまさに射干玉。それが真っ直ぐに布から零れ落ちている。
男は初めて見る漆黒の髪に目を見張った。何と不思議な色合いだろうかと驚きと共に美しいと感じ入る。

「いや……」

そもそも黒髪だと？
黒髪ときて、少女とくれば――男ははっとした。
そしてそれと同時にまさか、と思った。
それを守る様に傅くのは巨躯の男と、細身の男に女にと、それこそ身なりは文官と思しき者達だった。
そうか、リニムの民はオルキスの兵士達からそっとその身を盾にして彼らを守っていたのかと男は理解した。
隠匿していたことがばれれば命はなかろうに……
リニムの民、一人一人がまさに戦士なのだろう、男はそう理解した。
あどけない少女がすっとその場に立ちあがると、しっかりとした足運びで男の前までくると、ぴたりと止まり腕を一振りその場で軽

く薙ぐような仕草をしてみせる。
そして己の民へと少女は告げた。

「これより後ろへ控えることだ、リニムの民よ。そしてオルキスの男よ、話を聞こう。――ただしその前に一つだけ言っておこう。我が民草にこれより手をかければ、お前の欲しいものは何一つやらん。いいか、何一つだ。我が民草の命と引き換えに、我らリニム王室に仕える文官は、オルキスの言葉に従おう」

ざわりとオルキスの兵士達はこの言葉に沸き立った。
そして、それと同時にこの少女は何者なのかと思った。
少女の全身はようとして知れないが、それでも多少なりと分かる。身なりは粗末、そして異様なその髪色。
そして、少女はどう見ても文官にしては年齢がたらなさすぎるように見えたのだ。
背丈は男の半分にも満たない。だが、舌足らずというほどでもなく、流麗に舌を操り言葉を紡ぐ、その姿は、はて面妖なといったところか。
オルキスの兵士が奇奇怪怪と少女の姿そのものに怯えたとてなんら不思議なことはなかった。
ふっと男は笑うと、少女の前に膝折った。

「……アンセム様？何故そのような少女の前に膝を折るなどと……」

おかしなことをする上官に進言したのか、それともただわけも分からず尋ねてみただけか――と思い、少女は目の前の男同様に面白いとふっと笑ってしまった。
だが、少女が面白がっているのを余所に、少女の背後を守る様に巨躯の男が控えると、文官の者達と共に声を張り上げた。

「ここにおわすお方を誰と心得るっ！！ここにおわすお方は、ルクレティアナ・アナベール・リ・リニアン様でおわせられるぞ！」

それはリニアの王家の血筋を引くものとして、第一級で探すようにと優先して探すようにと求められていた王女の名だった。

「なっ……！！は、ははあっ！」

リニアの王女であるということ、そして名を文官達に告げられた途端に少女から発せられる重苦しいまでの重圧に、耐えかねたオルキスの兵士達は、男の背後にひれ伏すようにして膝を折った。

何と言う重圧か、まことリニアの王家の者は格が違うとは聞いていたが、少女の時分であるにもかかわらずによもやこれほどまでに強大な力を感じさせるとはと感じ入った様子だ。

目の前に居るだけでもびりびりと肌が叩きつけられるような圧力を感じ、兵士たちは全身脂汗に濡れてぐっしょりとなった。

全身に鉛のような錘を乗せられたように感じるほどだ。何と凄まじい覇気であろうか。

少女は男の前に更にずいと進み出ると何故王立図書館の書簡を求めるかと尋ねて見せた。

「あそこにあった書物は全て焼け出された。今は灰も残っておらん。それでも何故かお前達はそれを知ってなお、あれを求める。何故……あれを欲する？」

男は答えた。

「オルキスはリニムに侵略をしておりませぬ、王女。我らはただの調停者。ただ我々はこれ以上の戦火にリニムを巻き込みたくはない。なればこそ再度お頼み申す。この国の王立図書館にあった書物、あ

れを出していただきたい。そうすればこの国へと攻めいった国に、もうリニムへのこれ以上の侵略行為を止めるよう申しつけましょう。どうか王女よ――」

「馴れ馴れしいな、アンセムとやら」

少女は男の顎を無造作に掴みあげると言った。

「勝手に侵略行為をしてきてなお、お前達は自分に都合のいいことを言う。お前達が侵略をしていないだと？世迷言だな。お前達はあれを見ていた。そう、ただ見ていたんだよ」

「お、うじょ……」

顎を締め上げる強さの何と恐ろしい程の強さであろうか、男はどう見ても十は超えていない歳であろう少女に対し、最早畏怖すら覚えていた。

どうしてもあれが必要だった。ここで逆らうとリニムの民のことだ、あれをリニムの王ではないが、破壊されてしまうかもしれなかった。なればこそ、少女の気のすむまでさせようと思っていた――が、これではあれを破壊される前に、自分自身が危うい。

ぎりぎりと顎を締め付ける小さな紅葉のような手に指に、男は恐怖する。

間違っても少女の力などではない、それどころか今まで男の出会ったことのある者達の握力、それらを軽く凌駕してみせる少女の力にこれは何なのだと、悲鳴が口をついて出そうになった。

だがしかし、握力は確かに化け物であるとしても、その身は少女だ。配下の者達の居る前で身も世も無く悲鳴など上げられないと必死で耐えた。

それはただの愚かな男の矜持だった。

そんな男を見て、ほうと少女は更に面白そうなものを見るような目で見て言うのだ。

「耐えるか。面白い。だが……これ以上力を込めればお前の顎が割れてしまうだろうな。それでは折角の男前が台無しだろう。感謝しろよ。見逃してやる」

そう言うと、少女は男の顎から手を取り払うとにやりと笑って更に続けて言った。

「今からお前達の記憶を全て塗り替える……お前達にはこれから、やって貰うことがあるからな」

意味深な言葉を呟くと、少女は眼前の男の額にそっと手のひらを翳し、にやりと笑った。

その笑みは、天使のような顔を持つ少女が、まるで男のように笑うという、奇妙な笑みを浮かべていた。

気がつけば全身が身動きどころか瞳を動かす事も出来ず、男も、その背後に控えていた兵士たちも気味の悪さに震えあがった。

「安心しろ。ちょっとばかり記憶が消えるだけだ……さあ、眠れ、安らかに……」

「お、うじょ……ルクレティア、……ナ……殿下……」

少女はまだ動けるのかと眉をついと跳ねあげるが、それ以上の反応を返そうとはしなかった。

男の見た最後の映像は、瞼を閉じたままの、美しい天使のような見目麗しい童女の姿だった。

5（塗り替えられた記憶と共に）

アンセムは本国へと戻る前に、伝書鳩を一羽飛ばした。

そこに書き記されたのは、リニム王城爆破前に捕らえたリニム王室お抱え文官二名と、そしてリニム第一王女、ルクレティアナ・アナベール・リ・リニアンを捕縛したとのこと。

他に、国民はリニム国王が城を爆破した際には王城の中に避難をさせていたものとされ、生死はまず絶望的、と書き記されていた。

リニムはこのたった三名の生き残りをもって、その紙片の一片も残さず灰と化した――アンセムは見たまま、調べたままをそう記し、本国へと送ったのだった。

アイアンバッハは甲板に上がり暫し海風に当たりつつアンセムの姿を見つけると声をかけた。

「アンセム殿！」

「ああ、アイアンバッハ殿ではないですか。もう宜しいのですか？」

アンセムはアイアンバッハに比べると一回り小さい男だった。とはいえど、アイアンバッハほど巨躯の男もそういないため、それと比べて一回りも小さいだけでも相当に大きいのだが。

アイアンバッハは裾が例の出火で汚れてはいるものの、身なりはその巨躯に不似合いな文官の身なりをしている。

彼こそがアンセムの部隊が見つけた文官の一人だった。

「まだお礼も申し上げておりませんでしたので……こたびは王女殿下の――そして私共の命を救っていただき、感謝いたします。有難うございます、アンセム殿」

見上げる山のような巨躯を深々と折り曲げると、アイアンバッハはアンセムに丁寧に礼を述べた。
アイアンバッハはアンセムの部隊が見つけた際、壁や落ちてきた天井に挟まれ今にも危うい命となっていた。
王女に至ってはアイアンバッハが身を呈して庇わなければ、当の昔にその命は無かったであろう。それほどまでに城の崩壊は凄まじかった。
アンセムは人の良さそうな笑みを浮かべると、ほとんど怪我らしいものを負っていないようで良かったと告げ、王女はどうしたかと尋ねて見せた。

「王女殿下は今……」

アイアンバッハが口を開こうとした時だ。
杖をついて周囲を探りつつ、盲目の王女が歩いてくるのが見えた。
盲目ゆえに杖を頼りに歩いているが、王女は潮風を受けた途端、風にふわりと攫われそうになった。
アンセムはそれを見て驚くと、直ぐにも助けねばと駆けて行く。
まるで自分の大切な大切な姫君だとでも言うように。

「ご無事ですか王女！」

腰を抱くようにしてその小さな身体を抱きとめると、アンセムはそのまま王女を自分の腕の上に乗せてしまうと不安げな表情を浮かべてみせた。
王女は瞼を閉じたままにアンセムの腕を、胸をと触れていき、最後にその頬にぺたりと手を乗せ、這わす。
顔に触れた途端、ほっと王女は息をついてやや硬かった表情と共に一気にこちらも緩んだ声音になると、あまやかな声音でアンセムとその名を呼んだ。

「何故甲板になどいらしたのですか。危ないですよ。海は荒れることもあるのですから。もし攫われでもしたらどうしますか！」
「ごめんなさい……潮風と言うものを浴びてみたかったのです。それと、匂いも感じてみたかったのです」
しゅんと項垂れて王女はアンセムの腕の中で軽く震えた。
それを見るとアンセムは、怯えさせてしまったかと慌てるのだ。
「も、申し訳ありません！ですが、その……これは王女の身を案じてのことでして！……おっしゃってくだされればその……私が王女をお連れしますので。なんでもおっしゃってください、王女」
怯えさせるつもりは毛頭なかったのだと括ると、アンセムはこちらも項垂れる様になり、許してはくれまいかと言うのだ。
「アンセム……では、傍にいてください。海の匂いはもう嗅ぎましたから。今日もアンセムのお話が聞きたいです」
ふわりとどこか儚げではあるものの、王女が笑うとアンセムはぱっと途端に華やいだ笑みを浮かべる。そして瞳の中にはあからさまに安堵の色が見えた。
アンセムは鷹揚に頷くと、腕に抱いた王女をそのままに、自室と宛がわれた部屋へと戻っていく。
「王女は本当に勉強がお好きでいらしますね」
「勉強が好きだと……いけませんか？」
おずおずと王女がこう尋ねると、アンセムはくすりと笑い、海風にあたり少し湿り気を帯びた黒髪を撫でつつ口を開いた。

「いいえ、それはとても良いことだと思いますよ。戦が好きと言うより、とてもよいことだと思います」
「本当に？」
「ええ、本当に」

アンセムの言葉を受けて、王女は可愛らしく微笑むと、大人しく抱かれたままにされている。
先ほどまでは若干身体に力が入っていたものの、今では全身の力が抜けて柔らかな幼子の肢体を預けきっている。なんと無防備なことだろうかと後を追うアイアンバッハは思うものの、王女がそれを良しとするならばと口を噤んでいた。
完全に全身の力を抜いてアンセムに身を任せている王女に、アンセムも嬉しそうだった。

「そう……勉強はとても良いことなのです」

王女はそう呟くと、くすりと悪戯っぽく笑ってアンセムの頬に手を乗せた。

アンセムの部隊は、兵士を誰ひとり失うことなく本国へと向かう船を動かしていた。
狭い廊下をアンセムが歩いて行くと兵士の一人とすれ違う。
上官に会ったがために直ぐ様その兵士は敬礼するものの、その敬礼が若干ずれていると注意されてしまった。その場で直ぐにも直されたのだが、最後にアンセムからのお小言が待っていた。

「リニムの王女殿下の御前だぞ。敬礼も満足に出来ずにどうする？」
「はっ！ははーっ！申し訳ありません！！」
「アンセム……怒っちゃ駄目。もっと優しく注意してあげて。可哀

想だわ」

王女が腕の上でおろおろとしながらもアンセムにこう意見すると、これは参ったと眉尻を下げて負けましたと告げる。

「王女殿下には敵いませんね――以後気をつける様に」

これでいいですかと王女へとアンセムは困ったような顔をしてみせると、王女はほっとしたようにアンセムの顔を見て、綻んだ笑みを浮かべて感謝を述べた。

「有難う、アンセム。アンセムは優しいのですね」

視線だけがどこか遠くを見つめているかのように、閉じられた瞼は微妙にアンセムの顔を真っ直ぐには見つめてはいない。

「いいえ。ほら、お前も王女殿下に感謝を」

「あ、有難うございます、ルクレティアナ王女殿下！！」

「そ、……そこまであの……感謝されることではありませんので」

王女は困ったように手を振ると、明後日の方角を向いて言うのだ。もう怒られないといいですねと。そう言われてしまっては、アンセムとしても今後部下たちを怒りにくいものがあった。

困ったなとアンセムは苦笑すると、その兵士と別れた。

アイアンバッハとその兵士は、互いにどんと胸を叩きあい、にこりと笑みを浮かべて直ぐ様別れる。

アンセムはその何かの合図にも似たそれに、最後まで気がつくことはなかった。

「――本当に王女はお可哀そうですな」

アンセムがある日言った言葉だった。

アイアンバッハはこれを黙って聞いていた。

「父である国王陛下を亡くされ、そして母である王妃殿下は行方不明。更には王子殿下も行方不明となればさぞお辛いでしょうに。……それだけではなく、民草までも王城と共に失うとは……悲劇の姫、ですね」

アイアンバッハは何もいわなかった。

ただアイアンバッハは言った。

「王女殿下をどうか……お助けくださいますよう……何卒、何卒……」

この懇願に、アンセムは悲しそうな笑みを浮かべてこう請け負った。

「姫君おきましては、我らオルキスの国が丁重に保護させていただきましょう。手厚く遇することを約束致しますゆえ、どうぞご安心を」

「本当に感謝致します、アンセム殿」

アンセムは自分の部隊にも、戦火に巻き込まれた兵士が居たはずという記憶を忘れ、更にはたった三人のみと、リニムの生存者を間違った認識のままに本国へと向かう。

何も失ったものは人だけではなかった。

その燃え尽きた灰と化した書籍に書簡もきちんと本国へとは告げ

てある。
だがそのかわりに、彼ら文官と王女は、その書簡の内容を全て網羅していると言うのだ。
生きた情報である彼ら三人を遇するのは、アンセムにとっては当たり前のことだった。
ただし、それが本当に目的そのもののためなのか、それともそれ以上のものなのかは、分からないが。

中立国オルキスに着くまで、あと二週間。
アンセムはその間、ずっとそのことを思い出す事も、何ら不信感に違和感にと、抱くこともなく、海にゆったりと揺られ続けていた。

5（塗り替えられた記憶と共に）（後書き）

次回からようやく本編です

1（女の子でした）

忘れ去られし塔へと足を踏み入れると、王女は男を見上げ、ついで首を傾げた。
小さな王女が可愛らしくちょこんと首を傾げている様は、男には実に微笑ましいものに映った。
そんな可愛らしい王女をうっとりと熱い眼差しで見つめて男はこう言った。

「――大変可愛らしくていらっしゃいます」

鼻血をたらりと垂らしながら言われれば、王女は若干引きつった表情になり言うのだ。

「お前は相変わらずだな、アイアンバッハ」

血の匂いと息の上がり具合から相手が鼻血を垂らしたことを悟ったようだが、全盲の王女が巨躯の男を見上げて言うのだから、何も知らない者が見れば王女の目は視えていると思ってもおかしくはない光景だった。
王女は疲れ切った顔を浮かべると、男にこの忘れ去られて久しい塔の案内を頼んだ。
いかな王女と言えど、目が視えぬとあらば周囲を真実の意味で探ることは難しいからだ。

「大体の形なんかは分かるんだがな、困ったことにその色や朽ち果て具合、それとクモの巣の張りなんかは全く分からん。だから案内を頼みたいんだが」

気配があるわけではないものは本当に分かりにくいものが多くて困ると言われれば、実に不便な身体に入ったものだと男は思った。

以前の王女の姿を見知っているがゆえに、王女が感じているであろう歯がゆさは、男には痛いほどに分かったのだ。

「人の配置などは大変細かく分かるように見えますが……」

男が王女の腕を引いて塔の一階の隅から隅までを案内しつつ、言葉を続けていく。

クモの巣を払い、足元にある小石を退けつつ歩くその姿は、王女に不便がないようにとの配慮なのだろうと分かる。そして王女自身、そうした献身的な様子を受けて、やっと綻んだような笑みを浮かべて見せた。

「そうだ。人の位置くらいは分かる。その動きもな。ついでに言えばこの五年間、俺は塔の中に閉じ込められていたからな。その間は王妃や侍女か？たぶんだが……周囲のやつらの目を盗んでは鍛練はかかさなかった」

それくらいしかやることがなくてなあと言われれば苦笑してしまう。王女として生まれてきたと言うのに、それではどこの粗末な家の小僧かといった暮らしぶりではないか。

そのまるで腕白坊主のような日々を送り続けてきた王女に、男は鷹揚に頷いて見せた。

王女が健康そのものの上、更には身体も動かすのに何の問題もないとあれば、脱出は容易いだろうと思ったのだ。

男はふいに足を止めて王女を振り返りこんなことを尋ねてきた。

「それは良いことです。――そうです……全盲と聞き及びますが、それはまことですか？」

男は内心ではこれを尋ねるのには勇気がいった。
けれどそれはきちんと確かめなければならないことでもあった。
今後のことを思って王女が自分をあの場より連れ出したのは明らかだ。であれば、王女の今を最大限、理解しておかねばならなかった。
王女は隠しても仕方ないと言うことなのか、いたって素直にそれを暴露してくれた。

「そうだ、俺は――と言うよりも、この身体がなんだが……どうやら生まれながらの全盲らしい」
「矢張り、本当なのですね」

男は王女の言葉に肩を落として残念がるが、王女はそれを受けてもそう落胆したものではないぞと軽く言って見せた。

「……と、言いますと？他に何かあるのですか？」
「視えていた頃よりも、感覚は鋭敏になった。まあ……多少なりと寸足らずだからなあ……そこは補うために鍛練はかかさず行わなくちゃならないとは思う。が、随分と視えていた頃よりも、感覚が感じやすくなったんだ。だから……以前よりもしかしたら……俺は強くなっているかもしれない」

とはいえ、同じだけの背丈が与えられていればの話しではあるが。
王女はそこまで告げると、にっと笑って男を見上げる。

「……なるほど」

男は王女の現状をある程度それで理解出来たのか、二三度頷いてからまた先を進み始める。

素直に腕を引かれるままについていく王女は、男に無謀にも、こんなことを提案してみせた。

「ちょうどいいから後で鍛練を手伝ってくれ。ついでに組み手……というか、簡単な試合でもしよう。五年も一人で鍛え続けてきたからな、身体がなまっていないか見る必要がある」

王女の身体を遥かに超えるその巨躯を前にして、よくもまあそのようなことを言えるものだと普通ならば言うところだが、男は笑ってそうですね、久しぶりですからお互い怪我だけはしないようにしましょうと、有り得ないことを言うのだ。

それはまるで、男も怪我をすることを懸念しているような発言だった。

五つの童女を前にして、リニムの英雄と謳われる堂々たる体躯を持つ男は、更に続けてこんな言葉を口にした。

「ああそうだ、顔は一応そのまま全く前と同じのようですよ、王女」

前の会話とは全く関係のないこの話に対し、王女が虚をつかれたようにしてしまうのも無理はない。

「……そりゃあ……嬉しい情報、なのかな？」

全盲ゆえに今の今まで自分の顔を認識する機会を得られなかった王女に、男は何か物悲しい気持ちになった。

ああこの方は本当に、目が視えてはいらっしゃらないのか。

男は嘆きたくなった。

見も知らぬ大地に落ちてきて、そして見知った顔が、たとえ自分のものであろうともそこには存在するというのに——なのに、王女にはそれを見つめることの出来る目、そのものがないのだから。

虚しさが胸の中に一杯に広がっていくと、こんな言葉がついて出てきた。

「嬉しくはないのですか?ご母堂と同じ顔で……大変羨ましくありますのに」

「そりゃお前がだろうが。俺はこの顔で嬉しかったことなんて、一つもなかったんだ!」

と、ここまで言うと何やら妙なことに引っ掛かりを覚えた王女は首を傾げて男にこんなことを尋ねて見せた。

それは、男からしてみれば、どうして今まで気がつかなかったのか、大変不思議に思うことだった。

「……ちょっとしたことを尋ねたいんだがな」

「はい、なんでしょうか」

「……俺は、今、なんだ?」

「……なんだ、と申されますと」

男は主語のないこの言葉に内心首を傾げた。

王女の言いたいことが本当に分からないらしい。

だが、これに王女は何故察しないとばかりに理不尽にも男の足を蹴りあげたのだ。

王女の小さな踵のある靴が、男の武骨な革靴につき刺さったが、これまた不思議なことに、男はその場で痛みのあまり、本当に痛みを堪える様にして倒れ込んだのだ。

二メートルを超える巨躯の男がずしんと、王女の小さな足で踏みつけられただけで倒れこむのはあまりにも異様な光景だった。

痛みに呻く男を尻目に、王女は男を見降ろして切羽詰まった様子で尋ねる。

「だから、俺は……いや、単刀直入にいこう！俺は今、縮んだだけじゃなくて……女になっちまったのか？！」

「……いたた……ええ、そうですよ。大変お可愛らしゅう御座います。本当にご母堂そっくりの外見で……」

見ているだけで心が洗われるようですと続ける男に対し、王女は今度は床石を蹴り飛び上がるとくるりと宙で一転、男の脳天に踵を綺麗に叩き込んだ。

男も二撃目は防いで見せるつもりだったのか、腕を眼前に構えてこれを受けようと思ったらしいが、それよりも先に王女の踵は男の頭上に叩き込まれた。まさに電光石火の早業である。

「痛い！！」

悲鳴が早いか、それとも王女の動きの方が早いかといったところか――すたんと王女は男の頭上を更に一転して飛び越え着地をすると、唸るように言ったものだ。

「じゃあその……なんだ、王女って言うのは単なる愛称でも」

「どんな愛称ですか」

「子供の頃はこの国では呼ばれる名前とかそういう風習でもなく！？」

「そんな風習あったら見てみたいですよ」

律儀に合いの手を挟んでくる男に対し、王女は噛みつくように言う。

「……いちいちうるさいやつだな！！――本当に、俺は……女になっちまったって言うのか？それも……この国の王女様に？」

いちいちうるさいやつだと発する前か、発しつつか――そのあたりで王女は男の顎をつま先で蹴りあげ、更に続いて後方に飛びのいたかと思えば、みぞおちあたりに今度は先ほどの逆戻しのようにくるりと背面跳びをすると一転し、膝をまたも容赦なくその場に叩き込んだ。

男はこれには声も出ないらしく、脂汗をびっしょりとかきながら王女の下で小さく身もだえしている。

これがかの有名なリニムの英雄の姿なのだが、英雄と今まで称え続けてきた者達には決して見せられない姿であった。――と言うよりも、このあまりにもがたい差のある、小さき、そしてか弱いこの王女に、こうもあっさりとしてやられるような男が、よもやこの国の英雄であるとは、些か信じられないものがあった。

床石の上で哀れにももがき続けている男に気づいているのかいないのか、王女は勝手に話を進めていく。

「じゃあなにか？俺は五年前、本当にこの国の王妃の腹から生まれてきたって言うのか？……それこそ一体全体何のために。だって……俺はお前と――アイアンバッハと、あの日までちゃんと男で……そうだろう？！そんな……一体なんで俺はまた、こんなところに居るっていうんだ！おい、答えろアイアンバッハ！！何寝てるんだ馬鹿！」

自分で蹴り倒しておいてその言い草は無いだろうとは、流石に男も馬鹿ではないので口にはしなかった。

1（女の子でした）（後書き）

序章の半ばに話が一度戻ります。
オルキス編に行くまではノンストップで書きあげたいと思いますー

2（名前を呼んでくれないか）

よろよろと男は上体を起こすと、みぞおちを押さえて呻く。
答えることが出来ない苦痛の中、王女には見えなかっただろうが、男は微笑んでいた。

「身体は矢張り、見た目もそうですが、元の通りの身体のようですね。安心しました」
「何がだアイアンバッハ！いいから俺の質問に先に応えろ！」

じりじりとした気持ちの中で王女が言えば、男は首を振ってそうではないのだと告げる。

「お身体は確かに小さくなられましたし、何故か性別も変わっていらっしゃいますが――元の身体そのままのようですよ、と言うことです。腕も足も、元通り、きちんと使えるのでしょう？」
「あ……そ、うだな。そうだ。俺は……腕も足も、鍛えればきちんと、俺の動きについてこようとしてくれる、これは……俺の身体だ」

そうだった、これはきちんと自分自身の身体であると首肯すると、王女は確かに、性別が変わったことよりも自らの肉体年齢が若返ったことよりも、先ず何よりも先に気づかねばならなかったのはその肉体が元の肉体そのままなのか、と言うことだった。

「貴方様の肉体は特別仕立てです。力はおよそ人の持つものとは思えないほどのものを持ち、体力も人の身にしては素晴らしいものをお持ちでいらっしゃる。そして何よりこれが肝心でいらっしゃいますが――貴方様は彼らのお子でいらっしゃいます」

男がそう口にすると、王女は若干纏う空気を柔らかなものに変化させたようだ。
安心したのかもしれない。

「どういうわけかは分かりませんが、私自身ももとよりも、貴方もあちらの世界から、何故かこちらの世界の女の腹の中に落とされ……そして新しい命をもってここにいるようなのです」
「……じゃあ、俺は、……俺達は一体、なんなんだ？俺は……あっちの俺と今の俺は、別人なのか？」
「それはないはずです。貴方の身体は先ほど申しました通り、特別仕立てで御座います。腕も足も魔法がかけられたが如く、今も動くのでしょう？」

その言葉に王女はこくりと小さく頷いて見せた。
鍛えれば直ぐにも元の通りに動くようになってくれた手足。

「俺は……あの人の子供でいいんだよな？」

不安げに見上げてくる王女の姿に、男は柔らかな笑みを浮かべてこう答えた。

「それは変えようのない事実でしょう。貴方様はあの方々のお子であらせられます。それは曲げようの無い事実です。――兎角ここに居るのが私共二人だけなのかは分かりませんが、突然私共はこの世界に落とされてきたのでしょう。それだけは紛れようもない事実。そしてこの世界でのこの姿は、誰かの悪戯か……それともこの世界の何者かに呼び出されたからなのか……それは分かりませんが、私共はどうにかしてあちらに戻らなければならないと言うことです。これだけは理解してください」
「……分かった」

王女は神妙に頷きで返すと、男の上から小さな手足を使ってその胸の上からおりていく。
手足が短いために、おりるのも一苦労のようだ。
えっちらおっちらと短い手足を使い、王女は男の上から下りて行く。

「もう……王女、何と言いますやら言葉が中々見つからずに困りますが……大変、可愛らしくて、私は動機息切れ眩暈が大変です」

自分の上からぺたぺたと這って降りていった王女に息も絶え絶えに男は言うと、またも王女が足をからげた。
ぱかんと軽快な音をさせて男の顎が鳴ると、王女は床をだんと踏み鳴らし、吠える。

「馬鹿な言っているといい加減に埋めるぞ！ほらいくぞアイアンバッハ！案内しろ！」
「はいはい」

男は苦笑しつつも嬉しかった。
王女はどうだか分からないものの、男にとってみれば、二十数年もの間、見知った顔がなくなってしまっていたのだ。
王女と同じく、この世界で女の腹の中へ落とされ、記憶を持ったまま赤子から現在まで、一人きりでわけもわからず生きてきたのだ。
それが今日、見知った顔にたった一人だが出会えた。その嬉しさたるや言葉に言い表す事は不可能だろう。
叫び出してしまいたいほどの嬉しさを感じながらも、男は王女の手を引いて進みだす。
だが、王女は先ほどの狼狽した自分を見られた気恥ずかしさもあってか、男に冷たく言い放つのだ。

「……おい、なんか手が汗でべたべたして気持ち悪いぞお前」
「……」
「気持ち悪いってお前。放せ」
「……王女、私は悲しい……」

やっと出会えた同胞と懐かしんでいたというのに当の王女はこれである。男は鼻をずびりと噛んでむせび泣き始めた。
それを見て王女は何故泣くと慌てて尋ねるが、益々男は激しく泣いていく。

「お、王女が……見た目は天使ですのにっ、酷いっ！可愛らしいのに中身は極悪ではありませんか！こんなの詐欺です！酷いっ！」
「ああ？！」

その後連続して鈍い音が響いたかと思えば、悲鳴と罵声が塔の外までも聞こえてきた。
忘れ去られた塔の中ではこの日、ちんまりとした少女に泣かされるリニムの英雄の姿があった――らしい。

＋＋＋

塔の中の扉を一つ一つ開けて攻略していくと、全ての部屋に掃除が必要そうであることが分かったのと同時に、何やらこの塔の構造がおかしいことに気がついた。

「どこかに空洞が空いてるな」
「空洞ですか？」

「ああ。どうにも排気の流れがおかしいのと、それと……音の反響が妙だ。恐らくだが……ここには隠し部屋があるんじゃないか？」

目が見えなくなったがゆえに感じるもののもままある、とは先ほどの王女の言ではあるが、男はここでなるほどこういうことかと先ほどの発言の意味をようやく理解出来たのか納得したようだ。

目で見える分には、この塔は先ほどまで調べたままの姿であろう。だがしかし、王女には見えるもの以外のものが感じられるようだった。

王女はその場に棒立ちになると、肌と鼻と耳と、視力以外のものを全て使い、神経を研ぎ澄ませ、意識を凝らしていく。

どこかこの塔はおかしい。

空気の動き、そして臭い、耳で聞こえる音もそうだ、どこかがおかしい。

意識を凝らしていくと、王女は何かをその五感で捕らえたようだ。

ふいにぴくりと瞼を閉じたままの面を上げると、こっちだと短く告げて足音もさせずに駆けて行く。

まるでその様子は小さな獣のようだった。

慌てて男は王女を追いかけていくと、一部屋ふた部屋と移動をし、床石が一つだけ、僅かに持ちあがった場所を見つけた。

「……ここだな」

「これは……」

その部屋は一階の奥まった部屋だった。

石の竈があり、ここで薪をくべて火を焚くのだろう。塔全体を暖めるための暖炉、そして塔全体の食事をここで作る場所でもあるようだ。

この塔の心臓部とでも言える施設だ。

だがしかし、王族の者や貴族の者たちが立ち入るような部屋では

間違ってもないだろう。そんな部屋だった。
その窯と暖炉の脇にある棚の前に、僅かに床石が一つだけ持ちあがっている。
それに王女は小さな手を触れると、これだと確信した様に言うのだ。

「この下から風を感じる。アイアンバッハ、この下……何かあるぞ」

男はこれを受けて棚をどかそうとするのだが、何故かこの棚が、根が生えたように一向に動こうとはしないのだ。

「……お前の馬鹿力に良く耐えるなあ」

王女のこの発言に対し、男はげんなりと言ったものだ。

「ご自分のほうが腕力はおありでしょうに、何故私などにやらせるのですか」
「んー……だってお前、まだ俺の名前呼んでくれないし。王女だってんなら、王女らしく命じてやろうかと思って？」

こう告げると王女はどうしたものやらと、その場に胡坐をかいてどっしりと腰をおろしてしまうと、どうやらここに根を下ろしてどうにかこの先へ行く方法を思案するべく首を捻って考え始めてしまった。動く気は最早ないようだ。
男は王女のその何気ない調子で言われた言葉に対し、ぱちくりと瞼を瞬かせると、罰が悪そうに頭をかいた。

「あのですな、その……何と言いましょうか」
「なんだよ」
「矢張り……この世界の者に見られでもしたら、それこそ何と申し

開きをすればいいのかと思いまして……ですね」
「……何を言いたいのかさっぱりなんだが？」
「ですから、私は逆にですが、貴方を元の通り、呼んでも構わないのでしょうか？という……ことです」
躊躇いがちにこう告げる男に、今度は王女が首を傾げてしまった。
「……そりゃまあ、確かにこの国の連中に見つかったら面倒かもしれないけど。別にいいだろ？ニックネームって言い張ればいいし」
「そういうものですかね？」
王女はそれに答えを返さず、続けて行く。
「――それに、王女なんて敬称でお前に呼ばれるなんて、むしろ不愉快だ。それも単なる呼び名じゃなく、俺のことを呼ぶ名としてのものが王女だなんて……そんなの、笑えない」
苦しそうに、それでいて辛そうに何かを堪える様にそう口にする王女の表情を見てしまうと、今度こそ男は息が詰まるような思いがした。
男はその場に膝をつくと、王女の前に姿勢を正す気持ちで真向かい、慎重に口を開いた。
「――お久しぶりです、アッシュ様」
それを聞けば王女は、美しい花の綻ぶような笑みを浮かべてこう言った。
「だから、様づけは止めろって言ってんだろ。ばあか」

3（熊に出会ったら死んだふりをしよう）

男が何をやろうとも、うんともすんとも言わなかったその棚だが、王女がその僅かに持ちあがった石を踏み抜く勢いで踏んだ途端のことだ、ごごんごんごんと、けたたましい音を立てて棚が脇へとずれ始めたのだ。

長い間打ち捨てられていたお陰でだろうか、棚が横へと重そうに滑っていくにつれ、上から年月を思わせる埃がさらさらと舞い落ちてくる。

咄嗟に男が王女を埃から遠ざけようとしたが、それよりも早く王女は上から降ってくるその埃を避けるべく、さっと一歩後方へと退いていた。

「……重みを感じさせないものですら、お分かりになるので？」

男がまさかそんなはずはなかろうと思いこう尋ねてみたが、王女はあっさりとしたものだ。

「上から降ってくれれば嫌でも分かるだろう。それよりも、ほら行くぞ。どうやら下……か？道が現れたようだからな」

嫌でも分かるだろうと言われても、重みもほぼ無きに等しい埃だぞと、男は目を見張り絶句するが王女はそんな男に構うことなく足元の床石を足の裏で軽くならすようにして確かめて、特に問題なさそうだと平然と言って見せるのだ。目も見えないと言うのに、なんとも豪胆なと言ったところか――。

王女の言う通り、そこには先ほどまでは存在しなかった、人一人が通れるほどの空間がぽっかりと開いていた。それは奥へと続く、道のようだ。

足元がどうなっているか分からないと言うこともあってか、男は王女を肩にそっと乗せると、しっかりと捕まっているようにと言い含め、その出来たばかりの穴の中へと潜っていった。

薄暗い道を抜けた先に広がっていたのは、巨大な空間だった
それは椀をひっくり返したような形をしているようで、不思議に音が反響して聞こえる部屋だ。と言っても、部屋と呼ぶには明らかに巨大過ぎるその空間に、男は唸ったものだ。

「一体なんなのでしょうか、この……場所は」

物を見ない王女はと言うと、抜けた先の巨大さは分かったらしいが、本当の大きさが中々上手く理解は出来ないようで、何を思ったのかすっとひと息、息を吸い込むと、わっとその中で叫び声をあげた。

突然のこの行動に男は驚いたようだ。肩の王女を見ると一体何をと言った様子である。

だがしかし、王女はすまし顔で何かを待っているようだ。

一体何を待っているのだろうか。男は気になり王女に尋ねようとしたが、王女は指一本でそれを制した。

どうやら黙って見ていろということのようだ。

わっと叫んだその声は、その空間の隅々までを一気に駆け廻ると、その間に何度も反響を繰り返していく。王女はただただその音が消えるまでを待ち続けた。

とうとうその音が聞こえなくなると、王女は漸く男に口をきいてもいいと合図を送ってよこした。

「一体なんなのですか？行き成り叫ぶなど……せめて前置きくらいしてほしいのですが」

直ぐ隣で――それも耳元とそうかわらない場所でだ――突然の叫び声だ。男でなくとも誰でも驚くだろうことをしてのけた王女はと言うと、男の胸に下ろしていた短い足を振り子のように振ってその反動で飛び上がるとそのまま地面まで綺麗に着地してみせるのだ。

見事な着地をしてみせた王女の姿に男は本当に見えなくとも不自由はなさそうだと感じ入っていると、王女がこんな言葉を口にして見せるのだ。

「さっきので大体のここの形が把握できた。お椀がたで、可也の数の……なんだろう？板のようなものが幾重にもこの部屋の中にはあるんだと思うんだが、アイアンバッハ、ここには何が置いてあるんだ？」

王女曰く、その板状のものが気になるようで、男に何がおいてあるのかと室内を歩きつつ王女は尋ねた。

けれど男が口を開くのとほぼ同時期に、王女はその件の板状のものに出会ったようだ。小さな手のひらでそれに触れ、中のものを腕を突っ込み取り出して見せた。

「ここは図書館のようですね。ですからそれは書棚でしょう」

「そのようだな」

首肯しつつ王女は取りだした一冊の本を、ふんふんと鼻を鳴らしてその匂いを嗅ぎ始めた。

「……紙媒体か。羊皮紙のものもあるようだな？紙にしては妙な匂いがするものもあるし……うん？」

「どうかしましたか？」

王女が本を手に首だけを巡らせると、ある一点で首がぴたりと止

められた。その方向を男も視てみるが、あるのは棚ばかりで他には一切何もないように見えた。

何も無いのだが、何を一体視ているのか――男は気になって王女の――こういってはなんではあるが――視線に目を合わせるようにして、王女の脇に屈みこんで視線を合わせてみたが、矢張り、何も無い。

男は首を傾げたが、王女は矢張り何かを見つけたようで、突然全速力で走りだしたのだ。

「王女っ！！……ではなく！アッシュ！？何事ですかアッシュ！！」

王女は周囲には目もくれず、左右の棚と棚を足がかりにし凄まじい勢いで棚を蹴りながら棚のてっぺんに登り上がったかと思えば、何かを目指し、一目算に駆けて行くのだ。

凄まじい早さだった。

男は棚の隙間から王女を見上げ、追いかけるものの、障害物があるから追いつけないと言うのもあるが、それを抜きにしても王女の足は途轍もない早さである。棚があろうがなかろうが、追いつけるはずはないなと男はいっそ呆れたものだった。

王女は棚の頭を踏み外す事なく駆けては飛んで、進んでいくと、漸く棚の切れ端にまで辿りついたようだった。

そのまま王女は棚からふわりと降り立つと、更に獣もかくやとばかりに駆け続け、とうとう広大なその空間の端までやってきたようだ。

王女が辿りついた先にあったのは、一枚の巨大な扉だった。

「むう……困ったな」

背丈が足らず扉のノブに手が届かないのだ。

王女は沈思――するかと思いきや、何やら背丈が足らないことに

怒りでも感じたのか、扉を思う様外側目がけて蹴り飛ばした。
ずっばあんっ！
凄まじい音を立てて扉が弾け飛ぶ勢いで開いたかと思えば、「ひゃあああっ！」と言う情けない声が響く。どうやら扉の外側に、誰か人が居た様だった。
ここで漸く追いついた男が王女の背後からのっそりと扉の外で倒れた人を見やると、そこに居たのはどうやら若い男のようだった。
おや扉の向こうの人を追ってきていたんですねと王女に言いつつも、男は倒れこんだままに腰が抜けてしまっているらしいその人物の顔を覗き込むと、ただでさえ青白い色をしていたその人の顔色は更に悪くなり、とうとうぱたりと音をさせてその場に倒れ、更には気絶をしてしまったようだった。

「おい、大丈夫かそこの」

王女が気絶した人物の頬をぺちぺちと叩くが反応が返ってこない。流石にこれを見れば王女も罰が悪いのか、頭をかいて参ったなとぼやいてみせた。

「あのねえアッシュ。何度言えばいいのですか。扉は足で開けるものではありませんと。この方なんて驚いて気絶してしまったようではありませんか」

思えばこういうやりとりも久々だなと思いながらも、くどくどと男は王女に行儀作法をきっちりとこの際だから学んで貰いますからねと告げるが、王女は呆れたような顔をしてこう言った。

「あのなあお前。これはお前の顔を見た途端、倒れたんだっての。俺が何かしたからじゃないからな。ったく」

熊みたいにでっかい身体でのっそりと近づいてくるものだから、相手さんが気絶したんだと言われれば、男は所在なさげに王女の顔を見やる。

そこには「私はそんなに怖い顔をしているでしょうか？」と書かれていたが、王女は歯を剥いてこれには答えようとはしなかった。

男はめそめそとこれに子供のように泣いてみせた。

3（熊に出会ったら死んだふりをしよう）（後書き）

死んだふりじゃなくて気絶ですが

4（似てませんから分かります）

手持ちで何か無いかと探ってみたが何一つ手頃なものが見当たらなかったためか、男――アイアンバッハは元来た道をとって返していくと、塔の中から丁度良い大きさの椀を一つと扇子を持ち帰ってきた。それで気絶してしまった男をぱたぱたと煽いでやるが中々これが起きない。

王女も一応は椀の中に水を汲みいれてきて、こちらの中に自分の身につけていた衣服の裾を引き裂いて手頃な大きさの布を作りあげると、それを水に浸して顔を拭ってやるが、なんともあれな話ではあるが、途中から面倒になったようだった。

ただし、そこまでは良かった。

ただ、それを口にしたのは流石に悪かっただろう。

「……めんどくせえな」

殴って叩き起こすかと王女が言うと、アイアンバッハはどうして貴方はそう乱暴なのですかと呆れたように告げる。

そもそも介抱していたはずが、どこをどう間違えば「面倒」などという言葉が出てくると言うのだろうか。間違いにも程がある。

「……アッシュ。自分で気絶させたんですからそんなことを」

くどくどと説教をたれるつもりでいたが、王女はそのまま大人しく聞くつもりはないようだ。

「だから！俺じゃなくてお前が気絶させたんだろうがっ！」

くわっと口を開いて王女がアイアンバッハに叫ぶと、その声に反

応したのか、眼を瞑ったままでいた男の瞼がゆっくりと一度二度と小さく瞬きを繰り返したかと思えば、次にぱちりと瞼を大きく持ちあげたのだ。

男は周囲を見回してみては、一体何がどうして自分は寝ていたのかと、内心首を傾げる気持ちであったようだが、

「おお！目覚めたか！」

とアイアンバッハから声をかけられた途端、またもごとりと音をさせて意識を途切れさせるのだった。

「ほんっとにめんどくせえな」
「なななな、何故なのですか！？」
「お前はその凶悪な面をどうにかしてこい」

それのお陰でまた気絶したんだ、いい加減に分かれ！このど阿呆が！と、王女の口から口汚い罵声が浴びせられるのであった。

＋＋＋

二度目は失敗してはならないとばかりに、王女がアイアンバッハをまるで犬を追い払うかのようにして「しっしっ！」と追い払うと、男に一人で真向かった。

男の前にちょこんと小さな手足の少女が片膝を立てて格好をつけて座っているのだが、なんだかその姿勢もどこか無理に背伸びをしているように見えて、どこか微笑ましく映る。

「おい、起きたか？どこか痛いところはあるか？」

「へぇ！？あ、あああ……あのぅ！」

男は素っ頓狂な声を上げて、飾りも何もついていない長椅子の上をずり下がっていくと、貴方様は誰ですかと声を上げる。

介抱したのが王女達であることは理解出来たようで、一応は有難いことだとは言うのだが、ここは何でも神聖な区域らしく、滅多なことでは人が立ち入れない聖域のような場所だと言うのだ。

だからこそ、最初アイアンバッハを見た時に人ではなく熊と勘違いして倒れたのかと王女は得心がいった。ここは本当に矢鱈滅多なことでは人が来ないらしい。

「なるほどね、その代わりにってわけじゃあないが、熊がよく出没すると……存外危険区域じゃないかここ」

塔まできて立てこもったはいいものの、そんな理由でこの周囲には人が訪れないとは、まさしく誤算もいいところだった。

別段王女が食われると怯えるわけではないものの、周囲を徘徊しているかもしれない熊などの野生動物に、一応は食事を運んできてくれると告げてきた侍女達の身の安全を考えるならばこれほど危険な場所はないだろう。

さてどうしたものやら、である。

そして今は恐らく、男には盗賊か何かと間違われているに違いないのだ。

身元を明らかにすればそれは直ぐにも誤解と理解してくれようが、困ったことに王女には、まだ、名乗るべき名がない。

「誰って聞かれると……困ったな」

元の名を告げるべきか――と考えたところで、いやと首を振る。

あの名は元の国の、いや、世界の者達のために取っておきたい。

でなければ、この世界で新しく出来た友などの、親しいものに呼ばれたいと思った。

王女からしても男は未知の存在であり、信用に足るものか否か、と言えばどちらかと言えば後者に近い存在である。そんな男に軽々しく名を呼ばれてどうか、そう考えて王女は黙した。

矢張り、呼ばれたいか、と言われると、今はまだ、としか答えようがなかった。

けれどそうなると今度は呼ばれるための他の名がない。

王族へ迎え入れられる儀式はあのような形になってしまったがために、この国での――いいや、この身体での名が王女には未だない。

となれば――と、王女は頭を抱えてしまった。

するとアイアンバッハが王女に言うのだ。正直におっしゃれば宜しいでしょうと。

そこで王女は決心が固まったようだ。

とりあえず逃げるなよとだけ前置いて口を開いた。

「俺は――いや、私は王女だ。今日儀式に失敗した王女の話のことは聞いていないか？」

「は？え……いえ、あの、その……」

男は咄嗟のことに頭が追いついて行かない様子だ。王女の言葉を受けても、何を言われているのか、理解出来ていないらしく、王女と言うものを最初、名として認識したのか、「ああそうですか、王女ちゃんね……」などと口にするのだが、ややも立つと顔色を瞬時に変えて後方に一気に飛び退り「王女殿下ぁあああ！？」と哀れ、顔色を失くして今にもその場から消えいってしまいたいとばかりに震え、むせび泣き始めた。

王女はそんな男に構わずに、淡々と話を進めていく。

「まあその、王女だ。それでだな……」

だが、そんな王女の言葉を遮り、男は目の前に突如ばっとひれ伏すと、何と言うことをしてしまったのかと、怖れ慄き、口を挟ませない勢いでまくしたて始めるのだ。

「あああ、も、申し訳ありません！！先ほどは、その、神聖な場であるがゆえに、あのように疑ったわけでありますが！決して！決して私はそのっ、王女殿下とは知らずっ！！」

格好悪いなどと言ってはいられないのだろう。男は助命嘆願を続けるものの、王女はそんなものに興味はないとばかりに男の焦りが伝染したようで、若干慌てつつもざっくりと告げる。

「ああ、もういいから。って言うか五歳児にそこまでへりくだらんでいい。俺はただ、怪我はもういいのかと聞いている。お前、行き成り倒れたんだぞ？頭を打ってるはずだ。大丈夫なのか？」

「え……？……ああ！！そう！そうでした！！そ、その節は王女殿下御自らに……」

「いやもういいや。なんか、長くなりそうだからそこらへんの口上はどうでもいいから。とりあえず、元気なんだな？」

「え……ああ、はい。お陰さまで」

「怪我ないならいいよ。後、さっきも言ったように俺は出来そこないの王女らしいから、本当にそんな敬意とか、示さなくていい。もっと軽いお付き合いにしてくれると助かる」

男は先ほどの儀式の間での出来事を知らなかったようだが、そこはおいおい説明していくとして、王女は男の名を尋ねた。

「私……ですか？」

「そ。名前がないと呼べないだろ？困るから名前。後、こいつは知

ってるだろうけど、アイアンバッハ……なんてんだ、お前？」
「王女……」

アイアンバッハは嘆かわしいとばかりに眉間を押さえる仕草をするが、面倒くさそうに王女が顔を歪めてみせると渋々ながらといった体で男へと口を開く。

「アイアンバッハ・フラーグン・ペタロだ」
「なんっ！！」

アイアンバッハの名を耳にした男の顔こそ見ものだった。
男はアイアンバッハの名を耳にすると、耳を疑い、そして目を疑ったようだ。ごしごしと目を擦り、惚けていたかと思えば、一瞬にしてその顔はぱっと華やいだ。
アイアンバッハの眼から見ても、男は挙動不審なところを除けば一応整った部類の顔をしている。そのため、華やいだ表情をするとなんとも言えぬ美しさが漂った。

「ルヴァリエ騎士団、団長の！あのアイアンバッハ殿で御座いますか？！……こ、これは、……お初にお目にかかります！！まさかこのようなところでリニムの英雄と謳われる貴方のようなお方に会えるとは……恐悦至極に御座います！」

熱っぽい目で見てくる男に対して、ややこちらは答えにくそうではあるが、先ほど国王陛下からそちらは解任をされたのだと伝えた。理由は王女並びに王妃のことを庇ったがゆえ、と言うのは王女の口から告げられたものの、アイアンバッハは自らの意思でしたことなので、妙な勘違いをしないで欲しいと言う。
王妃の不義の相手でもないし、そして王女自身が不義の子であると言うわけではないのだ。そこを勘違いされても困ると告げると、

男は眼を瞬いて、

「そこは似ていませんから分かります」

とだけ告げた。

あまりにもさらりと言われたお陰でアイアンバッハはこれに言葉を返す事が出来なかった。

王女の見た目が王妃にもあまり似ておらず、更には庇い伊達してみせたアイアンバッハにも似ていないとくれば、王女の不義の相手はアイアンバッハではないだろう、と言うことだった。

事実なのだから確かにそこは勘違いをされていないのだからとほっとするべきなのか？とも思ったものの、何だかこれはこれで釈然としないものがあった。

4（似てませんから分かります）（後書き）

きっぱりと言ってのけおった

5（埋もれていたのは知識と言う名の山）

「それで……お前の名は？そしてここは一体どこなんだ？」
「ここは王立図書館に御座います」
ああそうか、王女は選王宮に今までおられたから知らないのですねと頷くと、男は告げた。
「あの塔は獄となっていることはご存じでしょう？」
「ああ、知っている」
獄と知っていたからこそ、自らそこに籠ると言ったのだから。
疑われてなお自分をあの王宮の中に置いておくのは矢張り、気が重かった。
例えそれが、仮初めの肉体、仮初めの居場所、仮初めの身分であろうとも、気が重いのは変わらない。
王女は自らを獄に繋ぐことで時間を稼ぐと同時に、何とか己の回りのことを知りたいと願っていたのだ。
「まさかあそこを獄と知って尚近づくものがいるとは……いやはや驚きですが、ですが何故獄に？」
「処刑を言い渡されている。……が、時期が時期だけにな、処刑にも時間がかかるだろう？だからこそ、その間自主的に獄で軟禁生活を送るべきかと思ってな。まあ、単なる気まぐれのようなもんだ」
「はあ……そのようなものですか」
「王宮に不義密通の証拠とばかりに騒がれた状態で、王女を置いておけるかと言われますと、可也厳しいものがあったのも事実です。だからこそ今ここに……」

塔に身を隠すように、自ら獄につながれにきたのだと言われれば、男は納得したようで、深く俯いて自分に言い聞かせる様にいった。

「そう……ですね。理由は大体のところが分かりました」

「それで？」

お前はどうなのだと訊かれ、男はとりあえずと言うことで、その身分と名を明らかにした。

「私の名は、その……ミシェル・ダヤンと申します。……この国立図書館の蔵書の研究と管理を任されております、この国の文官で御座います」

国立図書館の蔵書の研究をしているものは十数名いるものの、私が王宮に本を持っていく係ですので、毎朝私がここを往復しているだけで、他の者は来ないのですと言われると、なるほど、だからこそ一人であったかと二人は納得して見せた。

ついでに、大変貴重なことを聞いたと思った。

要はこの男の他には、誰もこの図書館に出入りしないと言うことだ。

大変いいことを聞いたと王女は快闊に笑うと、こんなことをいう。

「文官か！ちょうどいい、俺にここにある書物を読み聞かせてくれないか。それと、この国、この世界について、俺は知りたいんだ。俺に、一から全て、この世界のことを教えて欲しい」

王女のこの突然の申し出に困ったのは男――ミシェルである。ミシェルはぶんぶんと首を横に振ると、恐れ多いことだと慌てて告げる。

「私がそのような！王女殿下にそのような、……出来るはずも御座いません！！」

ミシェルの今までの言動からも、このような反応が返ってくることは半ば予想していたため、王女はこんな手に打って出てみた。

しょんぼりと顔を俯けると、悄然と項垂れたようにして健気にもこんなことを言い放つ。

「俺……いえ、私は、これから処刑されるでしょう。まだたった五年です。五年しかこの国にいはしませんでした。王族との責務をなんら果たす事も出来ないままで私は近いうちに殺される。けれど、それまでに自分の国を、世界のことを、知っておきたいと思うのは……我がままなのでしょうか？死ぬ前に私は出来るだけ多くのことを知ってから死にたい！ミシェルッ！どうか、どうか私の願いを叶えてください！！」

ぶわりと閉じられた瞼の内からみるみるうちに零れ落ちてくるのは大粒の涙だ。

美しい童女が涙ながらになんと殊勝な言葉を紡ぐと言うのか。

あまりにも気高いその志に胸打たれたミシェルは、それ以後時間の許す限り、王女と、そして読み書きが多少出来る程度であった、武人であるアイアンバッハにも、その知識をあるだけ詰め込んでやることになった。

これにほくそ笑むのは王女である。

ミシェルにはああいったものの、王女は大人しく死を待つつもりなど毛頭なかった。

この世界でどれくらいの間か分からないものの、迎えが来るまでか、それとも自ら帰還するまでか、それすら分からないが、王女は元の国へと帰らなければならなかった。

そこにきて、暫しの間生活するこの世界のことを、何一つ知らな

いままでこの場を後にするのは些か不便だ。都合も悪い。
よってミシェルにあらゆる知識を――と考えたのだ。
アイアンバッハは王女よりも先にこの世界へと来ていたらしいものの、王女らしき気を辿りこの国へと駐留するに留まったようで、この国での、この世界での知識はそう多くはないようだ。
生活するに事足りる程度の知識しか持ち合わせていないとなると、これから二人でこの場から逃走するにしても、あまり宜しくないだろう。知識は多すぎて困ることは無いのだから、なるたけ多くのものを得たい、そう王女は考えた。

十十十

ミシェルに勉強を教えて貰うようになってからと言うもの、大半の知識は頭の中に叩き込んでしまうと、王女は今度、国立図書館というこの場所の、その蔵書の数々をそのまま知識として頭の中に入れこむようになっていった。
この頃にはもう、貪欲なまでに王女は知識を得ようと躍起になっていた。
兎に角目が見えないのだから、耳で覚えるしかないと、王女はミシェルの声が嗄れるまで本を読ませ、そしてミシェルの声が嗄れ果てると、次にアイアンバッハに本を朗読して貰う。
そうして王女はこの国の蔵書である、知識と言う知識はほぼ全てを網羅するにいたったのだ。
ある一部を除いて。

「――これで王女はほぼ全ての蔵書を頭に入れたことになりますね。素晴らしい記憶力です。このミシェル、感服致しました」

王女は素晴らしいことに、本を一度朗読して聞かせてみせただけで、その小さな頭の中に入れてしまうようで、恐ろしいことに一度聞いたものは全て、さらさらと暗唱してみせたのだ。

一言一句、それは違わない。

それどころか淀むことのない朗々としたそれはまさしく歌声のようだった。

その素晴らしい記憶力もさることながら、王女の美しい高音の奏でる旋律に、ミシェルは感嘆したようだ。

「途切れることなく歌うように全ての文字をきちんと暗唱することがお出来になるなど……矢張り王女は素晴らしいお方です」

ミシェルはあれから王宮に足を運ぶうちに、王女の話は聞いてきたようだが、それでも王女に対する態度を改めようとはしなかった。

それどころかミシェルは、王宮から給仕の度にきていた侍女達が、嫌そうな——いいや、はっきり言ってしまえば王女に対する侮蔑の態度を、嘲りを、はっきりと示し始めたのを見て、ミシェルは自らがその給仕を買って出てくれたくらいだった。

何故そうまで献身的に尽くそうとするのかと尋ねてみた折には、こんな言葉をミシェルは漏らした。

「王女殿下が素晴らしいお方なのは、私自身がよく存じておりますゆえ。他の方から何を言われようと、関係は無いのです。そんな口さがないものの話など、私の胸に何一つ響きません。王女殿下は私を手厚く介抱してくださった。そして学びたいとおっしゃった。それは魔力が無いと言うこと以上に、とても美しいものだと思うのです。それこそがまさに、素晴らしいものだと思うのです」

何ともこっぱずかしい男だった。

王女は確かに介抱はしたが、途中面倒になって放り投げようと思

ったことはとりあえずおいておいて、更には学びたいと願ったことの意味は、逃亡を企てているからですと言う理由もとりあえずおいておいて——ミシェルに背中から抱きつくと、お前はもう少し恥ずかしいその物言いを改めろ、とだけ言うのだった。

けれどミシェルは「王女は大変お美しいと思うのです。そのお心根も、そしてそのお顔も」と、懲りることなく告げるのだった。

5（埋もれていたのは知識と言う名の山）（後書き）

知識ゲットだぜ

6（それは突然にもたらされた）

そんなある日のことだ、ミシェルが一人の少年をこの三人だけの閉鎖された空間に連れ込んだのだ。

「血のすえた匂いがする……」

それはまさしく今負ったばかりの手傷に思える。生々しいまでの鮮血の匂いだった。

むっとする嫌な匂いを嗅ぐと、王女はミシェルと少年が入って来たばかりの扉に手をかけ、やや強引にそこを閉めた。

「何があったミシェル！！」

王女は言いつつもアイアンバッハに桶に綺麗な水と清潔な布、そして何か刃ものを持ってくるよう告げた。

「申し訳ありません、王女殿下」

「そんなことはいい！！おい、お前！！意識はあるか！」

ミシェルに脇を抱えられる様にして歩いてきた少年にこう問うと、荒い息で少年は何も答えられないようだ。首をふることすら出来ない様子でぜぇぜぇと喘ぐ気配しか分からない。

仕方なく王女は素早く視力以外のもので二人の身体を調べ上げていくと、矢張り、少年の足には矢が突き立っていた。

王女は我慢しろとだけ告げて、少年に布を噛ませ、矢に手をかける。

ぐっと力を入れた途端、嫌な感触が手に返ってきた。

「くっ！！反しがついてる矢じりかっ！」

王女は舌打ちを打つと、戻ってきたアイアンバッハに刃ものを、とだけ告げたが、アイアンバッハが言うには、自分の持っている刃物しかここには無いのだがということだった。

「……大剣だったか？」

「ええ、そうです。もしやその矢傷から矢を抜くためにこれをお使いなさると？」

少年の矢傷の近くに手を翳して熱の持ち具合などを肌で感じようとしている王女に、まさかと尋ねるが、その通りだと王女は告げる。

「そんな、無茶です！相手は子供ですよ！そのような……傷を切り開くような手術など、大の大人でさえ体力のいることですのに、このような何の準備もないところで傷を切り開くとおっしゃる！？」

「やらないままでいいと思っているのか！このままじゃ、いつまでたっても治らない！早く矢を抜かなくちゃならんが、反しがついてて抜けない！だから切り開かなくちゃならないんだ！」

王女とアイアンバッハがぎりぎりと真向かい火花を散らしていれば、ミシェルがこれは使えないかとこちらも息も絶え絶えにだが何かを差し出してきた。――と言っても、ミシェルの場合は目立った外傷は無さそうだ。単に息切れを起こしているだけのようでほっとした。

それはいつもミシェルが運んで来てくれる、王女とアイアンバッハの食糧だった。毎朝作りたてを冷めないようにと保温効果の高い鉄の箱の中に納めてくるのだが、その食糧と他に、その食事の際使うものを一式、全て運んできているため、その手に握られている箱の中には王女の求めているものがあった。

「そうか、ナイフがあるな！借りるぞミシェル！！」

王女はミシェルの手から鉄箱を手に取ると、その中から食事用の美しい装飾の施されたナイフを取り出してみせた。

「あった！！アイアンバッハ、火を起こせ！ナイフを消毒する！」

鉄箱の中に入れられているのは、何も食器類だけではない。夜の食事の際、食卓を照らす灯りということで、燭台も収められている。アイアンバッハはそこに急いで火を灯していくと、ナイフを火で焙り始めた。

その間に王女は塔の出入り口を全て封鎖し、閂を内側からかけてきた。窓も全て同様に行い、図書館内も全てそのようにしてきた。手術中、侵入者があっても困るからだ。

手早く済ませてくると、いよいよ少年の傷口を切り裂くところのようだ。

「行きますよ……アッシュ、手伝ってください！少年の手足を！」

「分かっている」

王女は少年の両足をむんずと掴みその両足を床に縫いとめると、ミシェルに残った両手首を同様にしてほしいと告げる。暴れられでもすれば、傷口が益々広がるからだ。

両手足を拘束するとアイアンバッハが少年の傷口を、ナイフで切り開いていった。

「ぐぅううううううっ！！」

後方から、それも遠くから射たのだろう、少年の足に斜めに突き

刺さる矢じりは、まもなくアイアンバッハの手で取り除かれた。
「もう一度ナイフを焼けアイアンバッハ。傷口をそれで塞ぐんだ」
「……ですが」
ただでさえ戦場ではない場所で握る刃物が嫌でたまらないと言うのに、こうして健康な生き物に手をかける、そのことが嫌なのだろう。
だがしかし、今死にいこうとしているものにとどめを刺すのと、今必死で生きようとしているものに手を貸すのと、これは何ら変わらない行為だと王女はといた。
少年の顔色はそうしている間にも、益々悪くなっていく。
全身汗でびっしょりと濡れて、更には腕も足も、力を入れ過ぎて筋肉が元の形に戻らないようだ。ミシェルが逆に手首を掴まれて痛いと言うが、少年は離したくとも離せないと泣いている。
どんなに辛かろうが、今やらなくて何とする。
小刻みに震えるアイアンバッハの手がそれと空気で感じられる。怖い、それも分かる。
だがしかし、今やらなければ手遅れになるかもしれないのだ。
切り開いた傷口はあまりにも大きく、そして位置的にどうやら拙かったのかもしれないが、動脈を傷つけたようだ。王女の鼻をつく血の匂いは益々色濃くなっていた。
死なせたいのか!!――そう叫ぶことは容易いが、今は出来ない。
王女は慎重に口を開いた。
「やれ。近くに矢を射たものだろうが……きている。時間がない」
「……」
「お前しか出来ないんだ」
目の見えない俺ではなくて、今はお前一人が、彼を救えるんだ―

―アイアンバッハにはそんな声が聞こえた気がした。

「……済みませんでした。……や、ります」

「頼む」

ナイフを桶の水で綺麗に洗うと、アイアンバッハはまた、火であぶり始めた。

良く見れば少年は、王女のように闇のような頭髪を持っていた。漆黒とまでいかないまでも、茶褐色と言うべきか、くすんだ色で遠目に見れば、黒と見まがうことは可能かもしれない。

背格好も似ていたため、もしや自分のかわりに射かけられたか―と思い、王女はぎりぎりと歯がみする。

アイアンバッハから、少年の特徴を聞けば聞くほどに苛立ちは増すばかりだ。

「――終わりました」

汗をぬぐいつつ少年の処置を終えたアイアンバッハは、王女の方を何気なく見てみた。けれど王女はその場におらず、アイアンバッハの持ってきた大剣を手にし、扉へと手をかけていたのだ。

今まさに少年とミシェルを襲った者がきていると、王女自身が口にしたことだろうに、何をしていると言うのか。

「アッシュ！何をしていらっしゃるんですか！」

「お前は二人を見ていろ。絶対に守りとおせ。分かったな」

有無を言わさぬその口調に、そしてその小さな身体を覆う覇気に、アイアンバッハだけではなく、ミシェルも、そして意識もおぼろげな少年でさえも圧倒される。

「姫様……」

少年はそれだけ言うと王女に手を伸ばしてくる。

いってはいけない、そう言おうとしたのかもしれなかったが、王女はただ短く「いってくる」とだけ告げて、扉の向こうへと消えてしまった。

7（暗殺者）

敵方の恐らくは敵地視察に赴いた間諜か、もしくは王が刺し向けた暗殺者――なのかもしれない。

だとすると、とんだ親子喧嘩のとばっちりかと少年の境遇にくっと王女は自嘲めいた笑いがこみあげてしまった。

不謹慎かもしれないが、あまりにも不憫で、あまりにも間が悪いとしかいいようがない。

命を狙われているらしいと知って尚、王女はこれを単なる親子喧嘩と称するが、そんな程度としてしまえるのは王女がこれを危険と思っていないからだろう。

アイアンバッハの武器を一つだけ借り受けたわけだが、なにぶん五歳児であるため、どうしても丈が足らず剣を引きずってしまいそうになる。

王女は仕方なく肩に柄をかけて駆けだした。

殺気立った気配は確かに半球体の図書館をぐるりと取り囲むようにあった。それも複数だ。これがあの少年を射かけ、そしてミシェルを追いかけ消耗させたのだろうと思った。

王女はその気配を追いかけ茂みの中に身を投じる。

葉擦れの音を微かにさせるだけで、王女は足音を立てず、器用にも駆けて行く。武骨な剣を一振り、その肩に担いでいるとは思えないほどの身のこなしだった。

黒い装束を身に纏ったその人物は、血のりがついたそれを拭いさりつつ胸元に忍び込ませる。

これさえあればとほくそ笑んでいれば、前方から、何事かあったのだろうか、部下らしき者の悲鳴が上がった。

「まずは一人目……」

それはまだ、あどけないばかりの少女の声だった。

「何奴っ！！」

咄嗟に声を上げるものの、相手の声はどこまでも幼いもので、警戒をするようなものではなかった。

漆黒の装束の者達は、悲鳴を上げた人物の安否を確かめるようなことはしなかった。

素早く周囲を見回し、相手の姿も悲鳴を上げた者の姿も確認出来ないことを知ると、兎に角ここは逃げるべしと、直ぐ様踵をとって返したのだ。

声の主が何をしたのかは分からない、そもそも悲鳴を上げたそれと声の主が結びつくのかすらも確認出来ない。だがしかし、今自分達は死ぬわけにはいかないのだ。

「目的のものは手に入れた。王女の息の根も止めるつもりだったが予定は変更だ」

ずらかるぞ、そう告げた者は次の瞬間、どんと背後からやってきた衝撃に言葉を失くす。

「お前達、逃げられると思っているのか？」

「あ……」

ゆるゆると自分の胸を見下ろすと胸から鈍色をした刃が生えている。それが目に入った瞬間、がっくりとその者は首を落として絶命した。

王女はそこから剣を抜き去ると、またも藪の中に消えていく。

後三人。

残された者達は先ほどの男がそうだったのだろうが、指揮系統が失せたためにどうすればいいのか分からないようだ。

声はか弱き童女のように聞こえると言うのに、その姿すら見えないその手管はどうやっても手慣れ過ぎている。間違っても童女なはずがないのだ。

先ほど殺された男の元に戻り、例の物を、と考えるが、今近寄るのは得策ではない。

全員ばらけて散り散りに逃げようと散開したものの、一人は頭に飛礫でも投げられたのか、不自然な形で大木に激突し、そのまま沈黙してしまい、一人は茂みから現れた腕に捕まり、物言わぬ骸になった。

「どうやら残るはお前だけのようだ」

童女の声は葉擦れの音と相まって、どこに居るのかその位置を特定させない。

破れかぶれに打って出るべきか、と思ったものの、位置も分からぬ敵が相手だ、恐怖の方が勝った。

「こ、この仇は、必ずとる!!」

今は逃げるが必ず戻ってきて殺すと告げて大木の上に飛び上がろうとするが、王女がこれを許すはずもなかった。

「声を上げてくれてありがとうとでも言っておこうか。居場所を自ら知らせるなんてお前は馬鹿か?それとも、そんなに早く仲間の元に行きたかったか?」

「あ、ぐ……」

最後の一人を木々の合間から躍り出て下段から切って捨てるとまだ生きているらしい黒装束に尋ねる。

「おい、そう悲観したもんじゃないぞお前。お前はまだ致命傷じゃない。生かしてやることも出来るが……どうする？お前が背景を全て喋ることと引き換えに、生かしてやろう。二択だ。良く考えろよ。生きるか……死ぬかだ」

この王女の言葉に、そしてそのあどけないまでの姿に、黒装束は目を見張って驚いた。

けれど次の瞬間、その血まみれの姿に恐怖し、童女の姿で巨大な剣を振りまわす、その姿に気でも触れたかの如く、悲鳴を上げて地を這い、逃げようとしたのだ。

「化け物っ！よ、寄るな！寄るな、寄るな、寄るな！！」

こうなるともう駄目だろう。

仕方ない。

王女は黒装束の腹を蹴り飛ばすと、そのまま腹の上にまたがり、首を締め上げた。

予定変更だ、優しくするのではなく、脅す方向で行こうということのようだ。

ぎりぎりと今度は首を絞められたが、驚くのはその握力だ。子供の小さな手のひらで太い首を絞めるのだから両手で首を包み込むようにして閉めるのは当たり前なのだが、その有り得ないほどの力にまたも黒装束は驚いた。

幼子の細い指が力を入れるたび、黒装束の太い首に食い込むのがわかる。

「まだ聞こえているな？お前達は何を思ってあの子を……あの方を

殺そうとした」

少年を王女と誤って殺そうとしたのであれば、とのこれは賭けだった。

誤れば聞きだす事も出来ぬままに絞殺さなければならなくなるだろう。

――だが、王女はこれに勝った。

「何も、言わぬ……」

「俺はあの方の影武者だ。あの方に仇なすものは全て屠る。お前達の目的はなんだ。答えろ」

「言わないと……言っている！！」

あまりこういった職業に向いていないのかもしれないが、黒装束は王女からかけられるこの言葉に、ぴくりとその都度反応を返してしまう。

その度に王女の触れている黒装束の太い首には、如実にそれは現れた。

肌を介して伝わる呼吸、脈の動き、筋肉の動き……それらを踏まえて王女は言葉巧みに誘導していく。

「王女の……いいや、あの図書館にも用があったのか！！お前達、あそこに何があるのか知っているのか！！」

生憎と言ってあの図書館にあるものなど、その蔵書以外知りもしないが、さもあそこに何か特別なものがあるからこそ狙われたのだろうと当たりをつけてわなわなと肩を震わせて言えば、黒装束は勝ち誇ったように苦しい息の下で応えた。

正直、あてずっぽうなこの言葉に、相手が食いついてくればいいとは思っていたものの、ここまでの食いつきのよさとは思いもよら

なかった。

「知っている！そこのお宝こそが必要なのだからな！もう遅い、あそこにあれがあることは、もうどこの国の者も知っていることだ！もう観念するがいい、リニムの王家などに仕えてどうする？お前もこのまま行けばこの国が滅んだ時には用済みだぞ？俺と一緒に来い。そうすれば上手く俺が取り計らってやろう。な？」

どうやら今度はこちらを懐柔しにかかってきたようだ。

だがしかし、もう用済みだった。

王女は先ほどまでの様子はどこへ行ったのやら、鉄面皮に戻ると面倒くさそうにこう行ったものだった。

「お前達はあの図書館に用事があった。あの図書館にあるものは、今や大陸中で欲しがるものである。と、そういうことか？ついでに王女を見かけてきたら殺せってそんなところか……となると、悪かったなあ、あの少年には。親子喧嘩のとばっちりじゃなくて、俺のとばっちりじゃないか。ほんと……困るな。お前の首を持っていっても喜ばないだろうし……」

ああ困った困ったと呟いている王女を前にして、黒装束は何を言っているのか分からないのか、ぽかんと大口を開けて王女を見やる。

王女は一頻り困ったと言っていたかと思うと、ふいに黒装束に剣を構え、こういった。

「仕方ないからこれで許して貰おう。お前を襲ってきたやつを全員殺したからと言えば、……まあ、丸く収まるだろ」

「ひ、ひいいいいいっ！！」

次の瞬間、黒装束の首を王女の剣がすぱんと一閃。目にもとまら

ぬ速さで刎ねていた。

「さてと……にしても参ったな。これで気配の元は全て絶ったけど……あの図書館、何かあるのか？」

もしかしたら自分達はとんでもないことに巻き込まれているのではないかと思いつつも、王女はこの連中の頭と思しきものの遺骸の元へと戻っていった。その骸の胸元を探ると、出てきたのは一つの血ぬれた鍵が一つと紙片が一枚。

これは全員の骸を調べるべきかと思い、王女はその全ての骸を探ってくると、紙片は三枚見つかった。

「……これで全部か。まあ、一旦戻るか」

8（化け物王女）

それはたった一刻の出来ごとだったが、待つだけの三人にとってみれば、長く感じられた。
じっとりと嫌な汗をかいている。

「王女殿下……」
「ご無事ですよ、あの方は」
「アイアンバッハ殿……そうはいいますが……私はてっきり、貴方が行くものと思っておりました。そもそも貴方が王女殿下と共におりますのも、あの方の護衛を買って出たのかと思っていたくらいで……」

要は真逆だろうとミシェルは言うのだ。
それに対してアイアンバッハは不覚にもくっと笑ってしまった。

「あの方に護衛？そんなもの、必要ありませんよ」

だがこれに異を唱える声が上がる。
ミシェルはむっとした様子でアイアンバッハに詰め寄ると、あのようなか弱き王女殿下にもしものことがあったらどうなさいますと、笑うなどと不謹慎であると言うのだ。
からかったわけでもなんでもないが、誤解されたままでいるのはあまり嬉しくはない。
そもそもミシェルにここで嫌われるのは、今後のことを考えると、あまり良くないと言える。
だが、ミシェルが王女の安否を心配するのも当然のことなのだ。
何と言っても王女はまだ齢五つの童女と言ってもいい年齢だ。その上あのような天使のような見た目も相まって、いかにも弱そうと

誰の目にも映るだろう。
だがしかし、その見た目に騙された人間がどうなったか、それを知っているアイアンバッハからしてみれば、何故あれを見てか弱い生き物だと思えるのか、それこそ問いただしたいと思うほどだ。
アイアンバッハは慌ててミシェルに言い募る。
「王女に関しては心配要りませんよ。王女――アッシュの先ほどの姿を見ましたでしょう？私の大剣を軽々と持って見せた。あれは一般の騎士が使うそれよりも重い。同じものがもう一振りありますゆえ、ものは試しと言いますし、丁度良いですから持ってみますか？」
アイアンバッハは二刀流で有名な剣士でもあるため、王女の持っていった剣の他に、全く同じ一振りがここにはあった。
同じつくりをしているのだから、当たり前に同じ重さだ。これをアイアンバッハは文官のミシェルに持ってみろと片手で軽々と柄を突きだすと、抜くように迫った。
だが、ミシェルからしてみれば、人の命を啜ってきた剣だ。恐ろしくて持つなどとは、とてもではないが出来ない。
「いいから持つだけ持ってみてください。そうすれば、アッシュがどれほどの強さか、少しは理解出来るでしょうから」
そこまで言われれば渋々といった体ではあるが、ミシェルは柄を取ってみた。
そしてゆっくりと持ちあげてみると――いや、ミシェルは持ち上げることすら適わずに、これを取り落としてしまったのだ。
「うわあっ！」
がしゃんと音を立てて剣を取り落とすと、アイアンバッハは危な

いですよと口にして、剣を床から取りあげる。

「分かりましたかね？」

少しはこれで王女の強さを理解して貰えたかと問えば、ミシェルは首を縦にぶんぶんと振った。

ミシェルは顔にはびっしょりと汗をかいていた。

何と言う重さなのだろうか。剣はアイアンバッハの手の中におさまると、普通の兵士達が持つ武器よりも、少々大きく見える程度ではあるが、アイアンバッハの身の丈がそもそも規格外なので、一般の者がこれを持つとなると、桁違いの大きさになる。

それこそ王女が手の取ると、まさしくこの剣は、どちらが主か分からないといった見た目になってしまう。それほどまでにそれは長大で、巨大だった。

王女の身の丈のおよそ倍はあるだろう丈、そして幅は王女の身幅を覆い隠せるほどにあった。お陰で王女がそれを背負うとまるで剣が空を浮いているようにさえ見えるほどだ。

間違ってもそれで軽いはずがないのだ。

ミシェルは先ほど剣を持った手を見てみると、取り落とした時に痛めたようで、そこは真っ赤に腫れ上がっていた。

何と言う強さなのか……

ミシェルよりも体力があるかは分からないものの、腕力はあることは分かる。知力はここ一週間から二週間の間の覚えた蔵書の数、そして暗記力の強さからいって、嫌でも高いことは知れている。そこにきてのこれである。

まさに今起こった出来事が信じられなくなっていた。

「いえ、ですがあの方は、あのような姿で……腕も足も……あのような……」

ミシェルよりもほっそりとしていて、子供らしいむっちりとした肉すらついていない肢体、それは明らかに細すぎるものだ。
それでなおあのような力が出せると言うのか。
ミシェルは驚きと共に、ぞっとしたようだ。

「嘘でしょう？」
「何がだ？」

声のする方を仰ぎみてみれば、そこに居たのは先刻出ていった王女だ。

「アッシュ！お帰りなさいませ。怪我はありませんか？」
「ない。俺を誰だと思っている？」

ふんと鼻を鳴らして入ってくると、王女は真っ直ぐに少年の元へといくと、膝をついて済まなかったと告げて、先ほど取り返してきた一つの鍵を手渡した。

「これ、お前のだろう？」
「え……」

少年は先ほどまで痛みで視界がぼやけていたのか、ぼうっとしていたというのに、王女が話しかけると意識が急激に引き戻されたらしく、瞬きを二度ほどして、王女とその手にある鍵を見つめ、有り得ないものでも見たような顔をした。

「なんでそんな顔をする？」
「い、いえ……だ、だって！これはさっきの人達が持っていってしまったものですよ！？それを……姫様がまさか、取り戻してきてくださったと言うのですか？」

震える声音でそう問われれば、否やと答える必要性を全く感じず、王女はこれにさも当然とばかりに首肯してみせる。事実王女が取り戻してきたのだからそういった態度も当たり前といえば当たり前ではあるのだが、ミシェルも少年も、信じられないものでも見るような目で王女を見ていた。

王女は二人の視線の意味も分かっているのだろうが、あえてそのことには触れず、その血に濡れてしまっている鍵と、更に紙片を取り出して尋ねる。

「この図書館に、何か隠されていると、あいつらは言っていた。ミシェル、それとお前もだが――何か、知っているな？」

「……それは」

「他国の人間だったよ。お前達二人を攻撃してきた者は。その、隠されたもの、それが欲しくて恐らく……あいつらは戦争をふっかけてきているんだろうな。それが何かは知らないが、隠しておくならお前達が何とかしろ。今日は助けたが、これ以降は知らん」

「そ、そんな！」

先ほどは王女がまさか先ほどのもの達からこれをどうやって取り返したというのかと疑問だらけ――どころか、信じられないものでも見るような目で見ていたというのにもかかわらず、少年は次は助けてやらんと言われた途端、裏切られたような気持ちになった。

だが、それこそ酷い扱いではなかろうか。

「お前らなあ……それは勝手に過ぎるだろうが。理由は言えません。けど守ってくれるんですよね？当然ですよねって……あほか。せめてきっちり説明して、それから助けてくださいくらい言ってみろ。そうしたら考えんでもない」

「アッシュ……」

「なんだ、アイアンバッハ」
「……いえ、何でもありません」

ふんぞり返ってこれを言う王女に、アイアンバッハは突然のこれで混乱しているところに対して、まさに追い打ちをかけるようなことをするものではないと止めようとしたものの、そもそも王女がそのような言葉を聞くような腹を持っているはずがなく、アイアンバッハは止めに入るのを途中で止めた。

「ミシェル様……そのっ」

少年はミシェルに問うような目で尋ねると、ミシェルはやや躊躇うような表情になったが、止むをえまいと口を開き始めた。

「これは、内密の話ですので、もう少し奥まった場所で話しましょうか」

9（鍵と紙片）

戦時下と言うこともなければ、少年に持たされることもなかったはずのその鍵は、リニム最大の秘密であるそれが埋葬されている場所へ続く扉を開ける鍵だった。

「リニムに纏わる秘密？」

「ええ。リニム王家に纏わる秘密――王女殿下におわしましても、無関係ではないことになりますね」

そこに置かれているものを持ってくるように言われて、大人達が皆出払ってしまったがために、下働きの小僧がこちらに寄越されたのだと言われ、王女は首を傾げた。

「ってことは本来はもっと年かさの人間の仕事なのか？」

鍵の管理がそういう重要な仕事なのかと尋ねてみたが、それは当たり前かとも思い直す。

中に入れてあるものが、重要だからこそ、鍵をかけるのだから。当たり前にその鍵を取り扱える人物達は、重要な仕事を任されるに相応しい、年かさのいったものになるのだろう。

「一応、この下働きの少年――名はセネカと言いますが――セネカもこれでも王宮で長く仕えている人物なのですよ。何せ王宮に居を構える侍従長の孫ですから。彼だからこそ、こうしてその鍵を任されたわけでありましょうね」

なるほど、この少年、セネカも、身分は相当に高いようだ。

そして、そのセネカより様をつけて呼ばれているミシェルも相当

に位は高いわけなのだが――王女は思い切って尋ねてみた。

「ミシェルはセネカよりも身分は高いほうなのか？」

「え……い、いえ。私はその……身分はそうですね、高い……わけではないのですが……」

ミシェルがしどろもどろになっていれば、セネカが何を言っているのだろうかと首を傾げている。

「ミシェル様、きちんとお言いになれば宜しいのに。ミシェル様は、侯爵家の跡継ぎなのです。ですがリニム王立図書館の蔵書の閲覧を許されているその仕事を捨てたくなくて、侯爵家には戻りたくないんですって」

「こ、こらセネカ！」

半球体の部屋の脇にぽっかりと空いた仮眠室があった。そこに全員で詰められているわけなのだが、セネカは痛み止めをアイアンバッハから貰ったらしく、すっかりと良くなったようだ。よくしゃべり、よく笑う、そんな少年だったのだなと声音で気づく。

流石武人と言えようか、アイアンバッハは薬は自前でいつも用意していましたから、薬草さえ外から取ってくることが出来れば、私が調合しますと言っていただける。セネカは今や強烈な痛みを与えてきていたその傷を、すっかりと忘れてしまったかのようだった。

ミシェルは困ったように笑うと、ここの蔵書は素晴らしいでしょうと言う。

「蔵書の研究もそうですが、ここで自儘に暮らすのが、しょうにあっているのです。好きな時に好きな本が読める。素晴らしいこととは思いませんか？」

「なるほど。ここの本にお前は恋をしているんだな？」

「まあ……有り体に言ってしまえばそのようなものです。侯爵家に入ってしまえば、ここへは出入りを禁じられてしまいますから」

それは一体、どういうことだろうか。

アイアンバッハが尋ねる。

「まさかとは思いますが、ここは権力を有するものは立ち入ってはいけないという決まりがあると言うことでしょうか？」

「ええ。その通りです。ここは禁域。王家の者以外は、その下で働く者のみが入ることを許される場所なのです」

「だったら王宮で働いている者達は皆ここへ？」

「いいえ。王家に仕えている者ということで謳われておりますが、実際は文官として、王家の認めた者のみがここへは立ち入りを許可されています」

「なるほど」

ここは王立図書館とは名ばかりの、未開放地区なのだ。

許された者のみが立ち入ることが出来るものの、王家とは違う貴族にも、民にも公開されない未開放地区。それを唯一読める立場であるにも関わらずに、ミシェルはどうしてそれを手放す事が出来ようかと、そういうことのようだった。

なるほど、ある意味では変わっていると取られなくもないものの、それでも自分の知識欲を満たす為の行為とも思えば、それは悪いこととは王女には思えなかった。

むしろ好ましいと思った。

「それにしても姫様はお強いですね！僕、鍵を奪われた時に死刑も覚悟しておりました！それなのに姫様が……まさか取り返してきてくださるだなんて！！それも、そのように僕のために血まみれにまでなって……感激です！！」

「いや、別にお前のためじゃない。鍵はついでだ」

そもそも鍵が黒装束の者達に奪われたことなど知りもしなかったのだが、そんなことはお構いなしにセネカは続ける。

「本当にあの時は怯えてしまい、申し訳ありませんでした!!姫様の無双ぶり、大変素晴らしいと思います!!僕、感激です!!」

「いや……それはもういいから」

照れていると勘違いしているようだが、王女はただただこのような反応に慣れていないだけで、どう反応すればいいのか分からず、困惑していた。

まさか他人から感謝をされるようなことをしたつもりも無かったし、それどころかこんなことくらいで感謝されるとは思いもよらなかったのだ。

王女が困っていると、アイアンバッハが話題を変えてくれた。

「鍵のことは追々と言うことにしまして、この紙片はなんでしょうか?」

「ああそれな。俺も気になっていたんだが……ミシェル、分かるか?俺には書いてあるものが見れないから、お前が視てくれると助かるんだが……」

その言葉を受けて、ミシェルもセネカも王女が盲目であることを、今漸く思いだしたようだった。

「ええと、そちらを少々お借りしても宜しいでしょうか?」

「どうぞ」

アイアンバッハは王女から借りていたその紙片を三枚ミシェルへ

と手渡すと、ミシェルはそれを手にした途端、沈思してしまった。何やら突拍子もないことが書かれていたのか、ミシェルの顔色はどんどん悪くなっていく。

「……何が書かれていたんだ？」

「それが……そのですね……」

アイアンバッハはそこに書かれているものが分からなかったが、ミシェルには読みとれたようだった。

だが、決してアイアンバッハが文字を読めないわけではなく、単にそこに書かれていたものが、暗号文だったというだけだ。

そして、そこに書かれていたのは、まさしく国防を揺るがす重要なことで——ミシェルは申し訳ありませんがとその場に立ちあがると、これをお借りしますとその場を離れようとする。

それを見て王女は何かを悟ったらしく、アイアンバッハを連れていけと言うのだ。

「いえ、必要ありませんよ。一人で行けます」

「いや、連れて行け。さっきの今だ。殺されたいなら別だが、用心に越したことはない」

「……分かりました。では、アイアンバッハ殿、申し訳ないのですが、王宮までついてきていただけますか？」

「承った」

アイアンバッハは鎮痛剤となる薬草を王女に手渡すと、王女とセネカを置いて図書館を後にする。

王女は二人の消えた方角を見つめたまま、じっと身じろぎ一つしなかった。

＋＋＋

「……姫様？」
「なんだ、セネカ」
「あの、姫様はその、これを守ってくださいました」
そしてちゃりりと音が鳴ったのを耳にすれば王女はセネカが出して差し出してきたのが先ほどの鍵だと分かった。
「……結果的には確かに、そうだな」
王女は首肯すると、セネカが笑った気配がした。
セネカは王女に傍へと来てくれないかと言う。
「本当はその……僕がそちらに行かなければならないのに、この足ですので。申し訳ないのですが」
「皆まで言わなくても分かってる。お前が怪我をしたのは私が悪い。だから、何なりと言え」
「そっ、そんなことありません！！姫様が悪いはずがないじゃありませんか！！」
王女はもしかしたらセネカと王女を誤ったがためにあの黒装束どもはセネカを射てきたのかもしれない、とは流石に言えなかった。
だから曖昧に頷いてその話は止めた。
セネカの横たわる寝台に小さな手足を使いよじ登ると、そこには同じくらいの短い足が投げ出されていた。
「セネカは……歳は幾つだ？」
「え？ああ……ええと、姫様と同じ年に生まれたはずです。ですか

らほら、同じくらいでしょう？」

にこにこと悪意なく言ってのけるセネカに王女は苦笑する。

そして驚いた、同じ年ということはこの少年は五歳ということだ。

だが、その落ち着いた雰囲気にその口調、どれをとっても五歳の子供とは思えない――自分はさておきだが。

仕方ないと、セネカの手を取って王女は自らのそれを重ね合わせて大きさを比べ始めた。

「うん、同じくらいだな」

「あのっ！あのっ！！姫様！！」

「なんだ？」

「こ、これはその……」

拙くはないでしょうか、と慌てて告げるセネカの姿に、王女はそうだ、未だ自分は血まみれのままだったかと思いだし、セネカと距離を置く。

「すまん。血が乾いたとはいえ、べたべたとついたままの手で触れてしまった」

不快にさせたならば謝ろうと告げる王女に、セネカはそうではなく違うのだと首をぶんぶん振って否定するも、王女は分からないようだ。

「……いや、もういいですぅ」

「？」

王女が首を傾げているとセネカは先ほどの鍵を王女の手を取り、握らせてくる。

「これは王家の者のみが触れることが適うと言う、王家の秘宝、それが納められた部屋に入る鍵です。賊はこれを狙ってきていたに違いありません」

「……いや、それだとおかしくはないか？」

そもそもが王家の者のみが触れることが出来ると言われているその秘法、それを取ってこいと言われたのはセネカだ。

勿論セネカは王族ではなく――ならば何故、と思った。

けれどセネカがそれを簡単に種明かししてくれた。

10（ひみつの小箱）

「秘宝に関しましては僕は触れたことはないのです。他の方も同様です。小さな箱に納められたものらしく……僕でも持てるからと。王宮は今、それはもう忙しくて……恐らく、猫の手も借りたいといったところなのではないのでしょうか？」

そうでなければ一生、こんな大役を任されることは無かったろうと告げるセネカに王女は答えず、鍵に慎重に触れていった。

指の腹でその形を記憶していく。

何とも不思議な細工を施してある鍵だ。棒状になっているところから、三本ほど叉が分かたれている。そこの先にも細かな細工を施されていて――これは仕掛け扉の鍵なのかもしれないと、王女は思った。

「この鍵、複製は出来ないように作られているんだろう？」

「良くお分かりになりますね？その細工は複製が出来ないようにと作られたようで。ですから本当に、その鍵を取り戻してくださって助かりました。失くしたから作りなおせとは、決して言えないような鍵なのです」

だからこそ、鍵を失くしたという、ただそれだけの事由で死刑を言い渡される怖れがあったのか。

得心がいったとばかりに頷くと、王女は小箱はどうすると尋ねた。

「なるべく早く持ってくるようにとだけ言われておりましたので……どうするべきか……」

困っていると告げるセネカに、王女はならばとセネカの前に背中

を向けて来いと言う。

「何を……？」

「おぶってやる。だから早く乗れ。道案内はお前がしろよ」

「で、でですが！！」

「いいから早く！それを運べと言われたんだろ、お前。早くしないで後でお前が怒られたらどうする？お前の爺さんや父さんはそんなことになれば困らないのか？」

王女の言うとおりだ、確実に困ることになるだろう。

セネカは迷いに迷った末に、男として沽券に関わるものの、背に腹は代えられぬと王女の背に乗った。

天使のような見目麗しい美しい王女の背に乗るのは、本当に恥ずかしくて堪らなかったが、もうなるようになれである。

涙を堪えながら、恥ずかしさを堪えながらセネカがその背に乗っていれば、背を貸してくれている王女がこんな言葉を口にした。

「ははは！お前軽いなあ！ちっさいからだな！」

「わ、……わあああああん！！」

「な、なんだよ！泣くなよ！」

男心の分からない（そういう意味合いでは分かりたくもないだろうが）元男の王女であった。

＋＋＋

秘密の間と呼ばれるところにまで行くのに、存外長い時間、その通路を歩いていたように思う。

「セネカ、ここでいいのか？」

足音の反響音で壁に行きあたったと知った王女は、ここが所謂終点というやつだろうとセネカに尋ねてみるが、セネカの眼には扉など見えなかった。

「あれ……おかしいな。扉がつきあたりまで進むとあるって言われたのに。なんで？」

そこはただの石壁に見えた。

半球体の図書館の中央にある床の窪みを押しこむと、そこには塔内部と同じく仕掛けの施された床であったようで、その中には階段が隠されていた。

そこを真っ直ぐ――と言っても、うねうねと何度も曲がり角を曲がったのだが――道なりに進んでいけば、突き当たるのはただ一つ、二人の前に立ちはだかるこの壁のみだ。

セネカはそんな馬鹿なと呻き声をあげるが、王女は他のものが気になったようだ。

「セネカ、この壁、たぶんこれも仕掛け扉だ。どこかに窪みはないか？」

「くぼみ……くぼみは……」

セネカは王女に言われるままに、背に乗ったまま壁を調べていく。すると、程なくして王女の言うままに、壁の中央にうっすらと凹みを見つけた。

よくよく見れば、それは三又にわかれた穴があいている。

恐らく、これは鍵穴なのだろうと知ると、早速セネカが鍵をその穴の中に刺しこんだ。

すると歯車の回るような音をさせて壁が折畳まれていくように、横の壁に吸い込まれていくのだ。

「ここは……なんだ?」

そこは何とも不思議な空間に思えた。

先ほど図書室からこちらまで移動してきたわけなのだが、ここも負けず劣らずの不思議な形をした部屋のようである。

半球体の図書館に、こちらはほぼ完全な形の楕円といっていいのか、その球体である。

その部屋の最奥に設置された祭壇に、それは祀られるようにして置かれていた。

セネカに言われるままにそこへ入っていくと、セネカが腕を伸ばしてそれを手にする。

「姫様、取りました!小さな箱です。大変美しい装飾が施されています!」

「そうか」

見えない王女に気を使ってなるべく言葉にして見せているのだろうが、何故かその様子が可愛らしくて王女は笑った。

「じゃあ、このまま王宮まで連れていけばいいな?」

「……お、お願いします!!」

父と祖父のため、セネカは王女の背を借りたままに、王宮へと向かうのだった。

11（内通者）

ミシェルは王宮の中に足を踏み入れるとアイアンバッハを伴って奥へと進んでいく。

「ところで、どちらまで？」

「……国王陛下の元まで向かいます」

王の元へ向かっていると言われれば、二週間ほど前のあの出来事が真新しい記憶として蘇ってくる。

王に立てついた国の英雄。王ではなく、王女に恭順の意を示して見せた男。王に背いただけでは飽き足らずに王を捨て、王女を支持したのだから、この場を歩いているだけでも殺される可能性、それすら覚悟せねばならないだろう。

紙片を懐にしまいこんだままに前を進むミシェルに、王に自ら奏上すると言うことは、もしやそこの中にはとんでもない内容が書かれているのかとアイアンバッハが何気ない風を装い尋ねてみると、ミシェルは初めて足を止めた。

「……」

「そう警戒しなくともいいですよ。そのために王女殿下は私を伴って行けとおっしゃったのですから」

「そう……そうですね。済みません、アイアンバッハ殿」

ミシェルの態度からも悟れるのは、王に自ら内容を話さなければいけない、それも内密に、そして早く――そうする必要があるからだと分かった。

だとするとあの中に書かれているのは、恐らく、敵国と自国の誰か――上層部に内通者がいると言うことだろうか。でなければミシ

ェルが王に自ら会いに行く必要も無いはずだ。
アイアンバッハは開戦してからどれくらい時間が経ったのか、今更ながらに気になった。
王女はあの日よりも三日と予言した。だが、実際のところはどれくらいたってから戦が始まったのだろうか。
するとアイアンバッハの思考を読んだかのようにミシェルがこれに答えた。

「王女の予言は当たりました。あれから三日以内に開戦しました。迷いの森を侵略してくる者達を追い払う毎日ですが、ゴダール山脈のことも知っていなければ、恐らく守りを一点に迷いの森へと向けてしまっていたでしょう。予言は成就されました。迷いの森とゴダール山脈、双方ともに敵軍の進撃にあっております」
「なんと……そうでありましたか」

アイアンバッハはミシェルの言葉を聞くと、拳をぐっと握り締めて沈痛そうな表情を浮かべた。
こんな時に私は、何をしていると言うのか……
ルヴァリエ騎士団は、戦況はどうなっているのか、気になることは山ほどあった。けれど、アイアンバッハは王女の元を去ることが出来ない。そして、王女の元をされたとしても、前線に復帰することは今や適わない。

「前線に、出たいのですか？」
「……」
「あのような場所、いって何になります？命を落とすだけです」

ミシェルはアイアンバッハのことを思ってこう言ったのかもしれなかったが、今のアイアンバッハにとってみれば、これは逆効果だった。

慰めのつもりだった、とは後からミシェルが王女に漏らした話だが、この場ではミシェルは何も言わなかった。
アイアンバッハの嘆きようが、それほど凄まじかったのだ。

「貴方に何が分かるというのです！！あの者達は、私のルヴァリエは、……部下達は……私に今までついてきてくれたのですよ！それを、私は今、居ない！傍に居られない！彼らに何度背中を守られたか！彼らを何度守ったことか！貴方は私のことを、何も知らない！私が今、英雄と呼ばれているのは、彼らあってことなのです！それなのに……彼らは……今……前線で私を抜きに、戦っている。私は彼らの傍にいれない。いてやることが出来ない」

そこまで猛然と言い放つと、アイアンバッハはミシェルを振り返りもしないで先を行き始めた。
その手には、すらりと抜き放たれた長大な剣が握られている。

「だから……お前達のようなものは邪魔だと言っているだろうが！！」

突如として叫んだかと思いきや、次の瞬間どっと床を踏み抜く勢いでアイアンバッハがその場より頭から飛び込む勢いで前へと突っ込んでいく。
前方に何がとミシェルが前を向いてみれば、そこに居たのは先ほど追いかけてきた黒装束に囲まれた、王女があの日、大臣と考えた人物の姿があった。
殺せ、そう聞こえたような気がしたが、何故あのようなもの達にあの方が囲まれているのかとミシェルは頭が働かない。
そうこうしているうちに、ばっさばっさとアイアンバッハは黒装束を切り伏せていくと、黒装束を従え、周囲に侍らせていた男を捕まえた。

「おのれえ……！」

男は口惜しそうにしているが、アイアンバッハはその顔を見ることも嫌だったのか、その顔を物も言わず殴りつけた。

黒装束の者は明らかにこの王宮に仕えているものではなかった。アイアンバッハを、そしてミシェルを見て殺気を放つその姿は、どう見ても二人を亡き者にせんと襲い掛かってきたものだろう。

「お前が親玉だろう！手引でもしたか！……逆賊の徒よ……貴様のようなもの達がいなければ！私の部下達が一人でも亡くなっていたとしたら、お前を私は殺す！楽に殺しはしないぞ！」

王宮にまで入りこんだ敵国の手の者を従えた男、その男は見知った相手だった。だからこそ許せなかった。逆賊め、国賊めと、アイアンバッハは抵抗らしき抵抗も出来ずにいる男をぎりぎりと締め上げ、何度も何度も殴りつけた。

「ルーズベルト伯爵！矢張り貴方はリニムを……裏切っていたのですね！」

ミシェルがアイアンバッハの手から奪う勢いで、その煌びやかな衣装を纏った男の襟首を捕まえ、引っ立てる様にしてやると、壁にそのままだんと叩きつけ、普段のミシェルからは考えられないような剣幕でまくしたてていく。

「この紙片に書かれていたことは、事実なのですね！！貴方が国王陛下を裏切っていると！王女殿下暗殺を目論んでいるということ！！そして何より……リニムの情報を外の者達に売っていることも！！全てこちらに書かれているのですよ！ほら、答えたらどうですか

！！」

だが男は何も答えない。

それは当たり前のことだった。男はもう、唇を切られ、その頬は肥大していて唇が音を奏でようとしても、その頬が、切れた唇が邪魔をするため弁解することすら出来ない。

「ひゃめひょ……」

ひゅうひゅうと口から音をさせるが言葉となるものを紡ぐことも出来ないでいる男の姿に、ミシェルは溜飲を下げるどころか益々怒りがわき上がる。

だがしかし、そこに冷や水を被せられたかのようになった。

「それはまことかミシェル」

その声は、廊下の奥から聞こえてきた。

よく通る不思議に力のある声の持ち主は、ミシェルも、そしてアイアンバッハも良く見知った人物のものだ。

「国王陛下……」

毛あしの長い絨毯の上を涼やかな面の中に怒りを滲ませ歩いてくるのは国王、その人だった。

12（王女と王妃の最後の旅じたく）

アイアンバッハは絢爛豪華な衣装を纏った男を床にまたも引き倒すと、そのままミシェルが喋るのに不都合がないようにと、喋れないよう口に布を噛ませ腕を捻りあげた。

それだけで相手の男は悶絶し、出てくるものは言葉ではなく悲鳴ばかりでうーうーと唸って小さく悶え苦しむだけになる。少しの動作で相手の動きを完全に掌握してしまうとは、矢張り武人か流石だなとミシェルは関心していると、王がミシェルにまたも「まことであるのか」と尋ねてきた。

ミシェルは頭を垂れて、頭上よりも高く三枚の紙片を掲げて見せる。

「こちらにその証拠が御座います、国王陛下」

「……」

王は何も言わずそれを受け取ると、暗号かと呟いた。

読めるか、とは聞かなかった。王はそれをその場でするすると解読していったからだ。

そして読み終わった王は、顔をどす黒く染め変えて、男を――ルーズベルト伯爵を睨み据える。

「……謀ったかルーズベルト！！」

布を噛ませられているため、声も出せずに芋虫のように床の上で悶えるルーズベルトに、周囲の顔は冷ややかだ。

黒装束の者達の死体が山と積まれ、そしてこの紙片。更にはゴダール山脈にも迷いの森にも兵士を配置しているというのに、何故か敵はこちらの動きが分かるのか、毎回弱いところをついてくるのだ。

これは間者が居るなと思っていたところのこれであったがために、王は激怒した。

「こやつを牢へぶちこんでおけい！！」

「ははっ！！」

王は率いていた近衛師団にそう命じると、こうも命じた。

「洗いざらい全て吐くまで、責め立てよ。休ませるな。思考する暇を与えるでないぞ」

それはぞっとするほど冷たい声音だった。

これは、相当追い詰められているのかと、見ることも、知ることさえも出来なくなった戦況に脳裏を巡らせていたところで、またもそこに予期せぬ来訪者が現れた。

「何だお前達、こんな所にいたのか」

「アッシュ！！」

「王女殿下！！」

王女は窓枠を手の力だけで上ってきたようで、全身粉まみれだった。

儀式の間から衣装を取り替えてはいないため、絢爛豪華な衣装は、今や見る影もなくずだぼろだ。ところどころ解れて――いや、解れていないところを探すほうが困難なまでにぼろぼろになっていた。

「よっと」

王女は勢いをつけて窓の内側に入りこむと、セネカをアイアンバッハの腕に移した。そしてセネカにここに居るはずなんだが、お前

が手渡すようにと告げて、窓枠に腰を下ろして流石に疲れたなと全身についた外壁の粉を落とし始める。

その様子を見ていて唖然としたのは王だ。一度目は不義の子であると分かり、二度目の出会いはこれである。流石に沈着冷静と言われる王と言えど、あいた口がふさがらないようだった。

セネカが震えながら小箱を渡すと、王女が口を開いた。

「それなんだけどな、さっき妙な連中がそれを手に入れようと、セネカを射かけたりミシェルを殺そうとしたようなんだ。たぶん、敵国の連中は、そいつが欲しくて戦争をふっかけたんだろうな。――それで、それはまあいいとしてだ。アイアンバッハ、お前、この場所で何かやったのか？血の匂いがきつすぎてたまらん」

まあ俺も全身血まみれだから酷い匂いだとは思うんだけど、それでもここよりはマシだろうよと告げる王女に、アイアンバッハは困ったように言ったものだ。

「矢張り、やりすぎましたかね？」

「ああ？やりすぎたって何を？もしかしてここにもさっきの奴らがきたのか？」

「ええ、ざっと見積もってひぃふぅみぃよ……十五名ほどですか。廊下の狭いところで来るものですから、相手の飛び道具はほぼ使い様が無かったようですよ。あほですね、敵の刺客は」

「なんだそりゃ。馬鹿なのかそいつら。そんな狭いところで飛び道具って……どうせあれだろ？お前敵を刺したままにそいつを盾にして突っ込んだんだろ。だからお前がそんなに返り血浴びてるんだな。納得した」

道理で臭いわけだなと首肯すると、アイアンバッハは罰が悪そうだ。

「あ～……ばれましたか」

参ったなあと口にするアイアンバッハに、王女は突然王に首を向けて、「で？」と口を開く。

「……で、とは？」

「いや、そろそろなんだろう？俺の処刑」

「……何故、そう思う？」

「俺を見た時の表情？……かな。見えなくても――いや、見えないからこそ、肌で感じる。俺を見たくは無かったって、あんたが全身で叫んでた。だからそう思ったんだが……違ったか？」

王女のこの言葉に、王は言葉もないようだった。

王は小箱を懐に押し抱くと、アイアンバッハにこう告げた。

とてもではないが、娘と思っていた王女に対し、直接言うだけの勇気は、彼は持ちあわせていなかったようだ。

「この混乱している国を、一つにまとめ上げるには贄が必要だ。神に捧げる供物がな。――王女の処刑を明後日、早朝に執り行う」

「明後日？！そんな……早すぎます！！」

「もう……何日も前に決まっていたことだ」

それだけ告げると王は踵を返し元来た道を引き返していく。

セネカとミシェルが王にそんなのは間違っていると近衛兵に切り捨てられることを承知で声を張り上げて叫ぶものの、王は「捨て置け」と、ただそれだけを告げて消えてしまった。

その場に残された王女達の元に、白い布を頭からすっぽりと被った文官と思しきものがやってきた。

「皆さま、こちらへ」

この世界での、最後の仕度が始まった。

十十十

王妃はあの儀式の間での一件以来、人から隠されるようにして奥の宮に隠されていた。

あれから何も物を通らず、すっかりとやつれ果てた王妃であったが、ある日、王妃の実家であるボルツフェル公爵家よりの遣いがやってきた。

「……何用でしょうか」

王妃に置かれましては大変ご機嫌麗しゅう――などと空々しい美辞麗句を奉っていくと、最終的にその遣いとして現れた男はあるものを差し出してみせた。

それは、一つの小さな瓶だ。

つるりとした硝子細工の細かな装飾が、大変美しくもあるが、何故か王妃はそれを見て、寒々しい気持ちになった。

まさか、これは――

ごくりと不自然なまでに喉がなると、遣いの男は口端を上げてにやりと嫌らしい笑みをかたどる。

「こちらは公爵様からのもので御座います」

「……」

まさかと思った、だが恐らくそうだ、あの父からの物とあらばこ

の小瓶はまさしく自害せよという命令なのだろう。
そして、王妃がそのことに気づくや否や、男は「厳命であるとのことです」とだけ告げて、そのまま部屋を下がってしまう。
後に残されたのは王妃一人。いつの間にか侍女達も姿を消していた。
――そうか、これを飲むからと、侍女達に告げたのか。
王妃はこれより自害なさいます、邪魔立てなさいますな――そう告げられ遠ざけられたのか、それとも自ら遠ざかったか、そんなことを考え王妃は自嘲気味に笑った。
一体、何のためにここまで来たと言うのか。
王と出会い、慈しんだあの日々は一体、なんだったのだろう。

「もう、父上の元にも帰れぬか……」

元よりも帰る場所などあろうはずもないとは分かっていた。
あのように王女が日々育っていくにつれ、魔力がないのではないかと思う度に何度絶望しただろうか。
魔力がないと気づいたのは、確か王が愛妾の元に走り始めたのと同じ頃だっただろうか。ふいにそんなことに気がついた。
王女のあの予言めいた言葉がまことであるならば、愛妾はまさしく、世継ぎを生んだことになるのだ。

「……なのに、わたくしには魔力の無い王女がただ一人だけ」

笑えもしなかった。
日々狂いそうだった。
目の前の小瓶を見る。王妃は見た事も無かったが、それは海のような青をくっきりと映しこんでいた。
空よりも濃いその青に、魅かれる様に王妃はそれを手に取った。

「お父様……」

公爵より渡されたこの小瓶は、ある意味では王妃を助けた。

王からの愛情が遠ざかってしまった現実からも、自分は世継ぎを得られなかった絶望からも、愛していた娘が有り得ないまでに不気味に育っていくその事実からも、この小瓶によって逃げることが出来るのだから。

王妃は一息に小瓶の中身を煽ると、ゆっくりと床に沈みこむように倒れていった。

今わの際に呟いた言葉に驚いたのは、王妃本人だった。

「愛していたわ、わたくしの王女……」

そうか、わたくしは、あの娘を――愛していたのだ。

ふいに王女が首を巡らせると、アイアンバッハがどうかしたのかと尋ねた。

王女は暫し周囲を見回して耳を凝らしていたが、おかしいなと口にして何でもないと窓辺へと滑るように歩いて行く。

窓辺に立つと空を見上げて口を開いた。

「誰か……呼んだような」

――この日、母と娘は相容れぬままに、知らぬ間に今生での別れが訪れていた。

王妃アデレイドの葬儀はそれから一週間と待たずしてひっそりと行われ、王妃のこの死は国民にも知らされぬままに墓地にその棺は納められた。

その死を知る者は、リニムが滅んだ後、一人もいない。

王女が王妃の死を知る日は、これから後、六年後のことだ。
けれど王妃の死の真実を知る日は永遠にやって来ないだろう。
王妃が王女を愛していたと告げたことを知る日は、一向に訪れることはない。
悲しいことに、それが事実だった。

＋＋＋

王宮にきたセネカは、軍部の救護班に魔法で足の傷を癒して貰い歩けるようになると、祖父である侍従長の元へと真っ先に駆けていった。
王女のことをどうか助けてやれないかと、ただそれだけを願って。
だが、侍従長は首を振った。

「私にも叶えてやれないことがあるのだよ」

いやだ、いやだいやだいやだ、いやだ!!
セネカはそれから王女の元へと駆けた。まだ完全には癒されていない足では歩くまでがやっとと言われていたが、そんなこと構うものか。自分を助けてくれた、自分のために動いてくれた王女が生きていてくれるのならば、足を一本二本、くれてやっても構うものか、その時のセネカは本気でそう考えていた。
明後日の早朝、処刑が執行される。
昼の日中にしないのは、敵国の警戒もあるため、そう時間を割いていられないからだろう。
そんなおざなりな処刑もいやだったが、誰もが王女を不義の子だ

と勘違いしたままでいられること、そのことのほうが悲しかった。
セネカには、不義がまだ良く分からなかった。けれど王妃が良くないことをした『かもしれない』それを調べる方法が無い。けれど、恐らくはそれは事実だと思われる。
だから王女を殺す、そう大人達が言っていることだけは分かった。
絶対に、そんなことは飲み込めない話だった。

１２（王女と王妃の最後の旅じたく）（後書き）

王妃が救われないんですが……何て言うかごめんなさい。
救いが用意出来るかは未定です。

13（間違った入浴の仕方？）

「姫様！！」

扉の奥に勢いよく飛びこむと、セネカは王女の白く小さな背中に飛びついた。

この小さな背中を、今、守れるのは自分だけだ、そう思った。

絶対にはなさない、はなすものかとセネカはぎゅうぎゅうと抱きつくが、王女は容赦がない。

背後から抱きついてくるセネカをぽんと水の中に放り投げたのだ。

「っ！？げほっげぇほっ、うえっ、ひ、姫様酷い！」

放り込まれた水から顔を上げ非難の声を王女に投げかけながら見上げると、そこには怒りに顔を歪めた王女の顔があり――王女はセネカに向かって盛大に罵り始めたのだ。

ここはもっと可愛らしい反応（つまりは王女が照れて「や、やだセネカ！何をするのですか！」「ごめんなさいセネカ」などといった反応を返してくれるものと考えていたのだが大誤算である）が来ると考えていたのだが、罵声が返ってきたのでセネカはぽかんとしてしまう。

「馬鹿かお前！ここは風呂だ！風呂には裸で入浴する！これくらいの常識をどうして守れないんだあほめが！！おら、さっさと脱いで来い！！なんなら俺が今すぐ脱がせてやる！」

「えっ、えええええ？！」

自分で湯船に放り込んだくせに、何でそんなところに服を着こんで入りやがったとは、あまりにも酷い言葉だった。

だが、ここに王女は居ると言われて飛び込んだ先は王家専用の大浴場で――セネカはつまり裸の王女に抱きついたのだった。そして今そこで容赦なく王女にひんむかれ始めたのだった。

お陰で何のためにここまできたのか、セネカの頭の中からはぽんとすっぽ抜けてしまった。

「ひゃあああ！やだやだ、目に泡が入った！痛いです！！」

「だから目を閉じろって言っただろ！なんで守れない！？こら、大人しくしてろ！」

ただでさえ見えないんだから加減を間違ったらどうしてくれる！？と叫ぶ王女は問答無用でわしわしとセネカの髪を泡だてていく。

「やめてください姫様ぁあああ！！アイアンバッハ様も助けてください！」

「……え？」

アイアンバッハは満面の笑みを浮かべて王女の髪をわしわしと泡だてていた。とてもではないが、他のものが目に入っていそうには見えないほどに、王女の髪に夢中のようだ。それを見て、瞬間的にセネカは悟る。「ああ、この人に頼ってはいけない」と。

「アイアンバッハ……」

王女がアイアンバッハをくるりと振り返ると、アイアンバッハはその鼻の下を赤いもので染め上げた。

「だからお前はほんっとに……」

「え？なんでしょうか？」

どこまでも笑み崩れた顔をして、アイアンバッハが王女の髪を梳るその画は、どこか――いや、完全に変質者の様相を呈していた。
けれどそれを王女は今更告げるのも馬鹿馬鹿しいかと、痛む頭を抱えていれば、そこに救いの神が現れる。

「王女殿下、湯あみの後の着替えをお持ちしましたので、でましたらこれにお着替えください」
「でかしたぞミシェル！！」
「は？」

王女はアイアンバッハの手の中からするりとすり抜けてくると、そのままミシェルの声の聞こえた方にぱたぱたと駆けていき、ミシェルが反応を返す前にその懐に全身で飛び込んでいったのだ。
全裸でがっしとミシェルの足に四肢を絡ませる王女の姿に、ミシェルは目を白黒させていた。

「お、おおお、王女殿下！？そ、そんな！はしたないです！」

ミシェルは首から上を真っ赤に染め上げ見ないようにと顔を背けるも、王女はそんなものは見えやしないのでお構いなしだ。わしわしとミシェルの身体を丸太かなにかに見立て、その胴体を上って首に腕を回すと助けを求める。
首に短い腕をぐるりと巻きつけてくる王女との距離は、ほぼない。途轍もない近距離でのこの声に、ミシェルは聞き返した。

「なんですって？」
「だから、助けろって言ってるんだ！」
「だから、何からかと聞いています！」
「アイアンバッハ！！あいつ、俺を洗ってる間中ずっとはぁはぁしてて気持ち悪いんだ。さっきは鼻血まで出すし……怖いだろ！」

「それはまあ……」

王女の身を自らに置き換えてみて思う――大変身の危険を感じます。

王女は拗ねたように唇を尖らせると、だから助けろと言うのだ。

「では……」

助けるのはやぶさかではないが、ではどうしましょうね、と口にしようとしたところでミシェルは首を傾げてしまった。

具体的にどうすればいいのか、少々考えてしまったのだ。

アイアンバッハをこの場から追い払えばいいのか、とも考えてみたものの、それはそれで失礼にも思えた。（聞こえるところでこんな会話をしていてそれはまさに今更ではあるのだが）

ではどうするか、と考えた時に、王女がこんなことをのたまった。

「ミシェル、そうだミシェルが一緒に入ればいい。俺のことはミシェルが洗え。セネカはアイアンバッハに洗って貰うように！！それでいいよな！」

見えないし今までは全て侍女がやってくれていたもんだから、ここ暫くの間とっても大変だったんだと言われれば確かに同情もあるし、不便なのも分かるだけに何とも言えないものがあるのだが、それでも相手は小さくはあるが異性である。それも王族だ、ミシェルは激しく動揺した。

「えええええ！嫌ですよ姫様！僕自分で洗え……じゃない！……その、姫様にっ」

後半はぼそぼそと小さな声になってしまったが、王女に洗って貰

いたいと何とか絞り出すように告げるも、その声に被るようにしてアイアンバッハが口を開いたために、セネカの言葉は王女に届く前に霧散して消えた。

「アッシュ！私に洗われるのがそんなにお嫌ですか！」
「おう、あたぼうよ！！」

合点だとばかりに言いきると、ミシェルがどうやら言葉を取り戻したようだ。

「何か言い回しが違うような気がしますが、全力で嫌がっておりますね王女殿下」
「まあな！！」

全身全霊でお断りだと王女はアイアンバッハに言い放つと、ミシェルの首っ玉にぎゅううとしがみついて離れない。

「あ！……って言ってもなミシェル、めんどくさいから卵白とかで髪の毛の艶なんて出そうとしなくてもいいからな！」

それだけ言うと王女はミシェルの襟を突如として緩め始めたのだ。ぶちぶちと細工の美しい釦を千切る勢いで剥かれ始めると、ミシェルは目を剥いて嫌がった。

「王女殿下、何をなさいますか！！」
「……んと、脱いでる」
「違います！！それは脱いでいるのではありません！脱がせているのです！！」
「じゃあ分かった。脱がせてるっていうか、ひん剥いてる」

手元を一旦止めて愛らしくも首を傾げる王女の姿に、ミシェルはぶんぶんと首を振って違うと言うのだ。

「当たっています！確かに当たっているのですが何やら……間違っています！同じ剥くにしても逆でしょう配役！！」

「そうかあ？」

良く分からないけど兎に角ミシェルは早く脱げばいいじゃないと言うと、王女はミシェルの衣服をはぎ取る行為を再開し始めるのだった。

「王女殿下、あなたは間違っています！女としても！ついでに王族としても！！」

「んじゃあどっちも一旦横に置いといてだな」

「置いとけるはずがないでしょうが！！ちょっとこら止めっ……止めてくださいお願いしますから！！」

王女は釦をむしる作業に飽きたらしく、とうとう服の合わせを引きちぎり始める始末だ。

ミシェルは手篭にされる女人の気持ちがこんなところで分かったらしく、御助けを！と、普段の声よりも幾分高い声音で助けを求めるのだった。

けれど王女は無情にも言い放つ。

「お前ここがどこだと思ってる。王族専用の風呂場だぞ。んなところに誰が助けになんてくるもんか。馬鹿じゃないんだから大人しくしてろって」

「ですから貴方は先ほどから言葉の使い方が間違っています！」

それはもう、色々と。

13（間違った入浴の仕方？）（後書き）

色気のない入浴風景です済みません

１４（国民達の絶望）

王女達の姿は今、城下町にあった。
何でも王女曰く

「ミシェル、お……私、死ぬ前に一度でいいから王宮の外にいってみたい！私の愛するリニムを見て……から死にたいのです！！」

こんな時ばかり猫を被って言う王女の姿に、何故毎回丁寧に騙されるのか分からないが、ミシェルは感極まったようで、「私は最後まで抵抗をし続けるつもりですし、王女にも最後まで生きる希望を諦めて欲しくはありませんが」と前置いて、けれど城下町に出て、民と交流するのもまた必要なことでしょうと告げ、外に連れ出してくれたのだ。
王女は城下に出る前のやり取りを思い出して喉の奥でくっと笑った。

「ミシェルちょー……簡単」

そして大変いい人だ。

「何がですかアッシュ」
「だますの」
「さらりとそう酷いことを言いなさいますな。――にしてもアッシュ、王宮の作りにそして迷いの森、更には背後のゴダール山脈ですよ。これでは流石に逃げようがないのではないでしょうか？」

ひっそりと声を顰めてこう言えば、王女はこれに同じくひっそりとした小さな声でこう返した。

「今夜あたりに出ていけば、警戒もなにもないだろうよ。リニムはこれでも一応戦時下だぞ？明日の処刑だって早朝行うくらいだからな。通常処刑ってのはこれくらいの文化基準だと、一種のイベントのようなきらいがあるからな。それを早朝に行うのは些か奇妙だ。要はそれくらいリニムは余所に割いている手がないんだろうよ」

だからこそ、そこを突けばいいのだと言う。

「早朝くらいしかあきの時間が無いというなら、その前、深夜なら楽に逃げられるはずだ。戦のために毎日警戒をしているかもしれないが、それがずっとは続かないもんだ。違うか？」

「なるほど……確かにそうですね」

自分が長い行軍に置かれていた時のことを思いだすと、アイアンバッハは頷いて見せた。確かに自分達も、戦時下では常に緊張しているところもあるのだが、ずっとは確かに無理だ。だからこそ交代して見張りにつくのだから。

「といっても見張りも交代する時間帯は警備が緩むもんなんだよな。片方は疲れてる。そしてもう片方は寝起きでまだ頭が上手く働かない……」

「そうなりますと後は逃げ道を確保ですね」

「だな」

そう言うと、王女はアイアンバッハを伴って町の中に消えていった。

セネカとミシェルが護衛の兵士を伴って慌てて後を追いかけるものの、二人の足は速かった。

「待ってくださいよ、姫様！！」
「ちっ、めんどくせえな」
「アッシュ、口が悪いですよ」

何故このようなことになったのだろうか。今も王女には分からなかった。
ぶんと何か決して軽くはないものが自分の方に投げられたのだが、それを王女は危なげなくかわすと参ったなと思った。
こんなところで目立つと、逃亡の際にあとあと面倒なことになりそうだと思ったのだ。

「――こんなガキ、どうせいらない王女だろう！この役立たずの無駄飯食いが！死んじまえ！！」

兎に角ばれた。王女があの、排斥されたリニムの不義の娘であることが、城下町の人通りが最も多い道でばれてしまったのだ。
盲目の王女の前にアイアンバッハが割って入ろうとするも、王女はそれを手で制する。
放っておけ、言いたいだけ言わせてやるがいいということか、王女は無言である。
けれど言わせてやれない人がここに居た。
セネカだった。

「違う！姫様は、お、お優しい方だ！無駄飯食いなんかじゃない！！要らない王女なんかじゃない！！」
「なにおう？」

アイアンバッハよりも相手は年かさの男なのか、しゃがれた声は恐らく昼間から酒を飲んでいて潰れた声なのだろう、セネカに威嚇

するように放たれた言葉に、王女は不快げにやや眉根を寄せた。

「姫様はあんな失敗をした僕を助けてくださった！本来なら、僕の方が死刑になるはずだった！それなのに……姫様は、僕のことを助けてくれた！素晴らしい王女様なんだ！」

だからなんだと言いたげに割って入った男に、セネカは震えながらなおも続ける。

「それに、それにだよ！あんな……あんな小さな姫様が、敵国の間諜を次々と薙ぎ払っていくなんて、それこそ魔法が使えないはずがないよ！あの日の儀式は絶対、間違いだったんだ！やり直せば必ず、姫様は儀式に成功するはずなんだ！！」

「だったら今すぐやってみせろや！魔法を使って見せろ！今すぐだ！俺みてえなもんだって簡単に魔法が使えるってえのに、王女殿下が魔法を使えないなんて、リニム始まって以来の珍事だ！恥の歴史だぜ！おら、使えるもんなら使ってみろよ、嘘つき王女殿下よお！！」

「姫様は嘘つきなんかじゃない！！」

セネカには悪いとは思うものの、王女は言い返そうとは一度もしなかった。

物を投擲されても、一度目以降は全て全身で受け止め続けた。

「セネカ、行くぞ」

「え……姫様？」

「王宮に戻る」

「え、だって……王宮に戻ったら……」

セネカは唖然とした。

今王宮に戻れば、この者達に誤解を与えたままになる。
セネカは王女がこの場で証明してみせてくれればと思っていたが、王女はそのつもりがないことを悟ると何故王宮に戻るのかと叫んだ。酷く勝手なものいいかもしれないが、セネカからすれば、裏切られたように感じたのだ。
今証明すれば何とかなるかもしれないのに、勝手に死んで欲しくなかった。
自分を救ってくれたはずなのに、それどころか国の宝とされる秘宝すら守り通したというのに、なのに勝手に死に行こうというのだ、この王女は。
王女はセネカに――ひいては城下町の民全員に向けて言い放った。

「明日の処刑まで、あそこが俺の家だからだ。だから王宮に戻る。沙汰あるまでそこにいる。それが当然のことだろう、セネカ」
「……姫様」

王女はミシェルと護衛の兵士を伴うと、控えていたアイアンバッハを連れてそのまま王宮への道を戻っていった。

「ずるいよ……」

勝手に救って、勝手に死ぬなんて、そんなの……許せないよ。
セネカの顔は、悔しさに歪められていた。

１４（国民達の絶望）（後書き）

オルキス編まで書き上がってるんですが手直しが終わってなくて中々アップ出来ない状況です。
暫しお待ちいただければ幸い。

１５（最後と着飾るのは、）

「アッシュ……あのようなことを申しまして、如何なさるおつもりですか」
「何がだアイアンバッハ」
「何がって……今夜抜け出ると言うのに、あのようなことを言って……抜け出にくくはなりませんか？」

確かにそうかもしれない。
けれど、あの時はああいうのが最もいいことだろうと思ったのだ。

「何となくだったんだがな……」

ぼそりと呟くも、アイアンバッハには聞こえなかったようだ。

「何かおいいになりましたか？」
「いや……何でもない」

王女はそうして王宮に戻っていくのだった。

＋＋＋

王女は唸りながらも正直な感想を述べた。

「これは正直予想していませんでした」

と、いってみたところで、誰の反応も返ってはこないのだが。

王女は王宮に戻るなり、王の刺し向けた兵士により拘束され、囚われてしまった。

勿論その場で抵抗をしようとはしたものの、アイアンバッハはいいとしても、無力なミシェル、そしてセネカ達三人がその場で兵士達に囲まれているのを見てしまったがために、抵抗を止めたのだ。

――その時好きにしろと確かに言った、言ったのは王女は覚えてはいるのだが。

「これはほんっとうに……予想していなかったよなあ……」

最後だからと王が王女の全身を磨き上げるようにと侍女達に命じたようで、明日落とす首だと言うのに、それはそれは熱心に磨き上げようとしてくるのだ。

女だらけと言うこともあり、王女は最初逃げようかとも考えたのだが、王の差し金だろうか、部屋のあらゆるところには、武骨な兵士達が用意されていた。

矢張り間違いだったのか。

セネカを連れて王の前に出たあの時、自分の力の一端はばれてしまっている。逃げるのであればあの時を置いて他には無かったに違いない。

無駄に老婆心など出してあそこで忠告なんぞするべきでは無かったかと思い、くしゃくしゃと髪を掻き毟ると、侍女が悲鳴を上げた。

「きゃあああっ！何度動かないでくださいましと申しましたか！！どうしてじっとしていられないのです！？」

内心では「うるせえなあこの女」などと思っていたが、実際に口に出すのは殊勝な言葉だ。

「……すまん。一応は悪気は無かった。ただしそろそろめんどいか

ら早く終わらせろ。ついでに首いてぇ。あと、右にいる侍女の香水くせぇからちょっと遠くいけよ」

「んまあああああ！！」

殊勝な言葉に混ぜて寄越したのは、実にさり気無い（と言うこともないかもしれないが）注文だった。

最後の方はもう本当についでとばかりに口にしたのだが、最初は怒り狂っていたその侍女は、最後には、「私そんなに匂う？」などと同僚に尋ねていた。香水ぶちまけたような匂いしやがって、匂う？なんて控え目に聞くな愚か者、とは流石に声を大きくして言えなかったので小さく言った。

聞こえたのか侍女が泣いたような気がした。めんどくせえと思った。

仕方ないので王女は慰めるわけではないが口を開いた。

「いいかお前らよっく聞けよ！香水なんてのは邪道だ！！毎日水浴びでもなんでもしてればその個人個人のいい匂いってもんが漂うもんだ！香水なんてつけて男を誘うくらいなら、綺麗に身体中磨いてシナ作って誘え！それでいくらでも男なんざ釣れるってもんだ！むしろ付け過ぎた香水は男避けにしかならないぞ！」

「……え、そうなんですか？」

「当たり前だろうが！お前なんて香水かけ過ぎて意味分かんねえ匂いになってんだよ！自分じゃ気付かないようだがな、お前マジくっせえよ！！お前今男いないだろ！」

「何でわかるんですか！！」

「男の体臭がついてないからだ！」

犬並みの嗅覚をひけらかしてどんと言って見せた王女だが、侍女は唖然として言葉もない。

「香水をまずは落とせ！ついでに化粧もお前絶対にケバいだろ！おしろいの匂いがきっついわ！その半分の量でいいから落とせ！そしたらお前の可愛さに男はイチコロだ！」

色んな意味で通じるか分からないとこれには言った後から思ったものの、どうやら通じたようで、本当にそうでしょうかとおずおずと侍女が尋ねてきた。

「任せろ。お前の声も歩く音も、満点だ。後はそのきっつい匂いだけどうにかしたら俺だったらふるいつく」

見えないから顔はどうか知らないものの、適当に（……）王女は口にしたが、どうやら侍女は乗り気になったようだ。化粧を落としてくるとそそくさと出ていってしまったのだ。

他の侍女達は仕事中なのだがと唖然としたものの、自分達も流石にあの匂いには辟易としていたのか、出ていかれてほっと息をついていた。

「……あのな、お前ら。言わないのは優しさじゃないぞ。言ってやるのが優しさだと思う」

気づいていてそれだったのかと思い、王女が呆れたように言えば、

「……そうは言いましても、中々難しいものがございまして」

との答えが返ってきた。

女同士って面倒なんだなと、これは万国共通らしいと王女は嘆息を零した。

因みに侍女達も兵士達も、これは間違いであった、とは王女のことを考えているものの、名もなき王女ゆえに他の呼び名もないのだろう。仮にと言うことで王女はそのまま「王女」と呼ばれていた。

髪を梳られ、複雑な形に結いあげられていくのを見れば、まさか、と思った。

「どうやって寝るんだこれ……？」

そう尋ねたところ、これは寝る前の髪型であり、勿論このままで寝ていただきますと言うのだ。

「なんてことだ……首を痛めるじゃないか」

ぐいぐいと頭皮のあらゆる場所を引っ張られ、更には頭の上がこんもりと重くなっていくのを体感すれば、嫌でも頭の上が凄まじいことになっているのは容易に想像がつくというものだ。

見えずともそれくらいは分かるのだが、つんけんと侍女達はよくもまあ分かるものだ事と皮肉るように言ってくる。

髪を結いあげられただけで精神が摩耗したのだが、王女に更に苦難が待っていた。

「晩餐にはこちらの服にお召かえいただきます」

と、言われても王女には見えないので分からないのだが。

着せられる段階になり、王女はそのずっしりとした衣装に、そして胴を締め上げるコルセットに悲鳴を上げる。

「重いし苦しい！」

「我慢なさいませ！これくらい……貴方様は仮にも貴族です！王族ではなかったのかもしれませぬが……それでも貴族の端くれならば、

これくらい、当たり前に着こなしてみなさいませ！」
「無茶言うな！！五歳児の背骨が折れるっつんだ馬鹿！！」
「お口が悪う御座いますよ！！」

それだけ言うと、侍女は王女の胴をぐいぐいと締め上げた。
最後の晩餐だと言うのにそんな締まった胴のお陰で、王女はこれっぽっちも食事を楽しめなかったのは言うまでもないことだった。

１５（最後と着飾るのは、）（後書き）

王からの色んな気持ちが向けられた結果が着飾っての晩餐をと言うことだったのですが、王女はそれに気付かず。

16（処刑場に舞い降りた光）

そんな厳戒態勢の中、当たり前だが逃げられるはずもなく、王女はふらつきながらも真っ白な絹が目に眩しいまでの衣装を身に纏わせられ首に縄をかけられ城下町の中を歩かせられていく。

結局逃げる暇も、逃げられるような態勢も整わなかったか……

考えてもみなかったことだが、この別の世界で王女は死ぬのかもしれないと、処刑の段取りが着々と進んでいくこの状況になり、初めて考えたようだ。

なんてことなんだろうな。

あの人に、伝えなくちゃいけないことがあったのに……

王女は万事休すかと俯く。

周囲の声が喧しいほどになってきた。

殺せ！殺せ！殺せ！

不義密通の大罪を犯したものを！処刑せよ！！

戦時下で、更にはあまり芳しくない旗色なのか、処刑上に集まった国民は王女を殺せ！さすればリニムは蘇る！と、本気で考えているようだ。どうにもその方向へと国民の意思をねじ曲げることで国の心を一つにしたいとそういうことなのだろう。国民の意思はねじ曲げられているように王女には感じられた。

「分かりやすいな……」

後ろでに一応は木でできた枷を噛ませられているが、これくらい、千切って逃げるのは容易いだろう。

だがしかし、盲目ゆえにどんなにミシェルに知識を叩きこまれようとも、ただ一人では生きていけない。
それこそが王女の唯一の弱点とも言えた。

逃げられる、が、逃げられない……か。

参ったなと王女は空を仰ぐようにしてみるが、早朝だと言うのに朝日が眩しいのか、肌に照りつく陽光が熱いなとぼんやりと感じていれば、遠くからセネカの声が聞こえてきた。

「――姫様！姫様！！いやだ、姫様にはちゃんと魔力があります！ですから、何卒、何卒お待ちくださいませ！！」

殺せ、殺せ、リニムに新しい王族を迎える前に、不義の間違った子を粛清せよ！さすればリニムは蘇る！
セネカの声は熱狂的に叫び続ける国民の声に圧倒されて、誰の耳にも届かない。

「姫様！あんなの間違いなんだ！姫様は……ちゃんと魔力があるんだ！いやだ、いやだよ姫様！死なないで！――ねえお願いです兵士様！姫様の魔力をもう一度調べてみてください！！お願いですから！！」

死ぬ気は無かったんだがなあ……
こんな時こそアイアンバッハが来てくれるものと考えていたが、どうやらあちらも既に王に押さえられてしまったようだ。
となると本当にもう無理だなと、内心で諦めも肝心かとも考え、セネカに聞こえるはずはないと分かっていても、王女は言った。

「これがこの世界での俺の運命なんだろう。だから……ま、仕方な

いさ」

腹をくくった、だからお前もくくれと言うが、それはセネカに聞こえたのだろうか。王女には分からなかった。

受け入れれば何か、別の道も開かれるのだろう。

流石に五年もいれば、この国での自分と言うものも嘘でもまやかしでも何でもないのだと嫌でも悟っていた王女は、この国で、この世界で終える生と言うのは、まこと己の中では現実として残るのだろうかと考えた。

夢なのか幻なのか――はたまたこの世界での己という個は、本当にあるものなのか。

それは何度も何度も王女が抱いた問いだった。

ここで死ねば、元の世界へと帰れるのだろうか――と考え、セネカの声に引き戻される。

「いやだ！死ぬなんて、許さないですよ！！」

「うるせえガキ！邪魔なんだよおら！」

セネカに対して言われたのだろうその言葉は、激しい打撃音に続いて、セネカの悲鳴で理解した。

とうとう国民の鬱憤が、不満が、決壊しはじめたのだ。

雪崩れのようにセネカへとそれはどっと流れ込み、集まっていく。

王女に集めようとした鬱憤や不満が、セネカという幼い命へと向かっていくのが王女には居たたまれなかった。

「わああっ！痛いっ！やっやめて！！」

人垣の向こうで、セネカの悲鳴とそれを殴る蹴ると暴行を加える音が聞こえる。

「馬鹿がっ！」

王女は自分を牽いている兵士に街中で暴行事件だ、助けてやれと命じると、兵士は馬鹿にしたようにくっと笑った。

「何人の世話焼こうとしてんだ。お前は今から死ぬんだぞ？」

その嫌らしく言われた言葉に、王女は現実を思い知った。

ああそうか、そうなのだ。

この国はもう、未来に希望を持てなくなっているのだ。

国が滅亡しようとしている。そして滅亡しようとしている時に魔力を持たない王族が生まれ落ちた。これが示すものはなんだったのかと、それと今の戦況と結び付けて、災いは王女にありと思いこんだ。いや、思いこもうとした。

王女さえいなければ、この国は元の通り豊かになる。平和になる。そう信じたいのだ。

馬鹿なことを……

腐敗ここに極まれり。

生きる希望を失くした者達に、王女はすっと心が冷えていくのを感じた。

誰かの所為にしているからこそ、お前達は駄目なんだ！！

歯がゆかった。

何一つ出来ないこの身が。

説教を垂れても今の国民は、誰ひとりとして王女の意見に耳を貸さないだろう。

それは王女の前にいる兵士もそうだが、絶望に染まりきっている

のだ。
誰もが辛い、だからこそ他者の所為にしたい。
自分は悪くないと思いたい。
だが、そうではないのだと告げたかった。
誰かの所為にして逃げているうちは、一向に希望は訪れない。
立ち向かわなければいけない。
未来を見据えて歩かなければ前へは行けないと言うのに。

演説などにも使われる石畳の広場に設えられた処刑台。
王女の小さな身体は、今、壇上の上に召し上げられる。
民衆達の熱気と声に処刑台が震えているのがわかる。それは見えずとも分かるが、異様な光景だった。
たった5歳の子供の処刑をこれだけの人間が望んでいるのだ。熱いと王女は思った。
これほどの熱意をほかに向けられないのだろうか？と場違いなことも考えた。
頭上でこの国の神の名だろうが、そこに命を返す宣誓をする処刑人に言いたいものだ。
俺の神はこの国に居ないのだと。
この国もそうだが、この世界には居もしない。
絶対に帰って見せる、そうアイアンバッハの姿を見つけた時に誓ったが、どうやら己に誓ったその誓いは、果たせそうにもなかった。
せめてこの世界を己の目で見てみたかった。そんなことをふと王女は思った。
耳にいつも木々のざわめきが聞こえ、鳥達の歌声の聞こえるこの世界は実に美しいものだろうと思っていたからだ。
だが――今この瞬間この場所が見えたとしても、異様な熱気に身を包んだ人間しか目には入らないのだろうと思うと、見えなくとも構わないだろうと思い、瞼を更にぎゅっと瞑るとその時を待った。

「大いなる神、メティカの懐に抱かれて眠れ。いざ……」

いよいよ断罪の剣が振り被られたその時だ、王女に救いの神が現れた。

『姉上、死んではいけない』

そんな声が突如として処刑場一杯に広がり聞こえると、周囲がかっと光ったのだ。

「わあああああっ！！」

王女に剣を構えていた処刑人が目をつぶされたのか、周囲をつんざくほどの悲鳴を上げてくずおれる気配がした。

だが、王女には処刑人に構っている余裕が無かった。

真っ白な世界に放り出されたのかと思わず錯覚してしまうほどに、それは眩い光の嵐だった。

その嵐の真っただ中に王女はいたのだから――。

「なんだこの光は……」

光の嵐の中心に、自分がいることに驚くも、一体何がどうなっているのか、皆目見当もつかなかった。

かと思いきや、どうやら王女自身が光っていることに気が付いたのだ。

何だこれはと思っていると、次に目が見えることに気がついた。

そうだ、俺は今、光を感じている……？

闇の中に囚われていたはずの己の目に、今まさに光が宿ったのだ。
煌々と光り輝く渦の中心に身を置いていた王女は、次第に周囲が見えることに目が慣れていった。

「見える……」

それは喜びとも何ともつかない、奇妙な感覚だった。
もとよりもこの五年もの間、特にこれといって視界がないことに不自由を感じず暮らしてきた。そこにきてのこれだったために、何故？と、ただ疑問ばかり湧いてくる。
そして、まだ不思議なことは続いた。
目が見える様になったと知った王女は、物珍しさから、周囲をぐるりと見回したのだ。すると、王女が視界に入れた人間が、ばたばたと面白いほど簡単に倒れて行くのだ。

「なんだ、なんだこれは！？」

兵士が混乱している悲鳴が聞こえると、王女はその声に導かれるようにしてじっとその兵士を見つめる。するとこれまた倒れてしまうのだ。
これは一体、何なのだ。
王女は見える様になった目に戸惑いを隠せずにいれば、またもその声は聞こえてきた。

『私が姉上を助けます！』

どう助けるつもりなのかと疑問すら抱けないうちに、王女は声に導かれるようにしてその場から忽然と姿を消してしまった。

気が付けば、王女の姿は処刑上のその上の、儀式の間の中にあっ

た。

因縁の場所とも言える場所に居ることに、王女ただ一人だけが気付けないで、声の主と対峙していた。

17（こうして歯車が動き出した）

儀式の間が煌々と照っているのを見て、王も神官も貴族の者達もまるで呼ばれているかのようにその場へと駆けて行った。

処刑の模様は王宮から見下ろす形で見てはいたが、あの光は一体なんだと席を荒々しく立ったところで光が儀式の間から突如として溢れだしたのだ。

そう、処刑場から忽然と光が消え失せ、儀式の間に現れた。

一体この現象は何なのか、王女にはまさか魔法が使えたのかと皆色めき立ったのだ。

儀式の間に辿りつくと、そこに居たのは一人の少年と共に、向かい合うようにしてふわりと浮かびあがった王女の姿があった。

二人の身体を包み込むようにして、光が溢れ続けている。

「私は姉上をお守りするべく生まれて参りました。姉上、貴方の魔力はとても高い。高すぎます。それゆえ枷がかけられているようだ。それを私が今から外して差し上げます」

少年が王女に語る言葉は、王女には意味が通じない言葉だったようだ。困惑しきりと言った顔をして王女は少年に、戸惑いを隠せない。

「一体お前は何を言っている?それに、俺が姉だと?馬鹿なことを」

そんなことを二人が話していると、国王陛下と叫ぶ声が二人の元へ矢のように飛んできた。

その声に王は騒々しいと叫ぶが、続く言葉に絶句した。

「王子が予定日よりも早く生まれたようなのですが、……その、何

と申しますか……消えてしまったのです！！」

王はざっと顔色を変え立ち尽くす。

「きえ……た？」

王女もこの言葉には目を見張り居なくなっただとと驚愕に声を上げるも、少年は違うよと言うのだ。

「何が違うって言うんだ！これじゃあ台無しだろうが！」

俺が死んで、その世継ぎの王子が生まれてくれれば万事うまくいくと、国民は思っている。そこに希望を見出しているというのに、何をこの少年は言うのだろうか。

けれど少年は言うのだ。

「私はここに居る。居なくなったんじゃない。姉上を助けにきたのです」

「なにを……」

馬鹿なことを、とは続けられなかった。

王もそのようで――

「ではまさか、まことにお前は……我が息子だと言うのか？」

「何を今更言っているのですか、父上。姉上の予言を受けて、次に生まれ来る子が息子だと言うことは分かり切っていたことでしょうに。今更驚くなどとはおかしなことを」

ふんと鼻を鳴らして、厭味ったらしくこう告げる少年の姿に、王女は驚きを隠せなかったが、とりあえずはまあ待てとだけ言った。

「……そりゃまあ、驚くだろうよ。と言うかだな、少年」
「なんですか、姉上？」
王女に顔を向けると、ころりと態度を変えて少年は首を傾げる。
その様子は大変愛らしいのだが、如何せんこう変わりみを目の前で見せられては可愛いなどといった感想はどこか遠くへと吹き飛んでしまった。
「まだ何も食ってないうちからなんでまたそんなに大きい？俺と同じかそれ以上の大きさか？でか過ぎだろう。序列的に年長者にそういうのは譲れよお前。ずるいぞ」
「言っている意味が良く分かりませんが、私が大きいのがご不満ですか？」
「いや……見えるようになったら、実際の自分の身長と言うものが分かってだな。現実に対して大いに嘆かわしく思っただけだから構うな。一人ごとのようなもんだ」
「はあ、そういうものですか？」
七つくらいの年齢に見える少年の姿に対し、あえて全裸であることの指摘はさけた王女だった。
「まあ所謂これがほんとの生まれたての姿ってやつだな……」
少年は王女にこう告げた。
「私の眼を借りて、今はものが視えていることでしょう。姉上、これは魔力を借りて物を視ているのです。よく覚えて姉上。自分一人でも出来る様になるように、これから魔力の制御を確実に覚えてい

ってください」
「……そんなことを言われても、分からないぞ」
「いいえ、姉上は私と同じかそれ以上に魔力が高い。だから早く覚えて貰わなくてはいけません。この国が滅んでしまう前に」
「……そう来られるとな、ちょっとばかし今の俺には堪えるな」

先ほどの腐敗しきった国民の姿、嘆きようを聞いてしまった、肌で知ってしまったからにはこの国を滅亡させたくはないと、僅かではあるが思ってしまった。

参ったなと思う。

異世界の人間が、こうまで別世界のことに関わってもいいものかと思うが、こうまで配役を整えられてしまってはそれこそ逃げられないではないか。

そして先ほどの国民のあり方、敵国との戦、全てを垣間見た程度とはいえ、知ってしまった後となると、少年の口にした言葉に頷いてしまいそうになる自分がいた。

王が自分をようやく取り戻したのか、ふわりと空に浮いたままの二人の前に進み出て言った。

「その話はまことなのか、王子よ。王女には魔力があると？」

王子は言った。

「今は私の目を使っていただいていますが、それは姉上の魔力があってこそ出来る芸当にです。姉上の魔力をもって、その目に私の目を、私の魔力で結びつけ、使っていただいているのです。それはどちらもに巨大な魔力量がなければ、常時見えるようには出来ない『魔力の目』です」

その言葉を受けると、儀式の間に集まっていた人々の口から、お

おと、感嘆の声が漏れた。

「姉上と私こそがこの国の正当なる後継者。リニムを導く者なのです」

その声がしんと響き渡ると、何故か処刑上に集まっていた者達にまで――いや、リニムの国全土にまでこれが聞こえた。

民はあんな王女が生まれたことで滅ぶのかこの国はと、滅びそうになっている国のことを王女の所為にさえしてみせていたが、事態はこれにて一転する。

王女と王子のお陰で、国は滅ばないと諸手を挙げて喜んだのだ。

ご無事でとセネカもミシェルも喜ぶが、これでは早々にこの世界の知識だけ得てこの国から逃亡とはいかなくなったなと、アイアンバッハに王女は嘆く。

だが、決してその表情は暗いものではなく、屈託なく笑う明るいものだった。

「仕方ない。やるだけやってみるか」

生き延びたことには何か意味があるはずだ、王女はそう信じることにした。

王女がリニムのために生き延びること、それにより歯車が今、動き出した。

17（こうして歯車が動き出した）（後書き）

シリアス成分が多いのは、リニムだから仕方ないと言いますか。
もう暫くリニム編にお付き合いくださると嬉しいです。

18（闘いたい理由がある）

処刑場での一件は、てっきり王子の仕業かと思いきや、自分は何もしていませんよと言うことだった。

「おかしいな。皆俺が見ただけで倒れたんだが」

「まるで神話に出てくる怪物ですね」

アイアンバッハがこう揶揄すれば、王女はほうと笑って口を開いた。

「目が見えるようになって気付いたが、そのどこかの赤鬼のような顔をして良く言えるなお前」

「お、鬼、鬼ですか?!」

「鬼だな。鬼。凶悪だなあ～。向こうに居た時よりも余程いかつくなってるぞお前」

アイアンバッハはこの言葉を受けて、がんと頭を金づちで殴られたような顔をしてしまった。それを見た王女はからからと笑っている。

「冗談だ。許せよ」

「酷いですよアッシュ……」

ぐすめそと泣くアイアンバッハのことを、王女は尚も指さして笑っていれば、その背後の扉を開けて入室してくるものがあった。

「失礼します」

「……ミシェル！」

王女はミシェルが入ってきたのを見つけると、そのままぱたぱたと駆けていき、その足に飛びついた。

「お、王女殿下？」

「んー……ちょっとあの時と同じ感じかと思って試してみたんだけど……なんとなく違う感じがする。ミシェル痩せたか？」

わしわしと王女はまたもミシェルの足元から上を目指して上っていくと、ミシェルはいい加減に慣れたのか、もうどうにでもしてくださいと苦笑している。

顔まで辿りつくと王女は首を傾げて言ったものだ。

「話には聞いてたけど、お前綺麗な顔つきしてるよな～。女の子がほっとかないだろ。アイアンバッハ見た後だから凄くそう思う」

うむ眼福だと言うだけ言うと、王女はそのままミシェルの身体をするすると降りていってしまった。

残されたミシェルはと言うと、アイアンバッハの手前、どう返したものかと言った表情を浮かべていた。

「それは、その……恐縮です」

言いにくいったらありゃしない。彼の顔にはそう書いてあった。

＋＋＋

王子の肉体は一時的に成長させているようだ。王女と魔力を干渉

させ合っている間のみしか出来ないようだが、王女との話がしたいがためにこうして肉体を成長させているため、特にこれ以上の付加価値をつける必要はないと王子は考えているようだ。

だがしかし、これに価値を見出した人がここに一人いた。

「俺もさ、大きくなれないかな？」

ついでに元の性別に戻れれば言うことなしなんだがとぼそりと告げるも、そこは周囲の面々には都合よく聞き取れなかったようだ。

「もしかしてアッシュ、魔力の使い方次第で元の身体に戻れるとでもお思いですか？」

「いや、それは無理なのは知ってる。国立図書館で一応は頭の中に知識を突っ込みまくったからな。それは出来そうもないのは理解してるんだが――そうじゃなくてだな……そのなんだ、戦にお前もそろそろ、出るんだろう？」

罰が悪そうに王女が口を開いた。

「それはまあ……」

アイアンバッハはあの日、よくぞあの時止めてくれたと王より言葉を賜ると、直ぐにも団長に復帰せよとの達しがあった。実に都合のいいことを言っているとは思ったものの、仕方ないとも言えたため、王女はこれには黙っていた。

王女を守ることも確かに大事ではあるものの、今は前線を押し返すほうが優先されよう。

迷いの森より手前で戦うべきというのは、こちらもあちらも本来であるならば同じなのだが、一気にこちら側に押されてしまっているために、それも中々に難しいものがあった。

急ぎ仕度をせよとは言われていたが、王女が王子と共に、魔力を引き出す能力の開発に勤しんでいる中離れるのは、矢張り不安がある。

「……俺も手を貸せないかと思って」

「アッシュ、一体何を言っておられるのですか！！」

「そうですよ姉上！姉上はまだ子供ですよ！それに、王女です！父上のように戦術兵器を使用するならばまだしも、姉上がおっしゃっているのは歩兵として戦うことでしょう？そんなの駄目です！危険過ぎます！！」

アイアンバッハも王子も、お前は何を考えているのだと頭ごなしにこれを否定してくるが、今は一人でも多くの兵士が必要なはずだった。

「だからっ！！だから……元の身体が……良かったんだ」

「アッシュ……」

「こんなひ弱な見るからに小さな頼りない身体じゃなくて、もっと皆が頼ろうと思えるような、そんな身体だったら良かったんだ！！……だから、せめて身体を成長させられたらと思ったのに……」

今、リニムと言う国に、流行病のように伝染しているものがある。

それは、絶望と言う名の病だ。

「俺はそれを退けたい。この身体で生きることをあの日、許されたあの時から……お前が生きることを許してくれたあの日から……」

「姉上……」

王女は王子に縋るようにしてぎゅっと抱きついた。その腕は優しく、けれど頼りなく震えているようだった。

「俺一人で何がかわるとは思ってもいないさ。けどな、希望は見出せるかもしれない。希望を与えられるかもしれない。なのに後ろで指くわえて尻尾巻いて逃げるのか？そんなの……俺らしくねえんだよ」

確かに王女の言いたいことも分かる。アイアンバッハも武人だけに、後方で何一つすることも出来ないままに指をくわえてみているだけという今までが、どれほどまでに精神に苦痛をもたらすのか、身をもって知っていた。

けれど今の王女はリニムの王族だ。それを歩兵として、もしくは騎馬兵として使うなど、有り得ない。

王子の話ではないが、戦術兵器を使用して、魔力で後方支援などとは王女のガラではないため絶対にやらないだろうと分かっているだけに、アイアンバッハはこれに反対するよりほかない。

そもそも未だ王女は魔力の制御訓練中である。そんな王女に出来ることと言えば、歩兵として武器を取って戦うことくらいしかないだろう。

「今は耐える時です、アッシュ」

王女の肩をその大きな手のひらでそっと包み込むようにしてアイアンバッハは慰める様にそう言うものの、王女は無言だ。

そんな王女を見かねたのか、王子は言う。

やってみましょうと。

「何を……」

「ですから、大きくなりましょうと言っているのですよ。姉上」

「出来るのか！？」

「皆が安心してついていけるように、大きくなって戦う――けれど

姉上、これだけは誓ってください。私が帰還してくれと告げましたら、直ぐにも帰還すること。これを条件として飲んでいただかなくては、私は姉上の成長を手助けしません。それでも良ければ手助けします。いかがでしょうか？」

この条件に、王女は一にも二もなく頷いて言った。

「い、いいに決まってるだろ！やってくれ！！」

そして奇跡の瞬間が待っていた。

19（魔力の干渉、王家の秘密）

王は王族と認めた王女、並びに王子に名を与えるべく文官を集め、会議を開いていた。

名を与えるのは王女のみにすべきか、それとも王子も纏めてなのか――意見は割れていた。

それもそのはずだろう、五つの生誕祭の折にそれはつけられる習わしである。それを生まれたばかりで言葉を操れるような状態で生まれてくる子など、聞いたこともなかった。

前例がないのだ。

「魔力の高さは言葉を操れることで分かり切ったことではありませぬか。王子にも名を与えるべきでございましょう」

「そうはいいますが、今までの前例にありません。王女だけにすべきではありませんか？」

議題を上げてからと言うもの一向に進まないこの問答に、いの一番に痺れを切らしたのは王その人だった。

「ええい、静まれ！静まれ！！……もういい。どこまで話しても埒が明かぬ。前例がないのは王女も王子も同じぞ。だが、二人の魔力の高さはこの戦時下であてにすべきものである。違うか」

苛立たしそうに王は磨き抜かれた机を叩きこう言うが、それでは使えなければ切り捨てると言っているようで何とはなしに、はっきりと言いきるには気持ちの点で折り合いがつかなかった。

「いいえ、……ちがいありません」

魔力の有無のみでこれは違うとあらぬ疑いをかけて処刑しようとしていたことも、リニムの民の間では、心の傷となっていた。

それを押し隠しての会議であり、この議題である。それを真っ向から認めろと言うこの声に、少なからず反論したい気持ちがわき上がる。

だが、王は容赦しなかった。

王自らも罪を罪とし、認めると言い放ち、処刑の日取りを決めたこの会議も認めるべきだ――そう告げたのだ。

重苦しい空気が流れた。

そんな中、会議室をばんと勢いよく開けて飛び込んできたものがあった。

「そなたは……」

それは颯爽とした少々幼くはあるが、大変美しい男装の麗人だった。

その美しい人は黒い髪をきっちりと結いあげ、きっと引き結んだ唇がその凛々しさを象徴するかのような面をしている。まるで青年騎士のようではないかと息を飲んでいると、その人は騎士の正装を身にまとい、王の前までやってくると外套をばさりと背へやりこう言った。

「流石に名も無いままだと戦場で呼ばれるのに不都合が多そうだ。そろそろ名が出来あがった頃かと思ったんだが……その様子だとまだっぽそうだな」

名が無い、という言葉に王ははっとした。

「そなた……もしや王女か？」

「当たりだ。なんでか知らんが侍女連中に騎士の正装をきつけて貰

うついでに化粧までされたんだが……今度は言っといてくれよ。化粧だけはもう勘弁しとけって。髪はまあ……不格好よりかいいとは思うが、どこもかしこも首がつっぱるような感じがする。皮膚引っ張り過ぎなんだよなあ、あいつら。嫌われてんのかね？」

ああ、この無作法な物言いは王女で間違いないだろうと思うと、王はどっと疲れがくるようだった。

こめかみを押さえつつ、王は尋ねた。

「なぜそのような格好をしている」

十二、十三程度の年齢に見えなくもない姿に成長してみせた王女の姿に、王は何と言うことだろうかと顔を覆って嘆きだした。

だがしかし、そんなことに構う王女ではない。

「そうそう、それを言いに来たんだ。俺も前線に出る。それの許可を欲しくて謁見にきたんだが……時間が取れないって言われたんでね、強行手段に打って出た」

「悪びれずに言うでない！！」

王のこの大喝に、びりびりと鼓膜を震わせるだけで済んだものはいないだろう。全身にびっしょりと大汗をかいて会議室に居る面々はどの顔も酷く強張っていた。

けれど平気な顔をして王女はにやりと不敵に笑って告げるのだ。

「安心しろよ。王子が駄目を出したら俺は強制送還される手はずになってる。危ないと思ったら王子がこの首にかけられてる縄で手繰り寄せるんだとさ」

そう言ってちゃりりと音をさせて差し出して見せたのは、首にか

けられた美しい装飾の施された首飾りだった。銀細工が目を引くそれは、とても今の王女には似合っていた。
ちゃりちゃりと首飾りをもてあそぶ、ただそれだけの動作にも関わらず、今の王女を見つめる会議室に集まった者達の様子がどこかおかしい。
唐突に王は王女に向こうで話があると告げると、無理やりその腕を引いて会議室を後にした。

「お、おい！ちょっと待てよ！まだこの手足の長さに慣れてないんだ、もうちょっとゆっくり歩いてくれよ！」
「早くしなさい！」
「えええ！？」

王女のその美しい顔に、その艶めかしく一気に成長したその肢体に、目を奪われ釘づけになった者達の妖しげなことは、同じ部屋にいた王には良く分かった。
嫌でも理解せざるを得なかった。

「これは目を離せん、離せんぞ！！」
「はあー！？いいから放せよ！ほんとに足早いんだよおっさん！」
「誰がおっさんか！父上と呼べ！父上と！！」

くわっと目を見開いて王が王女に怒鳴りつけると、王子がぱたぱたと駆けよってきて王の胸の中に飛び込んだ。
そして真面目な顔をしてこんなことを言うのだ。

「ちょっとばかり綺麗になり過ぎですよね、これは」
「ああそうだな。こればかりは本人に他意はないのは分かっているのだが……これを戦場にだと？どうなるのか、火を見るよりも明らかではないか」

幼い我が子を胸に抱いてちくちくと刺すように王がこう口を開けば、王子もただ言わせるばかりではない。

「ですが姉上が行きたがったのです。民に希望を示して見せたいのだと言って聞かず……そして私は、そんな姉上のお言葉に胸を打たれました。ですから、ちょっとくらいだったらいいかなあと思った次第でして……」

「ちょっと!?ちょっとでも危険であろう!!それが分からぬか!この愚か者め!」

王が間近にある王子の顔めがけて怒鳴りつけるのを見ると、王女が王子の小さな身体をぱっと持ちあげると「おい、おっさん。ガキに何本気で怒鳴りつけてんだ」と、怒りをぶつけてきた。

本人、この親子が何を議題に話しあっていたのか分からなかったようである。

それに気付くと王は嘆かわしいとばかりに目頭を押さえてくっと呻くようにして俯いてしまった。

「なんだよおっさん。体調悪いのか?」

「姉上。今はそっとしておきましょう。父上は姉上が急に大きくなられたので、戸惑っておいでなのです」

「はあー?意味分からん」

「それよりも戦場に出る前に一緒に食事をしてくださる約束でしたでしょう?行きましょう」

「ん、分かった。んじゃ行くか。じゃあな、おっさん」

ひらひらと手を振ると、王女は王を置き去りに王子を連れてその場を立ち去ろうとするが、これに王は待ったをかけた。

まだ何かあるのかといった、いかにも面倒くさそうな表情を浮か

べている王女に、王はついてこいと短く告げて、一人で先に歩き始めてしまった。
わけも分からないながらも、王女は王子を連れて、そのまま王の後をついていくのだった。

＋＋＋

人払いをした謁見の間に移動すると、王は玉座の後ろへ進み、そこで何らかの操作をしたようだ。がごんと音を立てて玉座がすべる様に脇に移動していく。
それを見た王女は仕掛け扉多すぎだろうこの国と呟くと、そのまま玉座のほうへと向かっていった。

「この先だ」
「……」

王が先に進む後に続いて王女と王子は手を取り合ってついていく。
玉座の下にあったのは、石造りの螺旋階段だった。
頑丈な作りなのだが、どこか奇妙な作りに見える。

「まるで……ある一点を目がけているような……線が走ってるのは何故だ？」

石壁は、どこを見ても、全て一点に目がけて線を引かれているのだ。
そこをなぞればそれこそ、この王宮が一気に内部から崩壊していくのではないか、そのように王女の目には映った。
暫く歩いていくと、そこには小さな部屋があった。更にその部屋

から地下に続く穴が下にはぽっかりと空いているのだが、そこに進む必要はないようだ。終点ではないものの、今日はここまでと言うことらしい。

その部屋の壁は全て王宮の壁同様に白いものだったが、青と黄の色をつかい、壁には幾何学的な文様が描かれていた。

「この部屋は一体……」

周囲をぐるりと見回している王女と王子を見て、王は言った。

「ここは、王家に代々伝わる秘密の部屋だ」

そして、と続けて取りだしたのは先日セネカと共に王へと届けた小さな箱だ。

「これこそが、王家最大にして最後の秘密。これを守り抜くことこそが、我らリニムの者に課せられた使命なのだ」

「使命？」

訝る様にして王を見やるが、王はそんな視線に気づいてはいないのか、小箱に手をかけ、開け始めた。

「それ……本か？」

その箱の中身は小さな本だった。それが三冊、中には納められていた。

王は言った。

「これをお前達に読み聞かせよう。我ら王家に伝わる、これは秘密だ。よく、心して聞くように……」

それは、これから始まる、とてもとても長い話の始まり、その幕開けにもなるものとの出会いだった。

「魔石の……秘密？」

「その製造方法？」

「そんな馬鹿なことって……だって魔石は――！！」

この本さえなければ、俺はあいつの奴隷になんてならずにすんだ、すんだはずだったのに――。

「だからこそ、我々は命を賭してでも、この土地を、この本を、敵国より守り抜かなければならないのだ」

魔石を狙う者どもから、我らはこれを守り抜かなければならないのだ。

何としても。

そう言い残して一週間後、王はその本を胸に抱き――死んだ。

１９（魔力の干渉、王家の秘密）（後書き）

でっかくなっちゃった！という
一時的で、ついでに弟がいないと出来ないことですが

20（リニムの魔女）

リニムの魔女、そう仇名される者が現れ、戦況は一変する。

「ええい、何を手をこまねいておるのか！相手は子供がただ一人、それも女ではないか！何をあのようなもの一人にかかずらっておるのか！」

「将軍閣下、そうは言いましても、相手は魔女です！あのような動き……そうでなければ誰が出来ましょうか！！」

王女はあの日王と王子と共に会食を楽しむと――王女以外が楽しんだだけだったが、この際これで良しとしよう――その足で迷いの森を一気に抜け、その日の内に前線まで辿りついた。――まあ、その日のうちといっても、王女が前線に辿りついた時は深夜で、日付がかわるかかわらないかといったところであったため、実質的に次の日であったとも言えるのだが。

王女がその日中に辿りついたそのかわりに、従者は全て置き去りにしてきたが、それもまた致し方ないだろう。王女の足には誰もついてこれなかったのだから。

王女が前線に辿りついてから三日目のことだ、アイアンバッハと共に補給部隊が辿りついた。彼らは王女とほぼ同時刻に出立したのだが、到着したのは三日遅れだ。けれど彼らが当たり前なのだ。王宮から迷いの森まで、通常旅じたくをして出向いて来るような距離なのだから、王女の足がどれだけ並みはずれているか、これで分かるというものだった。

「新しい剣はあるか？」

そう言いつつ王女は補給部隊の方に自ら出向くと、その目録の中を探し始める。

「アッシュ、また武器を駄目にしたんですか？」

「そりゃまあな。あんだけ敵と休む間もなく切り結んでれば武器も壊れるってもんだろうよ」

まるで他人事のようにこう言って、王女はアイアンバッハを振り返る。

「こちとらお前みたいに魔力の付与された武器を使ってるわけじゃないんだ。お陰で切る端からぶっ壊れていきやがる。もうこっちに来てから四本目だぞこれ」

そう口にして腰につるした鞘から刃を抜き去ると、そこにはぼろぼろに刃零れをした剣があった。

「それは……酷いですね」

「だろう？」

補給部隊の兵がそう口にしたことに王女は同意してくれるのか、お前は良い奴だとぽんぽんと肩を叩く。すると途端に兵士は口を噤んでしまった。というよりも、言葉を失ってしまったようだった。

そんな兵士に王女は顔を覗き込むようにして見るが、更にぐっと喉を詰まらせて相手は息さえ忘れてしまったようだ。

流石に訝しんで王女はその体調について尋ねてみた。

「……どうかしたか？体調でも悪いのか？」

「い、いえ……なんでもありませんっ！」

ぶんぶんと首を振ってやっとのことこう答える兵士に、王女は一応はそうかと返したものの、矢張り気にはなるようで、肩をぽんと叩いて今日は早めに休むようにとだけ伝えた。明日は元気になればいいがと王女が考えていると、アイアンバッハがくすりと笑う。

「相変わらずの人気ですね、王女殿下」

ふふっとアイアンバッハは笑いながらこう言うと、王女はげんなりとした様子で腰のものを新しいものにさし直す。

「よせよ。それ、全然笑えないぞ」

兵士達からぼうっと見つめられるならまだましなほうで、ここにきて三日目の今ともなると、熱狂的な信者まで出来ていた。

王女の親衛隊に！と、処刑上の出来ごとがまるで嘘のような事態になっていたのだ。

中身が五つの童女と知っていてのこれである。確かに見た目だけは戦場に居ても許される程度の見た目に成長はさせてあるものの、行き成りのこれで王女も戸惑っていた。

十二、三も五つも、王女にとってみればあまり変わらないからだ。

「手足が短くて届かないものが多いくらいなんだがなあ……」

流石にここにきて、ああ女の格好をしているからかと気づいたものの、どちらにせよ相手の仕方が分からなかった。

いつもの通りに叩き潰せばいいのか、それとも――と考えたところで王女は気づいた。

「味方の兵士だろあれ。殴れない……よなあ？……あー、じゃあどうすればいいんだよ」

まあそれも、遅きに過ぎたのだが。

四日目となったその日には前線を押し戻し、今では多少の余裕も出てきた。

だがしかし、兵士達は今、王女への熱狂的な熱があってこそこれが持続出来ていた。

だが、もしこれが少しでも押し返されるようなことになればどうなる？

そう考えるだにぞっとした。

「今は巻き返されるわけにはいかない」

今巻き返されてしまえば、一気に総崩れとなるのは必至だ。王女はその無双ぶりで相手の兵士達の士気を低下させ続けているが、これも長くは続かないだろう。

「敵国からすれば妙な剣を使うやつがいる、そんな程度かもしれない。だからこそ、短期決着が出来るようなもんじゃないのが痛いな」

戦力差は埋めようがない。数で相手は圧倒してきている。

これは戦争ではなく、殲滅戦だ。前線に出張ってきてから気づいたことだが、敵国はリニムに降伏をせよとは迫らない。その必要がないからだ。

叩き潰し、ねじ伏せにきた。だからこそそんな必要がない。

「ええ。いずれにせよ、長くは続けられない戦です。我々にせよ、相手にせよ……長く続かせるだけのものが残っていない」

こちらの戦力が、あまりにも少なすぎた。
相手は連合軍だ。前線に出てみて初めて知ったことだったが、複数の国がここリニムを標的に、襲いかかっていたのだ。
道理で二方向から同じくらいの敵兵力がくるものだと漸くここで合点がいったものの、卑怯なとも思う。
確かにそれは効果的な方法かもしれない。前だけではなく、背後からも突くことが出来るとあらば、戦はより相手にとって楽なものになるのだから。

「だが、こちらにしてみたら……守ることも、攻めることも、今では難しい」

こうまで戦線を押し込まれた後では、どうすることも出来ない。
こうなると、以前見たものが気にかかる。

「矢張り内部の情報を提供したやつ、そいつが邪魔だ」
「一人は捕らえましたが、矢張りまだ他にも？」

アイアンバッハがこう尋ねると、王女は首肯する。一人とは、以前王宮内でミシェルやアイアンバッハに襲い掛かった者のことだ。ルーズベルト伯爵――彼は今、リニムの地下牢に繋がれている。

「あれはむしろ後から発破をかけられたものだ。『私は今他国にて亡命生活をしている。そこでリニムを攻め落とす協力をしているのだが手を貸しては貰えないだろうか』……そんなところじゃないか？そして報酬は、リニムの玉座とでも言えば、ほいほい乗っかる馬鹿の一人や二人くらいは居ただろうしな」

ルーズベルト伯爵はそのうちの一人だったんだろうと言われてしまえばアイアンバッハは唸ったものだ。

なんとも実にきな臭い話である。
アイアンバッハはむっつりと押し黙ると、怒りに肩を震わせた。

「まあ、何にせよ俺が見たのはあれじゃない」

裏切り者の顔――それが王女には記憶されている。
目も見えない王女ではあるが、夢ではくっきりとした、色鮮やかな映像が広がる。
そこで見るのは、いつでも未来の出来ごとだった。
そして、それはある日突然舞い降りた夢だったのだ。
リニムに戦火の火の粉が舞い降りる。
そして国が滅ぼされる夢を見た。
敵国は何かを探し、ここへくる。
大量の火が王宮を包み、そして沢山の国民が焼け死ぬのだ。
あんなもの、ただの夢で終わらせたかった。

「内通者の顔は夢で見たからな。見れば直ぐ分かる。見つけたら直ぐにもそのそっ首刎ねてやるところだが……」

肝心の首が現れないのだから口惜しいところだ。
どんどんどん！
突如として太鼓の鳴る音と、管楽器の奏でる音が二人の耳に入った。

「開戦だ」

二人の目は、途端、すっと細められていった。

「一人でも多く刈り取るぞ」

一日でも多く、一人でも多くの国民を救う、ただそれだけのために二人は戦場へと戻っていった。

21（緊急連絡）

馬上にある大隊長格の男の首を、王女は翻った燕の如く、足元から目にもとまらぬ速さで迫っていくと、力任せに剣を振り抜いた。

若く美しい女の腕が、太く分厚く作られた剣を構えるだけでも有り得ないと言うのに、それが今、一瞬にして振り抜かれ、馬の首ごと馬上の主を切り裂いた。

血煙を巻き上げ敵兵士を次々と叩き伏せていく王女の姿に、連合軍の兵士達は度肝を抜かれるばかりだ。

そしてもう何度かその姿を見た事のあるもの達は皆、王女の姿を視認すると、それだけでたじろぎ、知らぬうちに身体が逃げを打ち始める。

王女の姿が彼らにとっては死神にも等しい存在になりつつあるのだ。

「な、何なのだあの娘は……！！」

「あれは、リニムの魔女です！！鮮血の魔女！！メティスの娘でございまするううっ！！」

魔女と仇名されているだけでも笑えないと言うのに、死神メティスの娘と呼ばれ、そんな馬鹿なとも言えないほどに、今の王女は真実、神がかっていた。

「次はどいつだ！かかってこい！纏めて相手になってやる！」

刃零れをした剣を一振り投げ捨てたかと思うと、王女はすらりと逆側より抜き放った刃を前へ向けてゆらりと身体を傾がせる。地面へと沈みこんでいくその姿はゆっくりとしたもので――地面にあと少しで接触するといったところで瞬間、王女の姿は消え失せたのだ。

「どこだ!?どこに消えた!」

敵兵士達の中に動揺が走る。

「ここだ」

いつの間にここまで移動したと言うのか、王女は敵兵士達のど真ん中に踊り出てきた。

そして「ここだ」と応えた相手にこれもとくと味わうがいいと刃を一閃。白刃をきらりと閃かせた。

血化粧を纏った王女の姿は、今や妖しいまでの美しさを誇っていた。

そしてその美しさに、異常なほどの強さに、敵兵士達は震えあがった。

「魔女だ……魔女がいる!!」

恐慌状態に陥った兵士たちを追いかける手間は省いて、向かってくるものだけ王女は切り伏せていく。

狙うは全て隊長格の者達だ。頭を叩いて一気に数を減らす。そうでなければこのような消耗戦、長く続けることなど不可能だった。

全身に返り血を浴びた王女は多少息を乱してはいるものの、まだその足は衰えない。

まだ行ける!!――王女が剣片手に疾駆していたその時のことだ、ずどんと轟音があたりに響いたかと思えば、次の瞬間、後方から巨大な衝撃派がやってきた。

何事かと思い、敵も味方もそちらを向いてみれば、そこに見えたのは迷いの森の遥か向こう――リニム本国から火の手が上がっていた。

それは戦地からもよく見える炎であったことから、リニムではそれがどれほどの大きさの炎なのかと皆震えあがった。

「うろたえるな！！あれは国王の戦術魔導兵器だ！」

咄嗟に王女はそう叫ぶものの、嫌な予感は拭えない。

そもそもあれはなんだ？本当に戦術魔導兵器なのか？

だがそれも、相手をまた自分が切り続ければ少しは変わるはずだ、そう思った。

けれどそう上手くいかないようだ。首にかけていた首飾りを介して、王子から連絡が入ったのだ。

『姉上、至急こちらへ呼び戻します！！仕度をお願いします！』

「なっ馬鹿を言うな！まだ戦闘中だ！！」

言い切りつつ王女は剣の腹で敵を押しのけると、そのまま敵の槍を奪い、それをぶんと翻す。王女は瞬く間に敵の首をごっそりと刈り取った。

尚もその連絡は続けられた。

『こちらが大変なのです！ゴダール山脈からの部隊が強いらしく！それも少数精鋭とのことで――どうかこちらにも救援をと言うことなのです！一部隊でいい！――出来るならば精鋭部隊を率いて至急お戻りください！』

そうと聞けば流石にこの場で戦い続けることは出来ない。

王女は敵の首を落とし、返す刃で別の兵士の胴を撫で切りにし、迫るその腕を落とし――断腸の思いでそれを告げた。

「アイアンバッハ及び、ルヴァリエ騎士団！！後方へ待機！他の部

隊も後退しつつ補給に当たれ！」

そして自分も敵兵が追ってこれぬように敵に切り結びながら後退していった。王女を追ってくるものは、途中から一兵も居なくなった。

王女の小さな身より放たれる闘気の凄まじさに当てられ、これは敵わんと、すごすごと引き下がっていったのだった。

＋＋＋

アイアンバッハは王女に掴みかかる勢いで迫ってくると、何故下がらせたと王女に喚き立てた。

ルヴァリエ騎士団の兵士は全員、二人のやりとりを、矢張りアイアンバッハと同じ気持ちで見守っているようだ。王女を見る目はいつになく険しいものだ。

「――ゴダール山脈からの賊が強いらしい。どうやら精鋭ぞろいらしくてな、あちらに残った部隊では歯が立たんらしい。至急増援をと言うことで、こちらの精鋭部隊を連れて戻るようにと今、王子より連絡が入った」

「……それは、まことですか」

絞り出すように言われたアイアンバッハのその言葉に、王女は淡々とこう返した。

「至急、と言われている」

王女の真剣な面持ちに、アイアンバッハも他ルヴァリエの兵士達

も、ことの重大性が頭の中に染みいったのか、逡巡する動きを見せたものの、全員がばっと直ぐに顔を上げて戻ることに許諾した。
王女とアイアンバッハ率いるルヴァリエ騎士団の者達は、前線に残る味方兵士たちにこう約束した。

「必ず戻ってくる！王宮の無事を確かめたら、必ず戻ってくるからな！だから持ちこたえろ！」

それが今生の別れになるとは、この時誰も予測していなかった。

王宮に戻ると、アイアンバッハはルヴァリエ騎士団を二つに分けた。副隊長率いる第二部隊をゴダール山脈へ遣わし、アイアンバッハ率いる第一部隊は王宮の警備にあたった。これが最後の砦である。皆、死力を尽くして戦えと言ったが、アイアンバッハは最後にこう添えた。

「だが、生きろ。生き残ってくれ。国と共に、お前達も生きるのだからな」

皆、心のどこかでは分かっていた。これが今生の別れになるのだと。

第二部隊はゴダール山脈へと向かった。
王宮では魔導兵器を操る、国王率いる魔術師達の部隊がそこには控えている。
魔力の高い者が生まれやすくあるリニムだけに、魔術師の数も他国に比べると桁違いらしい。前線から戻ったばかりということもあり、王女にはそれが分かった。
リニムの魔術師部隊は全部で六部隊編成になっている。一部隊は王のみだが、他部隊と同じだけの魔力量を秘めているため、たった

一人といえど、その部隊の力は侮れないものがあった。
彼らはここで前線に魔力を交代で送り続けていた。それはとても孤独な、そしてとても精密な作業である。
それはリニムの兵士の身体能力強化にあてるものであったり、そしてその遠隔魔道兵器に魔力を送り続けているものだったりと、部隊によって様々あるが、どの部隊も疲労の色が濃い。
それも無理はないだろう。戦争が始まってからと言うもの、彼らは交代制とはいえど、ずっと前線に魔力を供給し続けていたのだから。

22（肉の盾）

魔術師部隊がいかに魔力を送り続けても、その魔力には限りがあり、また魔術師も兵士も休み無く戦い続ければそれは限界も来よう。いよいよリニムが危ういことになってきたが、王宮へ避難する国民は、どの顔も全て、覚悟を決めてきたといった顔をしていた。

王女はそんな彼らの顔に違和感を抱くものの、言っている場合ではない。

「早く王宮へ！入り切らない者達は、皆塔へ避難するように！！」

人出が足りず、王女は戻って早々にこうした国民の誘導に当たっていた。

国中を走り回り奔走している間に六日目だ。何とか全ての民の誘導が終わったかと思い、一安心していれば、王女を探して王子が塔の外へと飛び出してきてしまった。

「姉上！！」

「ティー！！」

元気だったかと王女は王子を抱きあげ――た、ところで王女の身体がみるみるうちにその場で縮んでいった。

どうやら魔力切れを起こしたようだ。

まあ無理もないか。

この六日間と言うもの、王女はほとんど寝ていない。それどころか動き通しだったのだ。

急に倒れたとて、それは無理のないことだった。

小さな身体に無理をさせすぎたかと思い、そして、今ここにきてこの世界での家族に会い、気が抜けてしまったのかと、まるで他人

事のように理解すると、王女はその場でぐったりと自身の先ほどまで身につけていた衣服の山に崩れ落ちていった。
意識が急速に失せていく向こうで、王子が王女のその姿に、半狂乱になる様子が見える。
王子を後から追って出てきた者がいたようで、この惨状を見ていった。

「王女殿下！王女……姫様！！」
「担架を！早く！医療部隊をここへ！」

そして大きく成長した王女の姿しか見ていなかった者達も、わらわらと集まってきたようだ。

「姫様……？そ、そんな……こんなに小さなお方だっただなんて……」

先ほどまで誰よりも動き、国民を助けるために走り回っていた少女は、あまりにも大きな服に包まれた小さな少女となっていた。啜り泣く声に、不安にむせび泣く声にと、ああ喧しいと王女は思うが、そんな憎まれ口すらもう叩けない。
意識が半分以上眠りの世界へといってしまっている王女には、視界どころか周囲の話声もまともにもう、理解出来なくなっていた。

＋＋＋

王女が次に起きた時、そこは戦場の真っただ中だった。
塔の中心を揺るがすほどに、巨大な地鳴りが鳴り響く。

「ここは……塔の中か」

王女はどれくらい寝ていたかと起きて直ぐにも関わらず、武器をと淡々と告げる。その様子に王子は無茶を言わないでくれと叫んだ。

「姉上はあれから丸一日、ずっと寝ていたのですよ!?そんな身体で何が出来るって言うんですか!無茶をしないでください!」

「馬鹿を言うな、ティー。俺は俺に出来ることをしにいくだけだ。無茶なんかじゃない。……おい、俺の武器はどこだ?腰にさげていただろう?」

尚も武器を手にしようと王女がくらむ視界で探し続けると、王子はここには武器はないときっぱりと告げた。

「なに?」

「ここにはありません。ここは、姉上をゆっくりと寝かせるために何も置かないでくれるように、頼みましたから。ですからここには何もありません」

王女はその言葉にかっとなった。

そして直ぐ様反応を返したのだ。

「馬鹿を言うな!なら、非常時の場合、俺はお前を守れないだろうが!!」

「そんな身体でなんて、守ってほしくありません!私は……私達は……姉上に守っていただくばかりでいいとは思っておりません!!」

気がつけば王女の周囲をぐるりと取り囲むようにして、人の山が築かれていた。

ある者は怒りに頬を染め、ある者は王女がやっと起きたと安堵の

色を浮かべて見せていた。
ある者はどれくらい疲れをため込んでいたのだと、悲しみに瞼をそっと拭っている。
どれもこれも、王女にもう少しでいいから休んでくれと、そう告げる口ばかりだった。

「馬鹿なことを言うな！！俺が闘わずしてどうする！」

自分よりも強い者がこの場には居ない。
塔に運びこんだ者達は、完全な民間人のみだった。
そこを守る兵士もいない。
地下では文官が万一に備えて全ての本を抹消出来る様にと、火薬の詰められた樽を用意し、導火線を図書館中に張り巡らせているが、こちらも戦力としてはあてには出来ない。文官は魔力がある者もいるにはいるが、その魔力を攻撃に転用したことのない、非戦闘員のみで構成された者達だけであったからだ。
ただ一人、この場で闘えるのは王女のみだ。
それを知って尚止めるのかと王女は叫ぶも、周囲の者達は頑として譲らなかった。

「王女殿下。いいえ、ルクレティアナ殿下。国は貴方方お二人がいれば、また蘇ることが出来ます。我々はそう信じております。ですから我々は、命を賭して貴方方を守ります。傷の一つもつけさせません。ですから今はどうか、お休みください。ルクレティアナ殿下」

先日付けられたばかりの名で呼ばれれば、まるでそれ自体が王女の身体を包み込むようにして呪縛のように雁字搦めに縛りつけた。
国は一度滅びると、この場に居る者達はもう、悟っているのだ。
だからこそ王女に、そして王子に、生き延びよと言うことか。
王女と王子を取り囲む者達をよくよく見てみれば、遠くに年老い

た者達があり、そしてそれを囲むようにして大人が――それも年かさの者たちが居る。その内側にいるのは若者達だ。王女を取り巻いている者達は、数名のまだほんの小さな子供と言える年代の子供達。

それを見て王女は悟った。

彼らは己の身体を盾として、王女と王子を守り抜くつもりなのだ。

肉の盾とも言えるそれに、王女はわなわなと全身を怒りに震わせていく。

「ふざけるな！ふざけるなよお前達！！俺がこんなことを許すと思ったのか！？こんな……ふざけるなあああっ！！」

王女は弱り切った身体に力を漲らせて行くと、そのままその場で立ちあがろうとしたのだが、頭を上げると矢を射かけられると無理やりに床に押し倒され押し込まれてしまった。

「王宮の奥深くまで敵はもうやってきています！！ですからルクレティアナ殿下、お願いです！この国を！！リニムを！！どうか……どうか……」

口も塞がれ王女は返す言葉すら紡ぐことが出来ない。

だが、痛いほどにそれは伝わってきた。

言葉を返せないからこそ、伝わる想いが王女の中にどっぷりと流れ込んでいくままに、押し流す事ができなくなっていくのだ。

死を覚悟して、未来に希望を託すことを彼らは考えた。

希望はここにある。だからこそ、命を賭してでもと馬鹿なことを考えてしまった。

ふざけるなっ！ふざけるなよお前達！！

王女は叫ぶことの出来ない胸の内を頭の中で爆発させた。

俺はお前達の国の者なんかじゃない！別の世界の者なんだ！！それなのにお前達は、そんなわけのわからないやつのためになんて死ぬっていうのか！？ふざけるな！そんなのただの犬死だろう！よせ、早まるな！！

23（瓦礫の山の上で）

一瞬、王女の脳裏にある映像がよぎった。
それは巨大な爆発だった。
王宮を薙ぎ払ったその巨大な爆発は、あの白亜の城を木端微塵にしてみせた。
塔はその爆発に飲み込まれ――そこまで見た王女は、押しつぶして耐える様にと説得してくる者達を前に、激しく暴れてみせた。

「動かないでください！敵はもう近くにいるのです！」
「どうかお願いです！生き延びてください！！」

そうではない、違うと言いたかった。
王女は口を押さえるその手を噛みちぎってでも逃げろと伝えるべきだと判断した――が、もう遅かった。
かっとあたりは閃光に一瞬、包み込まれたかと思えば、次の瞬間、大爆発に飲み込まれてしまった。
爆風が塔の壁を薙ぎ払い、あっという間に王女の上に覆いかぶさっていた者達にまでそれは届いた。
人がまるで紙屑のように呆気なく飛ばされていくのを見て、王女は驚愕に目を剥いた。
するとそれを見て、王女を、そして王子を助けろと、残った者達が二人の上を覆いかぶさってきたのだ。
馬鹿なことをするな！自分のために動け！生き延びようとしろ！！――それらの言葉は一つとて口にすることは適わなかった。
何度も何度も轟音が鼓膜を震わせる。その度に王女は死にたくなった。ただ弱い者のように守られるなどごめんだ。だと言うのに今まさに、そうして守られているのだから笑えもしない。
悔しかった、歯がゆかった、何も守れない己に腹が立った。

畜生、畜生、畜生！

一体誰の悪戯だったのだろうか。こんな別世界へと飛ばしてくれた者をぶん殴ってやりたかった。

こんなちっぽけで弱くてしょうがない身体で、こんなにも大きな国と言うものを守れなどと、身に余るほどの仕事を押し付けてくれたのは一体誰なのだろうか。

泣くことも許されない。

人の屍の中で、ただ二人、生き残ることを良しと言われた身では、そんな甘えは許されない。

いいだろう、この悔しさも何もかも、飲み込んで生きてやるさ。

お前達の国の者じゃない、別世界の者である――この言葉と共に、王女はそれら全ての感情を飲みこんだ。

白亜の王城が一面、焦土と化した日から半日経ち、ようやく人々は瓦礫の山から頭を出して周囲を見渡すことが出来るようになった。

目を焼くほどの業火に見舞われていた城下町も、今や綺麗に鎮火していた。

「生き残った魔術師の部隊がまだ居たか……」

「ええ、そのようです。戦線は完全にリニムの街の中まで押し込まれてしまいました。それは恐らく、ゴダール山脈方面のみならず、迷いの森方面も同様でしょう」

「そうか」

言葉すくなではあったが、王女もアイアンバッハも、気持ちは同じである。

前線で共に戦った兵士達の顔が、浮かんでは消えていく。恐らく、この夢に、暫くの間悩まされることになるのだろう。

生き残ったのは若者ばかりが二十名ほどと、他は生命力の強い男達がちらほらと。そして王女と王子と共に、押し込められるようにして肉の壁で守られていた小さな子供達が十名程度。

他にはアイアンバッハが率いていたルヴァリエ騎士団の第一部隊の残存兵が二十もいないだろうか。そして、魔術師部隊の生き残りが精根尽き果てたといった様子ではあるものの、こちらは多く残っている。四十名そこそこといったところだ。

王城の大爆発によって敵連合軍も死者が多く出たのだろう。鎮火がされたと確実に分かるまではここには戻らないに違いない。周囲を魔術師に魔力で出来た目を使い、遠隔視して貰ったのだが、遠くへどの国の兵士達も避難していた。

そうなると、何か策を設けるのであれば今しか無かった。

「――敵兵士の死体から使えそうな鎧があれば、全てはぎとれ！！」

「アッシュ？」

アイアンバッハは王女のこの命令に疑問を抱いたようだ。

人が居ないため、動ける者が皆動き出す。

死体の転がっていないところなど、ありはしない。

王女は子供達まで行こうとするのを黙って止めた。確かに生々しい遺体の下に埋もれていたかもしれないが、それでも自分から、死体を掘り起こしに行くなんて真似、こんな小さな子供には任せられなかった。

「アイアンバッハ、俺がここに居る理由が何かは分からない。だが、

これだけは分かった。俺は、この国を……どうやったって何したって……守らなくちゃいけないんだ」

王女が決意の籠った眼差しで見据えながらそう告げてくるのを、アイアンバッハはただ混乱のままに受け止めたようだ。

混乱し、そしてただわけも分からず抱いたのは、怒りの感情だった。

「……それは……いえ！いいえ！！ここにいるのは文官と負傷兵、そしてただの民間人だけですぞ！神官でさえ出払ってしまっている！これでなにをしようと言うのですか？！そもそも我々は、この国の……」

人間ではない――そう続けようとするアイアンバッハの言葉を遮り、王女は口を開く。

「国は！」

一体何を言おうと言うのかとアイアンバッハは思った。

「国は、民が居るのならば、何度でも興せる！！国は滅ばない！何度でもリニムは再興できる！！俺は誓った！俺を生かそうとしたあいつらに誓ったんだ！！この国を再興してみせると！！未来に繋げるための命を……だから俺は……やる！託されたんだ、あいつらに！！！」

ただ一人では国は国と呼べないだろう。

だが、そこに住まうものがあって、初めてそれは国となる。

たった一家族だろうと、それは小さな共同体の誕生だ。それが幾つも集まって、国と言うものは生まれるのだと思う。

幾つもの家族が寄り集まり、そこに規律が生まれることにより、国という体制が整うのだ。

「何度でも言う！リニムは滅びない！！何度でも蘇る！俺は王から託されたものがある！それはこの国の民も同じだ！この国の者達は、生きて繋がなければならないものがある！それは……この世界の意志だ！！この世界の意志が俺達を生かしている！リニムを滅ばないようにと俺達を生かしたのは、世界の意志だ！！」

「何を言っているのですか……アッシュ……」

アイアンバッハはもう、話についていけなかった。

けれど王女の口は止まらない。

「俺に未来を託した者達もそうだ、今残された者達に全てを託した！生き延びよと託したんだ！俺達は死ねない、何としても！！世界の意志のままに、俺達はリニムを再興してみせる！！」

このやり取りを聞いていた者達も、次々と口を開いて言い始めた。

「そうだ……リニムは滅びない。俺達は生き延びなければならないんだ。それこそがこの世界の意志なんだから」

「そうですよ団長。まだ終わっちゃいません。私達は生き延びなければ」

「お前達まで一体何を言っているのだ」

アイアンバッハだけが話についていけなかった。

「俺達は……リニムの民は、この世界が出来て一番最初に出来あがった国の末裔なんだと。だからな、ここでやってたことがあったんだよ」

その仕事は未だ継続しなければならない。世界の意志は未だ彼らと共にあるのだから。

「誰ひとり生き延びることが出来なくてもおかしくなかった。それなのに生き残った……生かされたのは、世界の意志だ」

だからこそ我々は、何としても生き延びねばならないのだ。

そう残された者達はこの時の確認を元に、再度誓ったのだ。

瓦礫の山を背景に、王女は叫ぶ。

「皆生きろ！死ぬな！国が滅んだから死ぬなんて真似はよすんだ！これからどんなに辛いことがあっても、生き延びろ！俺がまだいる！！ティーもいる！！だから――」

生き延びてくれ。

未だちろちろと残り火の点々と続いている城を背景にこう叫ぶ王女の姿に、生き残った者達はしっかりと力強く頷いた。

生き延びてリニムの再興を！！

全員の気持ちはこの時、一つになった。

23（瓦礫の山の上で）（後書き）

泥水をすすってでも生き延びる、それくらいの覚悟が伝わればいいな、と

24（また会うその日まで…）

魔術師達と文官と共に話し合った結果、王子ティセリウスは大事をとって別の大陸に落ち延びさせることになった。

少しでも生き延びる確率を増やす為に、王女と王子を分けておくことになったのだ。

確実にこの後、敵国に生存者は捕まるだろう。そこで平民として王女も王子も偽ることは容易いだろうが、いつ何時、ばれるとも分からない。

だからこそこれは賭けだった。王女か王子、どちらかのみでもいい、生き残りリニムを再興するのだ。

王女はこの大陸で力を得る。王子は別大陸にて力を得る。

魔力を未だ制御出来ないのは姉である王女も同様であるが、王子もそうだ。だが、王子の場合はその素質が可也高い。だからこそ別の大陸の方があっていると判断されたのだ。

別大陸は魔術が盛んと聞く。そのため、こちらの大陸にはない知識が山ほどあるはずだった。

「姉上……嫌です。嫌です」

王子は泣きながら王女に抱きつくと、離れないように必死に縋りついた。王女もそんな王子の姿に流石に心が痛む。

生まれたばかりでその全てを姉に捧げてきたこの弟は、見知らぬ土地へ行くのだ。なんと不憫なことなのか。

一度だけ、力の限り――と、行きたいところだが、自分がそれをやると大変なことになるため、優しく王子を抱きしめてやった。

けれどそれもすぐに止めてしまうと、王女はその身体を無理矢理引き剥がすようにして諭すように言うのだ。

「駄目だ、ティー。一緒じゃいけないんだよ」
「だって……私は姉上と離れたら、生きていけない」
「そんなことはない。父上の直属部隊の者に、アイアンバッハのルヴァリエ騎士団の者も同行するんだ。怖いことなんてないさ。きっとやれる」
「ですが……姉上が居ません」

随行の共は二個小隊程度と言うことで十二名が選出された。
どれも精鋭だ。たった一人の護衛にしてはやりすぎな感がするほどだった。
王子にこれをつける、だから安心しろと言うが、矢張り王子はいい顔をしない。
首を何度も振っていやいやとするが、もう時間だ。
王女は言った。

「魔方陣に入るんだ。もうお別れの時間だ」
「姉上……」

王子は他の者たちに連れられて魔方陣の中に入ると、王女の魔力を使い、魔術師たちが一斉に力を込め始めた。

「約束だ、また会う日まで！暫しの別れだ！」
「姉上！姉上えええええ！！」
「再会のその時まで、生き延びろ！！」
「あねうえええええええええっ！！」

光と共に彼らは消え失せ、そして残ったのは使い終わった魔方陣だけだった。
魔術師達は王女の身体に違和感は無いかと尋ねるが、王女は首を振って特にとだけ告げた。

「矢張り、魔力量が異常なほど高いのですね。別大陸にあれだけの人間を送り込むなど……通常は不可能です。この人数の魔術師が揃っていても出来るかどうか……矢張り、王女殿下は類まれなる力をお持ちのお方のようです」

今回の大規模超長距離空間転移魔法に力を貸してくれた者達は、王女へと頭を垂れる。

その力の一端に触れたがために、王女の前にひれ伏すことしか出来なかったのだ。

王女は急激に視界が暗くなっていくのを感じた。

目が……

矢張り王子と離れるとこうなるのかと思ったが、見えていた間がたった十日程度の間だけだっただけに、そうまで驚くものでも無かった。

――いいや、実際それは強がりだろう。

十日とはいえど、矢張り見えているという便利さに慣れてしまったがゆえに、視界が急に遮られると言うこの状態に耐えがたいほどの窮屈さを強いられる。

だが、こんなことで弱音を吐けようはずもない。

王女は気づかれぬようにと注意を払いつつ、告げる。

「世辞はいい。それよりも早く魔法を教えてくれ。敵国の兵士が戻ってくるまでに、俺は覚えることが山とある――違うか？」

「いいえ、相違ありません」

「では行こうか」

「王女殿下の御心のままに……」

十十十

意思を操作するもの、記憶を操作するもの――それらは全て、傀儡と言う分類の魔法になった。

人の意思を操れるだけではなしに、その記憶など脳の奥深くに根差す、その人の根幹に位置するものにまで作用することが出来るとは、驚くべきことである。

だがしかし、通常、そこまでこの術は楽に使えるものではない。もとよりも禁呪と言うこともあってか、普及はしていないが、それだけではなくそもそも他人の記憶や身体の自由などを奪うものであるがゆえに、この魔法は莫大な魔力を消費するのだ。

「王女殿下でなければそこまで完全に他者を操れますまいて」

獰猛であると知られる巨大な狼を見つけこれを行ってみたところ、初めてのものだったが上手くいったようで完全に狼を支配下に置けたのだ。

最初に始めてみたのは身体の自由を奪うことだ。そしてこれが成功するまで続けると、続いて己を親であるように、己を全てであるようにと意識を操作し、記憶すら塗り替える。

幼い頃からお前を面倒みてきたのは誰か。幼い頃からお前の友として振舞っていたのは誰か――王女は狼の全てを塗り替えていったのだ。

「お見事です、殿下」

「あ、ああ……」

王女の足元に侍る狼を見てそう告げる魔術師達に、王女は微妙な

顔だ。
呆気なく出来てしまった、と言うのが王女の感想だった。
出来ない、ではなくて、出来る様になる！と、強い意思を持って行ったあたりから、王女に魔力がまるで呼応するかのようにしっくりとなじんできたのだ。
それからは楽だった。
王女が意識するままにそれは簡単に行えるようになったのだ。

「それだけ出来れば後は簡単でしょう。敵国がこちらに次に来る時は生き残りを捕縛するために来るでしょうが、記憶操作さえ出来れば、もう後は容易いはずです」
「そうだな」

後は敵国の出方待ちだ。
王女達はそれから二日、敵国よりの使者を待った。

「我らはオルキスよりの使者である！！調停者としてここへ参った！誰かあるか！」

さあ、やってやろうじゃないか。
王女は傲然たる態度で彼らに対峙した。

２４（また会うその日まで…）（後書き）

ここでようやく時間軸が序章まで戻ります
長らくかかりましたが、ここから漸くオルキス編になります

25（オルキスにて）（前書き）

オルキス編始まりです。

25（オルキスにて）

オルキスに渡り早一週間と言うところか――王女は格子のついた窓から外の景色を眺めていた。

山と森に囲まれ、湿度の高い土地ゆえに、湿気の強い土と緑の濃い風が吹いていたリニムとは違い、平野にあるオルキスは乾いた風がよく通り太陽の匂いを強く感じる。

とはいえ、オルキスは大きな島であるため、海岸沿いは潮風が強く吹いているらしいが。

「風が気持ちいいです」

「それはよう御座いましたね」

アンセムは王女の傍らに立つと、そこで丁寧に髪に鏝をあてて髪をひねくってやる。

本来ならばこんな仕事は侍女がやるべき仕事だが、大切な身、と言うこともあり、王女を丁寧に――それも賓客を扱うかの如く扱っていた上層部の対応を見た侍女達が、王女に「敗戦国の姫に何を」と嫌がらせを始めたため、こうなった。

嫌がらせなどが起きた際の侍女の取り調べは念入りに行ったのだが、背後には貴族の娘達の姿も見え隠れしたそうだが、そこは深く追求すると後のち大変なことになりそうだったので、軽く釘を刺す程度にとどめておいたようだ。

それを見て、王女はやるなと内心ほくそ笑んでいたが、人の目がある間は小さな肩を震わせて泣くだけにとどめておいた。

後ろ盾もなく、嫌がらせにも誰がやっていると知っていても尚、何も手出しすることもできず、ただ泣きくれるだけの姫君――そう思わせておくほうが都合がいいからだ。

王女も慣れたアンセムの方がいいということもあり、お付きはア

ンセムと、そして王女が伴ってきたアイアンバッハ、そしてミシェルだけになったのだ。

王女の髪を丁寧に梳かしつけて結いあげると、アンセムは王女を抱えて外の風に当たりに行こうと靴を履かせるために別の椅子に座らせてやった。

王女はこの国にきて、初めて靴を履くための椅子というものがあることを知った。

小さな靴を足に履かせると、アンセムは王女の手を引いてゆっくりと歩き出す。

外の風を浴びた後は、すぐにもアイアンバッハとミシェルの元へと連れていかれるのは分かっていたが、それでも気分転換になればということだ。

他国の――それも敗戦国の姫に対しての扱いではないと、嫌がらせをしてきた侍女達に言われたものだが、侍女達には知らされていないことがあった。

王女にも、彼女についてきた文官二人にも、秘められたリニムの秘密を白日の元に晒して貰うと言う、役目があるのだ。

それはどこの国も欲しがる秘密で――それを得るために侍女どころか、その背後にいた貴族の娘達の首を全て捧げろと言われるならば、喜んで捧げるほどのものだ。

どの国にとってみても、それは大変貴重なものだった。そしてその価値も莫大なものだったのだ。

それをたった三人の者達が握っているという事実は逆に、その三人の人間を抑えている者がこの大陸の覇者になれるということでもあった。

だからこそ現在、オルキスは微妙な立場になっていた。

連合軍を結成し、リニムを滅ぼしたはいいものの、三人のみしか救助あたわず。

ただしそれは、リニムの秘密を握った三人でもあったため、連合軍はもろ手を挙げてこれを喜んだのだ。

無駄な人間のみ生き残っていればどうしたものかと考えていたのだろうが、まさか都合よく秘密を握る人間のみが生き残るとは、嬉しい誤算だったのだ。

リニムの王が秘密を抱いて爆死などといった愚かな真似をするとはどの国も考えてはいなかった。

他の知識も全てが火にくべられてしまったのか、何一つ見つからないと来たわけだ。

そこにきて三人が生きていた。

やれ嬉しや！――と、そこまでは良かったのだろう。

「わ、私達三人を……どのようにするおつもりですか？た、確かに私達リニムは負けたかもしれません。ですが、……この二人に何かなさるおつもりでしたら、私は……その知識を抱いて、自害します！！」

リニムの秘密を書き記したものがなんだったか、今ではようとして知ることも出来ない。だがそれがなんであったかは今は問うべきではないだろう。

その秘密を全て暗唱出来る王女の存在。そしてその知識を補佐することの出来る有能な文官が二人。

この三人が今、オルキスに生きて存在しているのだ。そのことが一番重要だった。

だからこそ誰ひとりとして、かけさせるわけにはいかなかった。

そしてこの王女の言葉だったのだ。

これで嫌でも連合軍の者達は、王女達に手が出せなくなってしまったのだ。

だからこそ、どこの諸外国も彼ら三人には手が出せず、じっとその顔色を窺い、下手に出ていた。

これではどちらが敗者か分からんな、とは、オルキスの第一王子の言葉である。

「ま、もっとも……あちらの王女も負けたつもりはさらさらなさそうだけどな？」

男はアンセムに連れられて歩く盲目の姫君を見つめ、くっと笑った。

「さて……どうしたもんか」

大人に手を引かれ歩く王女の姿。けれど王女はしっかりとした足取りで強い意志を持った顔をして歩いていた。

あの王女がこの後どうするのか、男はそれが楽しみだった。

＋＋＋

オルキスに着いてから三、四日が過ぎてからと言うもの、毎日やらされている日課のようなものがあった。

それは、王女があの時頭の中に叩き込んだ書物、それの復元である。

王女の暗唱出来るものの数はおよそ五十万冊だ。それを王女が暗唱し、ミシェルとアイアンバッハが羊皮紙に書き記していく。そんな作業が毎日昼を過ぎてから続けられていた。

リニムはこの大陸でもっとも古い国である。そのためその書物というものも、大変古いものが現存していた。

恐ろしいことに最古の書物では木に書き記したものが出てきたのだ。詳しく言えば木の皮だが、これに書き記したものに、羊皮紙に、そして最近では多少一枚が分厚いが安価な紙というものも出来たた

め、こちらにも書き記されていた。
お陰で五十万冊にも及ぶ冊数になったものの、木の皮などを薄くさいたものを使用した本などは、分厚くて、一冊に書き記された内容は濃く、興味深いものがあるものの、それでも他の羊皮紙や紙に比べれば分厚く、中身は薄かった。
半分以上が木の皮で出来た本であったためにこのような数字ではあるものの、内容は濃く、更に言えば他国でも読めるよう、これを現代語として翻訳せねばならなかった。お陰で文官である二人は大忙しだ。
王女が語り、それを書き留め、オルキスでも読める様に直していく。
王女にはこのあたりが見えないため良く分からなかったものの、アンセム曰く、大変素晴らしい、だそうである。そうなってくるとミシェルの能力が気になってくるところだが、聞いたところで答えてくれるようなミシェルではないため、どうしたものやらだ。

――そのようにして昼を過ぎてから周囲が暗くなるまでの数時間だけ、三人は一緒に居られた。書物を書き記す間の短い時間だが、それでも十分だった。
監視の目はあるものの、それも遠く離れた部屋の隅から見張るだけで、別段気にはされていないようである。

「――もっとも？文官とこんなちんまい子供の姿してたら確かにそりゃな？警戒心も薄れるよなあ」

小声でぼやくように口を開いた王女に、ミシェルが笑いながら続ける。

「済みませんね。私があからさまに弱そうで」

見るからに文官！という出で立ちのお陰で、警戒らしい警戒すら抱かれていないミシェルは、内心ではもっと物々しい警戒をされると考えていただけにちょっぴり物足りないようだ。

王女はそんな不謹慎なミシェルに何度か嗜めるようなことを言ってみたものの、確かに警戒心の無さ過ぎるのは妙ではある。理由があることは知っているのだが、それにしても――と言うのは気にし過ぎだろうか。

王女がその一抹の不安を押し隠すように、明るく笑って言った。

「逆にこっちは筋肉だるまだからな、ミシェルくらいの見た目でちょうどいいさ」

「筋肉だるまとは私のことですか、アッシュ」

心外だとばかりに言われ、王女はいっそ「ふざけてんのかなこいつ」と思ったが、本人至って真面目である。

「……違うつもりだったのかよ」

そう口にされた途端、アイアンバッハはしょんぼりと項垂れた。

26（傀儡使い）

王女が朗々と、まるで歌いあげる様に暗唱していく様は圧巻の一語に尽きる。

まだ齢五つという年齢を差し引いたとても、王女はそれはそれは美しい容姿をしている。

更にはその声音はまるで鈴を転がすように、時にはあまやかに、時には風のように優しく包み込み、周囲のものを虜にしていった。

お陰でリニムの原本再生の監視の業務は、いつしかオルキスの軍人たちの間で人気になっていった。

今もまた、涼やかな音色に身をゆだねている兵士がここにいた。

「――そして聖域は現在、封鎖されるようになった」

「はい、結構です。有難うございました、王女殿下」

ミシェルがさらさらと書きとっていくのを見て、そして終わりを告げる言葉を聞いて、ようやく兵士は、はっとなった。

まるで夢でも見ていたかのように、どこか頭の中がぼんやりとしている。

「おやおや、どうかしましたか？」

アイアンバッハがくすくすと笑いながらからかうように兵士を見てくる。見ればその手には、ミシェルが書き記した羊皮紙が山とあった。

「い……いえ、少々ルクレティアナ殿下の声に酔ったようです」

詩的な言い回しをして誤魔化してみようとするが、逆にそれは笑

われる結果になってしまったようだ。
だが、それは決して嫌な笑いではない。むしろもっと笑って欲しいと思えるような笑みだった。

「私の声で酔ったのですか？……ふふっ。それはお酒がいらなくてとても健康に良さそう」
「確かにそうですね。酒は身体に悪う御座いますから、王女殿下の声に酔われたということでしたら、そのほうがずっと宜しい」

是非これからも酔われてくださいとミシェルに言われてしまえば、参ったなと兵士は兜をがりがりと手甲に包まれた手で掻いた。

「済みません、兵士さん。アンセムを呼んで来ては下さいませんか？今日の分は終わったので、申し訳ないのですが呼んで来て頂きたいのです」

王女には万が一のことを考えて道を覚えられないようにと、一人で出歩かせないようにしていた。
嫌がらせのこともあり、それこそこれも万が一ではあるが、何処からか突き落とされてでもしたら――などという嫌がらせへの懸念もあった。
だから王女をここに連れてくる役目はアンセムだけがしている仕事で――そして、文官二名に関しては、この部屋から一歩も出すなと言う命令が出されていた。
この部屋に来て、初めて王女は心からの笑みを浮かべるようになった。
文官二名に会えず、たった一人で諸外国の代表達と渡り合ってきたのだから、それはもう、毎日のように張り詰めたような顔しか浮かべられるはずもないが、この部屋に来てからの王女はまさに、天と地ほどの差があった。

文官二名の無事を確認した途端、王女はよろよろと足を前に一歩二歩と出していきながら、二人にどこかと尋ね、「ここです、王女殿下ここです！」――その声が聞こえた途端、足元に何があるかも知れないと言うのに、王女は声の聞こえた方向へと向けて走り出したのだ。

涙をぼろぼろと零しながら二人の命があったことを喜び、そして笑みを浮かべた。

それからはアンセムにだけではあったものの、オルキスに対しては比較的友好的な態度を見せていた。

だからこそ、アンセムだけが請け負える仕事であったのだ。

兵士が待つようにと言い部屋を後にすると、三人は顔を見合わせてにやりと笑った。

「そろそろ頃あいも良さそうだ」

「ですね」

従順な態度はもう見せた。

無害そうな表情も見せてきた。

後は紛れ込ませたリニムの民を移動するために、やるべきことをするのみだ。

「近いうちに動けるようにしてやる。それまで待ってろ」

「ええ」

三人が短い会話を終えた時、扉がきいと音を立てて開けられると、そこにはアンセムの笑み崩れた表情があった。

「王女殿下、さあ参りましょうか」

「はい、アンセム」

王女はアンセムの手を取り歩き始めた。
アンセムは気づかない。王女が少しずつ、少しずつ、オルキスの軍部に手を伸ばしていることを。
後少し、後少しだ。待っていてくれ、リニムの民よ。

＋＋＋

王女の部屋の前にはたった一人の兵士が見張りの番をしているだけで、他には誰もいなかった。それもこれも、王女がまだ年齢的にも幼く、何一つ自分では出来ることもないだろうと言うことでそうなったようだ。
そして侍女として付けた者達からの執拗な嫌がらせも、王女にとってみれば大変上手くいったものだった。
彼女たちが嫌がらせをしてくれたために、王女の傍にはアンセムや見張りの兵士がただの一人しかつけられることなく済んでいる。
そのため、実質的に王女は自室に戻った後――夕食を終えた後は一人きりであった。
物を見ず、見知らぬ土地で見知らぬ建物の中で、王女が逃亡を企てられるはずもないと知ってのことだ。一人きりにしておいたとて、別段問題はなかろうということだった。
世をはかなんで自殺をされては困るということもあり、文官の無事も確かめさせた。
彼らにとっては王女が枷で、王女にとっては彼らが枷だ。妙なことにこれでなろうはずもなかった。
とは言え、知られていないことだったが、侍女達の心に妬み嫉みという感情を植え付けたのは王女であり、そして貴族の娘達にも同様にそれを植え付けたのも王女だった。
と言っても、王女は知っていた。

「元からその因子が無ければそれはああまで上手くは発動しなかったがな」

貴族の娘達も侍女達も、元から王女に妬み嫉みと言う感情を抱いていた。

そのために非常にやりやすかったのだ。

精神を操ることも、行動を操ることも、元から本人達の中にそれはある感情であったために、ちょっとした後押しをしただけで簡単に実行に移してくれた。

侍女を遠ざけた後は兵士だが、こちらも少しずつ少しずつ、見張りに立つ兵士達に声を聞かせていった。

王女の声を聞かせることにより、ある刷り込みをしていったのだ。

夢うつつと思え。

ここは現実と夢との狭間、お前はこの中で何が起こっているのか見えない、聞こえない――そうさ、これは夢なんだから。

この刷り込みは王女の私室、そして文官の私室の二か所で行われたが、オルキスの軍部の末端にはこれがよく行きわたったようだ。

「さて、出かけるとするか」

今日も今日とて王女は窓からするすると、見えもしないと言うのに不便を感じさせることなく外壁をよじ登っていくと、外壁の窪みに隠してあったくたびれた布を取り出し私室に戻った。

それを頭からすっぽりと被ると、王女の目立つ黒髪はこれで消え失せた。

そこに居るのは小汚い子供だ。

王女は着替えを済ませると、そのまま私室をまたも外壁を伝うと

いう移動方法で抜け出ていくと、文官の部屋にアイアンバッハを迎えにいった。

「――これは夢だ。これから起こる出来事は、全て夢なんだ」

そう涼やかな声音で告げた途端、とろんとした目でただ前を見続ける兵士の姿を確認すると、王女はその部屋の中へとするりと入っていく。

どこにも何の気配もしなかったのはいつもの通りだったが、どんどんと日を重ねるごとに警戒が緩くなっていくのが何とも言いようがない気分にさせられていく。

「何と言うか、あれだな、この国はこんなんで大丈夫なのか？俺は少々不安になってきたぞ」

げんなりとした面持ちでこう言えば、ミシェルが苦笑して言った。

「楽な方が宜しいでしょう？ならばこのほうがいいではありませんか」

「まあ……そうなんだけどなあー」

何となくだが腑に落ちない、と言っても、ミシェルは聞いてはくれないだろう。王女はそれとなく話題を逸らしてこの話を終わらせた。

「本はどうだ？出来上がりそうか？」

「ええ。誤字を直して読みやすいように言い回しを変えて……と言ったところでしょうか？まだまだ一冊作るだけでも一苦労ではありますが、それは仕方ありませんよ」

「なんか、大変だなあミシェルは」

「ええ、本当に」
「アイアンバッハが使い物になれば良かったのになあ」
「ええ……本当に」

二度目の本当に、がやけに低い音で言われたのは気のせいではあるまいと、アイアンバッハは恐る恐るミシェルに尋ねてみたところ、こんな言葉を返された。

「せめてもう少し読みやすい字を書いていただければ嬉しいのですが……書き直す手間が増えるので、大変……面倒くさいです」

そう言った理由からミシェルよりやんわりと王女の暗唱したものを書き連ねる係から外されたことを知ったアイアンバッハは、驚愕に目を剥くと最初言葉もないようだったが、続いて出てきたのは悲しそうな絞り出すような声だった。

「そ、そんな……」

ずばり言われてしまうとアイアンバッハは打ちひしがれた。
印刷機にかけるまでの手間がこうまでかかるとはと言われればしょんぼりと項垂れるアイアンバッハに、王女はからからと笑うのだった。

「本当に二人は仲良くなったなあー」
「ええ、本当に」
「……その分ミシェル殿が優しくなくなっていって……辛いです」
「そこはもう諦めろよアイアンバッハ」
「そうですよアイアンバッハ殿。友情の印ですよ諦めて受け取ってください」
「嬉しいんですが悲しいですよミシェル殿ぉおおおお！！」

友情と同等の辛辣さも得たらしいアイアンバッハに、王女は笑うしかなかった。

実に仲良くなってくれて、大変結構なことだと思ったのだ。

まあ、アイアンバッハからしてみれば悲しいことなのかもしれないが。

27（黄金の森）

王女達は町に下りるとそこの小さな酒場でいつもの通り、オルキスの兵士に紛れ込ませたリニムの者達と落ちあった。

「ここの最大の特徴は、兵士たちが全員、兜を着用するってことだな。お陰で未だに気づかれていない」

人相を丸きり覆い隠してしまうあの兜の形状が、実に王女達の役に立っていることを頷きながら嘲笑うようにして言えば、目の前に現れた生き残り者の統括者として今は働いている男が、同じく同調するように頷いて見せた。

「そうですね。それがなければ面倒なことになっていたでしょうし」

そう言いつつ席についたのはアンセムの元で今は働いているアイアンバッハの元部下、ルヴァリエ騎士団、副団長補佐のクレスだ。今はアンセムの配下としてめきめき成長していっている――と見られているようだ。実際にはクレスの実力を徐々に露わしていっているだけだったが、そんなことは中身が違うと知らないアンセムからしてみれば分かるはずもない。

「流石、実力者は違うな」

「いえいえ、姫様程では御座いませんよ」

酒場の名前は「黄金の森」だ。

外観のその古びた煉瓦の風合いが年季を物語っている、この街に古くからある酒場であった。

黄金の森にはそこそこの客足があり、そのほとんどが余所から来た客だ。それは料理が地元の料理を提供する酒場だからだろうと思われた。

余所者達の集まりで互いを意識しない場所とはいえ、王女の幼さは一等目を引く。

薄汚い布を頭からすっぽりと被っているとはいえ、あまりにも小さなその身体は、どうあっても分かってしまう。

今日も食べるぞといそいそと、出入り口からは奥まった卓につくと、王女は早速注文を幾つかしてしまう。看板娘が注文を受け付けたのを確認すれば、後はもう、料理が運ばれてくるまではこちらには誰もよりつきはしなかった。

話を聞かれたくない場合は、さっさと注文してしまうが吉である。

さてと王女はアイアンバッハとクレスに頭を寄せる様にと指で合図をすると、声を顰めて話を始めた。

「アンセムは気づいていないようだな？」

さり気無く頭を傍に近づけたクレスは、周囲の目を気にしながらもひっそりと言葉を紡ぎ、返した。

「ええ。それどころかアンセム隊長の部隊は楽ですよ。そのほとんどが孤児を集めて作った組織と言うのも楽ですね。家族にばれる不安も今のところありませんし」

「それが一番のネックだったからな。アンセムの部隊について吐かせた時、孤児の部隊と聞いてこいつは使えそうだと思ったな」

王女が牛乳に蜂蜜を垂らしたものを飲みながらくっと笑うのを見ると、クレスは微妙な気持ちになった。

それは「矢張り姫様はまだ子供なのだな」と、再確認をしたとも言える。

あの時オルキスの部隊がやってきて王女達の前で意識を失った後、完全に心神喪失状態になったアンセムに王女は様々な情報を吐かせていった。

そこで分かったことはオルキスの軍部は組織だって作られているもので、こちらは騎士制度ではないようだ。

つまりは貴族が騎士になり、それを補佐する立場であるものに平民が――というものではないらしい。

オルキスだけがそうかは分からないものの、こちらでは軍部と言うものが築かれており、それは国王の命令により完全に掌握されているというものではないようだ。

騎士の家系は騎士になり、王への絶対的な忠誠を――ではなく、国に対する忠誠を持つのがこの国の軍部という組織だという。

貴族の者も確かにそこにはいるようだが、それでも貴族階級のみが上層部へ行けるような選民思想はないらしい。

それを知った時、ここは徹底した能力社会なのかと王女は思った。

能力の有無により上に行くことが出来るのだから、実に画期的なことである。

這い上がりたくば力を示せということかと思い、そういう単純で分かりやすい方がずっといいと王女は始め、笑ったことを思い出した。

クレスはそこで下っ端の兵士の鎧を身につけていたが、近々階級が上になるようだと照れながらも、誇らしげに告げた。

それを受ければ王女は顔を輝かせて言うのだ。

「凄いじゃないかクレス！！やっぱりクレスの太刀筋の凄さってのは隠してても分かっちゃうもんなんだなあ！おめでとう！」

「いやあ……お恥ずかしい」

照れるクレスをアイアンバッハも誇らしげに見つめている。

「実力だ。照れることはない」

それだけ言うとアイアンバッハはおめでとうとクレスの背中をばんと軽く叩いて祝いの言葉を告げた。

「……はいっ！有難うございます！」

どこのどんな人間に褒められるよりも、クレスは団長に褒められたことが嬉しかったようだ。

アイアンバッハからの言葉を受けて、クレスは胸が弾むのを感じた。

――だが、こんなのはちょっと……見たくはなかった。

どんなに誇りに思い憧れている団長でも、見たい姿と見たくない姿と言うものがある。

王女が今まさに到着したばかりの肉料理を、待ってましたとばかりに飛びつく勢いでこれの攻略にとりかかれば、アイアンバッハはその口元を汚している、肉汁をふき取りながら諭すように口を開いた。

「ああもうアッシュ、駄目じゃないですか。もっとゆっくり食べませんと喉につかえますよ」

「……うっぜえ」

「アッシュ！口が悪いですよ！！」

そして始まったのがくどくどとしたアイアンバッハの苦言である。

まさしく、お前は王女の母親ですか！というその状況に、クレスはもとよりも、王女もついていけないらしい。

面倒くさそうに王女は言ったものだ。

「……クレス、続きを聞かせてくれないか」

王女はもうアイアンバッハのことを無視することに決めたようだ。くどくどと止まない苦言の間にも、アイアンバッハは王女の食べやすいようにと食事をせっせと切り分ける。そんな様を見て、何とも言いようがない苦々しい気持ちになると、クレスは視線をなるべく逸らして話を元に戻していった。

「少しずつ隙を見つけては女子供は移動していっています」

「例の場所に？」

「一応は。ただ、近々魔術師は少しずつ暇を見つけて数名、そこに入りこませていくつもりです」

「そうだな。わざわざオルキスの軍部に貴重なリニムの魔術師をそっくりそのままくれてやる必要はないさ」

リニムの地に戻り、そして我々はリニムをもう一度興す、ただそのためだけに今は生きる。生き延びる。

どんなに敵国で己が身を惨めと感じようとも、皆負けるなと王女は口にした。

「ただ見ていただけだから俺達は知らないなんて理由を言われてもな……」

オルキスはリニム殲滅戦には加わらなかった。それは何故か――彼らはこの戦争を仕掛ける連合軍を止め、リニムへと調停者として赴いたことがあったという。

戦争をやめさせるためには、貴方方にも協力して貰わなければと言って、オルキスは魔石を渡すよう迫った。

そしてリニムの国王はこれを拒否したのだと言う。

オルキスは交渉決裂と見切りをつけると早々に、連合軍へと交渉は無理といい、戦争が始まった。
オルキスはその間、ただ黙って見ていただけだ。
傍観者が戦争を仕掛けていなかったから、じゃあいいですなんてことはないのさ。

「リニムはどこにも屈しない。何者にもだ」
「王女殿下のおっしゃる通りです」

それは傍観者であるオルキスへ対しても同様だった。
クレスが王女の前で胸に拳をどんと叩きつけるのを見て、アイアンバッハは何とも言いようのない奇妙な表情を浮かべていた。

「団長……？」
「……いや、なんでもない。そうだな、リニムを再興する。それこそが今の我々の使命なのだから」

それから三人は、小一時間ほど黄金の森で何気ない会話を楽しみながら食事をし、岐路についた。
見張られているとも知らず、三人の顔は満足そうな表情を浮かべていた。

28（査問会、開始）

ミシェルとアイアンバッハの二人が、あの牢獄とも言える部屋から出されたのはどういった意味からのことだったのか。

二人は警戒心を募らせながら言われるままに先導する軍人についていった。

ミシェルはこの国の兵士が軍人と呼ばれていることを知ったのはつい先日のことだった。

「そもそも軍部と言うものの成り立ちが良く分からないのです」

全ての中立国であり、全ての国と平等でいられるための技術、そして侵略されないための力と言う意味での軍備――それらを備えているオルキスという国は、矢張り強く強大であると言わざるを得ない。

たった一つの小さな島国が、こうまで対等にリニムに侵略してきたあの連合国と渡りあっている現状に、ミシェルは驚きを隠せなかった。

それはアイアンバッハも同じで――

「階級社会、そして絶対王政とまでは行かないまでも、王にのみその力が委ねられているリニムとは大きな差があることは事実ですな」

「認めたくはありませんがね」

リニムは王の絶対的な力あってこその防壁が築かれていたところがあった。

それは迷いの森もそうだがゴダール山脈の連なりもそうだ。それこそリニムの内部をよく知るものが外にその話を漏らしさえしなけ

れば、という前提ではあるが。
　完全な絶対防壁が築かれていたリニムに、ああも容易く侵略を仕掛けられたことは、まさしく裏切り者がいたからに他ならない。
　それさえなければ、と二人は悔やんだ。

「確かに一部には貴族などの関わる部分があるようですが、こと守りに関してのオルキスはそういった階級といったものを全て切り捨てて考えているようですね」

　お陰で実に効果的に、そして分かりやすい構造になっているそれは、いわゆる「力の強い者こそが強者」という考え方だった。

「無駄を省いた単純な構造。……だがそれゆえに、未だ若い組織なのもまた、……事実か」

　オルキスではそれまでのリニム同様の貴族社会の軍備を廃し、数十年前から軍といった組織になり替わった。
　平民であれ、貴族であれ、能力のあるものが上に這い上がる構造は、まさしく改革と言っていいものだ。
　お陰でオルキスはそれからというもの、絶対強固な守りを築くことになる。
　今までのように貴族が上に立ち、階級による上下関係を築く形を取り払ったお陰で、軍備力の増強に繋がったのだ。
　生き残るには何が必要か、それをオルキスは分かっているのだ。

「貴族社会で平民から絞りあげるだけの体質に終止符を打つ形になったことは……新たな力を彼らに産んだことになった」

　オルキスは一時、貴族社会の腐敗に沈んでいた時期があったという。

そんな中、それにとどめを刺す形になったのは軍という、画期的な仕組みだ。

「貴族がただ搾取し、民がただ絞りあげられるだけという、一方的な隷属ではなく、そのどちらもが国と言うものを考えるようになるにはまさに、いい機会だったといえましょうな」

「そうですね。そうして皆が国と言うものを考えることにより、一人一人が国政を理解しようとする。それこそがまさにオルキスの軍人達が今、推進したいと考えていることなのでしょうね」

この短期間で探れたことをそう纏め終えるとミシェルは沈黙した。

リニムは国と名を掲げてはあったものの、それと似たようなきらいがあった。

国政を一人一人が理解し、そして一人一人が学ぼうと努力する。

一人一人がリニムを理解し、リニムの役目を知っていた。

だからこそ、今、アイアンバッハが感じている疎外感はリニムの者達には理解されないものがあるのだが――。

アイアンバッハは歩きつつも視線を落とし、声を暫し失った。

アッシュ、貴方は一体、何を考えているのですか。

王女もアイアンバッハと同じく、元の世界にただただ帰りたいと願うものとばかり考えていたため、あの焼け出された日からの王女の行動、言動、それら全てが彼には理解しがたいものだった。

まるで根っからのリニムの者であるように、王女はリニムの者である役目を果たそうと奔走しているのだ。

それがアイアンバッハには理解出来ない。

全て投げ出してしまえばいいのに……

王女に何度かそう言ってみようかと思ったこともあった。
だが、アイアンバッハにはそれが出来なかった。
触れることが怖かったのだ。
王女がリニムを愛してしまっていたらと、王女がリニムの者として、この世界で生を全うしようとしていたらと、王女の考えに触れることが怖かった。触れてしまえばアイアンバッハは本当に孤独になってしまう気がした。
焼け出されたからには、ただ流浪の民として二人でどこへともなく流離うことでもしようと考えていた。
だが、王女はそのようなこと、考えてもいなかったのだ。

もしも本当にアッシュがそう考えていたら――私はどうしたらいいのだろうか。

アイアンバッハが知らずごくりと喉を鳴らすと、唐突にぽんと肩を叩かれた。ミシェルである。

「どうか、……しましたか？」

もう到着したようですと言われれば、二人は押し黙った。
二人を引き連れていた軍人はクレスだが、彼もまたアイアンバッハを思わしげに見つめている。
二人の気遣わしげな視線を無視し、アイアンバッハは扉に手をかけると、扉の向こうに一歩、足を踏み入れた。
そこは、連合軍とオルキスの者の主催する、査問会の会場だった。

「それではこれより査問会を始める。リニム代表者二人は、中央に用意された椅子にどうぞ腰掛けてください」

査問会と言われれば、嫌でも緊張してしまうと言うのに、この場を取り仕切るオルキスの男と、その脇に控える青年将校は、さらりと「どうぞお寛ぎください」などと笑顔でのたまってくれる。

実に面の皮の厚いことだ。

アイアンバッハは食えない男だと思いつつもミシェルと共に中央に用意された席に腰かけた。

周囲を取り囲む連合軍の上層部――つまりは各国の代表者の顔が、その場所からはやけにくっきりはっきりと見えた。存外離れた位置にあるこの席でこれなのだ、何かしらの特殊な仕掛けでも施してあるのかもしれなかった。

「では、二三お聞きしたいことがありますので、お二人にはこれをお答えいただければと思います」

「……あいわかった」

武人丸出しといったこの返答を受けて、青年将校の方はくすりと笑う。

「矢張りアイアンバッハ殿は文官と言いますよりも、どこか武人めいた空気を纏っておいでですね。今のお答えもそのように聞こえます」

これにはぎくりとした。

ミシェルは背筋に嫌な汗がぶわりと吹き出し、アイアンバッハは表情が一瞬にして強張った。

まるで認めたようなその反応を前にしても、人がいいのか悪いのか――青年将校はくすくすと人の良さそうな笑みを浮かべ、続ける。

「いえね、ただ思っただけですので。あまりお気になさらず……」

こうまで言われてしまうと、流石にこのまま隠すのはどうかとも思われた。

――仕方ない。

ミシェルは意を決して青年将校に、これは名誉のためもあり黙っていたがと口を開いた。

「――アイアンバッハ殿は、以前この国で言う、軍部の者で御座いました。ですのでオルキスの使者の方がおっしゃられた通り、彼は武人で御座います」

「おやまあ……本当にそうだったのですか。それは驚きです」

飽く迄も本当に気づいていたわけではなくて、実に軽い気持ちからこれを言っていたのだと印象付けるようなその言葉の選び方に、ミシェルは内心、舌打ちを打った。

そうか、オルキスはこれを狙って……いた？

29（魔石）

だが、そうだとしても、ここまで口に出してしまったあとでは、今更引っ込めようがない。そもそも他の目もあることだ、このまま続けざるを得なかった。

「アイアンバッハ殿は以前、いわれのない罪で裁かれようとしていた子供を身を呈して庇いました。それにより当時配属されていた騎士団の上官の不興を買い……処分をされたのです」

騎士の位をも持っていたのですが、その騎士の位も剥奪され、今は身分も降格されてしまいましたが、途中王女殿下に幸運にも拾われるといった形で文官と言う名の、王女の身辺警護をしていた――と、このような説明を終えたあとのミシェルは、背中に滝のような汗をかいていた。

敵国の真っただ中――それも、大量の敵国首脳陣を前にしてのこの演説である。まさに生きた心地がしないとはこのことだろう。

実際は騎士団の団長格であったことがばれれば――下手をすればどんな嫌疑がかけられるか、想像するだに恐ろしい。

ミシェルはアイアンバッハがあまり文官としての能力が無いことを、最近疑われていたのも知っていたためにこうした話を即興で作ったのだが、つじつまがあっているか、急に心配になってきた。

ちらとアイアンバッハを見上げてみれば、ミシェルに彼は目で頷きを返してくれた。

大丈夫だったようだ。ほっとした。

するとこれを受けてオルキスの男は壇上でこう言った。

「なんと、そのような経緯であったか」

アイアンバッハはこれに、あまりにも褒められた経緯ではないため、今まで黙っていたことを告げると、深く頭を垂れた。

そも武人の――それも騎士の位を得ていたものがそれを剥奪されるまでのことをしでかしたとは、自ら言いたくはないのも事実である。騎士の位を受けるには、相当の鍛練を行ってきたもの――そして、ことリニムにおいてと言うわけではないものの、この大陸のほぼ全ての国では、騎士はそのまま貴族であることの証でもあるからだ。

王女以外のリニムの貴族が全て死に絶えたと思われているなか、ミシェルの身分が露呈してしまうことだけでも避けたいと言うのに、ここでアイアンバッハの身分までばれれば事である。

ばれないようにしたかった。

アイアンバッハに関して言うなれば、貴族では無いものの、特殊な戦績――そして武功を立てたがためにその地位を受けたため、騎士でも貴族ではないのだが、今回その話は割愛とさせていただこう。

「文官にしては少し肉が付き過ぎているしな。だがこれで納得がいった。そちらの者はでは、王女の護衛武将であったと考えたほうが良いな。そうしよう。これから貴公のことは王女の護衛武将殿と呼ぶことにする」

にやりと笑うオルキスの男に、アイアンバッハは何故か嫌な気配を感じ取った。

それはミシェルも同じようで――似たような感情をほぼ同時に抱いたようだ。

男に言われている言葉事体、そうまで警戒するものではないのだ。

だがしかし、何故だか胸の内に急に恐怖の念が湧いてきたのだ。

それも、途轍もない恐怖の塊だ。

なんだ、この男は。

ぞくりとした。

アイアンバッハは不気味と感じる程度であったが、ミシェルは目に見えて顔色が悪くなっていく。今にも卒倒してしまいそうなほどに顔色を悪くしていくのを見れば、この後が本番だと言うのに大丈夫か、とアイアンバッハは心配になった。

小声でアイアンバッハが大丈夫かと尋ねるものの、ミシェルは大丈夫だとしか返さない。

ミシェルにはこれが、酷く長い尋問に感じた。

「魔石について尋ねたい」

これはストゥルガニスよりの使者である。

酷く神経質そうに眉根を常に寄せてかつかつと机の上を叩き続ける指の音に、アイアンバッハは不快げにこちらも眉をひそめた。第一印象の段階で、この男は仲良く付き合えない人間だとの判断を下したようだ。早計に過ぎる判断かと思いきや、ミシェルも同じような判断を下したようである。

「……あまり、お付き合いは遠慮願いたい方のようで」

「……しっ！あまり見ると気づかれますぞ！」

こそこそとこういった会話をしていたのだが、背後に控えているクレスはと言うと、何とも困った――笑っていいのか怒っていいのか、複雑な顔をしていた。

兜があって良かったと心底思ったようで、甲冑が妙にぶれたりとして見えていなければいいと思いつつ、クレスは必死に警護に勤めていた。

「大体あの髪形なんです?香油を派手に塗りつけて……下品にも程がありますよ。つやっつやとしすぎてて油に頭突っ込んだのかって

いう」
「いえいえ、あのくらいの年代になりますと、油がこう……ですな。滲みでてくる量が増えるのですよ。ですからそれではないですかな？」
「にしても多すぎでしょう。恐らく脂身ばかり食べているのでは？」
「それはまた、随分と偏食家のようですな」

ぼそぼそと二人がそんな、間違っても相手には聞かせられないような話をしているのを見て、クレスは止めるべきか止めざるべきか、大いに迷った。緊張感のかけらも無い。
一拍置いて、勇気を持ってクレスは口を開く。

「相手は返事を待っているようですが、答えなくても宜しいのですか」

と。一応は元とはいえ、上官である。
その上もう片方は頑張っても手の出ない、文官だ。
リニムの人気職についたミシェルに、そして元上官ともなると、クレスは言いだしにくいことこの上なかった。
ぼそぼそと二人に聞こえるか聞こえないか分からないような小さな声音でこう口にしてみたものの、二人には矢張り当然だが、届かなかったようである。
もっと大きな声で言うべきか言わざるべきか――と迷った末、クレスは――二人の会話などを聞かずにいることにしたようである。

見てないし聞こえてないから知りませんからね！！

若干視線を上へと向けて直視しないようにすると、クレスは思う。
どちらにせよ、今この時、クレスに出来ることなど何一つ無いのもまた事実なのだが、大丈夫なのか不安になってきた。

お二人とも、大丈夫なんでしょうね？

一頻り二人での会話をおえたミシェルは、戸惑いつつも「何を尋ねたいのか」と、やや躊躇いがちに口を開いた。実に思わせぶりな態度である。

長い時間を待たせることにより、どこまで言っていいものかと迷っていたというようにも取れなくはなかった。

そして続く言葉が何を尋ねたいのかという、範囲としては大きなものを答えたことにより、相手に判断を委ねる形にしたのだ。

連合軍の者達は、これで大いに迷った。

はて、この者達は魔石についてどこまでの有用な情報を知りえているのだと、迷うだけの余地を与えたのだ。

あえてこの余地を持たせることにより、ミシェルは自分達の命に価値を持たせることに成功するか――ここからは勝負の時だった。

一歩も引けない。そして間違った手を一つとも打てない。

まさにここから火ぶたは切って落とされたのだ。

ストゥルガニスの使者が隣に座るヴグリードの使者と話しているのを余所に、シルラーノの使者はにこやかに口を開いた。

シルラーノの使者はストゥルガニスの使者とはまた違い、腹肉をむっちりと抱え込んだ男だ。

大して熱くもない部屋で、一人汗をふきつつ赤く裂けたような唇をまるで蛙のようにがぱがぱと開く様は、見ていてぞっとするほどだった。

30（誰が勝つのか）

「魔石については知っておろうの？」
「ええ。各国でも使われております通り、国の宝、命を育むもので御座いましょう」
ミシェルがそう答えると、満足そうにシルラーノの使者は言った。
「その魔石をそなたらリニムの者達は、独占してきた！！それが如何なる不平等を生んだか、知らぬわけでもあるまいと言っておるのだ！」
拳をだんとシルラーノの使者が机に叩きつけると、だるんと顎の肉が跳ねた。
すると跳ねた顎の肉が頬に伝わり、ぶるんぶるんと顔の肉全体を揺らし、最後には蛙のような口がぶるぶると小刻みに揺れ出した。
それを見てクレスは
「前飼ってた犬みたいだな……年老いた頃あんなんだったんですけど、若い頃沢山食べてたお陰で歳くったらやせちゃって。皮だけ余ってたからあんなんでしたよ。吠えるたびにぶるんぶるんだるるんって……似てるな。ヨーゼフに」
と、何もこんなことで郷愁を感じなくてもよかろうに、遠い目をして墓参りにもそのうち行きたいなあなどと言うものだから前の二人は「ぶふう」と口から思い切り空気が塊で飛び出していった。
「な、なんだね君達！？」

アイアンバッハとミシェルは、腿の肉を自分でぎりぎりと抓ったものの、笑いを逃がそうとして逃がせなかったようで奇妙奇天烈な顔を二人とも浮かべてしまった。

「なんだ、その顔は。奇妙な顔をしよって……」

あんたの所為だ！……とは言えないので二人は黙っていたが、震える肉を見るたびにヨーゼフの名前が頭の中に木霊する。

「いえ、何でもありません、ヨーゼフさん」
「ヨーゼフ！？誰がヨーゼフだ！」
「まあいいじゃないですかヨーゼフさん。それよりも先ほどの話ですが」
「ヨーゼフについてちゃんとした説明をしろ貴様ら！！」
「ヨーゼフさん。いいですか？魔石の話をしろと言ったのはあなたですよね？話を遮らないでいただきたい」
「……あ、う、うむ」

嗜めるように肩を竦めてミシェルが言うと、シルラーノの使者改めヨーゼフは、何故か会話に飲まれる形でそのまま聞き入れる形になったようだ。

これを聞いていて何だこの会話、とオルキスの男が考えたとて仕方無いだろう。

「リニムは魔石を独占していたわけではありません。それは各国の方々が一番分かっていらっしゃることではありませんか？」
「独占していたではないか！！」
「ちょっと茶々入れないでくださいヨーゼフ」
「……それはもう固定なのか？」

そもそも先ほどまではヨーゼフにも『さん』とつけられていたはずなのだが、今はすっかりと取り払われてしまっていることには何も言葉がないらしい。

「――十年に一度、魔石を必要に応じてリニムから各国は一定価格で買い付けていたはずでしょう。それは今までも同様でしょうし、これからもまた変わらないと陛下から言われていたはずでしたが――違いましたか？」

魔石が幾ら希少といえど、それにより暴利を貪る様に吹っかけた事もなく、また、それと同時に国により、値段を変えていたことも無かった。

値段を急に釣りあげたならばまだしも、そういう話があるはずもなく、何故今更魔石を独占などといった話になったのか、分からない――ミシェルはそう締めくくると、更に続ける。

「皆平等にしていたはずですが、それの何が不満だったのでしょうか。魔石は大変貴重なものであると陛下は常々おっしゃっておられました。物は有限にしかないのだと。よもやこれをまさか……信用しなかったわけではありませんよね？」

この問いには誰も答えなかった。

変わりと言ってはなんだが、オルキスの男がこんなことを尋ねてきた。

「因みに魔石とは一体何なのだ？我らはあれがただ、便利だからこそ欲しい。有り体に言ってしまえればそれまでだが……事実、魔石がなくなれば人々のまさに死活問題になる国さえある。それはここ、オルキスでさえも同様だ。だと言うのにそれは秘匿情報ということで、リニムは今まで、そのことに関しては情報開示を決してしよう

とはしなかった」
「……」
ミシェルは答えない。
エッレミアーラの使者がそれを引き継ぐ形で続けた。
「何も鉱脈があるならば教えろ、独占したいのだなどとは誰も言ってはおらぬのだ。ただ魔石とは一体何なのか。それを教えて貰いたいだけだ」
「……」
ミシェルは――答えられなかった。
「魔石によって国がまさに潤うことも知っている。それにより発展した国も数知れず……だがな、便利さにかまけて我々が何も魔石について調べなかったとお思いか？」
ミシェルがだんまりを続けているのを、見かねたアイアンバッハが口を開いた。
「……ということは、エッレミアーラでは魔石を調べに取りかかられたのですか？」
「おっしゃる通り。我らの国は学問が盛んでありましてな、お陰で調べる施設も沢山あった」
そう言われた割には、満足そうな色はそこに見えない。
その表情を見て、オルキスの男はしたりとばかりにこう言った。
「矢張りそちらもですか？」
「……と言いますと、オルキスでも魔石解析を行ったので御座いま

すな？」

「然もあらん――と言ったところですな」

それまでは飽く迄も人の良さそうな笑みを浮かべて見せていた男の表情が、一変したのはその瞬間からだった。

男は机の上に腕を組むと、その上に顎を乗せてにやりと笑う。

「いくら調べたところで何も出なかった。……というよりも、リニムよりもたらされたあの台座――あれより下ろせば魔石は機能しなくなり、命を失う。そして台座に乗せたままでは何一つ調べられないときたものだ。それも当然だな。台座の中にすっぽりと魔石が覆われてしまって、表面の欠片さえも見えなくなってしまうのだからな」

あれでどう調べろと言うのかと男が言えばアイアンバッハは首を傾げて見せた。

「台座……？」

はてどういうことだろうかと首を傾げるアイアンバッハに、ミシェルはちらと目配せをして見せる。

そこには「もう何も言うな」とあった。

ミシェルはオルキスの青年将校と目があったが、彼が何も言わないのを受けてまあいいかと思い話題を変えるべく別の話題を振って見せる。と言っても、勿論話題は魔石のことだが。

「魔石を調べても分からないのはこちらとて同じです」

「では、まるで何も分からないものをそなたたちは我らに売っていたと申すのか？」

長い眉を滝のように長く額から生やしているように見える一人の老人がそんなことを口走るが、ミシェルにそんなものが通用するはずもない。

ミシェルはこの言葉を受けた途端、してやったりと用意していた言葉を紡ぎ出す。

「では言わせていただきますが、そのわけの分からないものを求めるあまり、貴方方はリニムを滅ぼしたのですね」

それはどうなのだと言われてしまうと、連合軍の者達は、皆、言葉を失くしたようだった。

滅ぼした、とまでずばりとその被害者に言われてしまえば、黙るより他ない。

逆に、ここで何か言おうものならば魔石に関しても、何一つ情報を得ることも出来ず、彼らは口を閉ざしたままに自害の道を選ぶかもしれないからだ。

たった三人の生き残り。

そしてたった三人の生きた情報だった。

ここでこれを枯らしてしまうのは惜しいのだ。

リニムの大事な情報源である国王は死に、そしてその貴重な資料は全て灰とかした。

残るはこの者達だけだと言うのに、対話するのに必要なものが全てかけてしまっている。

オルキスの男は余計な真似をと思いつつも、老人に皮肉ったようにこう言うのだ。

「あまり妙なことを言って、リニムの方々を不快にしないでいただきたい。彼らの身柄を預かっているのは我が国です。この場で彼らを貶めるような言葉を口にしたり、彼らの感情を逆なでしたりするような言葉を気軽に発さないでいただきたいですね」

つっと口端を酷薄な形に歪めてそう口にすると、男は目を細めながらも、その瞳が笑っていなかった。

それを見れば老人はぞっとしたようで、慌てて男より視線を外すと言葉少なにそう感情的にならずともと、もごもごと言い訳めいたものを口にする。

だが、ミシェルもアイアンバッハも、先ほどの発言で大いに気分を害したようで、これには何の反応も無かった。

ただ淡々とアイアンバッハは「殺すなら殺せばいい。我ら生き残り三名、おめおめと生き恥を晒すくらいならば、いっそここで果てて陛下の元へと行く所存」などとのたまい、ミシェルは「そうですね。王女殿下には悪いとは思いますが、殿下も毎日辛いと泣きくれている様子。いっそ三人でどこへなりと放逐を……それが出来ないのであれば、リニムの地同様に、貴方方が紅蓮の炎で焼き払えば宜しいでしょう」と言うのだ。

これを見て、オルキスの男は内心面白くなってきたなと笑ったが、表面上では冷たい眼差しで連合軍の面々を見つめ、そしてリニムの二人を見つめ、重苦しい息を吐き出した。

――悪感情を抱かない方がそもそもおかしいのだ。

自らの地を焼き払った側と、自らの地を焼き払われた側で、どうやってこれで友好的な会話が成り立つと言うのか。

それも、焼き払われた側に助力を請いたく思う、と願い出るならばいざ知らず、上から物を言ったところでこの場合、当たり前だが話が進むはずもない。

相手はその頭の中に納められた知識と心中することすら出来る立場なのだ、そこを履き違えてはいけなかった。

ただの敗戦国の生き残り者ではないのだ。

生きた証人であり、生きた知恵であり、他にない、唯一の手掛かりを有しているのだ。

その段階で闘って勝てる相手ではないことは、明白なのだ。

オルキスの男は肩を竦めると、青年将校に目配せをしてみせる。
すると青年将校は暫し黙考すると、話を一旦戻そうと、連合軍の方抜きに私と会話をしていただきたいと告げる。
ミシェルはその提案に眉をひそめ、ここで話せば意味が無いではないかと告げるが、気軽に考えていただければ結構ですと言うのだ。

「別に私どもオルキスにとってみれば、魔石に関する情報は、そうまでして得たい情報ではないのですよ。ただあれば便利程度の品物。確かにそれが無くなってしまえば困る分野もあるのはあるものの、無ければないなりに我々はどうにかするつもりです。ですので本当に他の方にではなく、単なる好奇心から聞かせていただければと思いまして」
「……」

ミシェルの反応の無いのをいいことに、青年将校が続ける。

「ちょっと気になったのは、リニムの方々全てがまさか、魔石のことに関して、知りえていたわけではありませんよね？」
「……」

ミシェルは答えない。

「と言っても、細かな事由に関してはですが。ざっくりとしたことは我々よりは知っているかと思うのですが、リニムの国王以外はそこまで細かいことを知らなかったのではないか――と、そう思うのですよ」

この言葉に、ミシェルは視線を僅かに落とし考え込んだ後、何故そう思うのかと尋ねてみた。
すると青年将校は言った。

「いえね、外交の場で、リニムが魔石に関してですが――決してその場で即決出来た試しがなかったために、そう思った次第でして」

なるほどそういう理由かと思うと、ミシェルはどう答えたものやらと思った。

どうやらこのオルキスという国は、簡単に煙に巻ける国ではないようだ。ミシェルは心の中で居住まいを正すように、意識を改めて会話に臨む。

31（全ては一体誰の意思だったのか）

これは先に打ちあわせをしてあったことなのだが、魔石に関してある程度ものが分かったような人物が居た場合、予定通りの行動に移るべし、と王女から指示されていたことがある。

「おっしゃる通り、魔石は――リニム王家に連なる者のみが知る、リニム最大の秘密、それが魔石になります」
「おおっ！」
「なんと！」

ざわりと色めき立つ連合軍の者達に、青年将校はたじろぎもせずに続ける。

「となりますと、貴方方はその発掘現場……になるのでしょうか？それを王家より委託されて、掘り起こしにいくなどといったことで、関わるだけだった？」
「……いえ、我々はそれに、何一つ関わることが出来ません。あれは王家のみが秘匿するもの。そしてそれを守ることこそが、リニムの民の生きる意味だったのですから」

ひょんな形でリニムの国民の伝承めいたことを知った室内の面々は、一瞬、虚をつかれたような形になった。
そして、言葉を取り戻した一人の男がミシェルへと慌てて尋ねたのは、当たり前に気になったことだろう。

「な、ならば、今はもう、その秘密を誰もが知りえないということではないか！」

これにはミシェルもアイアンバッハも黙して何も語らなかった。
ただただ静かに座している二人に、焦れた連合軍の者達は次々に口を開いて二人を罵りだした。

「ええい、貴様らを生かしおく意味ももう無いわ！オルキスの代表よ、この者らの処分、早々にするがいい！無駄な口は早く塞いでおくにこしたことはない！」
「生き残りに下手な噂など流されるわけにはいくまい、ストゥルガニスの言う通りよ。これは処分するが吉だろう。はよう殺せ！使えぬ者どもめ！」
「そっ、そうだ！早く消してしまえ！こうなればただただ目障りな奴らよ。オルキスよ、早々に片付けよ。……なんとも無駄な時間を過ごしたわ。」

やれやれといった体でヨーゼフが椅子に身体を沈みこませながら消沈して言うのを聞けば、では殺せば宜しいとミシェルはにやりと笑いながら言い放つ。
アイアンバッハもまた、これにむっつりと口を閉じていたのを開くと、青年将校へ向かってこう言うのだ。
それはいくらなんでも気が早いと言えるもので――

「そこの方、剣を一振り借り受けたい。王女殿下にはよくよく言い聞かせてから私が弔いましょう。――そして我らは自らの命は、自らで絶つ所存」
「ええ、アイアンバッハ殿、宜しくお願い致します。他国の方のお手を煩わせたいとは、私も思いませんので……ですが一つだけ言っておきます。我が国の王女殿下におきましては、先日国王陛下より拝謁を賜り、その際、王家の秘匿する財産を全て引き継いだとのことです――が、口を塞げと言われるのであれば、敵国の者の手にかかって死ぬのであれば、自らで死を選びましょう」

この言葉にぎょっとしたのは先ほど殺せと散々口にしたヨーゼフ達である。

「我らは三人、確かに生きながらえたやもしれません。ですがそうしてただ口やかましいと無駄に殺されるくらいならば、いっそ自ら命を絶ちます。それでは――」

言うだけ言うと、二人は早々にこの場所を後にするつもりのようだ。

だが、先ほどの言葉通りアイアンバッハは青年将校の元へと行くと、剣を借り受けたいと申し出る。自らの剣は部下であるクレスに預けてあるため、空手であるからこそのこれだったが、十分にこの場に集う者達の度肝を抜いたこの演出に、全員が肝を潰したようだ。

「ま、待て！待つがいい！！」
「はて、何用でしょうか？」
「死ぬのは待てと言っているのだ！」
「なにゆえでありましょうか？我らにあれほど死ねと口さがなくおっしゃったはずでしょうに」

意地悪くそう告げるミシェルに、ストゥルガニスの使者は言う。

「先ほどは……も、申し訳ないことを……」
「申し訳ない？死ねと悪しざまにおっしゃったことの、何が申し訳ないと言うのでしょうか？」

飽く迄も何が言いたいのか分からぬと貫くミシェルに、ストゥルガニスの使者はぎりぎりと歯をすり減らす勢いで噛みしめる。

「心にも無い事を口にしてしまったが、それは悪かったと思っている！だからその……な？王女までを殺すことはせぬでも良いではないか」

「何故そのようにおっしゃるのか、意図が測りかねますが」

意図は明明白白なのだが、面の皮も厚くこう答えてやると、使者はぐっと喉に詰まりを覚えた。

相手の言いたいことは恐らくこうだ。

お前達は死んでもいいが、早まって王女まで殺す事はないではないか――こう言いたいに違いない。

王女の抱えた知識、それこそが相手にとっては必要なものであり、彼ら二人は、有り体に言ってしまえば邪魔なのだ。

だがしかしミシェル達にそれをそれとして言うことは出来ない。この査問会はオルキス主催なのだ。間違ってもこの場でこの二人を殺して王女だけを我が元へ！などと口にしたが最後、調停者として名乗りを上げたオルキスに見咎められ、果ては他国にも表だって揶揄されるような材料を与えるは必死。

かといって先ほど気が緩んだと同時に口にした、殺せとの意味合いの言葉を今更引っ込めさせはしないとミシェルから言われてしまっている。

「申し訳ない？死ねと悪しざまにおっしゃったことの、何が申し訳ないと言うのでしょうか？」

直ぐ様こう切り返してきたことからしても、ミシェルは許すつもりなどさらさらないと言っているのだ。

王女にこのまま告げ口をされれば、確実に面倒なことになるだろう。

保護をしているオルキスに向かい、ストゥルガニスの使者は嫌いと言われてしまえばどうなるか――本国に強制送還すらされかねな

い。
どうする、どうなる、そう考えて使者は全身を冷や汗でびっしょりと濡らしていく。

「どうかいたしましたか、ストゥルガニスの使者どの」

オルキスの男が気遣わしげに見てくるが、それに答える声すら喉からは出て来ない。
何をか言うことすら出来なくなった使者に、オルキスの男は更に畳みかける様に言うのだ。

「どうやらストゥルガニスの使者どのは、体調が悪いようだ。まあ無理もない。先ほどのような発言をしたからにはリニムの方々の不興を買うは必死。どうぞ自国へ戻り上の方に平謝りでもなんでもなさるが宜しかろうかと思いますよ。リニムの方の理性が持つ間にね」

ただ、リニムの方々はあなたの謝罪を飲むつもりはさらさらないようだがと口にすると、出入り口に立つ軍人を二人呼び付け、ストゥルガニスの使者を引っ立てた。

「使者どのはお帰りだ。旅じたくをさせよ」
「はっ！！」

両脇を抱えられ地面に足先さえもつかなくされてしまった使者は、浮いた足をばたつかせて口から唾を吐き散らしながら喚き散らす。

「ふっ、ふざけるでない！！オルキスの代表よ！お主、このようなことをして、後でどのようなことになっても、知らんぞ！！」

思わず出てしまったリニムに対しての言葉の数々の言質は取れて

いる。そのため、オルキスの男は何も怖くは無かった。
むしろ今後困ったことになるのは、ストゥルガニスの使者だろう。本国でどのようなことになるのか、それこそ自分自身の身の安全を考えるべきだと言えた。

「それはあなたにそっくりその言葉をお返ししよう。リニムの者に対しての無礼、調停者の我らの前でよくもまああれだけ言えたものよ。あなたの国のお偉いさんにはこちらから話は通しておくとしますよ。帰国が待ち遠しいですね？まあ、楽しみにしておいてください。熱のたっぷりとこもったやつを書いておきますから」

男はここまで言い放つとにんまりと笑みを深める。
口汚くリニムの二人へと罵ることを止めさせようとはしなかったのを棚に上げ、男は実に人の悪そうな顔をして肩を竦めて見せた。
お前が馬鹿だから悪いんだぜ？――と、それは言っているようにも見えた。
そして、そのまま首をぐるりと巡らして、今退場したばかりの使者に、同調するような言葉を発した二名にも、同じく帰国して貰うことを告げ、退場を迫った。

「引きずられていくのと、自ら歩いて退出するの、どちらがお好みですか？」

男はここまで来ると己の黒い内面を隠そうともしないのか、無邪気に笑いながらも毒のようなものを撒き散らして言う。
すると同調して見せた二人は、真っ青になりながら自ら出ていく方を選んだ。
それは、賢明な判断だった。

31（全ては一体誰の意思だったのか）（後書き）

誰がイニシアチブを握っているのか分からないまま続きます

32（王女召喚）

査問会が終わった頃、直ぐにも王女をこれへ連れてくるようにとアンセムに命令が下った。

王女と宮中を散策していたアンセムは、これに戸惑いを見せる。

「そのようなところに王女殿下を連れていけと？」

「ですがその……シーヴェス様からのお達しですので」

アンセムはその名を聞いた途端固まってしまうと、ややも経ってから仕方ないと肩を落としてこういった。

「シーヴェス様ではな、王女殿下のご都合が悪いと言っても聞く方ではあるまい。仕方ない――王女殿下、これよりリニムのお二方のおわすところへと参りましょうか」

「……二人に、会えるのですか？」

「ええ、会えますとも。その後で甘いケーキを食べましょうね」

ケーキとは、オルキスにきてはじめて食べることのかなった甘い菓子だ。ふわふわの生地がしっとりと舌に絡みついて、得も言われぬほどの幸福感を味わったのは記憶に新しい。

元から甘党であった王女は、この世界での菓子というものをこの国にきてはじめて知ったと言っても、過言ではない。

向こうの世界では普段から甘いものをしょっちゅう食べていたお陰でか、こちらでは可也の――言っては変だが、禁欲生活を強いられていたのだ。そのためケーキが食べられるようになってからというもの、毎日が楽しくて仕方がなかった。

因みに余談ではあるが最近の王女の脳内では、アンセム＝ケーキの人という図式が成り立っているのだが、流石に本人にはいってい

ない。当たり前ではあるが。
ケーキと耳にした途端、王女はぱっと輝くばかりの笑みを浮かべて小さな腕を目いっぱい広げ、嬉しさを身体全体で表現した。

「ケーキ!!アンセム大好き!」

むぎゅりとアンセムの足に飛びつくと、王女のその柔らかな身体が愛しくて堪らなくなった。
アンセムは優しくその小さくか弱い身体を抱きあげると、腕の上に乗せて、肩に捕まっていてくださいねと告げた。

「王女殿下、これから行く場所にはリニムの方もいらっしゃるのですが、我が国の代表たる方もおりまして……緊張なさるかもしれません」
「代表……」

願ってもない話だったのだが、王女は緊張に固まってしまったようにぎしりと腕の上で固まると、アンセムの肩に置いた手をきゅっと握り締めた。
怖い、そう見えなければならない。
王女の狙い通りアンセムには王女が怯えていると見えたようで、

「王女殿下から少々お話を伺いたいこともある方がいらっしゃるそうなのですが……何も怯えることはありませんよ。このアンセムがずっとお傍におりますからね。ご安心ください」

優しくいい、王女の手を取ってアンセムは自分の頬に手指を這わせるようにしてやった。
そしてふわりとした笑みを浮かべてみせるのだ。
大丈夫だろう?と、安心感を与える様に、温かな笑みを浮かべて

やれば、王女は安心したのかほっと小さな息を吐き出す。

「はい。行きましょう、アンセム」

こんな二人のやり取りを見ていれば、嫌でも当てられてしまうというものだろう――瞼を閉じた王女に、それでも分かってしまう押し隠せないその美貌の片りんに、周囲の者達はアンセムを羨み、妬んだ。

愛らしく日増しに増して美しく育っていく少女は、わけも分からぬ他国へと、攫われてくるようにやってきた。始めは警戒心からか、誰ひとりとしてその表情に色を見つけることは出来なかった。けれど、最近では色とりどりの宝玉の如く、輝くばかりの笑みを浮かべるようになった王女の姿があった。だが、そのほぼ全ては、アンセムがただ一人、独占しているのだった。

遅かれ早かれ、こうして妬み嫉みの感情を受ける様になるのも、時間の問題だとは考えていたものの、いやに早かったな、というのはオルキス上層部のこれに対する見解である。

「いやに早い、とは思うが……それでも、ああして無害な姿を毎日のように見せつけられてしまえば、そこに人々が癒しを求め、惹かれてしまうのも、また必然と言うべきだろうな……」

王女の可愛らしい姿をまるで、見せつける様にして歩くアンセムの姿に、ある時ほかの者をつけてくれないかと上官に申し出た者もあったと聞く。他の者といっても、恐らくは自分を推薦したのだろうが。

だがしかし、王女が他の者では怯えてしまうため、アンセム以外無いのだと言われ、その者は引き下がったのだ。

そういった話が事前に漏れ聞こえていたがために、皆引き下がり――今ではただただ羨ましそうにじっと眺めやる者がそこら中にい

る始末だ。
この事態にアンセムは誇らしそうだが、王女は見えてもいないため、気づきもしない。
オルキス上層部はこのような形になるとは最初、思っても見なかったのだろうが、実に面倒なことになってきたと最近では考えられていた。
いつの日にかオルキスの軍部は、そのうちあの王女のために、内部から崩壊するのではないか、そんな懸念すらわいてきたのだ。
そこにきてのこれである。周囲の者達が若干見せつけられている気がして腹立たしく感じたとても仕方あるまい。
周囲の妬ましいとの目を一身に浴びて、アンセムは悠々と歩く。
その腕に抱いた王女が、内心では計算通りだなと考えていることも知らずに。

＋＋＋

周囲をぐるりと取り囲むようにある知らない顔に、怯える子供は多いだろう。
王女もその、何と言うことは無い、取り立てて珍しいとも言えない、そんな反応を示して見せた。
アンセムが脇からすっと席を外そうとすると、いやと叫び、王女はアンセムの袖を掴んだ。
震えるその幼い身体を見つめ、アンセムはそっとその傍らに寄り添うように膝をついてその手を伸ばす。

「王女殿下、私はここにおります。傍におりますよ」
「……アンセム、アンセム」
「大丈夫ですよ、殿下。ゆっくりで良いのです。ゆっくり……ゆっ

くり深呼吸をして御覧なさい」
「……はい」

目も見えない王女がこれに怯えるのも無理は無いとアンセムは思う。
扉を潜り見えたものは、あまりにも暗く重苦しい空気だった。
これで何を王女より聞き出そうと言うのか、このようなところに呼び出した者がシーヴェスでなければ、アンセムはこの時直ぐにも踵をとって返していたことだろうと思う。
アンセムでさえその張り詰めた空気に、苦しいとさえ感じるのだ。幼い王女であればなおのことであろう。
更に言うなれば、見えぬからこそ感じるものがあるのだろうとも思う。
アンセムは気遣わしげにそっと王女の背中を撫でやると、勇気づける様に再度いった。

「お傍におります」
「……はい。傍に居てください、アンセム」

王女は胸の前で拳を作ると前をすっと見据える様に面を固定した。それは単に人の気配が多すぎて、どこに持っていけばいいのかが分からなかったため、椅子の向きの方向にしただけだが。
頃あいも良さそうだということで、青年将校が王女へと挨拶もそこそこに、先ほどの件を尋ねた。

「ルクレティアナ王女殿下、こちらまでお足をお運びくださり、感謝致します。さて、こちらまでいらしていただきました用向きですが、ミシェル殿に先ほど、お聞きしたばかりの話になりますが、ルクレティアナ王女殿下は先日――と言いましても、もう半月も前のことになるのでしょうか。父である国王陛下に何か、重大な話を伝

えられたと耳にしましたが……それはまことでありましょうか？」

そのことを言われた途端、王女はびくりと肩を揺らすと、アンセムに触れられた肩にゆっくりと手を伸ばしていく。不安、なのだろう。

するとアンセムはそっと王女の手に己のそれを這わせると、「ここにおります」と告げた。

王女はその言葉に勇気を貰ったのか、青年将校の問いに応えるべく、口を開いた。

「――はい。陛下より……リニム王家の秘匿するあるものについて、伺ったばかりです」

「では、それはどのようなものですか？」

「それは……その……」

王女が唇をきゅっと引き結び震えだしたのを見て、オルキスの男が冷たく言い放つ。

「ルクレティアナ王女、彼ら二人がそのことについてはもう、言っている。王女以外はそれを知らないと。……だが、あなたがそのことについて喋らなければ大変なことになるだろう。彼らは今も自害すると息巻いている。リニムを守るためだと。だが、よく考えてはくれないか。これ以上リニムを守ろうとしてどうなる？もう国はないんだぞ」

「……ッ！！そ……それでも、私は……い……言えません……」

余程強い語調で誰にも言ってはならないと口止めでもされていたのか、真っ青になり小刻みに震える王女の姿に、何と惨いことをなさるのだろうかと、未だ戦火より心がついていかない王女に、アンセムはあまりにも酷い仕打ちだと激昂した。

「シーヴェス様！それはあまりにも王女殿下に対して惨い仕打ちではありませんか！！」
「あ、アンセム。良いのです、良いのですアンセム……」
「良くはありません！王女殿下がこんなにも小さな身体で震えて…今にも泣きそうになっているというのに、こんな……まるで責め立てるようなことをなさるなど、あまりにも惨すぎる！」

国を失ったばかりの王女に、たった二人きりしかいない、自国の民の命を持って自白を迫るなど、正気の沙汰とは思えなかった。
あまりの出来ごとにアンセムは、相手の身分を忘れて食ってかかるも、王女がそれを留めるのだ。

「アンセム！いけません！」

33（誰が王女を握るのか）

先ほどまでおろおろと弱り切った獣の子のように、怯えて死ぬのを待つだけに見えた王女が、アンセムに駄目だと強い口調で制した。

だが、よくよく見て見れば、王女の肩は震えて見えた。

どんなに勇気がいったことだろうか。

それを見ればアンセムは、愛しさのあまりその小さな身体をすっぽりと覆い、抱きしめた。

「……申し訳、ありません……殿下」

震える王女の身体が、元に戻るまでアンセムはそうして抱きしめてやった。

そして、震えの納まった王女は言った。

アンセムがシーヴェスと呼んだ男に向かい、落ち着いた声音ではっきりと告げたのだ。

「魔石の生成法と、運用方法。それと……修繕の仕方を学びました」

「修繕？」

これには首を傾げたのは連合軍の面々も同じである。全員がどういうことかと首を傾げ、王女へと疑問を飛ばすも、王女はこれ以上はとアンセムの胸に顔を隠してしまって、会話が出来なくなってしまった。

だがこれで終われなかったのはシーヴェスだ。

シーヴェスは再度尋ねる。

「ルクレティアナ王女。君は――魔石を作ることが出来るんだな？」

「……まだ、作ったことが無いので、答えかねます」

この答えを受けて、シーヴェスは満足そうに頷くと、連合軍の面々の顔を見てこういった。

「魔石についてはこういったことのようです。時間をかけてそのあたりは王女と話をしていこうと思いますが……それで宜しいですね？」

「……相分かった」

低い声音がそう告げると、それに呼応するように三名の声が上がった。それはいずれも同調する向きのものだった。

これに満足すると、更にシーヴェスは続ける。

「ここに各国の方もお揃いのことですし、丁度いいのでこの際ですからこちらの話も纏めさせていただいて構いませんかね？……構いませんね？」

一見すれば相手の意見を窺っているようには見えるものの、実際のところは全く聞くつもりがないらしいこの言葉に、王女が内心では唖然としていれば、シーヴェスはそのまま続けてしまうのだ。

おいおい、誰か止めろよ。

そんな王女の心の声に誰が答えるはずもなく――会場はシーヴェスの独壇場と化していく。

「先ほどのミシェル殿――あの細身の眼鏡の坊やですが――彼から聞いた話ですが、リニム王家の女性は、はじめての生誕祭を迎えてから十五の誕生日までは殿方の前に出てはならないそうです。まあ

兵士は殿方に入るわけではないだろうと思うわけで……恐らくこれはこういう解釈になると思うんですよ。家から出すのは十五歳以上になってから、とまあこんな感じですね」

「十五歳……？」

王女はそんな話は初耳だった。

呆然とその話を聞いていれば、シーヴェスは楽しげに声を弾ませて告げる。

「オルキスは今後、調停者として身元引受をルクレティアナ王女の成人するまでを引き受けるつもりですので、その十五歳までは後見を務めさせていただこうと考えています。その間は先ほどの慣例を順守し、ルクレティアナ王女はオルキスの王宮内部で丁重に扱いますが、その代わり、外には決して出さない。これに関しまして、異論はありませんか？勿論、十五歳を超えてから、ルクレティアナ王女がここに居たいとおっしゃるのであれば、そのままこちらに籍を設けさせていただく心づもりもありますよ」

これには一同、絶句した。

リニム王家最大の秘密を知ったばかりでこのような爆弾発言をしてくれた男に、各国の使者達は怒りも露わに告げるのだ。

「そのようなこと……断じて認められるはずがないではないか！！」

「はて、何故でしょうか？」

実にとぼけた物言いである。

そんなそらとぼけた物言いを返された相手は、その場に荒々しく立ちあがると、机をだんと大きく叩いて叫んだ。怒り心頭といった様子である。

「オルキスの代表どのはそうしてルクレティアナ王女殿下を手篭にでもなさるおつもりか！そして魔石を独占しようと言うのだな！貴様はなんという盗人だろうか、狐のような男だな！」

この発言にはシーヴェスも流石に聞いていられなかったらしく、ぷっと小さく笑うと、小気味いいと笑って言った。

「たかが五つの童女に手を出して何とします？私がそのような幼児性愛好者だとでも言うのですか？これはまた……心外だ」

おどけた物言いで言われるが、使者達がそれで笑うはずもない。王女も笑えなかった。まあ、こちらの場合は二重の意味でだが。幼児性愛好者であったとしても笑えないし、話の内容そのものにも、笑えない。

「――さて、冗談はさておいて、魔石をどうしてオルキスが独占出来ますかね？そもそもルクレティアナ王女は魔石をまだ作ったことがない。それこそこれからどのように作り出すのか、実験を繰り返していく段階ではありませんか？まあ、現段階ではこれ以上なんとも言えませんが、希望はある、そうとしか言いようがない。それでどうして独占なんて言葉が出てくるんですかね？いやはや……」

やれやれと肩を竦めるシーヴェスに、今度は他の使者が噛みついた。

「オルキスにずっと王女が留まるとなれば、自然とそうなろうが。王女の新たな里はここになる。長く暮らした土地に馴染むは道理。若造よ、あまり年寄りを舐めるでない。子供心を少しずつ自分の都合のいい方向に歪めていくのは実に容易い。オルキスに都合よく意識が向くようにすることも、実に容易いはずだろう。それでもお主

は独占などせぬと、戯言をと言うつもりではあるまいな？……だとすれば、それは些か我々を甘く見過ぎているにも程があるぞ」

長く伸びた眉の下からじっとシーヴェスを睨みつける眼差しは、存外に強い。むしろ歳を得たからこそ強くなったのだろうその瞳は、まるで凍てつく氷のような鋭さだ。

だがしかし、これを受けてもシーヴェスは少しもたじろぎもせずに言い放つ。

「どうやら皆さんお忘れのようだが……貴方方は皆、ルクレティアナ王女にとって見れば、親の仇であり、民の命を奪った敵。そんな方々の住まうところにルクレティアナ王女が自ら成人するまでとの条件つきとはいえ、居させてくれと言うと思っているのか？」

手厳しいこの言葉に、連合軍の面々はぐっと喉に物が詰まったように押し黙ってしまった。

「だからこそ我々調停者であるオルキスが、一時的に宿をお貸ししようと提案しているんだが……そこが何故分かってくれないのか、理由を聞きたいところだな。あまりそう言うようだったら本人に尋ねてみますか？」

本人、と言われ王女はおずおずとアンセムの胸から顔を出すとシーヴェスの声の方に向かって首を向けた。

「ルクレティアナ王女、ちょっとした質問だ。よーく考える様に」

これに王女はこくんと頷くと、シーヴェスの言葉を待った。

シーヴェスは軽やかに声を弾ませて、まるで何と言うことはないことを語る様にそれを告げた。

王女はこれに内心では「いい性格してやがるな」とせせら笑っていたが、使者達からしてみれば、そんな程度の話ではないのだろう。どれもこれも怒りに支配された気配が立ち上り、王女の周囲にまでそれがおよんでいる。

重苦しい空気だった。

「――ここにおわす方々は皆、ルクレティアナ王女の国を滅ぼした方々だ。確かにリニムの国王は――いや、ルクレティアナ王女の父君は、というべきだな。……父君は自決を選んだようだが、それでもそこまで追い込んだのは彼らに他ならない」

「……はい」

「き、貴様ッ！！」

がたんと席を蹴立ててある者はシーヴェスの口を塞ぎに、ある者は王女の耳を塞ぎに動こうとするも、お静かにとぴしゃりと言われ、いつの間に彼らの傍に控えていたのか――首筋に小刀を押し当てられてしまえば身動きすら取れなくなってしまった。

シーヴェスはそれを横目にちらと見たが、ふっと笑ってそちらをまともに見ようともせずに王女へとまたも向き直って告げるのだ。

「そのような方々の国に、行きたいですか？」

「……いいえ」

返事をしながら王女は、なるほど、オルキスはこれが狙いかと考えていれば、更にシーヴェスは続ける。

「自国民をなぶり殺しにした国々の元へ、行きたいと思いますか？」

「いいえっ」

「あなたの大切な方々の命を奪った理由が、ただ魔石にあると知ってもなお、行きたいと思いますか？」

魔石を欲するがゆえ、リニムを滅ぼした。自国の滅んだ理由をこんなところで聞かせられた王女はと言えば、当たり前だが胸を抑え、耳を抑え――果ては悲鳴を上げて椅子から転げ落ちた。

「いいえっ！いいえっ！！」

畳みかけるようなシーヴェスの言葉に、王女は堪らず音をあげた。まだそのようなことを続けるのかと怒りの目をアンセムが向けるが、シーヴェスは矢張り気にした風でもなく、むしろアンセムに起こしてやれと告げて丁重に扱えとさえ言うのだ。

アンセムにはわけが分からなかった。

このようなことをなさる方ではないのに……何故……？

34（シーヴェス王子）

王女は抱え上げてきたアンセムの腕の中で、ぶるぶると震えてアンセムと名を呼び、その胸に顔を埋めて泣きじゃくる。

「い、いやあ、アンセム……いやあ……うっ、ううっ」

「大丈夫ですよ、王女殿下。もう安心ですからね」

「い、いやあ……私、オルキス以外には行きたくない！行きたくありません！」

「大丈夫ですよ、シーヴェス様がきちんと王女殿下を守ってくださいます。ですからご安心ください」

「シーヴェス様？」

守ってくださる、とは、一体どういうことなのだろうか。

演技に熱が入っていてここまで気づかなかったわけだが、何やらアンセムの言うシーヴェスという名の響きには、どこか違った思い入れがあるように感じられたのだ。

するとアンセムは安心させるようになのだろうが、大変な事実を語り始めたのだ。

「はい。オルキスの第一王子であらせられる、シーヴェス・オルク・ウルジェンキス様です。先ほどから相当酷いことばかり言われてさぞお辛いとは思いますが、あれでも一応は第一王子ですので、王女殿下をちゃんとお守りくださいますよ」

これを聞けば王女は唖然としてしまった。

そしてシーヴェスもこれを聞いて言うのだ。

「おい、アンセム。お前あれでもって……それはないだろう。一応

これでも王子でお前より偉くはあるつもりなんだが……お前、偶にそれを忘れるよな。意図的にだが」
「いいえ、分かっていて言っています」
「お前ねえ……」

このやり取りもやり取りだが、王女はまさかシーヴェスが王子だとは思わなかったようで、流石にここまでの大物がこんなにも早く釣れるとは考えてもいなかったためか、驚くと同時に、さてどうするべきかと案を練り直し始めた。
それをじっと青年将校が見つめていたことを、王女は最後まで気づかなかった。

＋＋＋

各国の使者が目の前で面子を粉々に叩き潰された上、魔石――いや、魔石を生み出せる唯一の者をみすみす奪われるという愚を犯したがためか、怒りに全身をぶるぶるとふるわせていく。
すると、それを見て何を思ったのか、シーヴェスが言うのだ。

「そこで提案なのですが、十五歳の時まで、我がオルキスの王宮に留まり、使者どのらには王女と話す機会を設けたいと思う。それで如何でしょうか？どちらにせよ今はそれより他ないと思いますが……」

つまりは王女に媚を売るだけの隙間をあけてやるとシーヴェスは言っているのだ。
どこの国もオルキスほど大国ではないため、この条件を飲まざるを得なかった。

あまりにも一方的過ぎるけれど、それでも飲まなければならない。けれど、これではあまりにも各国の使者を軽視した発言に行動にと続け過ぎているように思うのだが、一体それは何故なのだろうか。

王女はそれが気になった。

そしてそれは、程なく判明することになる。

では決まったところでとぱんと柏手を打つと隣室から歩み出てきたのはアイアンバッハとミシェルである。彼らも何故か使者同様に怒りが面に刻み込まれており、余程強い怒りでも感じているのかと、嫌でも理解させられた。

王女が怒気に染まった気配を感じ取ると、思わず二人を前に身構えてしまう。すると二人は王女の前に跪き、言うのだ。

先ほど何があったか、何を言われたか、そして使者達がどうなったか――それらを聞けば納得した。

なるほどそう言う理由もあるのであれば、流石に何も言えなかった。

先に面子をつぶしたのは連合軍の方なのだ。ならばオルキスが先ほどのことを盾に取り、あのように無茶を押し通したとしても仕方なかった。

それを暗に指す様に青年将校が口に上らせれば、先ほどまで怒り狂っていた使者三名は、ゆっくりとだが落ち着きを取り戻してきたようだ。

「……確かに、確かに我らのうちの三名が、リニムの方にしましても、オルキスの方にしましても、無礼を働いたやもしれぬ。確かに、確かにだが！！だが、何ゆえ我らまでそのような……！」

エッレミアーラの使者は最後までそのような言葉を口にしていた。

だが、これに対してアイアンバッハがすっくと立ち上がると、彼の目の前に立ち、じろりと一睨みを利かせた途端、視線を逸らして

俯くと押し黙ってしまった。
俯いたその目は、怯えと怖れ、そして後ろめたさが顕著に見られる、そんな目をしていた。
完全に使者達が沈黙したのを皮切りに、リニムの三人は席を立った。
さっさとこんな場所は後にしようとする三人に、シーヴェスは待ったを告げる。
これにはまだ何かあるのかとばかりにアイアンバッハもミシェルも、面倒そうな表情を隠そうともしない。
それを見てシーヴェスは苦笑気味に言ったものだ。
「そう嫌そうな顔をしないでくれ。一応これが最後だから――一週間に一度の茶会。それと一カ月に一度の晩餐会、それに各国の使者を招く。それには君達三人も参加していただきたいと思ってね」
「嫌だとは……言わせては貰えないのでしょうか」
これはミシェルだ。
「これ以上の恥辱をおめおめと被りにいくと思ったのですか」
これはアイアンバッハだ。
王女はアンセムの袖を引いてびくりと肩を震わせたが最後、だんまりを決め込んでいる。
それを見ればシーヴェスは笑った。
あまりにも演技が過ぎるとそう思ったのだ。
「もしもここでないとなりますと、オルキスとしてもこれ以上をやると、逆に反発を覚えられかねないのでね。ここらが妥協するところだと思う。勿論、毎日の茶会がお望みだったらそうするが、もし違うならこれくらいで勘弁してくれないか」

この言い分は確かに頷けるものであったため、ミシェルと王女は見つめ合うと、ミシェルがシーヴェスの出した案を飲むと告げた。
王女は承諾すると言えと、遠目からは目視出来ないほど微かに顎をしゃくってミシェルにこれを言わせたのだ。
気づかれていないはずだった。
物を自分では考えられない童女、それを演じなければいけない理由がある。だからこその演技だったが、これはシーヴェスに――有り得ないことだが、見られてしまっていた。
ついとシーヴェスは笑みを深くすると、ではそのようにとだけ告げて、三人の退出を許可する旨を伝えた。
ミシェルがアイアンバッハがと扉を潜りぬけていくと、それを追うようにしてアンセムに連れられた王女が扉へと向かう。後三歩もすれば扉を確実に抜ける――と来たところでシーヴェスがふいに、気になることがあると告げて王女とアンセムの足を止めた。
王女は何だ訝りながらもぎゅっとアンセムにしがみつき、そっと伺う様な顔をする。
そんな怯えた風を装う王女にシーヴェスは薄らと笑みを浮かべて言うのだ。

「夜の散歩は大いに楽しめているか？」

この問いに、王女は

「……お散歩は、夜にするものではありませんよ」

と返した。
そしてアンセムも

「王女殿下は夜中の間、見張りを立てた上でじっくりとお休みいた

だいていますが……」

と、怪訝そうに言ったものだ。

これを受けてシーヴェスはふっと笑うと忘れてくれと告げて、退出を促した。

アンセムの腕に抱えあげられた王女は、表面上は穏やかな笑みを浮かべつつも、内心では焦りに苛立ちにと、わけも分からぬ感情に振り回され始めていた。

これこそが二人のはじめて交わした会話だったのだが、王女にしてみれば、これこそがまさに忘れ去りたい過去でもあった。

あの時もっと上手く返せていればああはならなかったのだろうかと、いつまでもいつまでも、王女は後悔し続けた。

「さて、どう料理してやろうか……」

狩りの始まりだ。

３４（シーヴェス王子）（後書き）

ようやく名前が出ました～

35（首輪をかけられた王女）

迷った末に出した結論は、白を切りとおすというものだった。

深夜に徘徊をしていることがばれているともなれば、このまま続けて本日も外出をと言うのは危険過ぎる。だからこそ白を切るために当分の間は外出を控えるつもりだった。

けれど、相手の方が上手だったようだ。

――というよりも、最早あの時点ではとっくに包囲網は完成していたと言うべきか……。

ぎりりと王女は悔しさに歯を噛みしめ鳴らせば謝罪の声が聞こえてくる。王女はそれに要らないとだけ返すと、端的に何が目的なのか、こんなことをしでかしたシーヴェスに語気も荒く尋ねてみせた。

「目的？」

「……そうだ、理由あってのことだろう。早くしろ」

シーヴェスはあれから青年将校を伴って王女の元を訪れた。それも、青年将校からは「妙な動きを見せれば、私の部隊があなた方リニムの民を殲滅します」とのお言葉つきだ。

その堂々たる悪役ぶりに反吐が出る。

シーヴェス達は王女の企みにこんなにまで早く気がついていたのだ。

深夜徘徊だけではなく、その潜伏していたリニムの民のことまでもが知られていた。それどころかその民全てを捕らえ、その企みまで言い当ててきたことに、王女は驚きを隠せない。

「いやあ、少しずつオルキスの街の中に紛れさせていくのは中々上手い策だったとは思うがな……ただ、お前はやり過ぎたんだよ」

「やり過ぎた？」

「うますぎるんだよ、演技がな。それくらいの子供ならこうする、こうなる、それを上手くやりすぎたんだ。だから逆に俺はお前のことをただのつまらんガキか気になったんで注視してたら、案の定、猫を被っていましたと……」

これには王女は笑ってしまった。

そんなこと、そんなことでまさか自分の策が崩れるなど、王女は予想していなかった。あまりにもこの男の存在が――その思考が、王女に取って見たら計算外のものだったのである。

目まぐるしく思考を巡らせる。

だがどうしても思考はここで蹴躓くのだ。

「姫様……ごめんなさい……」

「セネカ……謝るなよ。別にお前の所為じゃない。全て……俺が悪いんだ」

青年将校に捕らえられ縛られ膝をついて床に伏せているセネカの姿に胸が痛んだ。

抵抗したのだろう。その身体中についた痕が生々しかった。

王女の敏感な鼻が感じ取ったものは血の混じったセネカの匂いだ。耳には弱弱しい息遣いが聞きとれ、妙な苦しさを王女へと与えてくる。

「ルクレティアナ王女、子供が子供らし過ぎるのはな、俺の今までからの経験上、逆に怪しいんだ。そこんところはよく覚えているといい。次は役に立つはずだ」

くっと笑ってこう告げたシーヴェスに、王女は今度こそぶちりとぶち切れた。

次などあろうはずがない。

シーヴェスのその、上からの物言いが気に食わなかった。
むしろ、気に入るはずがないのだ。こんな非道なふざけた男を、誰が気にいると言うのか。
王女は余程掴みかかりたいのを我慢して、声の限りに叫んだ。

「ふざけるな、ふざけるなよ！なんだその戯けた理由は！ただの子供で何が悪い！俺の演技が完璧？そりゃ褒めてんのか貶してんのかどっちなんだよ！ざけんな！！」

ぶつけどころのない怒りを王女は爆発させるも、どこに向かっても八つ当たりすら出来ず、ぶるぶると怒りに肩を――いや、全身を震わせて怒鳴りつけるも、シーヴェスは少しも動じることもない。むしろ面白そうにこれを見つめて言ったものだ。

「なあ、猫を被るのはもう止めるのか？あれはあれで面白かったんだがな」
「猫を被っていたわけじゃない！！」

あれにはわけがあってああしていたのだ。王女は理由がない無意味なことを何より嫌う。そのためあれも、全て計算づくの演技だった。
――とはいっても、媚を売るためであったわけではないのだが、それはシーヴェスには分からない。王女がそれ以上口を開こうとはしなかったからだ。
青年将校がそんな王女に告げた。

「先ほど伝令から連絡が入りましたが、アンセムの部隊に入りこんでいた兵士及び魔術部隊の者、そして文官二名も捕縛したとのことです。これでリニムの者は全て捕らえられたわけですが――そろそろ観念なさったら如何ですか？ルクレティアナ殿下」

淡々と告げられるその事実に、王女はその俯いていた暗い面をゆっくりと持ち上げていく。
そこにあったのは怒りを通り越して無になった王女の顔だ。
その何一つ感情の色を乗せていない顔を見て、シーヴェスはふっと笑った。そしてこうも言うのだ、これくらいで音をあげていられるのかと。

「一体それはどういう意味だ」
「さてね、どういう意味だと思う？」

気配だけでもそれと分かるのが、シーヴェスが嫌になるほどこの状況を楽しんでいることだった。
一体何の冗談なのだろうか、リニムの生き残りが全てオルキスのただの一部隊に捕縛された？
それも、何の冗談か王女の子供らしすぎる演技が臭いと思ったからこそ調べてみたとは、本当に、それこそ耳を疑ったものだ。
けれどそれは全て事実なのだろう。セネカはそこに身じろぎ一つすることも敵わず――更にはこんな事態になれば真っ先に隠れるよりも闘おうと誓い合ったはずの兵士がいつまで経ってもこの場に現れず、それどころかあのアイアンバッハまでもが来ないとは、いよいよもってこれが紛れもない事実なのだと信じるより他なかった。
王女はおもむろに口を開いた。

「何が要求だ。用件を早く言え。俺に用があるんだろう？」
「本当に気が短いな、そんなんで毎日つまらなくないか？もっと気楽に行ったほうが楽が出来ると思うんだがな。ルクレティアナ王女はどうにもいけない」

それでは幸運の女神は去ってしまうぞと言われれば、王女は吐き

捨てる様に言ったものだ。

「煩い。面倒だ、早くすませろ。用件を言え」

彼らを捕縛したままに、一体何を王女にさせようと言うのか。

シーヴェスも青年将校も、王女には何一つ縛をかけようとはせずに、ただ降伏をと勧告するだけだった。

王女自身に何か用事があるのは、明白だった。

魔石だろうか、とも考えたものの、企みに気がついていて泳がせていたことからも、もっと他の何かがあるのかもしれないとも言える。

何にしても相手の出方次第でそれも直ぐに知れることなのだが――

王女が最早抵抗すらせず言うがままになるという、無条件降伏を宣言したと取ったシーヴェスは、若干面白くはなさそうな空気を発してはいるものの、まあいいだろうと告げるとあるものを王女の足元へと放ってきた。

「ま、いいさ。――理由は確かにあるが……俺が今言いたいのはただこれだけだ。リニムの民を助けたくば、俺の奴隷になるがいい。リニムの民、その全てがお前に対する人質になる。どうする、奴隷になるか、抵抗するか、二つに一つだ」

この段階になってもまだ、シーヴェスは王女で遊ぶつもりのようだ。

よりにもよって二択を迫るとはと、王女はぎしぎしと歯を軋ませる。

「どうせここで抵抗すると告げれば、お前は喜んでリニムの民の全てを殺すんだろう？」

シーヴェスはそれには答えずに肩を竦めるだけにとどめた。
それは、肯定する意味以外には、王女には取れなかった。

「ならその質問は無意味だ。俺達の願いはただ一つ、リニムにもう一度、足を踏み入れること。民が全て死んだらそれこそ、意味が無い」
「なら話は簡単だ、その落ちた首輪を拾うんだな。――そして俺の狗になり、……働いて貰いたい」

最後の言葉を発する時のシーヴェスの声のなんと慎重なことか。
王女はそれを耳にして、その先ほどまでの物言いとはあまりにもかけ離れたその口のききかたに、首を傾げた。

「……貰いたい？奴隷とぬかす割には殊勝なことだ」

王女はそのまま放り投げて寄越されたそれをあっさりと取りあげると、首に当てて――暫し考え込むようにして言った。

「着けてくれ」
「……自分で着けられるだろう？」
「馬鹿が、こんなもの一人で着けられるか。こっちは目が見えないんだ、首に回すまでは出来ても、それ以上は……なんだ。……困る」

だがしかし、シーヴェスは動かない。
それに対し警戒していると受け取ったのか、王女は大丈夫だと告げた。

「セネカがそっちにいるのは知っている。なんならそっちの軍人でもいい」

それを受けてシーヴェスは躊躇ったものの、自らが行くことにしたようだ。
王女の前に跪くと、首に当てられた首輪を取り、それを慎重に回していくと血の如く赤い宝玉を首の前で音をさせて留めた。

「いや、最後の施しがまだ……済んでいない」

そう言うと、シーヴェスは胸元から小刀を取り出し、自らの親指を傷つけるのだ。
間近で血の匂いがぷんと強く香れば、王女は直ぐに気がついた。

「……傷をつけたのか？」

一体何のためにと思うが今更遅い。
シーヴェスはそのまま親指の腹を宝玉になすりつけるようにすると厳かに宣言するように朗々たる声を響かせていく。

「我はここに宣言する。この我の血の赤をもって主従の契約と成す。主の名をシーヴェス・オルク・ウルジェンキス。その隷従する身をルクレティアナ・アナベール・リ・リニアンとす。この契約は、契約の神の名を持ちて未来永劫続かん――ベクドゥ！」

シーヴェスが契約の神の名――恐らくはオルキスの神だろうが、王女はこの地方の神の名はまだ知らないため確信は持てない――を叫んだと同時に、王女の首に巻きつけられた首輪がぎゅっと急に締まったのだ。
あまりにも突然であったために王女は呼吸すら出来ずにその場に崩れ落ちた。

「姫様っ！姫様っ！！」

セネカの暴れる音がするものの、王女は遠のく意識に何をすることも出来ない。
苦しさの中、息も絶え絶えにシーヴェスに王女は聞くのだ。

「何を、した……」
「これから俺とお前は運命共同体になる、ただそれだけのことだ……」

そう傲然と口にしたものの、シーヴェスの表情は晴れない。声音はどこか痛々しくさえ感じられるほどだ。
何故だろう、そう感じただけだったが、思わず王女はシーヴェスに手を伸ばした。
だが、手が届く前に王女の意識はぷつりと途切れた。

「シーヴェス様、如何です？」
「いや……想像以上のたまだなこれは。本当にこうなると、リニムの魔女って説も有力になってきたんじゃないか？」

シーヴェスがこう答えると、ふむと口元に手をあてて青年将校は考えるような顔になった。

「メル？」
「メルヴィル――そうお呼びくださいと申しておりますよね？」

刺々しいこの言葉に、シーヴェスはたじたじだ。
怒るなと言いつつも、青年将校――メルヴィルの顔色を窺うようにして下から見つめる。

「兎に角、このままにはしておけませんよ。アンセムにはルクレティアナ殿下にはシーヴェス様の元で花嫁修業のために急なことですが部屋替えになったと申しておきますからね」
「その言葉だけはどうにも信じられないんだが……これが本当に嫁になんて行くと思うか？」
花嫁修業というよりも、これから叩き込まなければならないのは淑女教育である。それを数年かけて一気に叩き込むわけなのだが、嫁と言われても逆に居心地の悪い思いがするだけだ。
「むしろ今のひらひらとしたドレスも嫌々きているようにさえ見えますしね。夜中に身にまとっていた、どこぞの小汚い小僧のような格好のほうが楽でいいのかもしれません」
「だろうなあ……」
苦しそうにしている王女の首輪を少し緩めてやると、シーヴェスは複雑そうな顔をして言うのだ。
「何にしても早めに身につけて貰わなくちゃならんことが山ほどあるんだ。こいつには頑張って貰わんとならんなあ」
リニムのためにも――そして、オルキスのためにも。
にしても、とシーヴェスは苦笑しつつ添えて告げる。
「本当に目が見えていないとは思わなかったな」
全く不自由していないように見えたからか、シーヴェスはずっと疑っていたのだ。王女の目は本当は見えているのではないかと。
だがしかし、王女は首輪を留めることが出来なかった。
だとすると――

「リニムの王女は黒曜石のような黒光りをする妖しい瞳で敵を見据え殺戮の舞踏を舞うと言う。なら……違うのか？」
「なんでしたらルクレティアナ殿下に尋ねてみたら良いではありませんか」
「……馬鹿言え。これが大人しく言うような奴かよ。……まあ、何にせよ明日からやることがたっぷりとありそうだな。どうしたもんか……」

先ずは家庭教師が必要だが、下手なものはつけられない。となればーーとシーヴェスは考え、ぴんときた。

「よし！お前が家庭教師だ！」

メルヴィルの肩を叩いてにまりと笑って告げるシーヴェスに、メルヴィルは無表情だ。声を失ってしまっている。

「……頭がわきましたか？」
「お前、他に言うことがあるだろうに……」
「……ッ」

ふいに王女が呻き、つられるようにして二人がそちらを見てみれば、王女の喉元で赤い宝玉が生き物のようにどくりと鼓動を打っていた。
それを横目で眺めやればシーヴェスは満足そうに頷いて言うのだ。

「これで王女は俺のもの……だな」

それだけ言うとシーヴェスは、王女の小さな身体を浚っていく。
後に残されたのは、セネカの暗い瞳だけだった。

「姫様……姫様……許さない。あいつら……許さない……」

1（容赦のないオルキスコンビ）

行けども行けども砂、砂、砂。
右を向いても左を向いても砂、砂、砂。

「うぁあああああちいいいいいいいっ！！」

王女は思わず叫んだ。しかし叫んだことにより熱風がまともに口に入り大きく咳き込む。それを見るなりアイアンバッハが慌てて王女の口に布を当てた。

「大丈夫ですか、アッシュ」
「うー……」

じりじりと照りつける太陽に、砂からの照り返しにと、容赦のない上下からの熱にやられて今にも倒れてしまいそうだ。

「水……水が、欲しい……」
「もう全て飲んでしまいましたでしょうに」
「アイアンバッハのがあるじゃない」

まるでどこぞのいじめっ子のようなこの物言いに、間髪入れず駄目を出すのはメルヴィルだ。と言っても、三人共に現在、頭から布を被って誰が誰だか見分けもつかないような風体をしているのだが。

「どこの悪がきですか。ああ……あれですか。やはり一番小さいと地面からの照り返しがきついのでしょうかねぇ」
「ふ、ざ、け、ん、なああ！ちびなのはしょうがねぇだろ！子供なんだからっ！」

「口が悪いですよアッシュ！！……それとメルヴィル殿……その」

アイアンバッハはちらと自分の方が上背が相当に高いにも関わらずに上目遣いで見やると自分の水をやってもよいかと目で尋ねた。本人意識しないで可愛らしい仕草をしてくるのだが、これが大変気色悪い。（酷い話かもしれないがメルヴィルからすれば事実である）

メルヴィルは眼鏡の位置を直しつつ、厳しい目を王女へと向ける。

「駄目です。共倒れになっては元も子もありませんので。大体、それしか水は無いともうしましたのに、どうしてあなたは水の配分をせずにがばがばと……自業自得ですよ」

己の年齢の半分にも満たない少女に対し、メルヴィルは冷徹に言い放つも、それでも多少は気になるようである。次のオアシスの位置はあとどれくらいかと、望遠鏡を取り出してオアシスの位置を確認している。

そんなメルヴィルに対し、王女はと言うとわなわなと肩を震わせ言うのだ。

「メルヴィルが……メルヴィルが……」

「なんですか」

「小姑うぜえ……」

「オアシス寄って欲しくないってことですね分かりました。それではそのようにしましょう」

かちゃりと望遠鏡を即座に仕舞うとさあ行きますよとアイアンバッハに先を促す。そんなメルヴィルに王女が悲鳴を上げるのだ。

「嘘だろメルヴィル！オアシス寄らないと干上がるよ！？」

お前それでもいいのかと王女がメルヴィルに迫れば、メルヴィルはにっこりと微笑み、

「ご安心を、王女。私にはまだ予備の水筒まであります ので」

と言い放つ。

何とも無情な一言である。

ついでに言えばまだ予備まで残してあったことに王女は驚いた。

「それはあれですか、俺一人で干上がれよってことですか。さいですか」

がっくりと肩を落として大人しく王女は歩き始めた。大人しく従おうとする王女の姿に満足すると、メルヴィルはあと三十分も歩けばオアシスだから頑張れと言うのだ。

「さんじゅっぷん……」

ならば予備の水筒でもなんでもくれればいいのにと恨めしく思うものの、この砂漠のオアシスと言うものは、その全てが固定されたものではないのだという。

「直ぐにも消えるオアシスならば困りますのでね。水脈が変わらなければそれでもいいのですが……兎に角急ぎましょう。後少しですよ、王女」

「ううう……メルヴィルの鬼ぃ……」

ふらふらと歩く王女の姿にアイアンバッハも気が気ではない。メルヴィルが先を行くのを王女が砂の上だと言うのに足音さえもさせずについていく。

こうしたことに今でも新たに驚きを感じるものの、それを毎回毎回面に露わしてなどいられず、メルヴィルはいたって普通に前をいっていた。

だがしかし、これればかりは見逃せなかった。

「道理で足音をさせないと思いましたよ!!これは没収です!」

こっそりとアイアンバッハが自分の水筒を渡そうとしたのを見咎めて、メルヴィルがアイアンバッハの水筒を没収してしまう。

「ああ!」

「俺の水筒!」

思わず王女がそう口を開けば、メルヴィルはくわっと目を見開いて言うのだ。

「あんたんじゃないでしょう!!」

これまた至極まっとうな物言いだった。

砂を踏む足が段々とふらついてきたのを感じれば、王女は砂漠の凄さを――というよりも、自然の凄さを舐めていたなと一人ごちた。

王女の年齢は今年で十一を数えたわけだが、ここまでの道のりは決して甘くはなかった。これまでの生き方を露わすのであれば、それこそ散々なと言えると思うのだ。

だからこそ、砂漠くらいならば簡単に踏破してみせるとミシェルに安易に請け負ってみたのだが――

「流石に予想外と言うか……」

ぜえぜえと喘ぎつつ砂の山を登っていくと、先に登っていた二人から大丈夫かとの声が上がるが、決して二人は手を貸そうとはしない。

というよりも、貸せないのだが。

王女も荷を背負ってはいるが、彼らの比ではない。

メルヴィルは貴重なあるものと、工作のための様々なものを持っていた。そしてアイアンバッハは食糧と、そして彼の愛用の特大の武器を。

自分の荷物を持っているだけの王女など、まだまだ可愛いものなのだ。

だがしかし、慣れないこの気候の中、そして初の砂漠越えである。無理があると言いたいのは何も、王女に限ったことではなかった。

＋＋＋

あの日からというもの、王女は寝て起きると直ぐにも淑女教育が始まった。それも毎朝それで、王女は文句の一つもいう体力を残すくらいならば必死で覚えようと努力したものだ。

なにせそうしなければ食事は抜きになってしまうからだ。

王女は必死だった。

それは正餐から始まり、舞踏に古代語にと忙しなく頭から身体までを働かせられたかと思いきや、そのままの足で原本を作り出す作業にも借りだされると言うもので――淑女教育とは名ばかりの、とんでもなく忙しい毎日を送ることになった。

「教育部分がむしろすくねえよ！！」

「安心しろ、原本のほうがそれより余程貴重だ」

「答えになってねえ！」

因みにその化けの皮がはがされてからというもの、メルヴィルからは裾の長い衣装を身にまとって過ごしたくなければ上達することだとびしばしとやっつけられるようになってしまった。

「どうして俺の弱点が露呈した……」

愕然とした表情で言うものの、メルヴィルは馬鹿ですかとばかりに言い放つ。

「貴方ね、それだけ長い裾のドレスをしょっちゅう踏んでは嫌々渋々って顔をして……嫌でも分かると言うものでしょうが」

顔に全て書いてあると言われてしまっては、ぐうの音も出なかった。

どうやら目が見えない分、ふとしたときに自分の顔を繕いきれていないらしい。これは文字通り盲点だった。

そのようなことを言われてからと言うもの、メルヴィルの指導で上手く踊れなかった時や、上手く正餐を終えられなかった場合などは厳しい罰則ということで、大量のリボンやフリルをあしらわれた、ごってりとしたドレスを身に纏わせられることになり、王女は涙を流してこれに嫌がった。

だが、そうした反応は更に相手を喜ばせるものであるのは当たり前である。それこそ相手からすればこれはいい弱みを握ってやったということなのだろう。が、王女からしてみればいい迷惑である。

舞踏教育時間ともなると、右へ左へとステップを踏んでくるりと回ってと繰り返しているうちに、今どこにいるのかが分かりにくくなってくる。こっちは目が見えないんだと何度言えば気がすむというのか。壁に行かないようにせねばと思ってみても、これが可也難

しい。
危険ですよと言うものの、相手は「それくらい出来るんだろう？」という、無茶な振りをしてくるだけで、王女の言葉に耳を貸そうとはしなかった。

「な……納得が、いかん！！」

この待遇の改善を要求する！と声高に告げれば、シーヴェスはもとよりも、メルヴィルも言うのだ。

「却下だ」

この端的なまでの返しに、王女は叫ぶ、暴れる、飛び回る。
だが相手もしれっとしたもので、王女のこの動きにも、「借金としてつけておきますね」と言うだけで後は勝手におしと放置を貫くのだ。
オルキスには確かにリニムの王女とそのその部下であるアイアンバッハとミシェルは迎え入れられた。庇護すると他国に銘打っている通り、これは公費として彼らを庇護するオルキスがその食い扶持を賄うのは当然となるだろう。
だが、彼ら三人は当たり前としても、他のリニムの者達を賄うのは何の義理も無いとシーヴェスからは言われてしまったのだ。
王女がリニムの民を勝手に連れ込み、これを配下とするのであれば、王女にはその分の食い扶持を稼ぐ義務がある。
隷従の身となってからと言うもの、そうしたものに対し容赦なくシーヴェスは突っ込んでくるようになった。お陰でリニムの民がオルキスに滞在する際にかかっている諸経費は、全て王女にシーヴェス名義でまわってくる借金となっていた。
つけておきますね、と言うのはつまり、借金として更に追加入ります、ということなのだ。

こうなるともう王女にはどうすることも出来ない。
よって王女はこれ以上リニムの民がオルキスに負っている借金の返済額が増えないようにと苛立ちを腹の中に大人しくおさめ、潔くメルヴィルに扱かれるまま扱かれ続けた。

「借金額が金貨五千枚とか高すぎるんだっつの！ふざけろこの！」

そういいながらも王女は裾足の長いドレスを穿き踊る。ようやく正式な夜会で踊れるだけの水準にまでなったが、これでもメルヴィルは許そうとはしなかった。
なぜならば、王女にシーヴェスの仕事を任せる際の影武者を、セネカにさせることになったのだが、セネカの水準があまりにも低すぎるため、二人ともを水準を同じだけに引き上げる作業が待っていたのだ。

「じゃあ俺やらなくていいじゃん」

王女は当然のようにこういったが、メルヴィルはご冗談をとばかりに笑うとこう告げる。

「どうせ貴方やらなくなったら直ぐ忘れるでしょう。都合のいいところだけ鶏頭なんですからやめませんよ。さあきりきり踊る」
「鬼だ、鬼がいる」

王女は泣きながらも教えられたとおりのステップを踏み続けるのだった。

1（容赦のないオルキスコンビ）（後書き）

因みにファンタジーの平均値段設定として引っ張ってきたあたりだからこれくらいであってると思うんですが大体以下のようになってます。

現在の借金額金貨五千枚

（第一章現在まで。第二章終わるまでに増えるか減るかは王女の働き次第）

金貨（３千円程度の価値）１枚＝２ｇ
小金貨（千円程度の価値）１枚＝０．５ｇ
銀貨（３百円程度の価値）１枚＝５ｇ
小銀貨（百円程度の価値）１枚＝２ｇ
銅貨（１０円程度の価値）１枚＝１５ｇ
小銅貨（１円程度の価値）１枚＝１ｇ

日本円に直すと金貨五千枚なので、一千五百万くらいかなと。
あまりこの世界の物の価値が分かっていない段階の王女だからこそふっかけることの出来た値段でした。
シーヴェスもメルヴィルも腹黒です。
そして王女はそんなに高いと思ってないです。
恐らくあれだけの人数の食い扶持だろうから～うーん、これくらい？とかって数百万もいかないよなーとか軽く考えていそう……

2（あの後）（前書き）

話が一端戻ります

2（あの後）

あの首輪を締められ気を失った後、目覚めてみればシーヴェスの隠れ家の中に居た。

嗅いだ事のない匂いが充満していると鼻を鳴らして警戒を露わに告げれば、これは魔法でこの場を探知出来ないようにする、まじないの一種なのだと言う。

「何故そんなことをする。狙われてでもいるのかお前」

この問いに対してシーヴェスは、まあ似たようなものだと告げた。

「といっても、俺の場合は実に嫌になるが――実の父親が敵になる」

「なんだそいつは。きな臭いじゃすまないじゃないか」

一方的なまでの依存関係をあの時結んだわけだが、お互いに腹の内を今のうちにきちんと話しあおうと言うことだった――が、これは流石に予想をはるかに超えていた。

「実の親にまさか命を狙われてでもいるってのか？」

「……まあ、そうなるな。よくあることだ、気にするな」

実に気軽に口にしてくれたわけなのだが、王女としてはとんでもない話だった。

「おまっ、気にするわ馬鹿！俺らまでそれに巻き込もうとすんな！一人で狙われてろよ！」

早々に見切りをつけたこの発言が飛び出したわけなのだが、シー

ヴェスは笑顔でこんなことをのたまってくれた。

「まあ待て、安心しろ。その契約の首輪がある以上死ぬ時は一緒だ」

爽やかにそんなこと、言われたくなかった。そしてついでに全く会話が成立していないことに王女は恐怖する。

シーヴェスは王女とある意味では会話をするつもりがないのだ。説明をするつもりはあっても、王女と相互の会話をするつもりがないと分かると、王女は苛立ちを覚える。

「何だってんだその勝手な理屈は!? しかも説明する前にそんなことを先に言うか!? ってか何!? なんだって!?」

王女はばっとシーヴェスから身を引くと、首元にこわごわと手を伸ばしていくと、然もありなんと告げられたのはとんでもない事実だった。

「永劫の契約と言っただろう? 俺がそれを破棄しない限り、お前は俺と一蓮托生。――だからまあなんだ、父王に切り殺されたらお前も一緒に身体が裂けることになるだろうな。うん」

だから協力しろよと嬉しそうに告げるシーヴェスに、王女は絶望していった。

どう考えても王女のみが危険が高すぎた。

シーヴェスと違い、王女の場合は何一つ後ろ盾たるものがない。そんな中で国内最高権力者である国王からうとまれる王子の配下になっただなんて、それこそ聞いていないにも程があった。

強制的に結ばれた主従関係に、更には危険の伴う仕事をして貰いたいがため結んだとの理由がついてくるとなると、王女は頭が禿げあがるほどに髪を掻き毟って腹立たしげに叫んだ。それ以上やるこ

とが何も無かったのだ。
契約は王女からは破棄出来ない。それをすることが出来るのはただ一人、シーヴェスだけだ。
王女は自分の身のあまりの不幸さに呪詛の言葉を吐き出した。
「うん、じゃねえええええええええ！！何してくれてんだてめぇえええええ！！」
シーヴェスの首をぐいぐいと小さな手で締め上げる王女に、全く痛くないのが不思議だと漏らしながらもまあ待てと再度シーヴェスは言う。
「どんなことをしてでもお前を手に入れたかったんだ。手伝いも欲しかったしお前自身も欲しかった。だから許せよ。な？」
それが大変いい笑顔をしているのが王女には見えなくても分かった。
「いや、な？じゃねえからな？何をさもこれで許してくれるよねって思ってんだこら。許せねえし許さねえし」
「えー？」
「えー？じゃない。というよりも俺をどうして手に入れたかったって？さっぱり分からんがきちんと話せ馬鹿」
契約の首輪がある限り、王女はシーヴェスを傷つけられない。そのことを腹立たしく思いながらもシーヴェスに蹴りを入れてやると忌々しげに舌打ちを打ち、説明の先を促した。
危険な任務に赴け、そのために契約を無理にも結ばせて貰ったと言ったのだから、理由くらいは教えて欲しかった。
何故、王女にそれをやらせたかったのか。

何故、危険な任務に赴くのが王女でなくてはならなかったのか。
これでただ面白そうだったからなどという、ふざけた理由であるならば、痛みを与えられずとも、切り伏せてやろうと思った。

「……隷属の身だってことを全く理解できていないようなこの娘をどうしてくれようかと思うんだが。メルヴィス、どうしたものか……」

「主がそんなんだからなんじゃないですかねー？」

「わー、投げやりな答えー」

シーヴェスがメルヴィルの適当に返した答えに対し、こちらも適当に返していたのを目の当たりにして、この目の前で繰り広げられる会話に王女はどうついていけばいいのかと考えた。

「……もう、わけわかんねえ」

妙な男達にとっ捕まったのだけは確かだと思いながらも王女は長い裾を椅子の上で蹴りあげると、そのまま胡坐をかいて待つことにした。
王女を兎角彼らがどうしたいのか、それを知ることが重要だった。

＋＋＋

「お前の一族が、どれほど希少価値のある血を受け継いでいるか、知っているな？」

居住まいを正し、そう告げるシーヴェスの言葉に、王女は何と答えたものか、と考えた。

けれど嘘は吐くなと先に言われてしまったため、無駄ならばと早々にこれに肯定を示す。

「聞いたからな。あいつが死ぬ前に、弟と二人で……」

今思えば王の言葉「だからこそ、我々は命を賭してでも、この土地を、この本を、敵国より守り抜かなければならないのだ」という、あれが遺言になってしまったのか。

王女はきゅっと唇を噛みしめると、柄にもなく感傷に浸る様に無言で暗く地面を見つめる様に俯いた。

王女の瞳は何も映さない。

だが、だからこそ見えてくるものがあった。

ただ一度見ただけの父王の姿。本当に短期間しか過ごす事が適わなかった弟。顔を見ることなく、どこに消えてしまったのか、母である王妃の影。

不思議なことだが、これがこの世界での王女の家族なのだ。

何一つ家族らしいことをしようとは、向こうの世界でも考えたことはなかった。

そもそも、家族と言うのは王女にとって、ただ王女の生活をひっかきまわすだけの厄介な存在でしかなかったのだ。

この世界での家族も、ある意味ではそうだが、その性格は大分違う。

「リニムの王家はもう、お前一人だ。だからこそ、この大陸の迎えようとしている運命をねじ曲げるために、お前の力が必要なんだ」

シーヴェスがそう言い放てば、王女は引き結んだ唇を更にきつく、噛みしめる様にして声を喉の奥から絞り出して言った。

「……知っている」

あれがまともに話した最後だった。実の父親よりもはるかに長く会話をしたことだろう。それほどまでにたったあれだけの長さの会話でも、王女にとってみれば長い長い会話だった。

国のことだけではなく、王女に、そして王子に託したものは、それよりもはるかに大きなものだった。

そんなこと、シーヴェスに主従関係を持ち、強要されてやることではなかった。

元からそれは王女の役目なのだから。

あの日の父王から言われた言葉、それが未だに王女の鼓膜を震わせる。

生き延びたならば、成さねばならぬことがある。未だアイアンバッハにも言えていない言葉だ。

「……お前は、何故それを知っている。俺達リニムの民だけが知りえる情報なはずだ。……それも、王家のみに知らされている事実まで……お前は知っているんだろう？違うか？」

王女が問い詰める様にしてこう尋ねれば、シーヴェスはしたりと満足げに、にっと笑って首肯をすると言うのだ。

「魔石を調べた、そう言っただろう？」

3（王女と魔石）

「……魔石には細工がしてあるはずだ。俺にしか反応しない、そう聞いている」

父王から聞かされた事実の中にこんなものがあった。

「魔石とは、リニムの王家のみが生み出す事の出来るもので、それを守る守人の末裔――それこそがリニムの民なのだ。だからこそ彼らはその全てを持って王家に仕えようとする。彼らの古代より受け継がれてきたそれこそが使命なのだから」

「使命……」

「そうだ。そして我らが使命は魔石を持ち、全ての命を守ること。元来魔石とは、現行で使用されているような使い方をするものではない」

「……」

その意味は分からなかったものの、オルキスにきてから王女は理解した。

その活用方法、そして用途の多岐さに驚愕した。が、それと同時に納得もいった。

王がまさに言いたいことはこれだったのだと。

「魔石を触れて処理をすることが出来るのは、王家の血を引く者のみだ。私含め、お前――ルクレティアナと、ティセリウス、ここに居る三人だけだ」

これに訝る様に王女は王を見つめれば、王はその時、初めて王女にふっと安らぎを覚えたような柔らかな笑みを浮かべて言ったのだ。

「お前の名だ」
「……俺の？」
「ルクレティアナ・アナベール・リ・リニアン。戦場に行くのだろう？ならば名がなくては不便なはずだ。このような事態でなければ、もっとお前には贈りたいものが山とあるが――致し方なしだ。ルクレティアナ、どうか無事で……生き残るのだぞ」
「何を……」

狼狽する王女をひたと見つめる王に、そして王子にと、そんな彼らを見つめれば、王女は嫌な予感が拭えなかった。
胸が妙にざわつくのだ。
――そして、あんなことになった。
そんな苦い記憶を思い出すと王女は更にシーヴェスを追求すべく口を開く。

「あれは俺達のみが使えるものだ。なのに……どうしてお前がそれを知れるという？調べたと言うが、何故調べられた。答えろ」

淡々とそう追及していく王女に、シーヴェスはメルヴィルに言って持って来させた物があった。
王女の目の前の小さな卓にそれを押し並べると、見えないだろうがと前置いてシーヴェスは語りだした。

「これは軍部が見つけ出したものだが……この大陸創生に纏わる古文書になる」
「古文書だと？」

驚きに眉間にしわを寄せてこう口にすれば、シーヴェスは頷いて続けるのだ。

「リニムの民が各地に散っていったという事実は知っているか？この大陸のために、王家が死力を尽くしているのと同時に、民もまた、大陸を、そして王家を守るために力を尽くしてきた。そんな話が書かれていた。彼らは魔石を……可也昔の話になるが、守ろうと尽力してきたようだった」

それは気の長くなるほどに遠い昔の物語だった。

リニムの王家は大陸を、全ての命を守るために魔石を生み出し、維持することを強いられていた。それを守るべく、守人として戦うために民はあった。

いつしか魔石を得んがため、元よりこの大陸に住まう者達が魔石に群がり始めたというのだ。

「……」

「それを知ったリニムの一部の民が国を出て、狩りを始めた」

「大陸の魔石に群がり始めた者たちを、全力で潰しにかかったのです」

メルヴィルが話を繋ぐようにして王女の前に差し出したのは地図だった。

「見えないことは知っていますが……一応ですので用意させていただきます。――この地図で見ますと、ある規則にのっとって魔石は配置されているようでした。それも、現在では誰も触れることが敵わなかった魔石ですが、その古文書を読む限りでは、過去にはまだ、対策がなされていなかったのか、あれが珍しいものであること、そしてリニムの民が異常なまでにそれを熱心に崇め奉っていたことから、大陸の先住民達はあれを欲し始めたのだとか」

なるほど、では――

「その対策のために現在では魔石に触れようとしても、触れられないように改造を施されたわけだな」

現在魔石には、起動状態だと殻に覆われ、その姿を見ることが出来ない。更に言えば殻を剥き、中を見ることは可能だが、殻から取り出された魔石は息吹を感じさせないのだ。

命の鼓動を感じられない魔石には、何の価値もない。

魔石が胎動を繰り返してこそ、そこから力が取り出されるのだから。

けれど当時は殻は無かった。

殻に覆われた魔石でなければ力が取り出す事が出来ないようにされているという事実は、まさしく当時の名残であり、夜盗から魔石を守り抜くためであったのだ。

そこまで理解すると、王女は首を傾げて言った。

「古文書とは……では、リニムの地を離れた者達が残したものか？」

「そうなる。彼らの残した書物だが……彼らもまさか、他部族のもの達に読まれるとは思ってもみなかっただろうな」

他部族のもの達の命をも救うためとは言いつつも、それでもなお狙われ続ける事実は彼らをどれほど打ちのめしたことだろうか。

それを知ってしまったからこそシーヴェスは口を重そうに閉ざしたまま、黙してそれ以上語らなくなってしまった。

仕方なく王女は当時――いや、それ以上過去へとさかのぼって語り始めた。

「リニムの者達は別の大陸から渡ってきたことは知っているな？」

「……ああ」

「では理由はそこに書かれていたか？」

その問いに応えたのはメルヴィルだ。

「いえ、そのような記述がありましたが、何故とは……」

「理由は明白。別大陸でも追われていたからさ」

短くこう言われてしまえば、メルヴィルはそれは辛いだろうと答えた。

どのような理由からかはまだ分からないものの、それでも分かったことがあった――それは、リニムの者達が、新しい安住の地として求めてやってきたこの大陸でもなお、追いまわされ、疲れ切っていたという事実だ。

更に言うなればこの地の民の命、その全てを守りとおそうとしてきたのだ。にもかかわらず追われ、奪われる毎日。それはどれほどの精神の摩耗を強いられたことか。

「そして辿りついた先でも待っていたのは破滅の道だけ。だが元の大陸に戻れば待つのは死だ。そこは……どうせ書いてあるんじゃないか？」

王女を求めた理由が、語り始めたことにより王女の中で纏まったのだ。

古文書、そして魔石、そしてこの首輪。その全てが王女にはぴたりとはまりこんだ気がした。

シーヴェスは皮肉に笑って言った。

「元の大陸は今やリニムの民が消えたために滅びゆく運命、だったか……皮肉なことだな。魔石を求め過ぎたがゆえにリニムの民を追いまわし、逃げられた」

「便利さってのは危険だってことさ。利便性のみを追求した結果、人々はそれ以上を求め続ける。だからこそ神官の一族はリニム以外が滅びた。酷使され続け……もうあちらの大陸には、魔石の中身がほとんど残っていないんじゃないか？ぎりぎりのところでもっているってところか……魔導装置が盛んに使われ文明は発達した。だが……それゆえに滅ぼうとしている」

リニムの王家のみが使用することの出来る魔導戦略兵器は、別大陸で使用していたものの技術を真似て作られたものだった。

あちらの大陸ではそれが盛んに使われており、と聞いているがそれは王女は黙っていた。話せと言われた部分以上、話すつもりが無かったのだ。

そうした背景があり、だからこそリニムは逃げることを決意した。もう自分達の手にはあまる状況になってしまったと言って。

そして、この大陸に未だ息吹が感じられることに驚き、ここだけは二の舞にするまいとこの大陸を守ることを決意した。

「リニムがこの大陸から……あの土地から離れることの危険性をどれだけお前達が認識しているか、知りたい。そして知った上で言いたい。俺達があの場から離れればどうなるか……どれほどの災厄がこの地に及ぶのか……お前達は認識をしているのか？」

調べたというのであれば、知っているはずだった。

それがどれほどの危険を秘めているのか。

だがしかし、オルキスはこの場に王女を縛りつける方を選んだ。

王女の首に鎖を取りつけ、この地に縛り付けたのだ。

古文書の中のリニムの民の声を聞き、なおそのようにする理由を問いたかった。

「それは――」

3（王女と魔石）（後書き）

第二章を行き成りこういう暗い話し持ってきたくなかったので最初にああしました。

4（陰険眼鏡、極悪眼鏡、鬼畜眼鏡）

うぐうぐとべそをかきながらセネカが泣きごとを発し始めるも、メルヴィルは容赦なくセネカまで扱きあげる。

ここで一番の問題はこれだろう、セネカにも王女と同じだけの体力知力を有することを求めているのだ。これこそが問題だといえよう。

王女は一度聞いたものは全てあまさず漏らさず記憶している。そこにつけて

「私が二人の教育係になったからにはびしばしと行きますよ！さあ立った立った！甘えてるんじゃありません！」

「無茶言うな馬鹿！こっちはずっと立ちっぱなし踊りっぱなしなんだ！少しでいいから休ませろよ！」

だがにべもなく言い放たれたのは甘い、の一言だった。

「今までろくな教育も受けて無かった貴方方には時間なんて無いんですよ。ほら、きりきり動く！」

「ばーか！ばーか！メルヴィルのばーか！」

「語弊が少ない！もっと頭が良さそうな言葉でせめておっしゃいなさい！」

ぴしゃりとこう言われれば、王女はめげるか――と思いきや、めげなかった。

直ぐ様メルヴィルの指摘してきた通りに王女曰く、頭の良さそうな言葉遣いへと切り替えてきたのだ。

ただし、勘違いをしているように聞こえるのは気のせいではあるまい。

「ああら、メルヴィルったらなあにその顔。いやだわ～、怒り過ぎて顔に皺が刻まれてるわよ?そのうちそのまま皺が元に戻らなくなっちゃうんだから。時間が無い無い言っているからそうなるんだわ！ちょっと休んでなさいよ」

びしっとメルヴィルの眉間に皺が寄ったが怒りのためではなかった。

「どこで覚えてきたんですかそんな言葉。ばば臭いのでもう少し年相応に！ついでにさり気無く人を休憩に誘わないこと！！」

ばば臭いと言われてしまっては仕方ないと王女はこれまた切り替えてきた。

「陰険眼鏡、極悪眼鏡、鬼畜眼鏡」

ここで重要なのだが、王女はきちんともう、リニム周辺で使用されているエディロア語から、オルキスの島全土で使用されている、ゲルン・オルキス語に言葉を切り変えていた。それどころか今では自然にシーヴェスを罵る言葉まで操れるようになっていたのだ。

短期間の間に凄まじいとは内心驚嘆していたものの、メルヴィルはそれを面に出さないようにして、ざっくりと返した。

「眼鏡以外無いんですか」

なんたる記憶力かと舌を巻く気持ちだった。

確かに味方に引き入れて正解でしたか……

あのまま逃げられて、いつの日か敵に回る可能性を残しておくよりは、余程今の状況の方が安心である。
リニムへと戦争を仕掛けた側ではないとはいえ、放置を貫いたこともまた、事実だ。オルキスの立場からしてみれば、王女一人の出来ることなど微々たるもので、それこそ脅威に感じるほどでもないだろう。
だがしかし、リニムの王家の血筋を引いた王女なのだ。
その事実こそが厄介だった。

動こうと思えば、ただ一人でもこの大陸すら脅かす者……か。
そっと安堵の息をそれと知られぬように零すと、メルヴィルは二人をより一層厳しく扱き始めた。
能力のあるものには、それ相応の力を求める。それがメルヴィルのやり方だった。

「さ、馬鹿やってないで、本気出してください殿下。あなたの力量はこれくらいではありませんでしょう」
「えええええ、かったるい」
「……甘味抜きでぶっ通しでいってもいいのでしたら」

それでもいいんですが、と続けようとしたところで、王女が血の涙を流す勢いで決死の覚悟で遮るようにして言うのだ。

「やるから用意しとけやごるぁあああああ！！タルトとクリームたっぷりケーキだからなおらあああああ！！ついでに喉越し爽快だったあのつるんとした食感のアレも用意するんだからなお前えええええ！！」
「はいはい、分かりましたからね。じゃあ頑張りましょうねー」

さらさらと自分は自分の政務をこなしつつのこの言葉に、セネカは冗談だろうと王女の顔色を窺うようにしてみせるが、王女は本気のようだ。腕をぱかんぱかんと左右に振ってやる気を見せている。

「や……やですよ姫様!?僕そんな……死んじゃう!!」

今でさえきついというのに、これ以上でと言われてしまっても困るとセネカは言うが、王女は全く聞く気がない。

「死ぬ気でやるんだセネカ!!俺のケーキのために!」
「ケーキってなんですか!?僕より大事なんですか姫様!?」
「大事!甘いの大事!甘いものは世界を救うんだよ!?知らないのセネカ、遅れてるー!」
「そうなんですか!?」
「殿下ー。あんまりいたいけな少年をからかってるとしばきますよー。早く続きの頁の三小節目をやり始めないといい加減ダーツの的にしますからねー」

二人とも、それを聞くと慌ててその場で踊り始めた。
メルヴィルが本当にそれをやると知っていたからだ。
冗談は言わない、有言実行、それこそがメルヴィルという、オルキス軍上層部に、若干二十七で食い込んだ男の信条と掲げているものだった。

「あんまり遅いと夜も抜きますよー」
「ええ!?おやつ抜き決定なのか!?」

ステップを踏んでいるうちに何事かに気がついたようで、その場に唐突に立ち止まると棒立ちになり、王女は頭を両手でぱんと両側

から挟みこむようにして叩くと、気が付いたばかりのそれを何て事だと愕然としながら叫ぶのだ。

「目が見えないのになんでダンスだよ！良く考えたら無力っぽく見せなくちゃいけないならダンス出来たら駄目だろが！」

そもそもが目が見えていないのに踊れる方が異様にしか見えないだろうと、今しがた気付いた事実を盾にメルヴィルに迫ると、メルヴィルは眼鏡を指でついと持ちあげ、言うのだ。

「ばれましたか」

王女はそれを聞いた瞬間、ぽかりと顎が落ちてあいた口が文字通り、ふさがらなくなった。

「え……ちょ、おま……」

嫌がらせ？嫌がらせでずっと躍らせていたのかとふらついた足取りで更にメルヴィルに近寄ると、にこりと何を考えているか分からないような笑みを浮かべてずいと王女の方にむしろ顔を寄せてきて告げた。

それは、セネカからすればとんでもない事実で――

「と、いうのは冗談でして、潜入工作では物が見えるように見せなくてはいけないこともままあります。その際踊りをと所望されることもありますでしょう。と、なりますとこれは必須になってからでは遅いための練習です。ですから殿下には達人級になっていただかなくてはいけませんので……頑張りましょうね？」

達人級と聞けば気が遠のくのを感じるが、それどころではなかっ

た。今度はセネカが気がついてはいけない事実に気が付いてしまったのだ。

「ならそれこそ僕の練習こそ不要じゃないですか！！」

僕もうやらなくていいんですよねと声高に叫ぶのを聞けば今度は王女がぎょっとした顔をして、そしてあまりにもあまりな声を上げた。

「お前一人だけ逃げようってのか！そうは問屋が卸さないぞ！お前も一蓮托生だ！！っていうか俺だけなんて酷い！お前も絶対に巻き込んでやるからな！！」

「いいいい！？い、嫌ですよ姫様！一人でこなしてください！僕、この下駄の高い靴、痛くてもう嫌です！穿きたくありません！！」

「お断りだ！お前がやりたくないと言うのを断る！！」

「わけがわかりません！！」

ぎゃあぎゃあと子供二人が醜い争いをし始めたところで部屋の隅に、いつの間にか来ていたらしいシーヴェスが、面白そうに高笑いをあげていた。

王女はいつからきていたのか分かってはいたが無視をしていた。だがしかし、セネカは本気でいつ来たのか、それすら分からなかったらしく驚きに目を見張っている。

「達人級ねえ？王女殿下、今どの水準まで達したところだ？ゲルトルレーゲからは脱したんだろうな？」

「アンバリスは……太鼓判を押されたところ……だ、が！！こっそり見ているんじゃない！お前、性格悪いぞ！」

ゲルトルレーゲは舞踏用語で初心者を意味するが、古い言葉で鈍

重な、鈍足、亀のような、などを意味し、はっきり言って馬鹿にされているとしか思えなかった。
因みにアンバリスは中級者水準を指し、鹿のような、軽やかな脚、などを意味する。
達人級とは言わないが、せめて名人級を目指したいところだ。
王女の言葉に対し、メルヴィルはさらりと、

「安心してください。あれの性格の悪さは元からです」

なにげに一番性格が悪いのはメルヴィルだと思った。

「……お前、性格悪いよな」

メルヴィルの言葉にシーヴェスはため息をつき首を振る。

「お前もだからお互い様だろうなあ……」

王女はそんなシーヴェスを見て重苦しい溜息を吐きだした。
まさにどっちもどっちの二人である。

5（砂漠で行き倒れました）

嫌がらせではあると分かっていたが、どこまで上達したか見てやると言われれば、逃げるのは嫌だった。王女はこれを挑戦と受け取ったからだ。

「見せてやる……と、言いたいところだが、だったらパートナーをやれよ」

「俺がか？……ふん、まあいい。ならやってやろうじゃないか。いささか丈が足りなさすぎる感が否めんが、まあ仕方ない。今後の成長に期待というやつだな」

「ちびって言うな！！」

腰にそっと手を添える様に置かれてあの日のことを思い出した。

あれはそう、王女から先に言っておくがと連れ込まれた先で早々に線を引くために口にした言葉だった。

「俺は男だ」

こいつは幼女趣味ではないと思いながらも、妙な一室に連れ込まれてしまえば流石に警戒もするというものだ。

この言葉に二人ともが顔を突き合わせ、真顔になっていたようだった。

表情を変えたかどうかは王女には分からなかったものの、その空気が変わったかどうか程度であれば簡単に分かる。

そしてシーヴェスとメルヴィルはと言うと、全く変わらなかった。

ただ、顔を突き合わせ何か確認し合っていたようだが――それも

王女には筒抜けだった。

「こんなに狭い部屋で近くで内緒話なんて無意味だとは思わないか？丸聞こえだ。そのまま話せよ」

「……いや、オルキスの王宮に届けられた際、王女の身体検査は隅々までしたと聞いていたが、その結果がまさか違っていたのか、とも思ったわけでだな」

「いえ、ですが……間違うとも……」

オルキスの王宮で預かるにあたり、王宮医官五名からなる医師団に細々とした検査を受けさせられた。王女にとってそれはまさしく拷問に近い所業ではあったが、それでもこれは受けるより他無かった。リニムの者達の命がかかっていたからだ。

王女は淡々と、「身体がこんなだから信じて貰えないかもしれないが、それでも男なんだ」と告げる。

正直、これで幼女趣味であろうとも、今後の成長に期待と、邪な期待を寄越していようとも、釘くらいはさせるかと思った。

だがシーヴェスは慎重に尋ねてきただけだった。

「どういうことだ？」

こちらこそ一体どういうつもりで王女を引き入れたのか、その意図が全く分からなかった時のことだったがために発した言葉だったのだが、無駄だったのか？

王女は首を軽く横に振ると

「……いや、いい。男扱いしてくれると助かるってことだ」

ただそれだけを口にし、相手の言葉を待った。

今後どれほど長い間こうして共闘関係を築くことになるかは分か

らないが、それでもこの男とは長い付き合いになると思った。だからこそ妙に女扱いを受けて無駄な気づかいはされたくなかった。

――だが、今まさに、あの時この男に秘密を打ち明けたことが間違いだったかと後悔していた。

自分の腰を攫っている男は明らかにその秘密で王女をからかい続けているからだ。

「男だと言う割には女のパートが随分と上手くなったものだな」

「うるせえよ！だったら男のパートを覚えさせろクソが！」

足を踏もうと踵を軸にくるりと反転した際に、右足が浮いたところで容赦のない一撃をシーヴェスの足の甲に落とした――つもりだったが、シーヴェスは相当踊りが上手いようだ。さらりとかわしてそのまま滑るように王女を伴い部屋中をくるりくるりと回りながら踊っていく。

まさしく達人級――セレ・フィータの名を冠するに相応しい踊りを見せつけられ、嫌でも王女は負けを認めざるを得なかった。

見えなくてもその優雅な動きは分からないはずもない。

いや、ああいう言い方をするのだからこの男は失態などみせるはずもないとわかってはいたのだが、それでも悔しい気持ちは隠せない。

「ぐうううう……」

「なんだ？見惚れたのか？惚れ直したか？」

「あれなんだろう、いらっときたんだけど。でも殴ってもきかないからこの腹立ちをどこにぶつけたらいいのか分からない」

「あっはっはっはっは！」

心底楽しそうに笑うシーヴェスに王女は脛を蹴りあげると、負けず嫌いの血でも騒いだのか、メルヴィルにこいつ以上に上手くなるよう指導しろと命じた。だがしかしメルヴィルは言うのだ。

「私では達人級までは教えることが出来ません。達人級よりも上を目指すのでしたら、それこそその人に教わんなさい」

メルヴィルは名人級、フラームベラを持ち、更には教えるだけの資格も持っていた。だがフラームベラが達人級である水準までを教えると言うのは些か厳しいものがあった。

だからこそ端的なまでに私では無理だと告げれば王女はあからさまに顔を顰めて見せるのだ。

「……ねえわー」

シーヴェスを負かしたくて教えを請うと、まさかのまさかだ、シーヴェス本人から教えて貰えと言われるとは、正直思ってもみなかった。

するとシーヴェスはかかと笑いながらもお前さえよければ構わないぞと軽々しく言ってくるのだ。

正直な話し、今なら殴り殺せそうな気がした。

怒りの力で一撃粉砕出来そうな気が――と、ふるふると拳を震わせていれば、王女がシーヴェスと踊っている間に何があったのか、王女がふいに部屋の隅を見ると、そこではセネカがただただしくしくしくしくと咽び泣いていた。

まあ、と言っても王女は既に踊ってはいなかったのだが。

「もうや～だあああ～……うえええええん！！」

シーヴェスに抱えあげられてぷらぷらと足を宙に浮かせていれば

のこれである。驚いてセネカの元へ行こうとするがシーヴェスは王女の何が気にいったのか、放すつもりがないようである。持ちあげてそのまま卓へと運ぼうとするのだ。

「ええい、放せ放せ！もうお前はパートナー解雇だ！」

「何を言っているんだ？セレ・フィータまで頑張るんだろう？宵の妖精、夜の精霊の異名を持つのがあと数年で大陸一の美姫となりそうな王女だからな。俺も張り切って手ほどきしてやろうな。はっはっは、覚悟しておけよ。今夜は寝かせないぞ」

完全にからかっているのは分かっているのだが、ぞわりと背筋に嫌なものが駆け巡るのを感じ、王女はばたばたと手足をばたつかせてシーヴェスの腕の中から逃れようとする。

「放せ！きっしょく悪いこと言うな！はーなーせーーー！！

王女がじたばたともがいていれば、アイアンバッハが颯爽と現れて言うのだ。

いつから聞いていたのか分からないが、話は聞かせて貰ったと、扉をばんと開けて入室してくる姿は間がいいと言えばいいのか、悪いと言えばいいのか……である。

光沢のある滑らかな石で出来た床をつかつかとではなく、どしんどしんと、まるで砂袋を床にたたきつけるような音を立てて優雅さのかけらも無くアイアンバッハは近づいてきた。

「アッシュ！では私がお相手つかまつります！」

だがしかし、王女はこれににべもなくざっくりとした返しをしてみせる。

「一昨日きやがれ」
「んなあ!?何故ですアッシュ!私のどこがパートナーに相応しくないと!?」
「あえて言うならその鼻血を垂らしながら幼女の俺に迫るところかな!身の危険を感じるわボケ!」

あまりにぐだぐだと煩いため、王女はシーヴェスの腕からするりと抜け出ると、アイアンバッハの足を払って態勢が崩れてきたところに下から突き上げるような拳をみぞおちに入れてやった。
アイアンバッハは体をくの字に折り曲げふるふると震えている。それを見ればメルヴィルが「お外でおやんなさい」と冷たい一言を発するのだが、あえてのアイアンバッハを丸無視である。見ていたセネカは真っ青になったのは言うまでも無いが、この発言にもあいた口がふさがらないようだった。

「……却下だ。分かったな」
「……は、はい」

それを見ていたオルキス主従はと言うと

「容赦ないな」
「ですねえ」

そんな反応だった。

＋＋＋

結局そんな毎日が積み重なっていったかと思えば、気づけば六年

も経っていた。
十一ともなると、偽造手形でもきちんとした正規の手形でも、外に出向いても問題のない見た目になったためか、早々に「仕事をしてこい」と追いだされたわけなのだが――正直、最初が砂漠の国、エッレミアーラとは思ってもみなかった。
極寒の雪国にも出向いたことはあるものの、砂漠は未だ未経験の土地である。そのためか、矢鱈と喉が渇くに任せて水を飲んだ結果、王女は死にかけていた。

「み、るう……みる、ほしぃ……」

からからになった喉が渇き過ぎて唾液を呑み込むことすら出来ない。
唾液が口の中にあふれても来ず、舌が上あごにはりつくのだ。
胃すら渇いてしまったのか、痛いを通り越して妙な違和感を感じるほどだ。
寒さの耐え方くらいしか知らなかったのがいけなかったかなどとぼうっと考えてみるものの、後の祭りである。来た後で文句は言えない。
矢張り最初のオアシスで水が得られたからと油断していたのが拙かっただろうか。二か所三か所と次々とオアシスが目の前で枯れ果てていくのを見れば、あんなにもがばがばと飲むべきではなかったと言わざるを得ない。
計画性を持たせて飲めとはメルヴィルからの言葉だが、オアシスを次の目的地として細かく設定していたため、そうまで危機感を感じていなかったのだ。
それでこれである。

「もう……駄目だ……」

ばさり、音をさせて王女が砂の中に倒れ伏すと、まだ余力はあったが、それでも自分達も相当限界だったらしい男二人も王女の元によってきて仕方ない休むかと、自分達のためにも言った。

沈みゆく意識の中、もっと前に倒れておけばよかったかと思ったものの、指一つ動かすことが億劫になってしまえばもう、どうしようもなかった。

6（見捨てられました）

ばさりと倒れたは良いが、王女は砂地の地面に苦しんでいた。

「熱……い」

考えれてみれば当たり前ではあるが、砂漠の砂の表面温度は異常なほど高い。布を被っていなければ短時間でも触れるだけで火傷をするほどだ。言ってみれば火であぶった鉄板の上に頬を押し付けているような今の状況に、熱くないはずがなかった。

アイアンバッハは王女をそっと抱き上げるが、三人で木陰を探すわけにもいかず――と言うよりも、木陰どころか目に映るのは砂で出来た山や地平線のみだ。一面の砂景色に三人は呻くより他ない。

倒れた王女の口元に、しょうがないと言いつつもメルヴィルが一口水を分けてくれた。

「う～……」

「ああもう、そこまで酷いならもっと酷い顔をしてくださいよ。平気そうにしているからまだ大丈夫なのかと思ったじゃありませんか」

もっと頑丈かと思いましたと言いつつまた水を一口分流し入れてくれたのだが、王女は酷い言い草だと思いながら素直にそれを嚥下した。

水を飲むことが出来た王女に、アイアンバッハはほっとした。

そして王女の目がもしも今見えたなら、メルヴィルの心配そうな、それでいて自分の落ち度に嫌悪しているようなそんな複雑そうな顔を見ることが出来ただろう。

これでいてメルヴィルも案外情があるのだ。

ただ王女にはなるべく辛く当ろうとは当人も考えているようだが、

目が見えていればそうは感じられないだろう程度には、実は優しい顔をしていた。無理をしているとそれと分かるほどに複雑そうな表情を浮かべるメルヴィルの姿に、どこかアイアンバッハも気持ちが落ち着いたようだ。

そんな中、王女にかかる影が大きくなったのに気が付いて、アイアンバッハが顔を上げた。

そこには旅の一座と思わしき男女が数名、にこやかに立っていた。

「あらまあ、この熱砂にやられたのね。大丈夫?うちら今、天幕作り終えたところなのよ。良かったら休んで行きなさいな」

アイアンバッハはこれに有難いと一にも二も無く頷くと、王女を抱え直し、彼らについていくことにした。

だがしかし、メルヴィルはと言えば、折角の好意に反対なのか、しきりと「いいのですか?」と窺ってくるばかりで要領を得ない。アイアンバッハとしては確かに世話になっている身であるオルキスの者であるメルヴィルには恩義があるが、それにしても今は王女の身が第一である。理由も告げずにいいのかと尋ね続けられるだけでは全く意味が分からなかった。むしろメルヴィルの存在すら今は、不愉快にすら感じ始めていた。

先ほど見直したように感じたばかりだと言うのに直ぐのこれである、ある意味だが裏切られた、とも感じていた。

すげなくアイアンバッハはメルヴィルに「アッシュの身の方が大事ですので」と言いきると、そのまま旅の一座へと追いつこうと足早に歩いていってしまった。それはまるで、メルヴィルとはもう、話したくもないとでも言うように見えて、メルヴィルは些か気分を害した。

「まあ、いいですが……」

分かっているのかいないのかとぶつぶつと呟きながらもメルヴィルは彼らの後を追った。

この後起こることを知っているのだろうか、との僅かな疑問を抱きながら。

＋＋＋

天幕を張ってそこで休憩をしていた旅の一座は、大陸中を移動して珍しいものを売り買いしている商人だと言う。天幕の中には珍しい匂いのする香辛料らしきものや織物などが大量に積まれている。それを見れば成る程とアイアンバッハは得心がいったようだった。

そのお陰で大量の水や食料を持ってこのディーヤ砂漠にいたようで、親切にも王女達一行に水と食料を分けてくれたのだろう。まさに天の助けだとアイアンバッハは感動屋らしく、涙すら浮かべて言うのだ。

「た、助かります！」

アイアンバッハは礼を述べると王女の口に先ずそれを運んでやった。

「アッシュ、水ですよ。お待ちかねの水です。ゆっくり飲んでくださいね……」

「ん……んん……」

意識が途切れていた王女も、アイアンバッハに水を口元に運ばれて漸く目が覚めたらしい。目覚めた途端に猛然と水を小さな唇で吸い込んでいくのを見て、アイアンバッハは自分も出された水に手を

つけ始めた。アイアンバッハも喉が渇いていたのを可也我慢していたらしく、飲み干す早さは凄まじいものだった。

ただ一人、ゆっくりと静かに出されたそれに口をつけているのはメルヴィルだ。胃を壊すからゆっくり飲みなさいと言いながら、少し口をつけては離し、少しつけては離しとしている。

それを満足そうな笑みを浮かべてみている商人達の姿を横目で気づかれぬように眺めながら。

王女は全てを飲みほしたところで気が付いた。なんだか水の味が奇妙なことに。

いいや、それどころか匂いも何かおかしい気がする。

ひくりと鼻をうごめかし、杯に残った水の匂いを嗅ぐ仕草をして――としたところで手から大きな椀が零れ落ちた。

カランと音を立てて落ちていくそれを、王女はほとんど身動きらしいものも出来ずに聞いていた。

そして直ぐに思い至ったのだ。商人達が王女達をはめたのだと。

「み……ずに、何……混ぜ……？」

商人たちはそれには答えず、ただにっこりと笑みを見せているだけだ。それが益々不気味さに拍車をかける。

なんてことだと王女は指を動かそうと粘ってみるも無駄だった。指を動かすどころか、小刻みな震え程度もしなくなった自分の身体に王女は絶望すらした。

完全に身体の動きどころか、生理的な動きまで止められてしまうとは、相当な猛毒を盛られたに違いない。とすると、背丈の差など関係なく、あのアイアンバッハの巨躯でさえ、直ぐに全身にきいている可能性もあるのだ。

だとすれば、それは最早三人共に何の迷いも無く水を飲んでしまっていれば、完全に詰みであるということだ。

くそっ！！喉が渇いて感覚が鈍っていなければこんなことになんて……！

そうは考えても後の祭りである。

王女はばさりと音を立てて地面に倒れ落ちると、吐息が微かに聞こえ気がついたのだが、真っ先に倒れていたらしいアイアンバッハの頭が目鼻の先にあり、ぎょっとした。

正直な話し、従者ならばそれ相応にはなってくれとは思うのだが、如何せんこうしたところで毎回毎回アイアンバッハは期待を悪い意味で裏切らない。

そこは「嫌な予感がしたため、杯に口はつけましたが飲みませんでした！」とか言える様な、素敵に出来る従者であればなあと思うのだが、王女がそのように願ってみても、アイアンバッハはそうまでここぞと言う時に決められるような出来る子ではなかった。むしろ良い感じに引っ掛かる男だった。

真っ先に寝てんのかいと思いつつも王女は頭だけは動くため、それで周囲の気配を探ればどうにもおかしい。

メルヴィルが……いない――！？

＋＋＋

王女は檻の中に入れられ、ぐるるぎゅるうう……と腹を鳴らしつつ、商人達の知らない言語――王女達の元来た国の言語で喚き散らし始めた。

「メルヴィルがいねえええええええええええ！！なんっでいねえんだよ！？おいこら！アイアンバッハ、答えろ！」

するとアイアンバッハも数十年ぶりですと感慨深げに答えながらも元の国の言語を操り、語りだす。
それは、信じがたい事実だった。

「逃げたようですね。私達を置いて……」
「普通逃げなくねえ？だって俺いないと話しになんないのに？それっておかしくない？」
「切り捨てられたんじゃないですかね。私が水を飲んで倒れた際、視界の端で『いいのですかと私は再三念を押すように尋ねましたからね』と……言われましたし」

たぶん呆れられたんでしょうと大きな身体を震わせてぐすぐすと啜り泣くアイアンバッハに王女は若干引き気味だ。
薬の効果と空腹も相まって、王女だけではなく、アイアンバッハも瀕死の重傷であるため、檻をぶち壊して逃げるわけにもいかず、大人しく（実際は全然大人しくなくて、檻に噛みついたり蹴っ飛ばしたり体当たりしたりと忙しないが）鎖に巻かれて憮然とした面持ちでいたわけなのだが、メルヴィルが王女の手持ちの荷物だけではなくて、アイアンバッハの手持ちの荷物まで、どのようにしてなのか持って煙のようにかき消えてしまったのだという。それには商人達も驚き、慌てて周囲の捜索に乗り出したものの、メルヴィルの痕跡は何一つ見つけられなかったのだという。
何とも言えないが、本当にこれこそ正直な話しだが、アイアンバッハよりも余程役に立ちそうな部下だと思ったのは王女の心の中だけの話である。というよりもそんな言葉を口に出したら最後、アイアンバッハが首を括りかねないので流石に言えない。
王女は腕や首にかけられた大きな鎖をぎりぎりと手の中で擦り合わせて鳴らすと、消えたメルヴィルへ向けて呪詛を放った。

「ぜってえ殺す……後で覚えてろメルヴィルのくそ野郎……ただじゃおかねえ……」

たとえどんなにか役に立とうとも、その所業に腹立たしく感じるには変わりない。

「いっ……うわ、切った……」

かさついた唇の奥から血が滲んでくる。

喉の奥が切れたらしい。

「アッシュ……」

「平気だ。それよりお前は大丈夫なんだろうな？」

「ええ。まだ身体の自由がききませんが……それ以外は特に問題もなく」

「なら、いい。兎に角休もう。……何かやるにしても、もう体力なんてないからな……やるなら起きてから……だな。休める時に休む。これは鉄則だろう？」

「ええ。……なんだか不謹慎かもしれませんが、久々に監視のいない夜なので、不思議に落ち着きます」

ようやっと王女と二人きりである実感がわいてきたのか、メルヴィルというお目付け役のいない夜であることに気付いたアイアンバッハは、こんな時だと言うのに王女にふわりと笑いかけた。

王女には、それが見えたわけでもないのに、それを受けて嬉しそうに笑うのだ。

「確かにそうに違いない」

「昔に戻ったようですねえ」

「ああ。なんだか妙だが、羽を伸ばすって言うだろ？ああいうの、

今回のでようやく分かった。不思議だけどな」

からからと笑っていれば、ふいに何か感じたのか、王女は何の前触れもなしにぶるりと身震いした。

突然のことでアイアンバッハは王女にどうかしたかと尋ねて見せた。

「どうしましたか？」

「……いや、なんだろ、冷えてきたな。外はもう……夜か？」

小さく王女が吐く息は白さを帯びている。砂漠は日中と夜間の温度差が激しい所があるが、エッレミアーラの砂漠も例にもれず、夜間には氷点下の凍えるような寒さの世界になる。

「ああ……そういえば防寒具もすべてメルヴィルが持っていった荷物の中でしたね」

思い出したように言われれば、王女が檻をがんと腹立ちまぎれに蹴り飛ばす。

「くそ！檻に入れるくらいだ、あいつらは俺達のこと死なせるつもりがないんだろ？だったらせめて食事くらい寄越せっつーの！」

檻の中に毒を盛って転がしておくだけと言うのは、あまりにもぞんざいな扱いである。

更には最初の毒入りの水以外、何一つ出されることはないのだ。

食事も無い、防寒具も無いでは流石に凍えて死にそうだ。せめてどっちかでいいから寄越せと喚く王女にアイアンバッハは何かを思いついたのか、王女を呼んだ。

「アッシュ、とりあえずこちらにいらっしゃいなさい」

おいでおいでとアイアンバッハが手招くのがまるで見えるようだと思うが、嫌なことにその妙にてかてかとした笑みすらも見えてくるようだった。

先ほどまでとはまた違う、別の寒気を感じると、王女は慎重に尋ねた。

「それはあれか、雪山の法則か？」

心底嫌そうにアイアンバッハを見つめると、王女は僅かに距離を取った。とはいえ檻の中であるため、そう動けもしないのだが。

「しょうがないじゃないですか、防寒になりそうなものがないんですから。私はともかくも、あなたの体格だと凍死確実でしょう。さあいらっしゃい」

一晩過ごせるような体力もまともに残っているわけでもないだろうと言われるが、王女が身体は元のままだと鼻を鳴らして告げるのだ。

「別に問題ない。雪山は俺の庭だ。それにな、弱って見えたほうがいいんじゃないか？」

確実に自分達は売られるだろう。だが、売り物が弱っていたら相手はどうするだろうか。

王女はにやりと笑ってそう告げると、アイアンバッハがこれまた笑って言うのだ。

「なるほど、ではそういたしましょうか」

二人はそのまま距離を置いて檻の冷たい床の上で寝てしまった。
檻の中に入れられているのに楽しそうに笑うなどと奇妙なと、商人達が不気味に思いながらも、二人はそんなことに気づきもしない。
そうして二人はオルキスを出立してから十三日目の晩を、ディーヤ砂漠のど真ん中の檻の中で過ごす事になったのであった。

「さて、では私は私で動くとしますか……」

砂の山から望遠鏡を使い彼ら二人の動向をじっと窺っていたメルヴィルがばさりと外套をはためかすと、そのまま身一つで商人たちの向かう方向とは別の方向へと向かいだした。
メルヴィルが向かったのはエッレミアーラの首都、フーチャルだった。

「にしても本当に……香水臭い、嫌な国です」

6（見捨てられました）（後書き）

メルヴィル＝出来る子

アイアンバッハ＝残念な子

王女＝更に残念な子

シーヴェス＝……ざんね、おや誰かきたようｄ（ｒｙ

7（リニムの幼き魔女）

眠っている間に嫌な夢を見た。
それはシーヴェスとのちょっとした悶着を夢の中で再現しただけなのだが、その酷い内容に王女は暫しうなされることになった。
それは食事の仕方の採点をしてやると言われ、シーヴェスも臨席した夕食の席でのことだ。王女は出されたパイの中身に、こんな余計なひと言を告げてしまったのだ。

「いいね、ブルーベリーか。宝石みたいに綺麗だよな」

きらきらとしていてあれは美しいと、何の気なしに口にしてしまったのだ。
背後に控えていたミシェルがぎくりとしたが、王女に何か言いだす前にメルヴィルから止められてしまった。
冷たい目でメルヴィルが下がれと目で命じるのを青い顔で一歩下がるとそのまま跪く。目の前でシーヴェスににこやかな笑みを浮かべて弾んだ声で美味いかと尋ねられているのが、何故か嫌な予感しかしない。
シーヴェスは上機嫌な王女を見ながら、自分の分もどうだとすすめてみせた。すると王女はこれに更に機嫌を良くすると、快く譲ってくれたパイを受け取り、珍しくもにっくきシーヴェス相手に、ありがとうと礼まで述べて見せたのだ。

「お前良い奴だなあ～」
「それほどでもないが、……お前は本当に甘いものに目がないなあ」
「美味しいじゃないか。これを味わわない奴なんて、人生損してるに違いないな」

もぐもぐと早速一つ目のパイを攻略にかかりながら言う王女に、シーヴェスは苦笑気味だ。
シーヴェスは、更に王女の好みそうな話題として振ってみる。
「そう言えば、リニムには甘味があまりないと聞いたが……本当か？」
「ほんとほんと。なんもなくて逆に焦った」
そもそもおやつという、甘味を食べる習慣そのものが無かったのだが、今から考えてみれば、あれは王家のみのものだったのか、それとも王女が込められていた選王宮のみのものだったのか、とも思うわけで——実際のところはよく分からなかった。
王女が首を傾げていれば、シーヴェスは更に尋ねてみた。
「誇張でもなくか？」
「いやいや、本当だって。向こうにも低木が生えてて結構木の実は目にしたもんだが、こういった甘いもんだけは出されなかったんだ。ってもまあ、選王宮のみかも分からないが……でも、どっちにしろ向こうじゃ俺は食べた事が無かったよ」
どこか郷愁を滲ませて語る王女に、シーヴェスは些か同情したようだ。それがどのような実であったのかを尋ねてきた。
「同じような実があれば、今食べているもののように料理して出してやることも出来るぞ？どんな実だ？思い出せないか？」
いつになくシーヴェスが優しくしてくれるため、連日の疲れの反動から王女はついついぽろりと零してしまったのだ。
目が見えないのであれば、知りえるはずのない情報を。

「んーっと……林檎と桃があってすっごく美味そうだったんだけど、農家の人のだって聞いたから触れずじまいだったしなあ。いい匂いさせやがってあいつら……くそう。真っ赤になってて超熟れ熟れだったんだぜ？あああああ、林檎！林檎！想像したら食べたくなってきた！！」

「林檎か……オルキスにもあったな。少々傾斜がきつい場所に、真っ赤な林檎を鈴なりに枝にならしている木があった。桃は……そうだな、交易品で入ってきていただろうから、それで何か作らせよう。他にはないか？」

「うんとねえ、林檎に桃もそうだけど、うーん……後は向こうで見たのだと、葡萄か？」

王女が首を捻って出した答えにシーヴェスは葡萄と言えば色も多岐に渡るだろうと言う。すると王女は指を弾いてこう返してきた。

「まっ黒に照り光るような大粒のと、赤くて綺麗なルビーみたいな丸っこいの。それと細長いのと丸っこいのとある、緑色したのとで三種類あった」

三種類がリニムに生えていたやつだと言われれば、シーヴェスは片肘を行儀悪くもテーブルにつくと、作った拳の上に顎を乗せてこう言った。

「なるほど、矢張りお前……目が見えているな？」

「……あ」

ミシェルは伏せた顔を真っ青にしてがくがくと床の上で片膝をついて震えている。そしてややも遅れたかもしれないが、王女も顔を青くすると、やってしまったとばかりに、からりとナイフを落とした。

シーヴェスは諳うように軽やかに告げた。
それは、今だ戦場に語り継がれる魔女の伝説だった。

「――なんでもその魔女は、人によっては大女だとか小さな妖魔だとか言われてるんだが、共通するのは血化粧を纏って舞踏を舞うところなんだよな。それだけはぶれない。剣を二本携えて舞うのは死の舞い。背丈は分からないまでも、前線で見たものは魔女の歳を老婆とは誰も言わない。むしろ美しい娘だと言う……」

王女はシーヴェスから顔を背けると握ったフォークを置いて、無言で皿を見つめ出した。突き刺さる視線が痛いほどだ。

「上手く、切り抜けたもんだよな？」

何を、とは言わせては貰えなかった。
シーヴェスは目をきつく絞り込むと、王女を険しい目で見つめ、言った。

「どうやって医者の目を誤魔化した。生まれながらの全盲だと、どうやれば思いこませられたんだ？答えろ、ルクレティアナ」

シーヴェスは王女にかけられた呪いの首輪に反応する、名を呼ぶと、王女の首に鋭い痛みが走った。
突如として首がぐっと締まったのだ。

「かっ……」

辛さに天を見上げる様にして王女は胸を掻き毟る。
それを見てもシーヴェスは手を緩めようとはしなかった。相手は齢五つの童女だと言うのに、酷いものだと言うものもいるかもしれ

ないが、シーヴェスはそんな勝手なことを告げる者たちに言いたかった。

リニムの魔女を前にしても、そんなことを言えるのかと。

連合軍の兵士をどれだけの数、血祭りにあげたことだろうか。彼女はまさしく生きた伝説だった。それがまさか、こんな小さな童女だとは誰も思うまい。

どこにどんな力を隠し持っているか分かったものではないと、シーヴェスは気を緩めることなく追及していく。

「答えろ、ルクレティアナ」

「……ぐっ、い……いぎっ」

とうとう泡を吹き出し始めた王女を見て、ミシェルがその場から、弾かれるようにして叫ぶ。それは、切り捨てられるのも覚悟の上での行為だった。

「王女殿下は本当に、本当に目が見えないのです！！」

だがその言葉にシーヴェスは冷たい目をくれるだけだ。

ミシェルは尚も叫ぶ。

「リニムの魔女は、王女殿下です！ですが……本当に、目が、見えては……いないのです……」

ミシェルの言葉にシーヴェスは漸く聞く耳を持つ気になったらしい。

王女が首の締め付けに意識を手放したのを視界の端に捉えると、ぶるぶると震えながらシーヴェスを恐ろしげに見つめるその目を、シーヴェスは詰まらなさそうに見据えると、すっと目を細め、子細すべて漏らさず告げろと伝えた。虚偽を伝えればどうなるかは、明

白だった。

弟の存在は元から知られていたわけだが、そこまでの魔力を秘めているとは考えられていなかったらしい。

更には王女の魔力量もそこまでとは考えられていなかったらしく、驚かれたのはもとよりも、予期してはいたことだったが、矢張り、こう命じられた。

「もう一度魔女化は出来ないのか？」

進化の形みたいに言うなとは思ってみても、シーヴェスからすればそんなものなのかもしれない。

王女は首を振り、ついで端的にだが答えた。

「無理だ。干渉を起こす事の出来るだけの魔力を秘めた人間を、俺は知らない」

「……となると、お前、相当魔力が高いのか？」

「……」

これには答えなかったものの、今更ながらにシーヴェスは納得したようである。

「確かにそうだな、良く考えてみれば分かることだ。アンセムがあまでも深い催眠状態から今も目覚めないままなのは、お前の魔力が桁はずれという意味なんだろうな。納得が言ったと言えばいいのだろうが……魔女が居ると言うのに、これを戦力としてあてに出来ないというのが辛いところだな」

「戦力って……」

一応は降伏はしたものの、それでも戦力としてあてにすべきではない相手であることは、どちらもが十二分に承知しているものと考えていただけに、王女は呆気に取られてしまった。

だが、シーヴェスはそんなことにはお構いなしに続けるのだ。

「魔力干渉が無い限り、お前は魔女にはなれないのだろうしな……勿体無いものだ。弟がせめて生きていてくれればな……」

「……」

連合軍めと告げるシーヴェスに、王女は首をふいと背けてしまった。

それで納得してくれたのであれば、これ以上は言う必要は無いということだからだ。

だがしかし、次の日から待っていたのはシーヴェスの更なる勉強地獄だった。

「リニムの魔女ともなりますと、矢張り魔力も桁はずれでしょうから、魔力を使った特訓も勉強の中に組み入れさせていただきたいと思います。矢張り勿体無いですしね。使わないと魔力も腐る一方でしょうから。私に深く感謝してくださいね。それと行儀作法、他国の言語。読み書きは仕方ないとしても全て原住民と間違われる程度までの水準を希望します。そして舞踏ですが――」

これをメルヴィルから聞かせられた王女はと言うと、一拍置いてから、こう叫ぶのだった。

「お……お、鬼ぃいいいいいいいいいいいっ！！」

「煩いですねえ。まだまだ教育すべきことが山ほどあるのですから、

これくらいで驚いていてどうしますか」

「まだあるのかよ！！」

こうして無茶な教育期間は更に続くよどこまでも。

7（リニムの幼き魔女）（後書き）

ばれた上に扱きが一段と厳しくなった話し
秘密を黙っているとオルキスでの扱いは更に酷くなるよどこまでも

8（奴隷商人との交渉）

王女は翌朝、夢のお蔭様で最悪の気分で目が覚めた。そしてアイアンバッハ共々、奴隷闇市で競りにかけられることになったのだが、それが幸運にも延期されることになった。理由はと言えば大変お粗末なもので――

だんと足の歪んだ粗末なテーブルを叩きつけると男は叫ぶ。

「こんな上玉をみすみす売る機会を逃しやがって！！てめえら馬鹿じゃねえのか！ああ？！」

上玉、と言われたのは言わずもがな王女とアイアンバッハのことである。

見目の点で王女を高く売れると踏んだ男は、意外や意外にも、アイアンバッハにも可也の値がつくと考えた。

だがしかし、部下の不始末により、この二人が売り物になりそうもないときたから大変である。男の不興を買った部下は鞭で打たれ、こん棒で殴られ、原形も留めないほどに酷い顔形に成り果てていた。

血の匂いや凄まじい打撃音が響く中、王女は夢見の悪さもあり内心「素晴らしいよ君、もっとやりたまえ」などと考えてはいたが、実際はシーヴェスなどには演技過剰と言われかねないほどに、うんうんと呻いては檻の中でか弱くも正しい病人を演じ、伏せっていた。その様は、実に正しい病人のありかたであると言えよう。

アイアンバッハもこの例に倣い、なるべく病人に見せるためとふうふうと荒い息を吐き出しながらも呻いている。

演技でなければ分からないでもない二人のこの状態に、男が怒り狂うのも無理はなかった。

王女達を捉えた者達は、言わば奴隷商人である。そして今日は奴隷市が開催される日の中でも、もっとも盛り上がりを見せる日――

奴隷闇市の日だったのだ。
男が特に目玉らしき商品も手に入らなかった中でひょんなことから巡り合った王女達に、諸手を挙げて歓迎したのは商人としては当たり前の行動だったかもしれない。
だが、それを叩きつぶしたのは男の部下だった。
部下達は王女達を捕らえたと同時に、水や食料をけちり、与えなかった。更には呆れることに防寒具も自らが寒いからと薄布一枚も渡さなかったというのだ。
確かに昨晩は異常なほどに冷え込みはした。だが、だからと言って奴隷の管理を怠るのは、奴隷商人の端くれとしてなんと恥ずかしいことだろうかと男は腸が煮えくりかえる思いだった。
どうせ直ぐに売りに出してしまうからと、商品の管理を怠った部下に、男が怒り狂うのは当たり前のことだった。

「馬鹿か！！闇市は今日だってんだぞ！？ああ！？てめえら殺されてえのか！！」

何度ぶたれたのだろうか、ざまあみろとは思っていたが、いい加減に部下の悲鳴も聞きあきたところだった。
王女は男に苦しい息の下、喘ぎつつも言い募る。

「ご、後生ですから……命だけは御助けを……なんでも、しますから」

情けを請う美しい少女を前にして、男は一応は部下の仕事を認めてやる気が起きたようだ。
男は王女の前にしゃがみこむと、檻の中を覗き込み、顔を嫌らしげに歪めて笑う。

「ふん。こりゃあほんとに上玉だ。なりからしてお前オルキスの娘

だろう。ゲルン・オルキス語じゃあなく、ロ・アリィ語が使えるのか？他には何が使える？え？」

男は王女の入れられた檻の傍にしゃがみこむと、先ほどまで部下を叩いていた鞭の先を檻の中へと差し入れ王女の顎をついと持ちあげて見せた。

王女は毒の混入により、視線が定まらないのか、鳶色の瞳をゆらゆらと揺らしながら男の問いに答えた。その息は今も荒く、辛そうだ。

「ゲルン・オルキス、ロ・アリィ・スーリア……あと、ハルディンも……日常会話、程度……でしたら……使えます」

辛そうに口を開いている王女に向けて、男が更に檻の中に腕を突っ込み自らにその幼い肢体を引き寄せようとすれば、アイアンバッハが触れるなと叫んだ。

先ほどまで王女よりも静かに横たわり、息も細切れにしかしていなかったため、男はアイアンバッハの存在を忘れていたようだ。

おお、粋がいいじゃないかと嬉しそうにしていれば、アイアンバッハはぎりぎりと歯をすり減るほどに鳴らし、更に叫ぶ。

「お嬢様に、触れるな！！」

この言葉に男は更に相好を崩して弾む声で言うのだ。

「おうおうおう、なんだ、お前さんはこのお嬢ちゃんの護衛兵か何かか？んで、も一人の護衛兵にとんずらこかれたってわけかい？笑えるねえ」

「黙れ！！」

叫ぶアイアンバッハを放り、男は王女に尋ねた。

「お嬢ちゃんよ、お前、護衛兵二人も連れてたなんてどこのいいとこの娘さんだよ？え？オルキスからのなまりが強いってことは、オルキスの大商人の娘かなんかか？」

「あうっ！！」

ぐいと男は王女の髪をひと房掴むと上に引き上げた。その拍子に王女の体は檻の支柱に勢いよくぶつかると、派手な音を蹴立てて倒れた。痛いと叫んで王女は、思う通りに動かない身体で掴みあげられた髪を少しでも緩くしようと何とか起きあがるが、それでも辛そうだ。

そんな王女を見て、アイアンバッハも気が気ではないらしく、止めろとしきりに叫んでいるが、彼自身、毒がきいているのか何も出来ないようだ。

「お嬢様はお前の言う通り、大商人の娘様だ！オルキスまで連絡すればいい！身代金でもなんでも、旦那様はいくらでも払ってくださるだろう！それが狙いなのだろう！？」

アイアンバッハは男にそう言ったが、男はにやにやと王女を檻の中で吊り下げたままにアイアンバッハを見下ろしているだけで、何も言葉を返そうとはしなかった。

不気味に感じたものの、アイアンバッハが持てる札はこれだけだ。檻の柱を掴みながらぎりぎりと睨みつけるもどうすることも出来なかった。

「さあて、そいつはそいつで魅力的ではあるんだがあー……どうしたもんかね。身代金と売買価格、どっちが上かときたもんだが……」

男はアイアンバッハにさてお前の主はいくらまで出せるのだと、足元を見てきたのだ。

この期に及んでとは思ったものの、無事に主の大切な娘を連れ出さねばならないと、アイアンバッハは力を入れて叫ぶ。正確にはそう見えるよう奮闘した。

「金貨五百枚」

単なる護衛兵士の分際でそこまでをぽんと言って退けると言うことは、実際はもっと出せる余力があるということだろう。そう見た男は更に出せと値を吊り上げにかかった。

「足りんよ。もっと出せるだろう？」

「ぐっ……ならば、金貨、七百枚……くらいだったら、なんとか旦那様も」

それくらいならばいけるかいけないかと、判断に多少困る程度で七百枚と言う大金が出てきたかと男は大いに喜んだ。けれど、まだまだ絞り取れると踏んだのか、男は更に値を吊り上げた。

「いいか？このお嬢ちゃんはそんじょそこらの比じゃねえ上玉だ。天井知らずで破格の値がつくと俺は踏んでる。そこに金貨をたったの七百枚だあ？……んなもん、はしたがねじゃねえか！！」

そう言われてしまってはアイアンバッハも乗るしかない。

「金貨二千枚！！こ、これ以上はびた一文……出せん！！」

震えながらそう叫ぶアイアンバッハに、男はにやりと笑い、ならば良しと告げた。

その台詞に一瞬、アイアンバッハは何が起こったのか分からなかったが、王女を返して貰えるということかと安堵の表情を浮かべた瞬間のことだ。男は一瞬にして奈落のそこに突き落とすような台詞を出してきた。

「何喜んでんだマゾ野郎。お嬢ちゃんは競りにこのままかけんだよお。勿論、てめえもな。ひゃっひゃっひゃっひゃ、ひゃあーっはっはぁあ！」

最初から男は二人を競りにかけるつもりだったのだ。だと言うのに先ほどの質問は一体何だったというのだろうか。

期待をさせるだけさせて、絶望の淵から更に突き落とすようにしてみせる。

あまりにも惨いその仕打ちに、アイアンバッハは絶望一色に顔を染め上げていくのだった。

＋＋＋

元からこのまま解放されるわけはないと踏んでみたが、予想以上にいい方向に行きそうだった。

天幕の中のひと際奥まった檻の中に入れられると、王女の脇の檻に矢張りアイアンバッハが運ばれてきて、無造作に放り投げ入れられたのを感じれば、あれをよく動かせたなと関心を抱いた。だが、どうやらアイアンバッハが多少力を入れて補助をしていた、と言うのが実際のところらしい。あの巨体を持ち運べる人間など、この天幕にはいるはずもないかと王女は嘆息をついた。

実際は王女との元からの打ち合わせ通りにしたとはいえ、それでもあれは実際、可也悔しかったと臍を噛みながら言われれば、王女

は苦笑した。

「何言ってんだ。にしても、演技お疲れい。中々に迫真の演技だったぞお前」

「はあ……まあ、有難うございます」

半分は本当に焦っていたので、あながち演技とも言えない所もあるためなんとも素直に喜べない。

「これで後は可也の高官に売られればめっけもんなんだが……」

「確かにそうですが、これは一歩間違えば売られるどころか大商人を連れて来いと言われるところじゃありませんか？」

「んー……まあそこは賭けではあったけど、実際に俺もお前も、もっと高値がつくのは予想してたからなあ。と言っても？確率は無いとは言い切れなかったから、ほんとに助かったな。相手ががめつくてさ」

なんと行き当たりばったりなことかと思ってみても仕方ないのか。アイアンバッハはがくりと床に肩を落として倒れこむと、王女がからからと笑うのだ。

「ま、結果はこれからだ。楽しみだろ？」

「私は不安しかありませんよ……」

アイアンバッハは深いため息をつくのだった。

8（奴隷商人との交渉）（後書き）

最初から逃がすつもりがないのにいたぶれるところでいたぶる商人

9（奴隷市、開催）

奴隷闇市には出されなかったものの、二人はあれから体調が整うまで数日置かれ、その後この砂漠のど真ん中でたらいで作った即席の浴室に通された。

浴室といっても、そこは砂漠という場所柄もあり、単なる天幕なのだが。

「え……水は貴重なのではないのですか？」

一応は十一歳の少女で温室育ちの商家の娘という設定上は、丁寧な受け答えをせねばならないとやってはみたものの、これがまた、予想以上に面倒くさい。

しかも何をどう間違ったというのか、目が見えるふりをしろとはこのエッレミアーラ国内に潜入した時から言われてきたことだったが、それはあまりにも過酷な話しだ。

随分と目が見えていないことに慣れているためか、見える演技と言われても、中々に難しいものがある。それどころか一般的な少女を装い、潜入しろとの達しである。なまなかな気持ちでは出来ない話しだった。

檻から出され、手枷足枷をされて出される時にアイアンバッハとさあ演技開始だと頷きあったがいいものの、少しでも気持ちがぶれれば気取られるやもしれない。そう思うだけでも精神が摩耗しそうで辛いものがある。

布を一枚隔てた向こうで王女とアイアンバッハは生まれたての姿でいるわけなのだが、流石に恥じらいくらいは見せねばと、もじくさとしてみたが、王女の実年齢が実年齢であるためか、内心「素っ裸の何がいけないんかね？」とすら思っていた。といっても、直に見られている人間が異性――王女の現在の性別を考えれば同性なの

だが――ということもあってか、妙に具合が悪いのもあるのだが。
震えながら王女がそう言うと、商人たちはにたにたと薄気味の悪い笑みを浮かべながら二人を風呂の中に無理やり落とし込むようにしてくるのだ。

「なっにをっ！！」

石鹸水の熱い湯の張られたたらいに突然押し込まれ、王女もアイアンバッハも戸惑いどころか恐怖すら瞬時にわいてきた。けれど彼らは口を開けていいと言うまで開けるんじゃないと、笑みを浮かべているのに、その笑みとは裏腹に、その口調は実に冷たく返してくるのだ。

「お前らは商品なんだよ、少しは黙っていられないってのかい？」

あまりにも甲高い声できーきー喚くものだから煩いと告げるのは、王女を手荒くごしごしと、皮膚ごとすりおろす勢いで洗いあげてくる女商人だ。
このドへたくそがと叫びたく思うが、今逆らって話しがとん挫してもと思うと成すがままになるしかないかと王女は腹をくくったようだ。呻きながらも未成熟な身体を洗われることを渋々ながらも許したらしい。

「大体お前らがいけないんだ。あれくらいで熱なんてあげるから……だから親分に俺達まで……さあ、全身綺麗に磨き上げてやるから黙っていろ。俺の気が変わって、そのそっ首に手をかけないうちにな」

アイアンバッハに取りついた男商人達はその逞しい背中や腕などをわしわしと洗いあげていくと、そのまま髪を洗い――何を考えた

のか香油まで擦りこみ始めたのだ。それは王女にも同じことをするようで、女商人の手から思わず逃れようと身をよじれば、王女に鋭い鞭うつような一言が飛んできた。

「身動きなんてするんじゃないよ！殺されたいのかい！？」

思わずびくりと腰を浮かすようにしてたらいの上で身動きを止めてしまうと、女商人たちは王女をたらいの湯の中に、何を思ったのか頭を掴むと顔を思い切り突っ込んだ。

「んぶぶっ！」

「あんたの、所為でえっ！！奴隷の分際でっ！このっ、このおっ！！」

アイアンバッハが良く見れば、男の商人たちにも、王女を痛めつけている女の商人にも、身体中いたるところに打撲痕が見てとれた。恐らく王女達のことを咎められ、あの日あれから折檻をされたのだろう。使えぬ部下どもめと殴る音が未だに耳から離れない。

王女が水に押し付けられているのを、アイアンバッハとて黙って見ていたわけではない。

王女を助けようと身を捩り、助けに行こうとしたのだ。

だがしかし、男商人達が刃ものをつきつけてくるため、それ以上身動きすることも出来ず、悔しげに顔を歪めることしか出来ない。

実を言えばこんな枷など少し力を入れれば直ぐに砕けるようなものだった。だが、二人ともそんなことはしなかった。してしまったが最後、今こうして囚われていることの意味がなくなってしまうからだ。

だから今は、どんなにか屈辱的なことでも、耐えるしかなかった。

「ぷあっ！もっ、助けっ」

「まだだよ！もっと苦しみな！」

女商人が王女にまだまだ折檻を続けようとしたところで、年かさの女が浴室として設けられた天幕に入ってきた。

そして目の前に広がる光景を見て息を飲むと同時に、お止めと女商人に向かって大喝した。

「あの、こ、これは」

「言いわけをするんじゃないよ！あんたは……全く懲りてないようだね。前に奴隷を殺して死ぬほど殴られたってのに、それでも懲りないなんて、馬鹿じゃないのかい？ほら、その娘を私に寄越すんだ。もうあんたには任せておけない」

「い、いえ……そんな……」

女商人は年かさの女に向かって縋るように必死な声を出すも、年かさの女はそれに返す言葉もないのか、無言だ。女商人はそれ以上はそこに居続けようとはしなかった。居ても無駄だと分かっていたのだ。

王女は年かさの女に優しく身体中を清められていくと、張りのある肌を褒めそやされ、更にはその美しい瞳と揃いの鳶色の美しい髪も極上品だと我がことのように喜ばれた。

ここは一般的なこの年代の娘の場合、どんな反応を返すべきかなどと考えてみて、王女はふと嫌な思考に辿りつく。

「あの～……これってもしかして、売り物を着飾っている、とか？」

まさかのまさかだよなと思っていれば年かさの女はそりゃそうだと言い、美しい蜜色の肌に香油を擦りこんでいく。

「あんたとあの男は最後の目玉として出すんだからね、そりゃもう

着飾っておかにゃあならんよ。綺麗にして出してやるから安心しな」

全くこの言葉に安心出来ないのだが、致し方なしと王女はさりげに妨害しつつも大人しく着飾らせるのであった。

＋＋＋

真っ青な顔で奴隷市に並ぶ奴隷たちは皆一様に笑みを設けられたステージの上から称えている。それは何故か、答えは簡単だった。皆自分を少しでもいい条件の主を持とうと売り込むために頑張っている。

少しでもいい主の元に置きたくて必死なのだ。

そんな中最後のお取りとして出されたのが、蜜色の肌を持った極上の美しい少女なのだから全員がむっとするのも頷けるだろう。

確実にあいつは一番いいところに貰われていくに違いない、誰もがそう確信していた。だからこそ、同じ奴隷として売られることになっている者達からも、王女もアイアンバッハも、あまりにも冷たい目で見られることになったのだ。

おずおずとステージの中央に鎖を引かれるままに連れて来られたのは鳶色の瞳と、これまた同じく鳶色の髪を持った美少女だ。歳の頃は十二、三といったところか。これからの成長が実に楽しみな美少女だった。

肌は南方の血が混じっているのか、糖蜜をとろりと垂らしたように、甘い匂いがぷんと香ってきそうなほどの美しい飴色をした肌を持ち、その張りは子供特有のぷるんとした、弾くようなみずみずしさだ。

目鼻立ちどころか、その教養の高さをも褒めそやし、商人たちは王女を高値で売りさばくべく最初の値を金貨五百枚からをつけるのだった。

金貨、五百枚!?

そう聞いた途端、王女が考えたこととは「おいちょっと待て、安すぎはしませんか!?」だった。何と言うか……あほである。

すぐ脇の隣のステージでは男の奴隷たちが競りにかけられているわけなのだが、王女と同じく、そこに立っているのは取りを務めるアイアンバッハだ。

「さ～あ、お立会い。この男、さる大商人のところの護衛兵士だった男だよ～。見て貰えれば分かるはずだが、このなめし革のような張りの腕を見ておくれ！樽を抱えてるような腕の太さもさることながら、この張り！まだぴっちぴちだ！あと何十年だって働ける！どうせ買うなら若くて強い護衛兵士としての奴隷はどうです？さ～あ、まずは金貨七百枚からだよー！」

これには思わず

「おいちょっと舐めんなよ？こちとら王女だぞこんにゃろう。ついでに言えば向こうの世界でもアイアンバッハには負けた事が無いのに何なのこの屈辱。元の世界では俺の方が女からキャーキャー言われたのに……」

と元来た国の言葉で突っ込みを入れてしまったのだが、良く考えてみれば今現在、アイアンバッハにきゃーきゃー言っているのは若い娘では無くて、脂ぎったおっさんどもだ。

「ならばまあよし」

良くないが。

１０（二人を買った謎の男）

「アッシュだって、脂ぎった年寄りばかり目の色を変えているじゃありませんか……」

先ほどの言葉が聞こえたらしいアイアンバッハの嘆きが耳に入ると、王女は若干顔を顰めて言うのだ。

「どうせなら、若くてぴちぴちしたお姉ちゃんがいい……」

見た目美しい少女でも、中身は健全な男である。健全な男と言うことは、当たり前だが綺麗なお姉さんが好きなのだ。否、たとえ中身が女でも脂ぎった男などにきゃーきゃー言われるのは断じて嬉しくはないだろうが。

「私もです……」

おっさんばっかりでなんだろう、死にたかった。

必死になって「わしは金貨二千枚じゃー！」などと叫ぶ老人を見ていると、本気で殺意が湧くのだが、もうそろそろ死にそうな爺さんにそれはないかと思いとどまる。だってとどめになっちゃうじゃありませんか。

ああなんて俺ってば優しいんだろうか。

優しいついでに何故か思い出したのだが、

「俺、昔なんだけど、一度夢見た事があるんだ……」

「なんですか？」

この世界でたった二人しか通じない言語と言うのもいいものだと

感じながら、王女は続ける。

「美人なお姉さんに奴隷扱いされてみてーなーって」

王女が間違っても美しい少女の考えそうにないことを口走っていれば、アイアンバッハの側では金貨三千枚の値がついたようだ。

くそう、俺の側のひひ爺度も頑張れ。せめてアイアンバッハの倍の値段。

「ほほう。相手がおっさんになりますが、叶いそうで良かったじゃありませんか」

「……因みに奴隷がお姉さんに下剋上するまでが夢な。女王様をひいひい泣かせるまでが夢」

最低ですね、相変わらずと爽やかな笑顔でアイアンバッハが言うのを聞けば、そうかと王女は首を傾げる。平素から王女は人に……本当に酷いことをやってのけるが、あれこそが地であり、素なのだと、今更だが再認識させてもらった。

「おっさん相手に奮闘してみせてくださいよ、アッシュ」

ぽつりとこう返してみたが、王女はそれを受けると眉根を寄せて不機嫌そうな顔になった。

「何それ気色悪いんだけど……」

十一の美少女がそれを言う方が気色悪いとは、間違っても口に出せなかった。

おっさん連中が血の色を変えて値をつけていくのを、ある男が黙って見ていた。

「五千！！」
「五千三百！」
「六千！」

消して広くは無い奴隷市の人ごみの最後尾で段々と値段を刻み始めたのを見て、頃あいかと男は思うと、すっと腕を挙げて何気ない風を装い、告げた。

「その男とその子供、二人合わせて金貨二万だ」
「なんっ……！？」

一瞬にしてしんと奴隷市が静まりかえる。皆一斉に声の方を振り向いていく。

市を開いている商人が真っ先に我に返ったのか、他にはありませんかと買い付けにきた者達に尋ねるが、それ以上の金など、出せるはずも無かった。

王女はなんだこの異様な空気を持つ男はと思ったものの、何も出来ずにステージから鎖を引かれるままに引きずりおろされる。

「うん……矢張り似ているな。蜜色の肌に鳶色の髪と瞳。これならば旦那様も納得してくださるはずだ」
「何を言って……？」

王女の問いに答える口を持たないということか、男はこの場に居る商人全員に向けて告げる。

「今日私がここに来たことは他言無用だ。他言すれば……地の果て

までも追っていき、お前達を一人残らず根絶やしにしてくれる」
「そっ、そんなこと、致しませんとも！！」

買い付けに来た者達も同様だとぎろりと睨まれてしまえば、商人に奴隷買い付けの者たちにと、一様に震えあがった。
アイアンバッハと共に、王女は男に連れられ、奴隷市を後にするのだった。

＋＋＋

アイアンバッハは慎重に男を観察していく。
男の上背はアイアンバッハよりは可也低いが、低い、と言うほどではない。

ミシェル殿と同じくらいでしょうか？

ただしミシェルと違うのは、武骨な武人のような身体つきをしているということだろうが、あの商人達の中にいても浮かないようにと、その全身を商人の服で固めている。
だがその面にも決して卑しいところは見当たらない。
それどころか精悍な顔つきをしているとさえ言っていいだろうほどには凛々しい顔立ちをしていた。
万人に受ける美しい顔とは言えないが、それでも武人として相当のものであるとアイアンバッハが認めるほどには、それは凛々しい顔立ちなのだ。
はっきり言ってしまえば、この者は相当な武人であるだろうと思った。
ぶるりと身体を震わせると自然、頬の筋肉が持ちあがっていく。

武者震いだ。
それを目の前を鎖を引いて黙々と歩いていた男は敏感に感じ取ると、なんだ、し合ってみたいかと尋ねてきた。それはそれは楽しそうに。

「それはもう……と言いたいところですが、どうやら貴方は私共を奴隷として買ったようですし、そのようなこと、出来るはずも御座いませんでしょう？」
「ふん。つまらんな。……ま、とは言え、直ぐに武器を振りまわしては勝負と襲い掛かってくる方が問題でもあるか……」
男はつるりとした顎をなでやると、ふんと笑って先を急いだ。

「うぐっ！」

鎖を引かれて足をもつれさせると王女は砂地の上に不格好にも前のめりに倒れてしまう。そこで男は砂の上を非情にも、王女を引きずりながら砂で出来た小高い山の上まで連れて進む。慌ててアイアンバッハが続いていくも両手両足ともにこれである、中々思うように進まないのも仕方なかった。

「ま、待ってください！お嬢様をっ……立たせてあげてください！」
「……」

男は黙って進み続けたかと思えば、山の頂上までくるとぴたりと足を止めて二人を振りかえった。
そして王女を鎖で引いて立ちあがらせると、ちらと奴隷市が建つ方を見て、王女の鎖を更に引き寄せた。そして何をするかと思いきや、間近になった顔を男は、ぱんと派手な音を鳴らして叩いたのだ。

「……ッ！」
「なっ！！」

アイアンバッハも王女も声が出ない。
そしてそれは、奴隷市の者達も同様だった。
一番の上玉を、目が飛び出るほどの金額であっさり横から攫われたので、奴隷を買い損ねた人々はやる気なくそれぞれの情報交換をしていたのだが、その中の一人がふと気がついた。

「お、おい！あれ！」
「なんだ？」
「あれを見ろよ！月を背景にしたあの山を！あれ、さっき奴隷を二人買ったやつじゃないか？」

商人達が見れば、月を背景にした砂山の頂上に、影絵の如く見えるのは、先ほどの目玉商品である奴隷を颯爽と浚っていってしまった男と見える男が、小さな人影を派手に打ちすえていたところだった。何か奴隷がしたのだろうかと思ったところで気がつく。

「お……おい、あの小さいのってまさか、さっきの女っこじゃねえんか？」
「そうだ……間違いねえよ。だってあの野郎は、一人の付き添いもなしにここにきたじゃねえか。なら……そうだ。そうにちげえねえ」

砂の窪地に作られる、満月の晩にのみ開かれる奴隷闇市。そこから一週間以内に開かれる市が売れ残りを捌けるために行われたのが今日の奴隷市だった。
窪地から見えるその砂山は今、異常なほどに大きく見えた。
誰ひとり身動きが出来ない中、彼らの挙動を見守っていれば、それは白刃のきらめきをきらりと商人たちに見せつけるのだ。

まさか、と思った次の瞬間、鳶色の髪をした少女は、男に曲刀で切りつけられて砂にどっと倒れた。

「……か、はっ」

血の赤が月明かりに嫌に眩しく写りこむ。

「あ……ああ……貴方は！貴方は何故！！何故このようなことをっ！！あぁぁあああああああああああっ！！」

影絵の端から巨躯の大男が倒れた少女の前に跪くと男泣きに泣き濡れる。それを奴隷を買いつけた男は冷たい眼差しで、ただ見ていた。

11（変装のために）

王女はあれから顔を半分ほど覆う布と、髪を同じく覆う布を身につけ生活していた。
あの砂山での一件は、あの場に居た奴隷商人達全員に、王女は死んだと思わせるために必要なことだったのだという。
だとしても、

「せめて前置きくらいはしておいてほしいよな……」

そう思うのはいけないことなのだろうか。
目の前に血袋を押しつけられ鳩尾を容赦なく叩かれ気を失ったところで血袋を切りつけたらしい。
お陰で王女の身につけていた衣装は血まみれだ。
アイアンバッハは最初、疲れもあって全くそのことに気づかなかったようで、本気で男に飛びかかろうとしていたらしい。

全く、おちおち気絶もできやしない。

起きてびっくり、王女の前で男とアイアンバッハが問答を繰り広げていたというわけだった。面倒くさいったらありゃしない。
王女は判然としない気持ちの中、足音を立てずにするすると歩いて行くと、仕えることになったこの屋敷の娘の部屋の扉を叩く。

「どうぞ、お入りなさい」

無言で扉を開けると、扉の直ぐ脇に音も無く控えると頭を垂れて床に腰を落ち着ける。
このエッレミアーラでの作法、と言われたのだが、未だに慣れな

い。

「あら、イリヤじゃない！どうしたの？」

扉の向こう側に居たのは、王女があの日、買われていった先のハズルの娘、フィーネ。

フィーネはアイアンバッハ曰く、王女と背格好が大変似ており、その髪の色に瞳の色、ひいては蜜色の肌さえも同じなのだという。

「顔はアッシュの方が大変可愛らしいですが」

やに下がったでれでれとした顔で言われてもむしろ不愉快なだけだったので、王女はアイアンバッハを殴りつけると、どうして似ている人物を男は用意したのかと首を傾げた。

何のためにこうされたのかが良く分からないが、王女には、そのよく似た娘の傍にいろと、あの狂言殺害より以降、下された命だった。

嬉しそうに王女の前に近寄ってくるフィーネに、王女は表情を変えることなく更に深く頭を垂れると淡々と言った。

「フィーネ様、ハズル様からのご伝言で御座います」

「え……何かしら？」

フィーネは王女の前に膝をつくと、王女に耳を寄せて聞く姿勢を取る。

「ハズル様はこれから三日後、フィーネ様を連れて後宮へ来るようにとの達しがあったということで、それまでは決して外に出ないよ

うに、と」

フィーネは震えあがると心細そうに両手を胸の前で組み、きゅっと唇を噛みしめる。

「心細いだろうからと、私を常に伴うように言われております。ですからフィーネ様、ご安心ください。一人ではありませんよ」

「ええ。イリヤ、傍に居てね」

妙に気易いこの一家は、不思議なことに王女に対しても、アイアンバッハに対しても、砕けた口調で接してくる。一介の（不本意ながら）奴隷風情に何故とは思ったものの、アイアンバッハは奴隷ではなく、単なる兵士として雇いあげられ、王女は王女で単なる傍仕えとして雇われたのだと言う。

高い金を出して、更にはこれから給金を支払おうなどと、どういう了見なのだろうか。

更には殺したふりと言うのも奇妙だ……

ただ、不思議には思いはするものの、詳しく調べている暇がなかった。

王女にもアイアンバッハにも、あれから休みなどほとんど与えられる間もなく次々と学ぶことが舞いこんできたのだから。

「はい、フィーネ様。このイリヤが常にお傍におりますからね」

まあいい、こうして首都に潜り込めたのだから、あとは機会を待って最奥へと潜入さえできれば——王女はフィーネに笑顔で答えつつもそう考えていた。

物を見ぬ目で必死にフィーネと目をあわせようと努力しながら。

十十十

メルヴィルより用意された物の中にあった工作用の品の一つがヘルディーだ。それは元は青緑をした葉であり、乾燥させてあるためこれは茶褐色になるのだという。

人払いをするとその葉と根を大量に王女の前に用意し、全裸になるように言った。

「……必要なのかそれ？」

一体何のために？とも考えたが、メルヴィルのことである、理由は必ずあるはずとは思ったが、一応聞いてみた。

「必要ですよ。これは全身を……肌を染めるものですからね」

「……」

なんとはなしに判然としないものを感じながらも、王女は部屋着と渡されていた少年の衣装を脱ぎ捨てた。

脱ぐと決めた途端、王女の動きは素早いものだった。いっそ潔いと言うべきか、王女は上着を脱ぎ捨て下履きを放り、下着まで取り払うとあとはどうすればいいのかとメルヴィルに尋ねた。

「そのまま立っていていただければ結構です。ただ、だいぶ長い間立たせることになるかと思いますが大丈夫ですか？」

「平気だ。早くやってくれ」

メルヴィルはそれを聞くと王女の足元にヘルディーの葉と根を用

意していく。これを擂り鉢で粉末状にすると、水で練ったものを王女の身体に手で塗りつけていった。

ひんやりとした感触がしたかと思えば、ねっとりとしたヘルディーの練り物が、いやに気色悪く感じる。

これを全身、隅から隅まで、それこそ尻たぶの内までを塗りこめると今度は髪にこれを塗布し始める。

「髪の毛までか？」

流石にそれは必要ないのではないかと言うものの、これこそが一番必要なものであろうと言われてしまう。

「殿下は見えないから知らないのかもしれませんが、あなたの髪は目立つ。この国では――いえ、この大陸のどこを探しても、ここまでの漆黒は見た事がありません。煤けたような灰色でしたらいますが、だとしても黒ではありません。この大陸では黒は異質。あなたが歩けばそれだけで、リニムの滅びの王女であることは自ずと知れてしまうでしょう」

メルヴィルのその言葉を聞けば、王女は自嘲気味に笑いながら言ったものだ。

「それと、リニムの魔女ってのもばれる、か」

問題なのは各国の使者である。

オルキスにあれから滞在するものを設けるようになった各国では、王女の姿を写したものを国に持ちかえると言っては、王女を絵師に描かせた。

それこそ何のために必要なのかと問えば、シーヴェス曰く、

「お前を値踏みする材料が欲しいんだろうよ」

と言う。

一体どういう意味かと思って首を傾げてみれば、シーヴェスは傑作だと笑い始めたのだ。

「……おい、なんで笑う？」

「お前、本当にそういうところは男なんだな。要は他国はお前を嫁に娶ってしまおうと考えているってことさ。それが一番手っ取り早いからな。オルキスと荒れることなく交渉を進められる。自国でリニムの王女を娶れる、ちょうど身分的にも年齢的にも折り合いがつくような王族……だろうな。そいつらにその絵姿を見せてやるのさ。そうすりゃ食いついて来るだろうって見た目だからな。お前は」

そして後日各国の使者から王女に贈られたのは、その国の代表者の血族である若者達の絵姿だった。

交換に、と言うことなのだろうか。反吐が出そうだった。

「も……元の身体に戻りたい……」

男に値踏みをされるためだけに描かれた絵姿だったとしれば直ぐにもこの身体から元の姿に戻りたいと願ってみたが、それが直ぐにも叶えば元から苦労もしていないのだ。

見えないから絵姿を確認は出来ない、そうは知っていても王女の周囲の人間がいる。その者達の口から、王女に「この国の王子は大変見目麗しい方で……」などと伝えて貰いたいという腹なのだろう。

だが、実際には王女についているのは王女の配下の者であるリニムの者に、シーヴェス配下の者にと、つけいる隙があるはずもなく、全くの無駄に終わっていたのだが。

「見た目が知られているのですし、あの黒髪を持つのは魔女と殿下だけとは今やこの大陸中の者が知っている話です。その姿のまま出ていけるはずがありませんでしょう？」

一番目立つのが黒髪と言うのが問題だが、王女が手に自分の髪をひと房取ると、随分と前に見た艶々と輝くあの黒髪を思いだしてみた。

弟であるティセリウスは、似ても似つかぬ色をしていた。

あいつはきらきらしい見た目だったよな。

たった数回だけだったが、この目で見た弟の姿は、美しい金の色をした髪を揺らし、大層美しい姿だったが、元の世界での顔を持つ王女とは、当たり前だが似ても似つかない姿をしていた。

ある意味だが、王女が唯一持ってこれたのは自らの肉体だけなのだ。

あちらの世界から連れ戻しに来てくれるのを待つのと、それと同時に王女は自らも帰るために様々なことを調べていたが、中々これが遅々として歩みを見せない。

この黒髪も、この真っ白な肌も、この国では大変珍しい様子。

王女にとってみれば、この髪と肌と顔――己の肉体全てが変わらぬことにより、安堵を得ていたのだが、こうなってくると邪魔なだけだった。

12（ハズルから持ちかけられた話し）

「唯一の手掛かりがこれなんだが……」

はあと嘆息を零すと、大人しく髪にもねっとりとしたその練り物を塗りこめられていく。

「因みにこれはこのまま水に浸かって落とせばいいのか？」

「これが乾燥しましたら、色がついた証拠になりますので、水に入って落としていただくことになります。それと……その前にこちらも宜しいですか？」

肌と髪を塗り終えたメルヴィルは、王女の前に膝をつくと、何やら異様な臭気を発するものを持ってきて目を開けろという。

「……む、り、だろ……これは」

目をあけるどころか、瞼を開けるだけでも何かが出てきそうだった。

鼻から目からと異様な臭気に水分という水分が捻りだされていく。とてもじゃないが瞼なんてあけられそうになかった。

けれどメルヴィルは容赦をしない。王女が目を開けられないと見るや、ぐいと無理やり瞼を開けて何か汁気を帯びたその臭気を発するものを突っ込んできたのだ。

「ぎゃあああああああああああああっ！！」

その叫び声のあまりの大きさに、驚いたのは扉の外で仕事をしていた者達だった。

「アッシュ！？何事ですか！！」

飛び込んできたアイアンバッハ、ミシェル、セネカ――そして、今回ばかりはどうしていたのだと聞きたいが、シーヴェスが目にしたものは、王女を全裸にひん剥いて、目に臭い汁を指で眼球に塗りこめているメルヴィルの姿だった。

「おや、騒々しいですね、どうかしたのですか？」

いけしゃあしゃあと言い放ちおった。

「な、な、……あ、あああ、アッシュ！？」

「おおおお、王女殿下！？そ、……なんて格好を！？」

「わあああああああああっ！ぼ、ぼぼぼ、僕！済みません！出ます！！」

セネカが真っ先に我に返って走って出ていったのを皮切りに、ミシェルもアイアンバッハも出ていったのだが、シーヴェスは王女が目を抑えて呻いているのをじっくりと眺めてはうんうんと頷いている。

「おま……んだよ、くそお……見てんじゃねーよ！」

王女が八つ当たり気味にこう言えば、シーヴェスは真顔で言ったものだ。

「十一にもなったのにお前ってやつは……貧相だな」

どこを見ていってるんだと全員から罵声を浴びせられたシーヴェ

スは、その後、扉の向こうの三人に引きずられて連れ出されていったが、なんだか色々と納まらないのは王女である。

「メルヴィル、もういっそのことシーヴェスが俺のこと大好きって噂流しとけ。んでもって俺のことが好き過ぎて、年増の婆どもじゃやる気が起きないとか色々と脚色もしてな！あんのくそ野郎が……どこが幼児愛者じゃないだ。この嘘つきが！」

気炎を上げる王女の姿にふうと溜息を吐きつつも、メルヴィルが問う。

「……それくらいで気が納まるんですか？」

「やつの婚約話がわくたびに毎回邪魔してやろうかと思ってな」

嫌がらせのために幼女愛好者疑惑を湧かせてやろう、王女はそんなことを考えて一人暗く笑うのだった。

「あ！！でもな、あくまでもシーヴェスが俺のことを大好きだからって流して来いよな！シーヴェスに恋する乙女達の恋心は全てうち砕いてやるから。そのつもりでやるように」

「まあ……いいんですがね」

そんな暗く笑う王女をじっと見つめると、メルヴィルはこくりと一度頷いてみせる。

確かに貧相ですが、これからだと思うのですがねえ。

「おい、何か考えたか」

「いいえ、何も？」

十十十

全身をヘルディーで染めた王女の姿は今現在、髪も瞳も鳶色で、そして肌は蜜を溶かしこんだように飴色をしていた。

それはまさに、顔の造作を問わなければ、フィーネと姉妹であると言われれば、信じてしまいそうなほどに酷似したものであった。

ハズルが戻ってくると、フィーネと共に王女を食事の席に誘ってきた。

一度はこれを断ったのだが、ハズルが話したいことがあるのだとなおも食い下がっていうのだ。そうまで言われてしまえば、雇われている身ということもあり、断るわけにはいかなかった。

「イリヤ、それまでこちらで遊びましょう？お父様がくださったの、おはじきよ」

おはじきと言ってフィーネが差し出してきたそれは、王女には分からなかったものの、ハズルに伴ってついてきていたアイアンバッハには分かった。

「ハ、ハズル様……あれがおはじきですと？」

「ああ、そうだよ？紅玉で出来たものだけど、あれじゃあ売り物にならないからね。ああしてフィーネのためにおはじきに作りなおして貰って来た」

エッレミアーラでは紅玉は、大層高値で取引がなされる貴重な宝石である。それを売り物にならないとは何の聞き間違いかと思った。

「売り物にならなくはないでしょう……あの大きさですよ？」

フィーネの手にあるそれは、平べったい形をしてはいるものの、それでもとても粒が大きい。

「あれならペンダントなどに使えたはずでは？」

「いやいや、あれの中には傷があってね。だから本当に売り物にならないんだよ。だからあれでいいの。分かったかな、ガイ君」

「はあ……」

たしかに宝石とは石の中に傷がないことが高価な証ではあるが、傷があろうとなかろうと、それでも小さく切れば使えただろうとは思ったが、恐らくはああして歳を取ってから出来た子供だからこそ猫可愛がりをしているのかもしれない、とも思ったため、アイアンバッハは黙っていた。

王女は自らの名をイリヤと名乗り、アイアンバッハはガイロードと名乗った。だからこそアイアンバッハは愛称として現在、ガイとハズルから呼ばれているが、屋敷の他の者達には、ガイロードと普通に呼ばれていた。

王女がフィーネに伴われて出ていくのを見ていれば、アイアンバッハはアイアンバッハで中庭へと連れていかれる。

「ガイ君、君にも折り入って頼みたいことがあるんだがね……」

「……なんでしょう？」

「君には三日後、王宮で開かれる闘技場での大会に参加してほしいのだよ」

「大会……ですか？」

一体何の大会かと問わずとも、それは自ずと分かると言うものだろう。

何せ開かれる場所というのが闘技場なのだから。

人懐こい顔でぐっと顔を近づけてきたかと思えば途端に顔を恐ろしい程の鬼気迫る顔に変え、ハズルは告げる。

「闘技場の大会で、優勝して貰いたいんだ。金貨一万枚の働きを今、してほしいんだよ。やって……くれるね？」

断ればどのようなことになるのかと、アイアンバッハに連想させるに相応しい顔をしていたことだろう。

王女と引き離したのはこのためか、そうは思ってももうどうしようもない。

「イリヤ……様は……」

ごくりと生唾を飲み込み言えば、ハズルは良いように取り計らうとだけ告げた。

アイアンバッハはそれだけ聞けば十分と、ハズルを見つめてこう言った。

「分かりました。御恩をここで返させていただきます」

彼の瞳、そこにはもう、迷いは無かった。

フィーネが屋敷の者達を総動員してかくれんぼをするのは日常茶飯事だったようだ。

年老いてから生まれた主の娘であるフィーネは、この屋敷の者達からも随分と慕われて可愛がられているようで、全員が愛しそうにその成長を見守っているのがなんだか眩しくて、そして胸のどこかが抉られるような痛みと共に、何故だか妙に切なくなった。

王女が持たない家族と言うものはこういうものなのかもしれない

と、そんなことを考えたのもまた事実だ。
こちらでも、あちらでも、家族を得ないままに生きてきた王女にとって、それは一種の憧れでもあった。
きゃっきゃとはしゃぐフィーネは愛情を一身に受け、それゆえ年より幼さをのぞかせる。

「本当に、眩しいな……」

王女はそっと瞼を閉じてフィーネを追う使用人たちの群れに混じっていった。

13（友達ならば身代わりになってくれるだろう？）

フィーネにはとっておきの隠れ場所がごまんとあるらしい。そのため、使用人たちは彼女を見つけることが出来ないようで、毎回フィーネの勝利でこのかくれんぼは終わりを迎えていた。

そんな中、王女がこの恒例のかくれんぼに加わるようになってからと言うもの、フィーネの連戦連勝にも、終止符が打たれることになった。

「見つけましたよ、フィーネ様」

どこをどう登ったのか、フィーネは天上まである石柱の上に登り、天井近くの死角にひっそりと丸くなっていた。そんなところに隠れているフィーネを、哀れ使用人たちは下ばかりを探し、見つけようと躍起になっているのだ。これでは見つかるはずもない。

またこんなところに隠れてという王女は、これで三度かくれんぼに参加して、三度ともフィーネを見つけて見せた。お陰でフィーネの隠れ場所は使用人たちの知るところになってしまったのだった。

こうくると、今度は面白くないのはフィーネだ。

ぷくりと頬を膨らませて王女をねめつけるように見る。

「もう！イリヤのお陰で私のとっておきの場所が全て見つかってしまったわ！」

「三つしか無かったのですか？」

これは予想外の言葉だった。目を丸くする王女にフィーネは更に頬を大きく膨らませる。

「そうよ！だって今まで見つからなかったんだもの、これ以上なん

て必要なかったの。でもどうしよう、これからはどこに隠れても見つかっちゃうわ。皆今度からはあの三か所を探せばいいのねって嬉しそうだったもの」

しょんぼりと告げるフィーネに、王女は困ったように顔を顰めてみせた。

流石に隠れ場所を全て取りあげたのは自分だと言われてしまえば、どうにも具合が悪いものがあった。

仕方ないと王女は溜息をつくとフィーネに言うのだ。

「ではこうしましょう、これから二人でとっておきの隠れ場所を見つけましょう？絶対に見つからない、二人きりの秘密の場所です」

それでいいだろうと言えば、フィーネは手を叩いてこれを喜んだ。

「嬉しいわ！イリヤとの二人だけの秘密の場所だなんて！ふふふっ、それって凄く素敵なことよ！見つけましょう、二人の秘密の場所」

殊の外その言いまわしが気に入ったようで、フィーネは王女の手を取ると、駆け足で中庭へと駆けだしていった。

フィーネにとってみれば同い年の者同士でそうした共有の秘密を作るということそのものが初めてだった。

一般的な子供らが、そうして遊び楽しそうにしているのを、じっと屋敷の中から見ているだけだったため、同じようなことが出来るのかと嬉しくてたまらなかったのだ。

「ふぃ、フィーネ様！早いです！待ってください！」

早いなんてことは実際はないのだが、フィーネに手を取られて咄嗟に身体の均衡が保てなくなったため、足がもつれてこけかけた。

目が見えないため、これがまた中々に危ないものがある。だからこそ制止をかけるがフィーネはそんなことお構いなしだ。嬉しそうに駆ける足が止まるはずもなかった。

「フィーネ様！フィーネ様ったら！」

「あははははっ！イリヤ、早く！どこがいいかしら？中庭？それとも厨房かしら？それとも泉の間？木々の囁きの間でもいいわ！二人で探せばそこが二人の特別な場所だものね！」

早く探しましょうと駆けるフィーネの耳に入るのは、楽しげに囁く小鳥たちのさえずりだけなのか、王女の声など全く耳に入らないようだった。

＋＋＋

それからというもの、王女は濃密な三日間を過ごすことになる。フィーネに朝から晩までくたくたになるほどに連れまわされ、引きずりまわされたのだ。

体力的には何ら問題はないとはいえ、王女はフィーネとは違い、物が見えないために細心の注意を払いつつ動かねばならない。体力よりも神経ばかり使う毎日だった。

お陰で全く気づかなかったのだ。夜、個室を用意され、その狭い部屋の中に王女が寝入ってからたきしめられる香の存在に。

三日目の早朝、ハズルに叩き起こされた。

「起きるんだ、イリヤ」

「……」

口をあけてみようとするが、起きたてだからか、唇がまともに動かない。それどころか、全身がいやに気だるく、動かす事が出来なかった。

そんなに毎日連れまわされて疲れていたのかこの身体はと思うが、後に分かるがこれはそんなものではなかったのだ。

そのことに満足がいったようで、ハズルはうんうんと頷くと、更に問いかけた。

「声は出せるかね？」

声？

どういう意味かと思い口を再度開くものの、王女はハズルの呼びかけに答えようとしても、声が出ないことに気が付く。

これは起きたばかりだからではない、本当に声が出ないのだ。

喉も舌も、力が入らずだらりとしている。

まるで頭だけ動いているのかと思えるほどに思考以外が全て封じられているようで、その不自由さを露わす言葉が王女には見つからなかった。

そして違和感を感じて飛び起きようとしたのだが、これまた指先一つ、ぴくりとも身体が言うことをきかないのだ。

それどころか全身を蝕むこの奇妙な感覚はなんだろうか。

それは久しく覚えの無い感覚だった。

じっとりと背筋に嫌な汗が伝う。

これは……なんだ？

催淫剤でも盛られたのか、と王女は身体の底からじくじくと疼きだした熱を冷静に分析していた。

だが、これくらいならば自我を切り離されることもあるまいと、肉体の自由を奪ったもの声を聞き、せめて事態の把握に努めようと

してみれば、何の冗談か、意識はまだあるのではまだ足りないようだと、何やら更に毒を盛り始めたのだ。
動かない身体に苛立ちを感じながらも、少しでも情報を得ようと王女は耳を澄ます。
王女に与えられた狭い私室に窮屈そうに座り込むと、そこでハズルは何やら取り出し、用意をし始めた。
取りだしたのは小さな木を彫りだして作った細工の美しい小箱だった。
その小箱の中に丸いものを納めると、更にその中に藁など燃えやすい材質のものを放り込む。
そして最後に火種を放り込んでこれを左右に振り始めたのだ。
自由にならない身体でじっと見上げてくるのが滑稽なのか、ハズルは穏やかな声音で何をしているのかご丁寧にも説明してくれるつもりになったらしい。

「これはね、香を焚いているんだよ。それもこれは飛びきり素晴らしい香でね、君のような子供にはまだ当分必要はないものだろうけれど、所謂媚薬というものだよ」

矢張り、王女は瞼をゆっくりと開き、そしてまた閉じた。
瞼はまだ動くが、この香にはどうやら相手の自由を奪う働きもあるらしい。
催淫剤としての作用だけではなくて、まさかそんな効能を持たせた媚薬があるなんてと驚くものの、それでも薬は薬だ。かけ合わせ次第で何にでも化けるのは当たり前かと何故だか妙に納得してしまった。

「イリヤがここにきてから直ぐに微量ながらも毎日のように焚きしめていたけれど、気がつかなかったかね？ここ三日間ほどは毎日のように噎せ返るほどの煙の中に置いて寝かせておいたからね、効果

は随分と長い間きくはずだったけれど……それでもまだまだききが弱いようだ」

そう言うなり、ハズルは振りまわしていた小箱を覗き込む。中では香に火が移ったようで、小さな灯りがぽっと灯り始めていたところだった。

それを見るとハズルはにっこりと、本当に人の良い顔で笑うと、王女の枕元にそれを置いて扉まで下がる。

扉に手をかけた状態でハズルは言った。

「フィーネが言っていたよ。『イリヤは初めて出来たお友達なの』とね。なあイリヤ、友達ならばフィーネのために働いてくれるね？フィーネのために……犠牲になってくれるだろう？」

まるでそうすることが友ならば当然とでもいいたげにハズルは言い放つと、扉を閉めてしまった。

もう香の煙は部屋中にみっちりと充満していたのだ。

扉越しにハズルは告げる。

「大丈夫だよ。最初は確かに恐ろしいかもしれないけれど、時期になれる。人とはそういうものだからね。身体の言うことがきかず不便かもしれないが、それがイリヤ自身を守るものになる。だから今はそのままそれを受け入れたまえ。それではな、イリヤ。いや――フィーネ。今はゆっくりと休むんだよ、フィーネ。ではね……」

王女はハズルの去りゆく靴音に耳をそばだてるが、行ったきりで戻ってくる気配すらない。

あたりはしんと静まり返っているのを知れば、恐らく屋敷に住む者達は、この王女の部屋の周辺からは遠ざけられているに違いないと思った。

薬を嗅いでしまえばどうなるか――危険から遠ざけるために王女の私室から遠ざけたのだ。

全身から更に感覚がなくなっていくのを感じれば、次に王女の身を襲ったのは全身が酒で作られた湯船にどっぷりと浸からせられたかのように、どろどろに蕩かせられていくような感覚になった。

そして気が付けば王女は、うっとりと恍惚そうに目を蕩けさせ、意識を混濁させていった。

ハズルが次に見た時、そこに居たのは紛れもなくただの生きた人形となった王女の姿だった。

「うん。上手く仕上がって私は嬉しいよ。ね、フィーネ。君もそう思うだろう？」

王女はその問いかけに答える術を持たなかった。

１４（二人のお嬢様）

この日、フィーネは機嫌があまり良くなかった。

それはなぜなら、大好きな父との外出なのにも関らず、自分の身に纏う衣装が幾分大人しめ――いいや、はっきり言えば地味の一語に尽きるからだ。

折角暫くぶりに外に出れたと思いきやのこれである、何のために外に連れていかれるのか分からないだけに、不満たらたらだった。

顔と髪を布で覆ってしまえばもう、目以外がすっぽりと覆われて見えなくなってしまう。

地味な服に地味な覆いではっきり言ってもう、外出する気分ではない。むしろ葬式にでも参列するのかという出で立ちの自分の姿に、フィーネは「まっ黒だわ」と素直にその感想を口にした。

フィーネの言う通り、その全身は灰色を基調とした地味な色合いで統一されており、流行遅れも甚だしい衣装だ。

年若い娘ということもあり、流行を取り入れた服装をしたいと思うのは当たり前だろう。

目にも鮮やかな覆いを被り、そして下履きは上等の絹に綾の美しい柄物だろう。上着は半袖の臍が出るほど短い丈のものに、それに合わせた金細工の装飾品を全身にあしらうのが今の流行りである。

野暮ったい今きている服とは真逆の衣装だわと嘆くように呟くと、フィーネは恨めしそうにハズルをねめつけるように見やる。

「お父様、どうして今日は可愛くしてくださらないの？」

綺麗に着飾って自分を伴うのがハズルとフィーネとの間の外出の決めごとであったはずだ。唇を尖らせてフィーネがそう拗ねる様にして言えば、ハズルは今日は王家の方もいらっしゃる催しなので駄目なのだという。

「催し物？」
「そうだよ。催し物さ。王家の方以上に目立ってしまったらいけないからね。だから今日はそれで我慢なさい」

王族の中には身につける衣装それ一つにさえこだわり抜き、更に言えば自分のものよりも煌びやかな衣装を身につけているどこそこの者が気に食わぬとばっさりと切り捨てる者すらあるという。そんな中、フィーネが着飾って行ってもしもそんなことになれば目も当てられないと言うハズルは、フィーネがとても大切だからこそ今日のような服装をさせるのだよと言うのだ。

そう言われてしまえば、フィーネは渋々といった様子で頷いた。

ここで我を通してしまえば反感を買い、切り捨てられるかもしれないのでは、笑えもしないからだ。

「ねえお父様、イリヤはどうしたの？今日はイリヤも連れていくと言っていたじゃないの」

フィーネがふいに思いだしたように話題を変えてくるので、ハズルは僅かに目を見張ったものの、その問いは想定内だったのか、淀みなく答える。

「イリヤは昨日から少し体調が思わしくないようだったからね、私室の方で寝ていると言っていたよ。申し訳ないけれどついていけないことをお前に詫びておいて欲しいとも言っていた。すまないね、伝えるのが遅れて……」

そう聞くと、今度はフィーネの怒りがハズルから王女へと向いた。

「まあ！なんてことかしら！お父様に伝言を頼むだなんて、いけな

い子ね！後でおしおきしないと」

いかにも高慢そうなその台詞は、逆に楽しそうに朗らかな調子で言われ、ああこれは冗談なのだなと分かる口調でいっそ安堵する思いだった。

城の奥深くに位置する者達のように、娘が醜く育っていないことに安堵すると、ハズルは矢張り自分は間違っていないのだとほくそ笑んだ。

「そうだね、後でフィーネがおしおきをしてあげるといいよ」

「ええそうね。体調が元に戻ったら、イリヤにはたっぷりと遊んで貰わなくちゃ。今度は何をしようかしら？ねえ、お父様。かくれんぼには飽きたから、他の遊びがいいわ。何がいいと思う？」

その問いにハズルは、すっと目を細めると口元を笑みで称え、優しく答えるのだった。

「そうだね、おままごとがいいんじゃないかな？」

ハズルの瞳はその口元とは裏腹に、笑っていなかった。

＋＋＋

仮初めの名を呼ばれ、アイアンバッハは面を上げる。

「檻の中では矢張り、息もしにくそうだな」

「……」

奴隷市につれて来られた時とそう大差ない扱いを強いられるようになったのは、つい昨日の晩のことだった。明日闘技場へと運ぶということで、逃げだされないようにとの措置であったのだろうが、それにしては些か遅きに過ぎるようにも思う。

「何故今夜から檻なのでしょうか？闘技場へ出すと決めた時から放り込めば良いものを、おかしなものではありませんか」

どうにも奇妙なと思い男へと訊ねるも、男は僅かも動じない。

「単に筋肉を鈍らせないためだろう。鈍った獣ほど、見ていてつまらないものもないからな」

男はそれだけ言うと、担いできた小さな袋を中に放りいれた。それはアイアンバッハの胸へとあたりずるりと胡坐をかいた膝の上に落ちてきたが、存外これが重い。一体なにが入っているというのか。

「水の入った袋と布だ。全身を清めておけ」

汚らしい格好で明日は連れてはいけないからなとそれだけ言うと、男は元来た道を引き返していった。

どちらにせよ逃げられないというのだから、これは有難く使わせていただこうと、アイアンバッハは袋の中に手を入れて中から水と布を探り出そうとした――が、中に入っていたものは、明らかに別のものだった。

「なんだ、これは……？」

そこにあったのは小刀だった。

十十十

意識と無意識の狭間にいるのか、妙に霞みがかった意識のために王女はとろりと意識をとろかせたままに、心ここにあらずといったところか、ただただぼんやりと真正面を眺めているだけだ。

実際にはそう他者には見えていただろうが、王女は元から見えもしない視界の中、ぼんやりと瞼だけをただ開けていたに過ぎない。

ハズルの屋敷で働いている女達が王女の身体をごしごしと布でこすり落としていく。

「ああ嫌だよお、フィーネ様はこのことを知らないんだろう？」

「もしも知っていたとしたら……嫌だよ……私。お嬢様が何て言うか……」

絶対に気落ちすると言いながら、擦ったばかりの肌の上に湯を落としていく。

すると骨ぎすの女が煩いやつらとばかりに落ち込む女二人を咎めて言うのだ。

「知っているはずがないじゃないか！！知っていたら絶対反対するに決まっているよ。それでなくてもイリヤはお気に入りなんだからね！知っていたらなんて……滅多な事を言うもんじゃないよ！」

そう告げると、骨ぎすの女は王女を可也強めの力で乱暴に擦りあげていく。

「やだ！あんまり力を入れないどくれよ！一応王族への出しもんな

んだからさ！」
「肌がずる剥けちまったらどうすんだよあんた！！」
流石にそこまではやるつもりは無かったようだが、それは考えていなかったようで、骨ぎすの女は慌てて腕を引っ込めた。
王女を見て、そして手に持った布を見て驚いたのだ。
「なんだいイリヤ、お前……どれだけ長い間風呂に入ってなかったっていうんだい？」
うっとりとただ正面を見据え続ける王女は応えない。
ただ女たちは一様に顔を見合わせて言うのだ。
「肌からこんなに垢が落ちるだなんて……余程酷い奴隷生活でもしてたってのかね？」
どこぞの奴隷市から拾い上げてきた娘と傭兵としかきかされていなかったため、女達はそう考えて可哀想にと同情する気持ちが芽生えたようだったが、真相はそうではなかった。
肌に塗ったヘルディーが、落ち始めたのだ。
元よりヘルディーが身体より色落ちする時期が迫っていたこともあり、それは湯でぬくめられた肌から薄まるようにして僅かに落ちたようだ。
蜜色の肌が僅かに明るい肌になったことを見て、女達は自分達の仕事の良さを誉めたたえ合うと、次の仕事に取り掛かっていった。
絢爛豪華な衣装で着飾られた王女は仕上がりを確認して貰うためにハズルの前に連れ出されると、僅かにあいた唇から覗く赤にハズルですら何か感じるものがあったらしく、直ぐにさげられた。
早々に下げよと告げたハズルは仕上がりにも満足すると、フィー

ネを前の輿に乗せ、そして自らは王女の乗った輿に乗り、屋敷を後にした。

布で区切った輿の後ろには、檻に繋がれたアイアンバッハの姿がある。

アイアンバッハはそこに居るのが王女であることに流石に気がつかなかったようだ。

それも無理もないだろう。アイアンバッハにとってみれば、自分の知りえている王女の姿はあの見えない目の中にさえも覇気の込められた力強い魂であり、こんなただの人形のような少女などではないからだ。

見知らぬ着飾った娘を伴うハズルに対し、アイアンバッハは訝るでもなくただただ静かにじっとその顔を見据えている。

それにハズルはおかしなものだねと言うのだ。

「何がおかしいのですか？」

「だって君は君の大事なお嬢様を守りたくて闘技場に向かおうとしているというのにね、そのお嬢様が目の前に居るのにどうして気がつかないのか……おかしいと思うのがそんなに変かな？」

いたって気軽な口調で告げられたこれに、アイアンバッハは我が目を疑った。

「ん……なっ！！そ……そこに居るのは、アッ……お嬢様なのですか！？」

「そうだよ。毒をもって意識を混濁させてある」

「何と言うことを……き、貴様っ！！」

恩を返せと言われ、大人しく繋がれることを良しとしたというのに、まさかよりにもよって王女を捕らえて毒を盛るとは何事かとアイアンバッハは激昂するが、ハズルは全く動じない。

「君がきちんと働いてくれる保証がなかったからね。君にはきちんと働いて貰いたい。だから……この娘には毒を盛らせて貰ったよ」

15（何も知らない娘が二人）

毒という言葉にアイアンバッハは頭に血が上るのを感じた。

「きちんと恩は返すといったはずだ！！なのに何故」

激高するアイアンバッハにハズルはおかしなことを言うとばかりにうっすら笑う。

「信用出来るほどに私は君を知らない。だからこそ、保険を設けたんだよ。それの何がいけないというのかね？当然のことだろう」

ハズルはアイアンバッハを全く信じていなかったのだ。

恩を返せと言うだけでもアイアンバッハにはこれに頷くだけの意味があった。当たり前にそれくらい返して当然であると思っていたからだ。

けれどハズルの価値観からすれば、それはありえぬことらしい。

逆にアイアンバッハがああも簡単に頷いたことからして解せぬと思ったのだろう。

だからこそハズルは一計を案じた。

そして、王女に毒を持ったということだろうか。

アイアンバッハはぎりぎりと歯をすりつぶすほどに鳴らすと唸るようにしている。それを見てハズルは怖いねと笑うのだ。

「そう怒らないで貰えないかな？きちんと君が働いてくれれば解毒剤はきちんと渡そう。けれどそのかわり、君には死に物狂いで戦って貰いたいんだよ。分かるかな？」

「……それは、お嬢様の命と引き換えに解毒剤を渡すと言うことか」

「ものわかりがよくて助かるね。そういうことさ。だからこれは君

が勝ってこそ手に入れられるものだということを忘れないで貰いたいんだ。いいかな、必ず勝っておくれよ?でないと私はこの娘がどうなっても知らないからね?」

ハズルはふくふくと肥えた頬をつやつやと脂で光らせて笑うと、あげていた布を下ろした。

小さな布張りの椅子に腰かけさせられた王女はと言うと、焦点すら定まらない目で宙を見たまま微動だにしない。

ハズルはその人形のように容姿の整った王女の肌に指を滑らせると、途端に王女の身体はびくんと跳ねたのだ。

その反応を前にして、ハズルは残念そうに言ったものだ。

「引き渡さなければならないのが勿体無いよねえ……」

喉の奥で笑うと、けれどしょうがない、これは愛する娘のためなのだからと自分に言い聞かせるようにして、ハズルは輿で揺られていった。

闘技場はもう眼前にその巨大な姿を露わしていた。

闘技場は円を囲むようにして席を放射状に段々に設けられた会場で、そのもっとも高い所に位置する席が王族のみが使用することを許されている席である。

すり鉢状になったその一番低い場所では、闘士が闘う場が整然と今も整えられていた。

今か今かと試合開始を待ちわびる群衆の中、フィーネもそこに居た。裕福な者達のいる階層は、王族よりも三段下がった場所からが用意された席である。頭から覆いを垂らし、珍しげに周囲をきょろきょろと見回していた。

「闘技場……かあ。これは一体何をする場所になるの？」
「闘士として祭り上げられた者達があの場で戦うのですよ、お嬢様」
「闘う？」
「ええ、あの場で戦い、勝利し、王にその勝利を捧げるためにいるのがこの場で言う『闘士』になります。そのため、城仕えなどをしている兵士などとはちょっと向きが変わるのです」
「ふうん？よく分からないけれど、今日は式典があるってことね？」
フィーネは自分なりに導きだした答えを男へと告げれば、男は満足げに目を細めて頷くと、今日は王子の元へと姫が嫁ぐ日なのだという。
「まあ、お姫様が。そうだったの」
驚きに目を見張ったその表情を見て、男はどこか悲しげだった。
「そうなのですよ。フィーネ様……」
「素晴らしいことだわ！きっとそのお姫様は王子様に嫁いで、幸せに暮らすのでしょうね！」
フィーネにとって王族とは、父親であるハズルが王に謁見出来る立場にあるだけ一般の民達に比べ身近な存在ではあった。
だがフィーネ自身はまだ王宮に行ったことはなく、王宮の中のことはすべて物語の世界のようなものだ。
一般人よりは近く、けれどどこか遠い世界の物語を聞いているように感じられるのだろう、フィーネはその話を聞いて、ただうきうきと心が浮足立つのを感じた。
そんなフィーネの無邪気な言葉に益々男は胸のどこかが抉られたように痛みでも覚えたのか、そっと胸の前をかきよせ、呻きながら答える。

それはまるで、絞り出すような声音だった。

「そうですね、フィーネ様。お姫様はきっと……王子様に優しくされて、大切にされて……幸せに暮らせるのでしょうね」

この娘は何も知らぬのだ。あのムバーフ宮殿の最奥である、後宮で女達がどんなに血生臭いことをしているのかを。

そして今日、あの娘がどれほどの惨い目にあわされようとしているのかも。

目を瞑れば、フィーネの本物の侍女のように相手をしていた娘の姿が浮かぶ。

同じ年格好にも関らず、遥か年下の娘の世話をしているかのように大人びて、優しい笑みを浮かべていた娘。

常にどこか俯きがちで暗く、表情に乏しいところはあったものの、それでもよく気がつく素晴らしい娘だった。

男は神を呪った。

そして自分の身代りになったアイアンバッハに心の中で詫びた。

王女の身をせめて安らかにと祈った。

それしか男には今、出来なかったからだ。

闘技場を見下ろすと準備が整ったのか、人々のざわめきが聞こえる。

乾いた風がこれから闘士達が集められる底へと吹きすさび、一気に降りてゆく。

男は小さくつぶやいた。

「あの場で会えたあの者達にとって、私は悪魔だったのだろうか、それとも救い主であったのだろうか?」

余程他の者に買われるべきだったのだ、お前達はと思いはするが、それでも矢張り、辛かった。

「楽しみね、早く始まらないかしら。わくわくしちゃうわ！」

無邪気に笑うフィーネの顔を見て男は思う、これは天女か、それとも魔女かと。

ハズルを狂わせるのは、いつでもこの姫君なのだ。そういう意味でいうのであれば、フィーネはまさしく、魔女だった。

フィーネはこれから闘技場で散る闘士達の命を指して、正しく意味を理解した上でそれを言っているのか、男には分からなかった。

意味を理解したうえでの発言であれば、矢張り、血に飢えた、狂った、魔女なのだ。

「ほおんと楽しみ。ふふっ、早く始まらないかしら」

「……済まない」

＋＋＋

男が王女達のことを思い胸を痛めていた頃、闘技場の王族の席では肌を焼く日差しを天蓋で遮り、顔を覆うこともせずにゆったりと椅子に身体を預けている女がいた。

その女の前には男が一人、額を敷かれた絨毯の上に押し付けている。

女はこの砂漠の国、エッレミアーラの王妃である。

そして、王妃ギュイファの前に膝をついて低く頭を垂れるのはハズルだった。

恭順の証として差し出すものの中身を全て網羅したものを読みあげる文官に満足そうに頷くと、よいと短くギュイファは言った。

奴隷に仰がせていた団扇を止めさせ下がらせると、ギュイファは

にまりと笑い狐のように目を細めて告げる。
その目元のくっきりとした刺青が、なんとも言い知れぬ恐ろしさをハズルへと与えてくる。

「して、娘はどこに？」

恭順の証として差し出された品々も、確かにギュイファを喜ばせることには成功したが、ギュイファがこの日、最も待ち望んでいたのは、第五王子の元へと嫁いでくる予定の娘、フィーネだった。
後宮に差し出せ、さもなくば反逆の罪をもって死ね――まさにこのようなことを数か月前にハズルは言われたのだが、何とか十一になるまではと待って貰った。
そして先延ばしにし続け、ようやくの輿入れである。ギュイファが待ち遠しいと思うのも無理は無かった。

「蜜色の肌に鳶色の瞳に髪。おお、おお！そなたがフィーネなのだな！よう輿入れを決意してくれた！我が息子と、仲睦ましゅうな？」

ころころと笑いながらギュイファは言うが、ハズルの背後に控えるフィーネは応えない。
それにギュイファは軽く腹が立ったようで、低頭したままに動かないハズルにぎろりとねめつける。

「ハズル……」

しつけがなっていないようだ――そう言いたいのだろうが、ギュイファはぎろりと睨みつけるだけでそれ以上は言おうとはしなかった。
そしてハズルもまた、発言を許されているわけではないため口を開いて直ぐに閉じてしまった。

じっとりとした嫌な汗がぶわりと毛穴から溢れ出て来るようだ。
ハズルはじっとギュイファの動きを待つが、震えが止まらない。
ギュイファは怒りのままに腕を振り上げると、配下の者が音もなく動き、その腕にあわせるようにして鞭を振るった。

パンッ

１５（何も知らない娘が二人）（後書き）

間違えて一話抜けてました
わあああああ

16（血の宴の開幕）

渇いた音を立ててフィーネが床に崩れ落ちる。
その頬には、打たれたばかりだというのに、真っ赤なみみずばれが出来ていた。

「……」

倒れたフィーネはただ恍惚とした表情を浮かべたままに、眼前を静かに見続けたまま、変わらない。
声も上げねば呼吸一つすらしていないかのようなその様に、ギュイファはいっそなんだこの人形のような娘と憤りをあらわにハズルへと大股で詰め寄るとずいと迫った。

「ほ……これはまた、これくらいでは声も出ないと？なんとも強情な娘を連れてきたものよのう、ハズル？」
「い、……いいえ、ギュイファ様。フィーネは……」

恐ろしいと面を伏せたままに、ハズルは哀切なまでに訴えた。

「フィ、フィーネがまだ私と離れたくないと……ごねまして！……ですのでタラシュワール香を焚きしめ、意識を混濁させこうして連れてまいったわけで。け、決してギュイファ様を軽んじてフィーネは挨拶をしないわけではないのです！」

ギュイファはタラシュワール香と聞いて軽く目を見開いた。
タラシュワール香と言えば、催淫剤としても使われる所謂媚薬である。だがその実は大変都合のいい香でもあった。
この香を焚きしめられた者はたちまち意識を失い肉体の自由を失

う。

意識は全て香の魔力によりどこかへと遠のいてしまい、そこにあるのはただ、その者の抜け殻だけ。

ギュイファは倒れたままにうっとりとした目を前方に向けたままのフィーネを見やり、くっと皮肉げな笑みを浮かべた。

「なんと酷い父親よのう。のう、フィーネ、そうは思わぬか？そなたの父親はそなたがどんなに家に居たいと懇願したかは知らぬが、そなたを香で意識を失わせての輿入れなどをさせてきたぞ。あまりにもごねるから仕方ないということか――にしても、酷い父親よのう？」

なあ、ハズルと地獄の底から響くような声音で告げるギュイファに、ハズルは床に額を血が滲むほどに擦りつけていく。

「おお、何と酷い父親か。フィーネ、今日からは我が息子、アデルがそなたを慈しむだろう。その腐った性根を持つ父親とは違い、そなたを大事にしてくれることと思うぞ。――娘を連れて行け。大切に、だぞ」

「ははっ」

兵士が輿を誘導してきたかと思うと、その腰にそっとフィーネを横たえる。輿はフィーネを乗せると音もなくその場を後にした。

ギュイファはハズルを見下げ果てた男よと侮蔑すると、もう興味もないとばかりに直ぐにも踵を返して謁見の席として設けられた場を後にした。こちらはフィーネを追って出ていったようだが、兵士達もそれに続いて出ていってしまった。

後に残されたのは地べたに這いつくばったハズルだけだ。

額を絨毯からゆっくりと引きはがす。すると露わになった面は酷く屈折した笑みを浮かべているのだ。

「くっ……くくっ、ははは……！！」

堪え切れなくなったとばかりにハズルは喉の奥から哄笑をあげる。誰も居なくなったその場所で、膝を一度叩いたが、笑い声は後から後からハズルの喉の奥からわき出でてくるのだ。

どうにも止まらなかった。

ハズルは賭けに勝った、賭けに勝ったのだ。

安堵と娘を守れた喜びにハズルは震え、そしていつまでも笑っていた。

ギュイファの腕に移された輿の娘は腫れた頬に氷を当てられうっとりと目を細める。

「おお、悪かったのう。そなたのことに気がつかなんだ。ゆるりと休み、身体を癒すのだぞ。よいな、フィーネ。意識が戻ったら婚儀じゃ。我が息子アデルはほんに良き旦那様となってくれるはずぞ？何も怖いことはない。のう、フィーネ。早く香が抜け、意識を取り戻したそなたと話がしたいのう」

フィーネは答えない。

ただただ氷が頬の熱を奪ってくれるのを愛しげに目を細めているだけの娘に、ギュイファは嬉しそうに愛しそうに話しかけ続けた。

「何も怖いことはないぞ。そなたは我が守ってやるゆえの。ゆるりゆるりと休むが良いぞ」

フィーネはその声に、何も答えられるはずが無いというのに、ギ

ユイファは何故か物言わぬ娘が愛しいのか、目を細めて嬉しそうにしていた。

本物のフィーネはここに居ないとなれば、ギュイファはハズルをどうするのか、本物のフィーネをどうするのか、それは身代わりのフィーネには知る由もない。

フィーネ――いいや、王女はこれから先、後宮の奥で香の力に揺られ、暫くの間寝入り続けることになるのだった。

起きれば待っているのは天国か地獄か、それはまだ夢の世界に居る王女には、遠い遠い世界の物語。

「母上、その……娘が、なのですか？」

「おお、アデルよ。そうじゃ、この娘がそなたの嫁じゃぞ。慈しんでおやり」

アデルは入り口から動こうともせずに、王女を見やって一言告げた。

「慈しめと申されましても……女子など、私には不要です。私は僧になりたいとあれから何度も申しておりましょうに……」

不浄のものとばかりに侮蔑するように王女を見やり発せられた言葉に、壁の向こうに居たメルヴィルは眼鏡をついと指で押し上げると、肩を竦めてみせた。

「女嫌い、ですか。やれやれ……妙なことになっているようで」

エッレミアーラの王室に嫁ぐもの、婿として入る者があった時には、必ずあることが王室主催にて行われることになっている。

それは、この闘技場にて行われる、戦士たちの血みどろの戦いである。

新たな血を迎え入れるべく、その迎え入れられる側の一族の者の血を流す。古来よりもそうしてエッレミアーラでは血を流させてきたのだ。

後宮に迎え入れられる女達の血筋の者――稀に女王の婿として入る血筋の者もあったが、そのことごとくはその血筋の近い者の血をもって行われてきた、言わば儀式であった。

けれど昨今、それは変化を見せてきている。

王室に入る者と言えば、当たり前ではあるがそれは貴族の者達になる。

その貴族の尊い命を犠牲にするのは如何なものかと言われるようになり、いつしか奴隷を代わりに戦わせるようになったのだ。

そうして身内である貴族が関らなくなったことで、それは貴族の者達が流す血の流し方よりも、最も残酷な方法で行われるようになり、現在ではあまりにも恐ろしいものに変化を遂げていた。

フィーネは男に訊ねる。

「ねえ、あそこに居るのはガイロードさんじゃないの？」

「……」

男は答えなかった。

観覧席からじっと見つめる者達の眼には、地の底のような場所に檻に入れられ中央に置かれたアイアンバッハの姿がある。

フィーネは一体これから何が起こるのかと、何故か急に不安になってきた。かと思えばひっと引き攣れた声をあげてフィーネがその場で腰を浮かせた。

男はフィーネを支える様にしてその背にそっと手を這わせるが、見るなとその目を隠してやるような優しさを見せようとはしない。

それも当然だろう、これからアイアンバッハは男とフィーネのた

めに、野獣どもに食らわれることになるのだから。

「よく、みるんだ」

男はフィーネの身体が崩れないように優しく、けれど逃げられないように固定する。

「い……嫌よ。だって……何あれ！……怖いわ」

フィーネは震えながら底を凝視し続けた。怖くて目を離せなかったのだ。

アイアンバッハの居る中央に向かって今、闘技場の下にあるほの暗い穴倉から、一斉に這い出てきた獣たちが迫りくる。

唸り声をあげ、檻に飛びかかり、どうにかして檻を引きはがそうと全員が躍起になっている。

数十という数の獣が檻に向かって突進していったのだ、恐ろしく感じるのも当然だった。

引けた腰はもう、立たない。腰が抜けてしまったようだ。

フィーネはがくがくと震える自らの身体をかき抱き、そしてもう見たくないと男へと助けを請うが、男は助けるどころかもっとよく見つめるのだと言って、逆に底を見せるためにフィーネの身体を前に押し出すようにしてくる。

「い、いや……やめて……」

怖い怖い怖い。どうしてこんなことをするの――フィーネは思った。

男は今までフィーネにこんな酷いことをしようとはしたことがなかった。いつだってフィーネのことを守るために戦ってくれていたのだ。

屋敷の古い使用人としてよく仕えてくれた男の名は、キースという。なんでも王宮に仕えたこともあるほどの腕の持ち主で、今はハズルの護衛兵として仕えてくれている、優秀な兵士である。

ハズルの信頼も厚く、そしてキース自身それを一度として裏切ったことなどなかった。

だというのに何故こんなことをしてくるのかと、フィーネは混乱する。

これは立派な裏切り行為だ。

ハズルの娘のフィーネにこんなことをすれば、不興を買うのは必至だ。けれどキースはあえてそうしている。

何故、なのだろうか？

「お願い……止めて、止めて……キースお願いだから……」

フィーネは檻を襲う獣たちが、人型をしていることに気がついた。獣は全て、人間だったのだ。

アイアンバッハを襲っているのは自分と同じ人間だ。それがアイアンバッハを食らい尽くそうと檻を腕の力だけでねじ切ろうと腕を伸ばし、掴み、引き寄せ、叩きつける。

凄まじいほどの怒号、罵声、悲鳴。

ある者は前の者を押しのけるために怪我をし、ある者は邪魔をしてくるなとその場で喧嘩になり、ある者はただ痛いと泣き叫ぶだけ——本当に酷い惨状だった。

そして、何が一番酷いかというと、その場面を見ても、誰もが止めようとしないと言うことだった。

助けを求めるように回りを見渡せば、心底楽しそうに、身を乗り出し笑っているものもいる。背筋を氷が伝う。信じられない光景だ。

「なんで、誰も止めないの？」

がくがくと震えながら涙を零すフィーネの目に、それはあまりにも残酷に映りこむ。
キースはハズルから言われていた。
「あれが運びこまれてきたら直ぐにフィーネを連れて出ていくように。分かったね」
けれどその命令をあえてキースは破っているのだ。
キースはフィーネの掴んだ肩を更に強く底へと向ける様にして押すと、告げる。
「ガイロードは私と……あなたのためにああして惨たらしく殺されようとしている。さあ、よく見るといい。目に焼き付けるんだ……あれは私と、お前の――罪だ」
途中から言いまわしを完全に変えて言葉を発しているのだが、フィーネはそんなことに気づきもしない。それどころか鋭く切りつけるような言葉に身が竦んだように身体を縮め、ただ辛そうにしていた。
「つ、み……」
フィーネは呆然と呟く。
つみ、罪、何をもって罪と言っているの？

16（血の宴の開幕）（後書き）

中々難産で筆が進みません。
むーん

17（さあ、存分に殺し合いなさい）

キースの言葉が理解出来ない。いいや、理解したくなかった。
ただ恐ろしいとフィーネは泣いた。
けれどそんなフィーネの肩を掴んで尚も恐ろしい事実をキースは突きつけてきたのだ。
それは日々真綿に包まれ慈しまれ育てられたフィーネにとって、なんと残酷な仕打ちだっただろうか。

「あの娘――イリヤは、お前の代わりに王宮に行き、近く無残にも殺されるだろう。ガイロードはここで罪人達の餌食となり……イリヤは王宮にとりついた魔物の毒牙にかかり――全ては、お前のために行われる、身代わり劇なんだよ」
「わたしのため……」

喉が何故だか嫌に渇く。
ちりちりと痛いほどだ。
鼓動も追いかけっこをした時のように、いやそれ以上に早く打つ。

「お前を思うあまり、旦那様は――いいや、ちがうな。あの豚野郎は、私に生贄となるべくあの二人を探させた。フィーネ様、……知っているかな？あの二人は私と……お前の代わりに殺されるため、ただそれだけのために用意された……哀れな生贄だ」

生贄、と言う言葉を聞けば、ぶるりとフィーネは震えあがる。
あまりにも不吉な言葉だ。
神に捧げる生贄の山羊を殺すとき、フィーネはいつだって恐ろしくて泣いた。神はどうしてそんな惨い仕打ちをしろと言うのかと、司祭にも訊ねたほどだ。けれど司祭は言った。

「それだけ惨いことをせよと言うのは、神は大変弱い方なのでしょうね。我々を試しておいでなのですよ」

本当に自分のことを信奉しているのであれば出来るだろうと試しているのだろうと言われ、神の悲しき心にまた泣いた。

だからこそフィーネは疑わないで、私の心を。あなたを一途に慕う心をと毎日のようにあれから祈りを捧げ続けてきた。

神はどれほど残酷なのだろうか。

「だめよ……だって、ガイロードさんが居なくなったら……イリヤが悲しむわ……」

呆然と前を見て告げるフィーネに、まだ分からないかとキースが苛立つように言う。

「だから、まだ分からないか――お前のためにガイロードも死ぬ！イリヤも死ぬ！だから、イリヤが悲しむはずがない！お前のためにあいつも死ぬからだ！！」

死ぬ――その言葉が脳裏にじょじょに染みわたっていくと、フィーネはふつりと緊張の糸が切れでもしたのか、口を大きく開き、甲高い声をあげて叫ぶ。

「いやあああああああああっ！」

それはあまりの恐ろしさに、あまりな現実に、フィーネの気がふれた瞬間だった。

叫び声をあげ続けるだけで、正気を失ったフィーネを無情にもただ見下ろすと、キースはアイアンバッハの最後を見届けようと闘技

場へと目を向けた。
そこでは今まさに、アイアンバッハの入れられた檻が破られようとしていたところだった。

＋＋＋

檻が崩れた瞬間、ばらばらと柱が何本もアイアンバッハへと向けて倒れ込んできた。それと共に頭上の天井が崩れ落ちてくるのが見える。
一撃で終わってしまうか――誰もがそう思った。
今回運びこまれた奴隷はなんだ、騒ぎもしないでつまらないと思っていた時のこれである、見世物として面白味の欠片もないこれに、一同は肩を落として残念がった。
――が、それは早計に過ぎた。
アイアンバッハは崩れ落ちてきた天井を手のひらでがっしりと受け止めると、それを眼前に迫る者達の前にずんと盾にするようにして置いた。
それも置いたとは言うが、その根っこは足元の鉄板に突き刺さり、もう抜けることはないだろう。それほどにアイアンバッハが振り下ろした力が凄まじかったのだ。
ずんと叩きこむようにして地面に突き立った鉄の壁に挟まれるようにして半身をぶつ切りにされ死亡したものもいた、首が落ちた者もいた。腕が千切れ飛んだ者もいた。
悲鳴と共に血しぶきがアイアンバッハに降りかかる。けれどアイアンバッハはそれを何を思うこともなくただ冷静な目で観察していた。
今彼の中にあるのは、使命を果たさなければという、強い意思だけだ。

王女を救いだす事、それこそが今、アイアンバッハの中にある唯一の使命だ。

それには何をしなければならないか――まずは生き残ることが必須だ。

そしてこれが終われば――アイアンバッハは顎を引いて強く唇を引き結んだ。

服の下から取り出した小刀を使い、迫りくる腕を薙ぎ払う。ざっと肉が裂ける音と共に新たな悲鳴が木霊する。

こんなものでも無いよりはましだった。血で滑らないようにしっかりと小刀を握りこむ。

「何暴れてんだ！てめぇは死ぬために用意されたんだろうが！！」

暴徒の一人が腕を切りつけられ、悲鳴を上げつつ抵抗をするなと言ってきた。けれどアイアンバッハはこれに応じることが出来なかった。

当たり前だ。自分から死にたいと本気で臨むものなど居ないのだから。

「私は生きる。アッシュのために」

静かな目だった。

「うるせえ！！俺らのために死ね！！」

傷つけられた腕をだらんと垂らしながらも目だけは鋭く罪人は叫ぶ。

アイアンバッハをこの場に運ぶ兵士が言っていた言葉を思い出す。

「そうか……お前は何も知らされずにここに連れて来られたのか。

ハズル様も酷いことをなさる……」
「だが、それも慈悲と言うものなのかもしれないぞ。知っていても変えられない運命なら、知らないほうがいいことだってあるさ」
そうぽつりと呟く兵士に、もっともなことであると頷くと、もう一人の兵士が言った。
「今日ここで行われるのは、見世物だ。お前は王家入りをする家の者の血を、闘技場で供物と称して流すしきたりがあるのは知っているか？」
「いや……初めて聞きました」
アイアンバッハが素直にこう答えると、奴隷風情では知らなくとも無理は無いと言う。
「まあ、大概が知らないな。――見世物って言っても、これはちゃんとした契約みたいなものなんだ。良く聞いておけよ？」
「ここには奴隷兵士が連れて来られるが、王家入りをする側の奴隷が勝てば、その家では報奨を約束され、奴隷も奴隷から平民になることが出来る報奨が出る」
なるほど、だからこそ強い兵士をと請われるわけかとアイアンバッハは頷いた。
けれど続く言葉にどうしてハズルがキースを出さなかったのか、その理由が判明したのだ。
「そのかわり、簡単に勝てる相手は出て来ないと思え。向こうも必死だからな、強いなんてもんじゃないぞ。相手はお前を殺せば生きてここの地下から外に出ることが出来る、死刑囚や無期懲役の凶悪犯罪者達だ。お前を殺した者こそが、ここから外に出ることが出来

る――言わばお前の手にする報奨と同じようなものだ」

恩赦ってことになるなと頷く兵士に、アイアンバッハは唸った。

ならばこれから行く場所は、戦場なのか。

それもリニムどころか仲間の居るオルキスよりもはるか南東に位置する砂漠の国で、孤立無援で戦わねばならぬのだ。

胸元にある小刀を粗末な服の上から触れると、その存在感に多少だが、安堵を覚える。

今の命綱はたったこれだけだ。何を思ってこれをキースが寄越したかは分からないが、今だけは感謝しておこう。

この闘技場の見世物は、貴族たちの悪趣味な道楽として知れ渡っているのだろう。見ている兵士たちの目は、どれも一様に醜悪な物を見る様に、辛そうだ。

けれどそれとは真逆に貴族たちの目はどれも爛々と輝いている。

その瞳にはこうあった――殺せ！と。

まるで獣のように目の前の背を飛び越え、頭上より飛びかかってくるこれを、アイアンバッハは足元にあった柱を足の先でこれを器用に踏みつけて立てると、これを手に取りそのまま槍投げの要領で飛びかかってくる相手の頭を貫いた。

逆に迫りくる者達の中に、柱を手にアイアンバッハを狙いつけてくるものがあったが、心臓目がけて突き立てられようとしていたその柱をアイアンバッハは片手で掴むと引っこ抜くようにしてこれを奪うと、掴んでいた男をそのままに柱をぶんと大きく振りまわす。

「ぎゃあっ！」

男は宙に勢いよく放りだされると、そのまま罪人達の上に落ち、踏まれて死んだ。

柱は人の腕ほどはないが、王女の細い腕くらいの太さはある。案外太いそれは立派な武器になった。小刀では近距離しか戦えないが長さがある分、柱は戦える幅が広がる。

アイアンバッハは奪った柱で更にぶんと振りまわし近づいてくる者達を薙ぎ払い、一歩も寄せ付けなかった。

けれど罪人達の相手で精いっぱいだったのだろう。

「――射かけよっ！」

上から雨あられと矢が降り注いでくるのをどうすることも出来ずにアイアンバッハは呆然と見やった。

それはこれではつまらないと、一方的過ぎる殺し合いに、面白味を持たせるために放たれた王妃からの殺矢だった。

ついと笑みを浮かべる王妃の足元には、侍る様に膝の上に頭を置いて、だらりと肢体を投げ出した王女の姿があった。

王女の姿がはるか彼方に見え、思わずアイアンバッハは彼の人の名を叫ぶ。

その瞬間、王女の瞳が揺れたように見え、アイアンバッハはぐっと更に目を見開いた。

アッシュ……毒が抜けたのですか！？

ご無事なのですね！？

それはもう、一瞬のことだった。

気を抜いたその瞬間に、アイアンバッハの胸に鋭い矢がトンと突き立った。

18（恩人、だが……）

胸に突き立ったと思ったそれは、カッと光が周囲に溢れた瞬間、その場に変化を露わした。

アイアンバッハの胸に突き立っていたはずのそれは、いつの間にきたというのか、アイアンバッハの前に仁王立ちに立つキースの肩に突き立っていたのだ。

「！！」

「……っ！……矢張り、きついな」

突き立った矢をどうにか堪えると、アイアンバッハに何をしているんだとキースは叫ぶ。その顔には死相が出かかっていた。

「余所見をしている暇などない！死にたくなければ動け！」

「なぜ……ここに？！」

ごくりと生唾を飲み込み唸るようにして言えば、キースはその小刀だと言う。

ぶら下げた曲刀を手に、自由の利かなくなった腕を垂らしたまま、曲刀を残った腕でまるで蛇のようにしなやかに蠢かせ、頭上から降り注ぐ矢を次々と払っていく。

状況は一転した。

「なんだあやつは」

ギュイファは美しい眉間にしわを寄せると、そのまま更に矢を次々と放てと命じた。

「乱入者など認めぬぞ。生きて出すでない！あの場にいるものを全て殺せ！殺すのだ！！」

曲刀はキースの腕の延長のように、自在に振るわれる。まるで舞いを見ているかのごとくだと、ほうと息を吐けば、何を見惚れているんだと揶揄された。

「怪我をしていながら余裕そうですな」

揶揄するキースに背後を任せ、怯えながら蹲ってしまった罪人を担ぎ、アイアンバッハにそれを盾に迫ってきた罪人を切り捨てる。仲間を盾に迫るとはと、なんとも言えない苦々しさを感じた。

「ぎゃあああっ！」

二人重ねて切ったわけだが、なんと後味の悪いことだろうか。けれどこちらも生死を賭けた戦いだ。生き残るためには手段を選んで――などと綺麗事など口に出来ようはずもない。

死ぬわけにはいかないのだと気迫をこめて小刀を振るった。それを見ていた罪人達も、なるほどそうすればいいのかとそれを見て閃いたようだ。次々と負傷して動けなくなった者を担いでは突進してくる。

これに応戦しつつキースと場を忙しなく入れ替え立ち替え武器を振るうと、キースが静かに言葉を紡ぎ始めた。

「――済まなかった」

何のことを、とは聞かなかった。

何とはなしに分かるような気がしたからだ。

キースは言った。

「旦那様には借りがあった。昔、命を救われたことがあった。部隊の責任を全て押し付けられ、殺されかかった時に……救われたのだ」

「……そうか。命の恩人か」

「そうだ」

肩口からばっさりと切りつけ、そのまま鳩尾に蹴りを入れて曲刀を抜き去ると、キースは矢が邪魔だと言いながらも罪人の中に頭から突っ込んだ。

「借りがあった！だから今まで尽くしてきた！だがっ……腕の立ちそうなものを連れて来いと言われ、連れてきてしまった！まさか、殺す為とは思わなかった！！」

それは言い訳めいた台詞だったかもしれないが、事実なのだろう。キースは今までハズルの言うがままに生きてきた。それは借りがあるため、恩義があるためだった。

逆らわず、訊ねず、だからこそ疑問にも思わなかった。

だが――

「三日前に言われたのだ、お前を私の身代わりにしようと」

荒い息になりながら、キースは赤褐色の髪を汗で濡らしながら言葉を吐き出すように言う。

辛かったのかもしれない。ずっとずっとどんなに吐露したくとも、誰にも出来ず。

アイアンバッハに己の背を預け、息を整えつつも迎撃に当たっているキースに、アイアンバッハは無言だった。

「娘のためにハズルはイリヤを連れていった。その時には既に、……イリヤには毒を盛られていた。私は逃げられないと確信した。――だからお前に小刀を預けた」

アイアンバッハは小刀、と言われて手の中にしっかりとある、確かな感触を握りなおした。

「それには持ち主が危険と感じた時、私を呼び寄せる様にと魔術をかけてある――身代わりになるようにと」

元はフィーネかハズルのためと魔力を込めておいたものだったのだが、まさかこんな使い方をするために使うとはと自嘲気味に語るキースにアイアンバッハは唸りを上げた。

「では……」

矢張りあの時矢は、アイアンバッハの胸に突き立っていたのだ。

「予定ではあの時お前の代わりに死ぬ予定だったんだが……中々どうやら、簡単には死ねないようだ。もうひと働きくらいしろということだろうな」

矢だけあり、肉に食い込んだそれは血を流すことなく、ただ突き立っている。だが、突き刺さり続けているために、キースの疲弊の仕方は尋常ではなかった。気力だけでその場に立ち続けているような状態だった。

その状態ではもう――そう言おうとしたが、キースはアイアンバッハに獰猛な笑みを向けると、駆けだした。

「こっちだ！続け！」

「逃すな！矢を放て！！」

二人は迫る矢を背後に、罪人達の飛び出してきた穴倉の中に飛び込んでいった。

＋＋＋

身体が言うことを利かないが、不思議な夢を見ていた。

王女はただ人形のようにして、ぼんやりと眼前を見据えているだけなのだ。そこに申し訳なさそうにいつも謝る声が聞こえる。

「――こんな小さな子供だったら大丈夫だと思われたのか……本当に済まない。絶対に出してあげるからね」

優しい声音にまるで楽でも奏でられているようだとうっとりと目を閉じた。

夢の中でその声の主は、優しく優しく慈しむようにしてくれた。

ただ、他の人間が居るときは、冷たく氷を思わせるほどに、その声音は一瞬にして色を変えるのが不思議でたまらなかった。

何があったのか気になっていれば、声の主は誰も居なくなってから、申し訳なさそうに詫びるのだ。

「ごめんね。君が好かれていると……殺されてしまうから。だから……ごめんね」

その声はとても悲しい色をしていると、ぼんやり思った。

18（恩人、だが……）（後書き）

キースもキースなりに考えていたのです。

19（彼にとって恐ろしいもの）

我が子アデルを目の前に、ギュイファは苛立たしそうにしていた。後宮にアデルのために用意した娘は上は適齢期をとっくに過ぎた四十過ぎの女から、下は適齢期真っ盛りの十五の女までを用意した。貴族に娘を出させ、奴隷の中からも美しい娘を取りたててやっては後宮に籠めてやるが、それでもどの娘に対しても、アデルはいい反応を見せた試しがない。

「僧になど、王子であるそなたがなれるはずがなかろうが！」

そう、王を継ぐはずの大切な我が子アデルは王を継がず、よりによって僧になりたいなどと世迷い事を口にしているのだ。

「おじ上はそうしておられました」

ギュイファを視界に入れないようになのか、そっと目を閉じてアデルは母の前に背筋を伸ばして立っている。

椅子に全身をゆったりと預けていたギュイファは我が子の静かな言葉に全身を怒りに震わせる。

「おじとそなたは違うであろう！そなたはこのエッレミアーラを統べる王になる者であろう？！その大事な身が何故分からぬ！この……愚か者が！」

脇に立つ金の大皿を持たせてあった奴隷の腕から、上に乗った果物が落ちるのも構わず、ギュイファは大皿をアデルに投げつけた。

がしゃんとアデルの胸にぶち当たったそれは、アデルの胸を切り裂くと、一筋の血を流させた。

すると途端にギュイファは血相を変えてアデルに飛びついて泣き叫ぶのだ。

「いやあああああああっ！お、おおお……アデル！アデル！アデルの胸から血が！！誰か！侍医を呼べ！はよう！」

取り縋り泣き叫ぶギュイファに、アデルはこれくらい何ともないから離れてくれと鬱陶しそうに言う。けれどギュイファの耳にそれは入っていかなかった。

アデルはそんな母をいっそ哀れむかのような眼差しで見つめる。アデルのような大きな息子がいるとは思えぬ美貌を保ちながら、どこかおかしい母。

けれどアデルにはこの母をどうすることも出来ず、そしてどうにかする気力も、最早ない。

やっと落ち着いたギュイファに一言、では暫くの間、新しい娘に限り共に過ごす時間を多く取りますので、暫くはそれで様子をみてくださいとアデルの側で譲歩をすることで和解となった。

「おお！そうかそうか。そうなるとフィーネの香がはよう抜けると良いのう」

「……そうですね」

アデルにはちっともそうは思えなかった。

今はまだ人形だからこそ、王女は生きていられると、そう信じていたからだ。

通常、タラシュワール香が抜けるのは、随分と時間がかかると言

われている。と言っても、王女のように完全な泥酔状態まで落とされてしまえば――だが。

「酔うほどに香を焚きしめて連れてくるなんて……ハズルは何を考えていたんだ」

自分の娘が可愛くはないのかと思いながら、ああと気がついた。

「それは母上と同じ……か……」

愛しいからこそすることもあるかと思いなおし、自嘲気味に笑う。

それは気づきたくもないことだった。

腕を引けばすんなりと起きあがり、ついてくる。物を口へ運べばすんなりと口をあけて租借をし出す。

それは最初に見たものを親と思う、鳥の習性に良く似ていた。

ここまでの早い回復を見せる王女に、ただ純粋に慕ってくる赤子のような愛らしさを感じ、父性のようなものを抱き始めていたのは王女がアデルの部屋に寝起きを共にするようになってから、たったの三日目のことだった。

それからずっと、王女はアデルの手に引かれるままに歩き、アデルの手から食事を摂り、アデルの腕の中で寝起きをするようになった。

アデルにはまだ子はない。

それも当然だろう、アデルは女を抱かない。だからこそ子は生まれなかった。

いや、一度子を設けたことはあった。だが、悲しいことに子は死産だった。

それからと言うものアデルは寺院に籠り、職務のために王宮へとやってくるというようにしていて、どちらが本職か分からないほどには寺院に居る時間を長く取っていた。

ただし、寝泊まりする場所は寺院と王宮のちょうど中間地点で取ることが決まっており、一度足りとてアデルは後宮へと、足を運んだことは無かった。

「さあ、フィーネ。今日も私は仕事だよ。起きようね」
「……」

こくんと頷く王女を起こすと、そのまま王女の寝巻の薄い衣を奴隷達がはぎ取っていく。
アデルも衣をはぎ取られ、僧の黒一色の衣装に着替えると、こちらも着替えの済んだ華やかな衣装に身を包んだ王女の手を取り居室を後にした。
日々生気を取り戻しつつある王女の瞳はとろりと蕩けきってはいるものの、その奥には力強さが垣間見える。
それを見て安堵の息を吐き出すと、アデルは王女の小さな身体を膝の上に乗せて食事をさせ始めた。
そうしていると本当の親子のようにすら見える。

「ほら、口をあけてごらん」
「……」

ゆっくりと開けられた口に、アデルは果物を小さく切ったものを入れてやる。赤い実が、とろりと滴を垂らし、とても美味しそうだった。

「おいしいかい？」
「……」

アデルが首を傾げるのを感じ取ると、王女は首をこてんと傾げる。

それが何だか面白くて、アデルは笑った。

「本当に人形のようだね、君は。作り物めいた美しい容姿に、指先まで神が作ったのではないかと思えるほどに整った爪、指――毛先までそうだ。美しい。それなのにそんな動きをされたらもう、同じ人だなんて思えなくなる」

美しい娘達は沢山見てきた。

けれどどんなに美しくとも、触れれば何になるか、知っているだけに恐ろしく、アデルは触れることが出来なかった。

愛しさよりも恐ろしさがあった。だからこそ何もしてこなかった。

「だと言うのにね、君はそんな私の心の奥深くにするりと入り込んできてしまって……それでは困るよ」

アデルの目にはゆったりとした布をたっぷりと使ったパンツをはいて腰かけている王女の姿は、神々しいばかりに映った。

「君の香が抜けきったら……君も……恐ろしい姿になってしまうのかな？」

辛そうにくしゃりと顔を歪めたアデルは泣きそうな顔をしていた。

アデルの容姿は整っているが、その髪は今、僧となってからは短くされてしまい、ぶつ切りにされて寒々しさを印象として与える。

僧の衣装をまとっているだけで、どこか近寄りがたい雰囲気を周囲に与えていたアデルは、実際は垂れ目で温厚そうな顔立ちをしている。

そこにきて瞳の色は美しい褐色をしている。人懐こそうな顔立ちだと言うのに、子を失くしてからと言うもの、悲壮感と近寄りがたい雰囲気のため、周囲に人はあまりいなかった。

それはアデル自身周囲にそう見せていたのだが、それをいともたやすく打ち破ってしまったのは王女だった。
ただ声を発することなく腕の中で抱かれているだけだと言うのに、王女はその瞳の奥の力強さでアデルを励まし、慰めた。
たった三日でこれだ。もう二度と女性を近づけさせたいと思っても居なかっただけに、これにはアデル自身、驚いたほどだった。

「君は変わらないような気がするんだ……」

それは願いではあるが、適うと信じていた――確信していた。

「今度こそ、守るから……君が変わらなかったらその時は――」

君を全力で愛そう。アデルは膝の上の王女に悲しそうな瞳で笑いかけるとそう心に誓った。
その憂いの中に愛しさを滲ませた表情を見られていたとも知らずに。

20（嫉妬の渦巻く後宮）（前書き）

※イジメとかそういうのの描写が苦手な人はこの回は飛ばしても大丈夫だと思います。

20（嫉妬の渦巻く後宮）

すでに日課となった王女に夕食をとらせながら自分も軽く食事を取ると、王女の横でアデルは本を読んで寛いでいた。

相変わらず反応をほとんど見せない王女に、アデルはそれでも心穏やかに過ごせる日々に満足していた。

だが、そんな安らぎの時間を突然のギュイファの訪問が壊した。

王族なら当たり前として行われる親子間のそれぞれの部屋へ訪れる前の女官達を通した前触れなど、ギュイファはしたことなどない。

母がただ息子に会うのになぜそのようなことをせねばならぬのだというのがギュイファの言葉だが、その言葉通りにいつも突然に息子の部屋へ訪れるのだ。

愛しい息子からのギュイファに対する礼ににんまりと笑みを浮かべると、王女へギュイファは目を向ける。

あの日、闘技場で見たときよりもしっかり自分の力で座っている娘に満足そうに頷く。

「香の力もだいぶ薄まったと見えて、手を引かれれば歩けるようにまで回復したのであろう？」

王女のことを指して言われたその言葉に、ぎくりとしながらもアデルは恐る恐る頷いた。嫌な予感がする。

「ほんに結構なことよのう。そなたとも仲睦ましい様子であるのは皆からよう聞いておる。だからの、後宮にもう入れてもよかろうと思うのだが……」

どうか、と言葉を続けようとしたギュイファの言葉に被せる様に、アデルは叫ぶ。

「あのようなところ！誰が行きますか！！」
「おやおや、だからといって、いつまでも同室ではそなたも窮屈だろうて。の？だから――」
「いりません！そもそも、仲睦ましいといいましても、フィーネに私が感じているのは父性としての情！愛しいと思っているのは捨てられた子としてフィーネが哀れで……だからです！！」

決して女として求めたわけではないと言い募る我が子に対して、何故か満足そうな笑みを深めると、潔癖なのは変わらずかとところころとギュイファは笑う。
けれどギュイファは王女を後宮へと籠めるように部下へと命じるのだ。

「なっっ！？返してください！まだフィーネは……フィーネはまだ香の力が抜けていないのですよ！？」

アデルがフィーネの細い腕を取ろうと腕を伸ばすとそれは兵士に阻まれた。ギュイファが兵士に命じてアデルを拘束してきたのだ。

「放せ！フィーネ！フィーネ！！」
「返して欲しくばそなたもきやれ。あそこはそなたの思うほど悪い場所ではないぞ？」

ふふと笑いギュイファは王女を連れて後宮の奥深くへと姿を消した。
後に残されたアデルは、真っ青になりながらも拘束が解かれたと同時に二人を追いかけるのだった。

後宮の最奥にある部屋に籠められたと同時に、言うことのきかない身体に早速嫌がらせが始まったのは仕方ないことかもしれなかった。

あんなにも大切に慈しんでやろうと言っていたギュイファは満面の笑みを浮かべて王女をぽいと、まるで放るようにしてその部屋に置き去りにして早々に出ていってしまったのだ。

後に残された王女は、ギュイファの放ったこんな言葉に群がる女達の嫉妬の的となったのだ。

「この娘が今のアデルのお気に入りじゃぞ。仲ようするがよい」

アデルは一度たりとこの場に足を運ぶことはなかった。

いくらアデルに対する情がわきようがない状況といえど、それでも後宮に秘されると女達は最初、思うのだ。自分だけは違うと。自分のためにはアデルは通ってきてくれるはずだと。

そして女達は毎回夢に破れる。

アデルは来ない。一度も。誰のためにも。

いくら着飾ろうともアデルは来ない。アデルのために自分を磨き、競い、どれほどの長い間を待とうとも彼は来ることはないのだ。

閉鎖的な空間の中、皆同様に夢破れたものが集まる場所。そんな場所に言わば勝ち組である王女が放り込まれればどうなるかなど火を見るよりも明らかだった。

流石にギュイファが姿を消してからのことだったが、女達は我も我もとどんどんと王女に宛がわれた部屋に集まってくる。

そして人形のように打ち捨てられた王女を上から見下ろすと、頭の先から舐めるように見回していく。

「ねえ、その子なの？アデル様に貢物として献上される時に薬盛られてきた娘って」

どこで知ったと言うのか、ハズルが行った行為まで知っている女達に、後宮の警護を任されている女兵士は部屋の隅からうろたえる。

それと同時に馬鹿なとも思った。

外部からの情報は遮断してあると言うのにいつ知ることが出来たのか。げに女とは恐ろしきかなと、同じ女の身でありながらも空恐ろしいものを感じる。

色とりどりの山と積まれたクッションの上に投げ出された王女のほっそりとした足首を持ちあげるとふんと鼻で笑うと、無数に編んだ細かいみつあみを一つに括った女が嫌らしそうに言う。

「嫌よねぇ……どうせ薄汚い野心のために親に売られてきたんじゃないの？」

タラシュワール香と言えば通常は媚薬として用いられるが、これを焚き続けることにより、意識を混濁させるまでにすることが出来る、言わば人をただの器にするためのものである。

人を人たらしめるための意識を奪う、恐ろしい秘薬としても用いられるのだが、女達は媚薬としての意味として王女の親が使用してきたのだと考えた。

快楽の縁にどっぷりと突き落とされて献上された嫌らしい娘かと嘲笑う。

「どんな教育をされてきたのか……どうせ親って奴隷じゃないの？」

多くの細い腕輪を細腕に着けた女は王女に嘲る。

「奴隷？じゃあ、あたしとおんなじだ。でも香に漬けられて献上の時点で全く同情出来ないわね。アデル様の同情を買うためにそんなことしたんじゃないの？」

「いやあね、最低だわあ……」

たった一人だけ、この場所でアデルの寵愛を一身に受けている娘に対し、アデルの寵愛を一度たりと受けた事のない女達は怒りを感じた。そして妬み嫉みにかられ、身動きの出来ない王女を詰り、侮蔑し、あまつさえも暴力にで始まったのだ。

「ねえ、なんでこの子とんでんの？」

意識の無い王女を訝るように言う女に対して他の声と言えばこんなものだった。

「どうせ昨日の余韻か何かに浸ってんじゃないの？もしくは私らみたいなのの声は聞こえないってことよ」

「ああら、なら遠慮するこたないわね」

にやりと笑みを刻んだ口元を歪めると、女達は身動き一つ、瞬き一つしない王女へと腕を伸ばした。

狭い後宮などに籠められて、その上ここを出てはならないと言われているのだ。これでは出口のない感情の捌け口を余所に設けたくなるのは必定。

王女がそこに放り込まれたらそうなるだろうという、嫉妬や怒りの捌け口にされるのは当然の流れだった。

新しい女が増えるたびにここはそうして感情をぶつける相手を、まるで生贄を求める様にして求め続けてきた場所なのだから。

「……ッ」

ぱしんと鞭を打っても相手はびくりともしない。ただ首をのけぞらせたままに固まっている。

女達はまるで、新たな玩具でも手に入れたかのように目を輝かせ

て各々手に武器を持ち、王女を殴りつけ始めたのだ。

「やだ、何これ面白い。ほんとに抵抗しないわよ？」

「あははは！ねえ、アデル様ってそもそも女を抱けるの？ねえどうなの？」

嫌らしい質問を浴びせかける女に対しても王女はとろけた瞳をのぞかせるだけだ。それが女の怒りを更に煽ることになろうとも、王女は意識がここにないため知り様がない。

更にはこんな提案までなされる始末だ。

「こんなに小さな身体でアデル様に抱かれたのかしらねえ？ね、どうせならひん剥いて奥の奥まで見てみる？」

「そうねえ。御開帳～」

手入れの行き届いた節すらないような細い指が、いくつもいくつも王女の両足首を掴んでゆく。

21（報復の火龍）

誰も止めようとはしなかった。止めれば反感を買い、新たな生贄と共に嬲られるのが分かっていたからだ。

それは同じく女兵士の思うところでもあった。

今入っていけばどうなるか――今まで何度も何度も見逃してきた出来ごとだったため、あえて今度も見て見ぬふりを決め込んだのだった。

女達は笑いながら王女の纏っていた衣装を破き始めると、王女の瞳が初めて揺らいだ。

そしてぎりと目の前の女を睨みつけると、びくりと女は肩を揺らして怯えたようになる。

「なっ！何よこいつ！……睨みつけてきて！起きてんじゃない！」

怯えたように声をあげる女に、脇に居た華美な衣装をまとう女は訝るような視線をくれてから次に王女を見やった。

けれど言うのだ、そんなことはないと。

「嘘よ。さっきと一緒じゃないの。何言ってるのよ」

怯えた女がさっきのは見間違いかと思って王女の顔を注意深く見守っていれば、王女の瞼が一度閉じられ、次にあいた時にはかっと周囲に閃光が迸っていた。

そして気がつけば王女の周囲を取り囲んでいた女達は全員、ぐったりと力なく倒れており――そこにアデルが息を切らせてやっとのことで辿りついたところだった。

「フィーネ！！」

そこに居たのはぐったりと横たわるフィーネだが、その身体は全身鞭で打たれ――服は破かれぼろぼろとなった酷い状態の王女の姿だった。

それを見ればアデルは周囲に倒れた女達の姿に何があったのかと訝る前に、ただ純然たる怒りだけが込み上げてきた。これで何をなされたか、分からないような愚鈍な男ではなかった。

「また……なのか！またなのですか、母上！！」

アデルはフィーネを横たわる床から掬いあげると、その全身が熱を持って熱いことに気がつく。

「フィ……ーネ？」

その瞳は今、アデルをついと見つめていた。

「目が覚めたのかい？」

自らを取り囲む女達の魔力を吸い、王女の瞳は息づいた。

＋＋＋

メルヴィルは面白いものを見たと感じていた。

「まさかね、ああいった使い方をなさる方がいらっしゃるとは思いもよりませんでしたね」

ふむ、あれは参考にするべきところでしょうかと呟くと、そのまま石畳を踏みながら歩いて行く。

ここは闘技場の地下である、囚人たちを囲うところだ。

先ほどの二人を探していた兵士達が雪崩れこんできたが、メルヴィルが全てそれを出入り口で眠らせた。

こういった催眠系の魔法は何も、王女のみが得意とするところではない。むしろメルヴィルのほうが得意としているかもしれなかった。

睡眠、催眠、幻視、そういった他者へと働きかけるものはメルヴィルがよく工作のために使用する魔法だ。王女のそれとは年季が違う。

地下への出入り口を塞ぐ形で山と積まれた兵士たちを置き去りに、メルヴィルは奥へと向かう。

ひっそりとした息遣いさえ聞こえないことに、矢張り二人とも兵士――それも熟練の兵士なのだと内心思いながらも慎重に歩を進めていく。ここで下手な出会い方をすれば相手は手負いだ。出会い頭にばっさりとされかねない。

こつりと石を一つ蹴り飛ばすと、それが壁に当たったのを感じる。

特に反応はなし、か。

近くには居ないと見えるとゆっくりと光の玉を生み出しそれを先に進め、案内役をさせるが、その案内役が進んだ先に血だまりが見えた。

それも、まだ液体だ。渇いていない。

となるとこれはアイアンバッハたちだろうかと思いメルヴィルは案内をさらに進ませようと腕を伸ばした――が、上から殺気を感じ、思わず腕を引っ込めた。

途端凄まじいことが起きた。

ばさりと衣擦れの音をさせて男が曲刀を下にしメルヴィルめがけ

て落ちてきたのだ。

「ッ！！」

腕を引っ込めていなければどうなっていたか、メルヴィルは咄嗟に案内役の光の玉を呼び寄せ、ついで火炎を生み出すべき呪文を唱え始まった。

地下で火炎を生み出せば自分も危ういのは分かっていたが、メルヴィルの十八番は火炎だ。最速で相手へと叩きこめるのがこれしかなかったのだ。

「――火よ混沌より生み出された原初の炎よ、我の前に立つ敵を」

呪文をひと息にこめていくと急速に手のひらの中におさまっていく魔力を感じる。

手のひらの中に集まった魔力を炎の像にするべく脳内で固めていくと、意志を持ってそれは形を成していく――と、ここで素っ頓狂な声が目の前の無頼の者よりあげられた。

「メルヴィル殿!?」

うん、予想通りの相手だったらしい。

予想していたのは討ち漏らした兵士、またはアイアンバッハかキースだが、前者はほぼないと考えていたため、恐らく八割の確率でアイアンバッハかと考えてはいた。

とりあえず残り二割の安全のために炎を生み出したわけなのだが――瞬間、メルヴィルは手の中に生れてきている炎を見下ろす。ぼふっと音を立てて更に大きな炎となったそれは、アイアンバッハの上半身を軽く飲み込む巨大さに成長していた。

「……ああー、どうしましょう、炎。もう発動段階なんですが」

あと一語唱えればもう出せるんですがと言うメルヴィルに、アイアンバッハは消してくださいと喚くが爽やかな笑顔で言われてしまう。

「無理です。魔法ってそんな簡単に消せるもんじゃないんですよあっはっは」

「えええ！じゃ、じゃあ！ええとええと……どうすれば！？」

「もう面倒なので貴方が食らえばいいんじゃないですかね」

メルヴィルの手から抑え込んでいた魔力を解放すると同時に炎の龍が生み出された。

途端、それはアイアンバッハへとがぱりと牙を剥いたのだった。

「ぎゃあああああああっ！！た、助けてください、メルヴィルどのおおおお！！」

「あっはっはっは、私に刃を向けた罪です。有難く受け取りなさい」

「やっぱり単に怒っているだけですね！？メルヴィルどのおおおおお！！」

ぶすぶすと上着から黒煙を上げつつアイアンバッハはキースの元にメルヴィルを案内した。

「先ほど矢傷を負った者なのですが――看ていただけませんか？」

魔力が全くないアイアンバッハは癒しの呪文も何も使えない。

騎士団の中には癒しの呪文を得意とするものもいたが、生憎とここは外国である。それもこのような追われる立ち場では、誰に助け

を求められるはずもなく――傷薬の一つさえなく、あまつさえも火すらないこんな地下ではキースの怪我を看るのも容易ではない。

光の玉を呼びだしたメルヴィルに荒い息をするキースを見せればあまりにも酷く衰弱しているのが分かった。

「これは……早いところ矢を抜くべきですね」

応急処置の道具しか持っていないがやむを得ないだろうと言いつつメルヴィルは腰に巻いたベルトに下げられた皮の袋から小さな刃物と消毒液を用意する。

「私はあまり癒しの術は得意ではないのですが、仕方ありませんね。ないよりはマシでしょう。さ、矢を抜きます。いいですか……貴方」

キースは視界も定まらなくなっているのか、声を頼りにメルヴィルの方を向いて来るだけで、いいとだけ静かに言ってくる。

「これは……私に下された罰だ。だから……もういいのだ……」

定まらぬ瞳でメルヴィルを見るキースにアイアンバッハは声を荒げる。

「いいわけ……いいわけありません！私を救った貴方なのに！何を勝手に死のうとしているのですか！！」

それだけ言うとアイアンバッハはもう何を言っても無駄だと感じたらしく、勝手にやってしまおうと言うことなのだろう、キースの肩を抑えつける様にしてメルヴィルに矢を抜くように言う。

「なんだか気が進みませんが……まだ貴方には聞くことがあるんで

すよ、キース隊長」

過去の役職名を言われ、目を見開いてキースは驚く。

今のキースを見て、当時のキースを思い浮かべる人はまずいない。なぜならば顔が違い過ぎるからだ。

髭を生やし、髪を撫でつけ、すっきりとした面で出仕していたあの頃はまっすぐと前を見ていられたが、今のキースは前を見ることが出来ず、軽く視線をいつも下に向けて歩いていた。

前髪は面に汚くかかり、ざんばらな髪が全てを覆い隠している。お陰でキースの表情はその口元でしか知ることが出来ないため、他の使用人たちでさえキースはよく分からないからと不気味がられている始末だ。口数が少ないのも災いしているのかもしれないが、表情が分からないため、どうしようもなかった。

過去の己を知っている人物がいる、それも一番後悔しているあの過去を。それを知った途端キースはメルヴィルに掴みかかる勢いで跳ね起きようとするが、それは適わなかった。

上から暴れるキースをおさえつけるアイアンバッハは渾身の力でキースを抑えつけている。

「……お前、は……何を……ッッ！クッ、あっ！」

肩口に遠慮なく刃を突き立てると、矢を抜きだすために傷口を更に大きくするべく切開していく。そしてひと息にふんと矢を抜き去ってしまえばそこから血が一気に溢れ出てきた。

メルヴィルはそこから早かった。

消毒のためにそこに酒を注ぎ洗うと、次に血止めの止血剤を大量に落とす。後は清潔な布だった。これも袋の中にあったらしく手早く包帯を巻きつけていくその姿にアイアンバッハはいたく感動したようだった。

「素晴らしい手つきですなあ」
「これくらい軍人でしたら当然です」
にべもないこの言いざまに、がっくりとアイアンバッハは項垂れる。
まるでそれでは自分が騎士らしくないと言われているようだと感じたのだ。
気絶こそしなかったようだが、キースは荒く息を繰り返している。
これでは長く移動することは出来ないだろう。
「仕方ありませんね。私の隠れ家にご案内します。ついてきてください」
アイアンバッハはキースを担いでメルヴィルについていった。
地下の更に奥深くへと。
「地下……ですか？」
「ええ、穴倉の中ですよ。ふふふ、この国は存外、面白い作りをしているのですよ」

21（報復の火龍）（後書き）

メルヴィルはこういう子

22（僧衣をまとった王子と、それが初めての出会いだった）

意識が戻ったと同時に視界が戻った。

なんでだ？

暗闇にどっぷりと浸かりこんでいたのが嘘のように、目の前に光が射していた。

何の因果かまたもや視界がえられたことに安堵するよりもむしろ困惑の色しか出て来ないことに気がつくと、王女は内心で苦笑した。

おかしなことだったが、もう、目で見えるものは全て、汚いとしか思えなくなっていた。

悲しいことだがハズルから裏切られ、そして奴隷として売られたことにより、王女はどんなにも声で親切を装っていてもどこか邪悪なものが人に透けて見えたのだ。

それは視界を失ってから知ったことだったが、そうなってくるとむしろ今では、視界そのものが邪魔にさえ思えた。

見えるからこそ惑うのだ。では見えなければ耳で、そして全身の感覚で、視ようとするに違いないのだから。

だから今の俺には目なんて……不要なんだ。

見えない状態で騙されて、そして目を得られても嬉しくもなんともない。

ここで間違ってでもハズルやあの奴隷商人達の顔を見てしまったが最後、王女は地の果てまでも追っていってその姿を原形をとどめないほどに粉みじんに切って捨てるだろうから。

無駄に知りたくもない情報を得たくないがために、王女はそっと

瞼を閉じた。

＋＋＋

「殺すぞ」

舌が操れればそう口にしていただろう言葉は王女の口の中に留まり、いつまでも消化不良を起こしている。

意識を取り戻した後、身体中を痛めつけられたのはどういった理由からなのか。そもそも意識どころか身動き一つかなわなかったはずの自分にこうした行動をとるとはと、ただただ腹が立った。

抵抗も反撃も何もすることが出来ない弱者を痛めつける行為は、王女にとって吐き気を催すほどの嫌悪を与えるものだった。

そんな行為がここでは当たり前に行われていることを王女は悟る。なぜなら、自分に手を伸ばした者たちはその手になんの戸惑いも躊躇いもなくやっていたことが肌でひしひしと感じられたからだ。

だからこそ怒りがふつりとわいてきたのだろう。

そしてその怒りが全身を包み込むほどになった時、何故か急に視界が開けたのだ。

意識を失って、戻ったと思えば視界が生まれ――一体何なんだとただただ当惑するばかりだった。

そして今、自分を優しく抱き抱える肌が小麦色の美しい男は一体誰なのかと思うものの、恐らく――と、ある程度の見当がついていた。

こいつにやりたくなくてハズルは俺を寄越したのか。

意識が無い間の記憶は、王女はうつろではあったが多少はえてい

たため、あった。
後宮へ召し上げるのが嫌で王女を寄越したようだということだけは分かったが、相手の記憶は全くない。
意識を失ってからというもの、特に何らかの手出しをされた感覚もなく、覚えもなかった。まあ、完全に意識があったわけではないため、確実かと問われると辛いものがあるが、それでも恐らくないはずだった。
なるほど、ハズルが警戒する色情狂はこいつかと勝手な判断で納得をしてみたが、どうにもおかしい。
どこをどう見てみても、アデルは色狂いの王子には見えず、触れる体温は安らぎをくれるだけだ——そしてこの腕には覚えがあったのだ。

俺を暫くの間、助けてくれていたやつか？

王女はずっとずっと気になっていた。誰かが自分を庇護してくれようとして、ずっと傍にいてくれたことに。
何故そうまで優しくされるのか理由が分からなかった。
ハズルや奴隷市などを体験したためか、このエッレミアーラ自体が最悪な歴史として王女の中に刻まれていたために、この国でこんなにも優しくされるなんてと、いっそ怪訝に思ったほどだ。
けれどそれも直ぐに止んだ。
優しさに嘘いつわりがないことを肌で知って分かったからだ。
アデルが腕の中で大人しく抱かれている王女に訊ねた。

「済まない……君を巻き込んだ」

意味が分からなかった。
先ほどまでの女達は、全てアデルに好かれたいと願っていた女達だ。けれど振り向いてさえもらえないことに焦れた女達は、今まさ

にアデルの想いを一身に受け止める少女に牙を剥いた。
だからこその謝罪であったそれは、事情を知らない王女からすれば意味が分からず首を傾げるようなものだった。
ただ、他にも今の謝罪には意味があったのだが、アデルはそのことを告げるべきかと迷い――そしてはたと気がついた。
自分を見つめる目が、意思を持っていることに。

23（紛いものであるがゆえの穏やかな日々）

そっと王女の頬に触れ、その瞳が自分を映していることを確認する。――その頃にはもう、王女の瞳はもう、曇りかけていたのだが。それでもアデルをひたと見つめてくる瞳に、きちんと焦点が――精気が戻っていることに気がつくと、胸に何か熱くこみあげてくるものがあった。

「フィーネ？意識が……戻ったんだね？」

王女の意思を確認するかのように問いかけたアデル。

けれど王女は答える術を持たない。

舌はまだ、動かなかった。

視界がぼんやりとしてきたことに気が付くと、何故だと首を傾げたくなったものの、王女はこの偶発的に現れた視力に、最早憐憫の情などあらわす事もしなかった。

見えるからこそ騙される。

相手の気配をよく読み、そして相手の心の内を読む。そうしなければこの世界では生き残れないのだろうとよくよく肝に銘じて視界が薄れていくのを感じながらも見送ることにしたのだ。

どちらにせよ足掻いたところでどうすることも出来はしないが、それでも気持ちが全く違った。

視界を無いものと切って捨てることを出来てこその立ち切れた思いだったのだが、果たしてそれは良いことなのか悪いことなのか――目で見える世界そのものを憎み始めた証拠とも言えるその感情に、王女はまだ、気がついていなかった。

漆黒に染まりつつあった視界の中、アデルの口元が優しげに微笑みの形を取るのが最後に見えた。

「良かった！！本当に良かった！！」

手放しで喜んでくれるアデルの姿に、僅かに胸がちりりと痛む。

けれど王女は消えゆく視界にそっと瞼を閉じてそれを素直に見送るのだった。

＋＋＋

地下の迷宮を越えた先にあったのは、ある大臣の屋敷の地下だった。

一度地上に出たまではいいのだが、まさか有力者の屋敷の地下に続く道に案内されるとは思っておらず、キースは驚きに目を見張る。

「あなたは……一体……」

この屋敷は確か王族と縁戚関係にある、とある大臣の邸宅であったはずと思い出すと、キースはメルヴィルが何者なのかと訝るような目を向ける。

それはどう見ても疑っていますと言う目であるため、流石に向けられたメルヴィルも分かったらしく視線を返してくる。

けれど反応らしい反応を返そうとはしなかった。むしろ面白がっているような目を向けて、ついと口端を持ちあげて笑っていた。

「少し、腕を上げていただけますか？」

肩口に出来た傷に布を当て、そして包帯を丁寧に巻きつけていくのは女官達だ。治癒魔法をあてているのはこの屋敷に住まう魔術師。

お抱えの魔術師がいる時点で相当な家柄であることは分かるようで、アイアンバッハも驚いているようだ。
キースはメルヴィルのことも気になりはしたが、それ以前にこの大人しく手当てを受けざるを得ない状況が大きな不満となっているようだ。
憮然とした面持ちをしているキースにメルヴィルは笑って言う。

「そんなに気にいらないですか？」
「……当然だ」
「ですが貴方はまだ生きている。ハズル殿に貴方、おっしゃったようですね。まだ命があることに感謝し、この命尽きるまで尽くしましょうと。命がまだあることに奇跡を貴方は見出した。――だったらまだ、貴方は生きて何かをしなければならないという理由があるのではありませんか？」

だからこそまだ――いいや、また生き残ったに違いないだろうとメルヴィルは締めくくった後、にっこりと笑った。
その笑みはどこか、人の食えない笑みに見える。
キースはそれを聞いても無理だと頭を振る。
そう考えるにはキースは裏切りすぎている。命の恩人であったハズルを。そしてフィーネを。そして――
ふいに視線を感じて面を上げて見ると、アイアンバッハの視線をかちあった。
そう、この男をも自分は裏切ったのだ。
けれどアイアンバッハは静かな目でキースを見下ろして言うのだ。

「私はまだ貴方に生きていただきたい。そう……死に急ぐこともないのではありませんか？」

何があったかは知らないし聞きたいとも思わない。

何があったとしても、アイアンバッハは受け入れようと思うからだ。

けれどキースは自分のことを自分自身が許せないのだという。

「だからこのまま生き恥を晒すくらいならと……」

始末を終えた魔術師と女官が去った後、キースは寝台に突っ伏すようにして顔を埋めると、祈るように絞り出すような声で告げた。

「誰でもいいから俺を……殺してくれ……ッ！！」

「キース殿……」

アイアンバッハにはキースをどうすることも出来ず――なんと声をかけていいのか分からないそんな状況が苦しく、物悲しかった。

とても他人事とは思えなかったのだ。

キースは過去のアイアンバッハととてもよく似ている。だからこそ悲しく、苦しい。ただ見ているだけだと言うのに。

＋＋＋

言葉が繰れないだけで、王女はよく食べ、よく眠る。そしてよく感情をあらわそうと努力した。

それは何とかして外の情報を知り得たいからだったが、アデルにはそれが嬉しくて堪らなかった。

王女がアデルの傍にいる様にとの言葉にこくんと頷くとついてくるのが愛しくて、アデルは微笑ましいものでも見るような目で王女をそっと見つめる。

素直に愛しいとそう言えた。

仕事終わりのことである、アデルは王女の手を引いて中庭に行こうかと誘ってみせた。

「今日は天気がいいからね。庭師から伝達があったんだけど、珍しい鳥が来ているようだよ。見に行こうか？」

王女は小首を傾げるとどうしたものかと思ったが、断る理由もないためこれもこくんと頷いて見せた。

そうとなればとアデルは王女を連れて中庭へと向かうと、一面の花畑が見えてきた。花畑は一面、色とりどりの花で満ちており、むっとするくらいに花の匂いが濃厚にあたり一面に漂っていた。

そんな花畑の中に、そっと王女を引いて歩きだす。

「見えるかい？右側に咲いているのがここにしか咲かない花でね、なんでも他の地域では絶滅してしまった希少種らしいんだ。綺麗だろう？」

王女は答えられない代わりに、はにかむような笑みを浮かべた。

それは綺麗だねと言っているようにアデルには見えた。

実際はこうなのだが――

「くさいな、これ」

最低である。

花の形、美しさ、そして色彩。その全てを感じ取れない王女からしてみれば、匂いだけがその花を知る唯一の情報源であるためか――更には目が見えない分、他の器官が敏感なために花の匂いは強すぎ、臭いという異臭だけしか感じ取れなかったようである。

ついで言えば、様々な花の匂いがここには入り混じっており、今現在王女が感じられるのは最悪なくらいこの場所は臭い――の一言

につきるのだ。
なんとも残念なことである。

「これと、その脇に咲いてる花、こっちも可愛いだろ？薄紅色をしていて……この地域だと珍しいそうだよ。なんでも、本当はもっと北の方の種類だそうでね」

因みにその時の王女はと言うとアデルに見えたのは「ふうん、そうなんだ？」そのような反応に見えたものの、実際考えていたのは先ほど同様相当にひどいものだった。

「まあいいんだけどさ、それはそうとして腹が減ったんだけど？」

首を傾げてにこにこと微笑むだけなため、お互いに全く意思が伝わっていないのだが、今はこれでいいのかもしれなかった。
中身を知ってしまえば落胆するのはどちらも同じような気がしたからだ。

「やっぱりフィーネをここに連れてきて良かった。そんなに喜んでくれるなら、また連れてくるから」

王女はふんわりとそれはそれは可愛いらしく微笑んだ。
アデルはそんな王女に満足そうに微笑み返した。
傍目には素晴らしくほほえましい光景である。……実際はどうあれ。
知らないほうがいいことも、世の中にはたっぷりとあると言うことだ。

24（無垢な娘は己が罪を自覚する）

王女が日々をそうして何とか過ごしていけるようになった頃、身代わりを知らなかったとはいえ、アデルから――と言うよりも王家より隠れるようにして屋敷の中でひっそりと生活していたフィーネはと言うと、気がおかしくなりそうな日々をあれよりずっと過ごしていた。

キースが目の前から忽然と姿を消したこともフィーネの心を大きく惑わせたが、何よりも一番恐ろしい話は、屋敷になんとか逃げるようにして戻ることが出来た後のことだった。

フィーネの頭の中にはいつもあの恐ろしい日のキースの恐ろしい言葉が巡っていた。

《あれはお前の罪》

《イリヤはお前の身代わり》

《近く無残にも殺されるだろう》

違う違う違う！フィーネは頭を振る。

身代わりなど嘘だ。イリヤが死んでしまうなんて嘘だ。きっとどこかに少しの間病気が酷くなり、養生のために出ているだけに過ぎないはずだ。そうに違いない。フィーネは必死にそう思いこもうとした。

それ以来フィーネは、屋敷中をイリヤを探して彷徨うようになった。

奥まった部屋に、隠された部屋にイリヤはいるはずだ。それらしき部屋をあてもなく探し、彷徨う。病気の人間が隠される部屋はどこだとうろつくフィーネの姿に、何をしているのかと屋敷の者達は困惑顔である。それはそうだ、フィーネは誰にもイリヤを探してい

ることは告げていない。キースの言葉を鵜呑みにするわけではないが、それでも矢張り、無視するには恐ろし過ぎたからだ。

――そして屋敷に仕える使用人の声を聞いてしまったのだ。

聞いてはいけなかったそれを、フィーネは耳にしてしまった。

敷布を山と集めたものを足の裏でえいやと踏みつける数人の使用人たちがそこには居た。大きな洗い桶で足踏みをしながら小さな声でひっそりと声を顰めて何やら話しをしているではないか。

フィーネはそれが何故か気になり、廊下の隅であちら側からは影になり見えない場所に陣取ると、話しを盗み聞きし始めた。

「あの王妃の元じゃあアデル王子は一生独身を通すだろうよ」

「ええ？なんでよ。独身って……じゃあなんでイリヤを後宮に？」

実際はフィーネとしてイリヤは入ったことになっているが、屋敷全体でそのことを隠ぺいしようと誓っていたがため、このようなことを堂々と話していたようだ。

――が、結果的にこれが間違いだった。

「馬鹿だね。知らないのかい？アデル王子は昔、後宮に嫁を囲ってた。きちんとした王族の男としてね、勤めを果たしてたんだよ。なのに王妃はアデル王子可愛さに、嫁憎しになっちまったそうでね――なんでも、腹に子がある時に嫁をくびり殺しちまったそうだよ？」

おお怖やと話す女の言葉に、薄暗い一室の端で心臓が裏がえるかと思うほどにどくりと大きく跳ねた。

だからこそハズルはフィーネを嫁に出したくないと散々とフィーネの嫁入りを阻止し続け、そしてそれが出来ないと見るや代わりをたてたのだ。

「旦那様は確かにいい雇い主様さ。けどね、それでもやっちゃいけないことをしているってあたしは思うねぇ……」

やりきれなさそうにぽつりと零す女に、罰が悪そうに他の女達は視線を逸らした。けれどどの顔も同じことが言いたいのか、否定するような顔はしていない。むしろそんなことをこんな場所で言っていいのかという顔をしていることにフィーネは更なる衝撃を受けた。

お父様……

そう――ハズルは娘可愛さのあまり、王女を生贄として捧げたのだ。

万が一にもフィーネがアデルの目に止れば最後、フィーネは王妃の毒牙にかかり殺されてしまうだろう。

だからこそ王女は、無残にも殺される為だけに飾り立てられ、この屋敷から送りだされた。

フィーネの幼い頭の中にさえ、その筋書きが容易にたった。否応なしにたってしまった。

《あれはお前の罪》

《イリヤはお前の身代わり》

《近く無残にも殺されるだろう》

どくんどくんどくん。心臓が忙しなく鼓動を奏でる。耳に煩く響く音が煩わしくてフィーネは耳を手で覆って聞きたくないと目を瞑るが、むしろ音はもっと大きく響くようになってしまう。

「い、や……」

フィーネの頭の中にキースの声が木霊する。何度も、何度もだ。

「……じゃ、じゃあ何？アデル王子はもしかして」

恐る恐るもう一人の女が問うと、女は更に声を顰めて言う。

「そうさ。アデル王子が僧になった理由はそれだよ。王妃に嫁が自分の所為で殺されるなんてのは不憫だからね。そして王妃がこれまた性悪だけどさぁ？次もやると確信するような出来事があったんだそうでね――なんでも、だからこそ二人目をどうあっても娶りたくないってことだよ。だから僧職につくんだって無理やり出家したらしいんだから、思いきったことをしたもんさね」

お可哀そうに、女達が誰ともなくそうしみじみと言いあうと、何となく、示しあわせたわけではないが全員が口を噤んでしまう。

静寂が訪れたがこちらは逆だったようだ。女達の口とは裏腹に、フィーネの心は荒れ模様だ。

フィーネは時が立つのも忘れて目の前の空間を凝視し続けた。

その唇は小さく開かれては閉じて、開かれては閉じてとしている。

よくよく見て見ればそれは「イリヤ、イリヤが死んじゃう。私の所為でイリヤが……」そう、繰り返しているように見えた。

「神様、どうか……どうかお願いします……私……私のためにイリヤが死んじゃったら」

フィーネは初めて出来た同年代の友人を自らのために失うことを恐れていた。

そして、ハズルのしたことも――いいや、今では父そのものを恐れていた。

「お願いだからイリヤ……死なないで……」

つっと伝う頬の滴に、フィーネは拭うこともせずにただただ後からで続けるそれを、流し続けるのだった。
果たして血の気の失せたその顔に、また華やかな笑みが浮かぶようになる日はくるのだろうか。

＋＋＋

この頃になると王女は、アデルが寝入ったのを確認して周囲を散策に出かけるようにまで回復していた。
ただしアデルの元で着せられる衣服はどれもこれも華美なまでの衣装だらけで、これを纏っていては見つけてくださいと言っているも同然だった。
衣擦れの音も夜中では煩く、そして金ものを手首足首と巻き付けてあるため、これも耳障りだ。
そのため、大変気前がいいといえばいいのか、大雑把と言えばいいのか――王女は下履き一枚まで全てを寝台に置き去りにしてほぼ全裸の状態で夜闇に溶ける様にして飛翔するのだ。
壁を蹴りあげ垂直に駆けあがっていくと、南国の葉の大きな木々の間に身を潜ませるべく葉の中に頭から突っ込んだ。
闇夜にそうして溶け込むように息を顰めながら周囲の気配を探り始める。
すると兵士の話声が聞こえ始めたものの、アイアンバッハの行方やハズルの行方――果てはフィーネの行方などを話している者はいないようだ。勿論メルヴィルのことも話題には登らない。
けれど意外なことだがアデルのこととキースのことが話題に上っていた。

「アデル王子も大変だが、キース隊長もな……」
「まさか奴隷を庇うためにあんな形で脱退した隊長が登場するだなんて誰が思う？……お前が驚くのも無理はないさ。俺だってそうだ。驚いたよ」

先日、アイアンバッハを庇うために一瞬のうちに飛び出してきたキースのことが話題になっているようだが、王女はその時心神喪失状態にあったため、いまいち話しが理解出来ない。
ただ、キース、この名には覚えがあった。

ハズルの脇に控えてた、あの尋常でない圧迫感を与えてきた男か。

王女はすっと見えない目を細めて兵士たちの話に聞き耳をたて続けた。

25（砂漠の夜の情報収集）

王女とアイアンバッハを買い、そして圧倒的な強さをその圧迫感と共にひしひしと感じさせられた男がそういった名であったなと思いだすが、同一人物であるかまでは分からなかった。

ただ聞いていて分かったことだったが、キースなるものは数年前にある事件の責任を無理やり取らされる形で王宮を追われ、先日、奴隷を庇うために死地に赴いてきたのだという。

この国での奴隷の扱いをまざまざと見せつけられてきたからか、それがどれほどまでに奇異なことかよく分かっている王女は、兵士の口に上るキースが一体何を考えてそのようなことをしでかしたのか気になった。

だがしかし、兵士たちは直ぐにも話題をアデルへと切り替えてしまったから先を聞くことは出来なかった。

「隊長はともかくとしてもさ、アデル王子だ。妃殿下が早々にやってくれたらしいじゃないか」

「あ……ああ。あんまり大きな声じゃあ言えないが、後宮に放り込んだんだって？それも、毒で全身が犯されて身動きが取れないような娘を」

「そうそう。それも、まだ十一の毛も生えそろってないような娘だそうだ。そんなのをあの魔窟に放り込んだらどうなる？殴り殺されるのが関の山だろうが」

王女は暫し考え――ようやく言われているのが自分のことだと理解した。

「王子に袖にされ続けてる女どもが連れ込まれてるようなところだからなあ……そんなところに王子が今いっちばん入れこんでる娘を

放り込むだなんて……正気の沙汰じゃあるまいよ」

――壁を伝い、地面を這いまわり、得た情報を総合するとこうだ。

王女は王妃に鬱陶しがられているようだ――これになった。

まあ、実際はフィーネにそうした嫌がらせをしたいのだろうが、今現在フィーネになりかわっているのは王女である。

それも口をきけず訂正する術すら持たないから面倒だが、声を取り戻すまでの間、何とかして生き延びなければならないことだけは確かである。

これまた本当に面倒なことに巻き込まれたもんだな……

兵士たちの話しから得た情報曰くだが、王女は近く王妃に殺されるかもしれないとのこと。

「アデル王子に嫁をすすめるくせに、王妃殿下は嫁を娶ったらその嫁憎しで嫁を殺してしまうんだ」

そんな話を恐ろしげに語られてしまえば事実であるかの審議よりも警戒してかからねば危うかろうかと思うだろう。

眉つばものと疑るにしても何にせよであるが、如何せん情報が少なすぎるのだ。

兵士たちの話にそっと溜息をつきつつ足音をたてぬようそっと離れる。

嫁を殺した？一体何のためになんだ？――わけも分からず王女は闇夜を駆けつつ思う、はたしてそれは真実なのだろうか。

王女は眉を寄せた。

王女は王妃を知らない。その人となりを知らないのだから多少は警戒程度、しておくに限るというものだろう。

嫁を娶れという王妃、そして嫁を殺す王妃、どっちが王妃の真実の姿なんだろうな。

王女にはそれが分からなかった。

寝台の上に泥を払いながら潜り込むと、アデルが寝室を訊ねてくるまでの間に少し休むことにした。

今日は沢山動いたからな、あいつらの居所も魔石の位置も情報としては全く掴めないが、まだ時間はある。

明日にでもまた捜索を再開しようと王女は山と積まれたクッションの上に、頭を埋もれるようにして身を横たえると、直ぐ様眠りの淵へと滑り落ちそうになる。

うつらうつらとしながら王女は考える。

最悪の場合、合流せずとも自分一人でやり遂げて見せる、王女はこの時そう誓った。それこそ最悪の場合を考慮した結果のことだが、行方不明のアイアンバッハもメルヴィルも、身動きの取れない状況になっている可能性も考えてのことだ。

無いとはいい、そう考えてはいるものの、現段階ではどうということも出来なかった。

兎に角今は身体を休めるべきである、それは王女の気だるさを訴えてくる全身が伝えている。

思考も纏まらぬ中、王女の意識は今度こそ闇に溶け込んでいくのだった。

＋＋＋

「フィーネ！泥だらけじゃないか！！」

アデルの悲鳴にぱっちりと王女は瞼を開くと一瞬にして目が覚めた。

なんつう金切り声か。女かよ。

王女のあまりの惨状（？）に、アデルは声を裏返して叫んだようだ。嘘せながら王女の傍らに膝をついて一体どうしてこのようなことになったのかと王女を追求してくるが、王女は何も言わない。

泥だらけ？そんな馬鹿なと思ったがどうやら口がまだきけないようで、もそもそと起き上がり王女は憮然とした面持ちでアデルに首を向ける。何とか視点を合わせようとはするがあっているか矢張り、自信がない。

アデルは王女の手足についた土に、そしてその足から付着したであろうシーツの汚れにぷりぷりと怒りだす。

「綺麗な手足がこんなに汚れてしまって！！」

アデルにギュッと手を握られれば、たしかにざりざりとした感触がする。

ああ、泥を落とし損ねたやつがあったのか……

シーツの汚れで外に出たことが一発でばれてしまい、夜中に外で遊んでいたのかと咎められればしょんぼりと項垂れ、ごめんなさいとばかりに王女はぺこんと頭を下げた。

ここは素直に謝るべきだと考えたのだ。

無駄に違うとここで首を振るのは無意味だろう。

そしてそれ以前にシーツはもう、泥まみれで汚れ放題だ。ここはアデルの考えた通りの出来ごとであると思わせておいたほうが得だ

と踏んだ。
しょんぼりとして小さくシーツの上で何とか許しを請おうと上目遣いでじっとアデルを見つめてくる王女の姿に、アデルはうっと何故か言葉に詰まる。
王女には見えないが（そもそも見えたら怖いが）王女のその姿は、まるで捨てられた子犬のような愛くるしさを放っていた。
細かいところまで述べるとすれば、まだ怒っている？ねえ、もう怒りを解いてよ。ごめんなさい。ねえねえ、……まだ怒ってる？――と、怒りをかったことが悲しくてたまらずに、飼い主の足元でじっとその怒りの解けるのを待っている子犬の仕草や表情に酷似しており、アデルは動物好きの血が騒いだのか、胸を打たれたようにわなわなと肩を震わせ顔を若干そらして言った。

「も、もう！仕方ないな！フィーネ、次はないからね！」

存外早く落ちたわけだが、そんなことを王女が知る由もなく。

「……ッ！」

途端にぱっと華やいだ笑みを浮かべてこくこくと頷く王女の姿にアデルは更に胸を打ち抜かれたようである。
その実、誠心誠意をこめて謝れば何とかなるもんだなと思っていた王女だったが、微妙にずれているのは視界が無いため致し方なかろう。
アデルはぎゅっと王女を抱きしめると、息も絶え絶えにフィーネの頭をぐりぐりと撫でまわし始めた。

「なんだよもう、可愛いなあ！ああもう凄い可愛いよ！妹ってこんな感じなのかなあ！」

可愛いを連呼し王女を撫でまくるアデルに、王女は内心「首もげる！首がもげるからあんま頭強くしないで！っつか禿げるわボケ！！」と考えていたものの、先ほどまで怒りを買っていた手前、抵抗らしい抵抗はしなかった。

――そして、これは当たり前だが夜の徘徊を止められるはずもない。

まだアイアンバッハもメルヴィルも、見つかってはいないのだから。

とりあえず今度からは、より念入りに全身を汚れていないか確認しようと誓う。

「そうだ！フィーネ、お風呂入らないと。シーツも交換して貰わないといけないしね！」

「？」

首を傾げていれば、王女の身体をそっと抱えあげるようにして胸の前に抱いてアデルは歩き始める。

向かった先は音や空気、匂いなどで嫌でも分かった。

ふ、風呂？！

「そうだ、今日は私が洗ってあげようね。フィーネは女官の手を煩わせてばかりだと言うから、私が丁寧に洗ってあげるよ」

無茶を言わっしゃる。

女官の手を煩わせるとはそのままの意味である。女どもの手で全身を泡まみれにされることが王女は不快で浴槽の中で逃げ惑っているのだ。

何が悲しゅうて抓られたりと嫌がらせをされるのを黙って享受せ

ねばならないというのか。

女官達は王妃から遣わされたのか、王女を目の敵にしている。よって当たり前だが王女は湯船で追いかけまわされて捕まると同時に、水攻めにあい、そして洗うと言っては抓られる。

まだましなのはここで命までは取られないことと言えようか。そこまでの行動を起こされれば嫌でも王女も蹴りをつけようとするのだが、如何せん相手は女である。流石にこれくらいでは仕返しをするにしても――と、二の足を踏んでいる始末だ。

そんなの無理だとぶんぶんと首を横に振る王女に対し、アデルはにっこりと笑って告げた。

「それが嫌なら今度からは外を出歩くのは私と一緒の時だけにすること。それと風呂では女官の手を煩わせないことを誓うんだね。まあそれも？声が出せたらだけどね」

それはつまり――？

「今日は観念して私に洗われることだよ、フィーネ。さ、ついたよ。……さてと、全身ぴかぴかに磨き上げてあげるね」

鼻歌でも歌うかのように軽やかに言うと、アデルは風呂場の扉を開いた。その途端、むっとした暖かい空気が頬を包み込む。

妙な話しではあるが、風呂場の扉があく音が、王女には地獄の釜が開いた音に聞こえた気がしたという。

……ぃやめろぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！

26（選ぶのはお前だと突き放す）

アデルの腕から逃げるべくさあ動こうかとしたところで周囲の気配の中に、兵士らしき腕の立つ者達の気配を沢山感じ取った王女は、ここで暴れるのは危険と判断した……わけだったのだが、問題はそれが浴場の中まで続いたわけである。

浴場の出入り口は一か所だ。アデルの安全を守るために窓一つないそこは、明かりとりとして半球上の屋根の中央部分に水晶をはめ込んであるため、大変明るい。それも水晶は多面体になっており、明かりはきらきらと水晶の中で幾つも反射をして浴場の中に集まる様に設計されている作りなため、全く暗さとは無縁であった。

よって浴場には隠れられる場所も、逃げだせる出入り口も、何一つ用意されていないような状況なのだが――王女はこの場をどう切り抜けるべきなのか、必死で考えた。

丸裸ではなく、浴衣を身につけさせられて放り込まれたわけなのだが、それでもこれでは無防備極まりないというもの。

しかもこんな状況で命が危ういって聞いたばかりでこれかよ！！

ふざけるなと思いつつ王女は周囲を探っていたが、アデル専用の浴場と言うことで王女はこの場所を全く知らない。最悪なことに何がどこにあるのかさえ、未知数だった。

「さて、洗ってあげるね？」

「……ぃ、……ぁ」

「え？」

王女は、はっとなった。声が戻ってきているのだ。

喉を押さえ口をぱくつかせていれば、アデルは感激したのかおめ

でとうと王女の方をバンと叩くと、もう少しで元に戻るんじゃないかなと弾んだ声で告げた。

そうだな、もう少しで戻りそうだ。

良かった、本当に良かったなどと思っていたのが悪かった。王女はじゃあとアデルに頭からざぶんと湯水を浴びせられたのだ。

唐突のことで王女は全く身動きが取れなかった。

湯水をたっぷりと王女に見舞ったアデルはと言えば――

「さ、いつ戻っても歓迎の宴が開ける様にね、綺麗にしちゃおうね」

王女は全力で叫んだ。――いや、実際は叫べなかったため、内心で、だったが。

いらねえわあああああああああああああ！！

全身綺麗にしていくうちに、アデルは気がついてしまった。

確かに王女の薄汚れていた肌は、王宮で暮らすようになってから白く段々と抜けていくようではあった。けれどこれは――これでは、偽っていたのではないかと思った。

王女の肌の上を、柔らかな布でこすりあげるたびに肌の曇りのようになっていた色がどんどん落ちていく。

途中から観念したのか、王女は棒のように突っ立っているだけで、さっさとしろとばかりにしているから、アデルはやりたい放題だった。

耳の穴の中まで洗ってしまえば、そこにあるのはどう見ても焼けた肌ではなく、抜けるようなまっさらな肌の美しい少女だ。

本来であれば白い泡が全身を清めるはずなのに、王女の身を削る

ほどにそれは薄汚れて茶色くなっていく。白く抜けるような肌になればなるほどに、その泡は茶色く、黒く染まっていくのだ。
まるでその肌そのものが、元は違った色であったかの如く。
アデルは無言で頬の泡をゆっくりと払いのけるようにする。

この顔は……どこかで見た事があったような……

「……フィーネ、よく目を瞑ってるんだよ？水をかけてしまうからね？」
「……ぁあ」

大分声が戻ってきたらしい王女にほっと安堵の息を漏らす。だが、それとともに何故かフィーネと呼ぶことに違和感が芽生えてきたのもまた事実。
全身の泡を洗い流すと、アデルは気がつく。そうだ、この髪の色が違うのだ。

もっと、この肌には黒い色の方が……似合うはず。

何と比べているのか、アデルは自分でも良く分かっていなかった。
そもそもこの国の大半の国民の髪色は灰色か赤褐色だ。黒などといった色のものはいない。珍しいものでは金などもあるにはあるが、どれもこれもくすんだ色をしているだけで、どの色だって黒とは呼べない。
何故、黒などと言う色が連想されたのか、それが疑問だった。
だが兎に角王女の身を綺麗に洗い清めねばと何故か思った。それは奇妙にも使命のようなものにさえ思えたほどだ。
ごくりと生唾を飲み込むと、アデルはその衝動の赴くままに、王女の髪を洗い始めたのだった。

十十十

エッレミアーラではオルキスという大国にどうにかして繋がりを持ちたいわけがあった。

「わけ、とは……？」

キースが訝しむのも無理はない。この国はオルキスとは並ぶべくもないものの、それでも貧国ということもなく、とても豊かで国としてはとても充実しているはずだ。

最近になり、周囲の小国を統べながら、力をつけてきた国、エッレミアーラ。そこに何故大国の影があるのか。

この国は住みよい体制が整えられており、不自由なく人々は暮らせているはず。水には多少不便は強いられるものの、その点は交易で補える程度には国は潤っている。

なんせこの国には珍しい石が取れる。他にも他では見られないような作物もどっさりだ。甘い果物は南国ならではの甘さで、諸外国に大変な人気がある。

更には小国との小競り合いと言う名の戦争にも常勝であり、国としての借金さえない。

だというのに大臣はキースに向かって首を横に振って見せるのだ。

「この国は間もなく滅ぶであろう」

「……そんなことがあるはずがありませんよ。この国はあと十年はやっていけるはずです。それも、何も無くとも十年ですよ。それを滅ぶとは」

はっと笑って言うキースに、大臣は「馬鹿な、たったの十年では

ないか」と反論してくる。

「今のこの国の体制を知っておるか、キースよ。この国は王妃の独裁により治められておるわけだが――では、王妃が亡くなれば、この国はどうなる？確かにお主の言う通り、今王妃が亡くなろうとも十年は持つだろう。王妃が亡きあと十年……だがな、その十年後はどうなる？」

十年後、王妃がたった一人で切り盛りをしているようなこの国の、その亡きあとを考えてみたが、キースにはどうなるか、想像もつかなかった。

「導く者もおらず、王子にはああして妻もなく、子もなく……そして、その後継者である子は、王妃によりくびり殺されてしまうようなそんな有様よ。これでいいはずがなかろうが、キースよ」

「……」

数十年も持ちはしない、百年先にはこの土地に、草の根一本すら生えていないのではないか――そうまで言われてしまえばもう、反論の余地はない。

「我々は王子に後を継いで貰いたい。一刻も早くな。王妃が作ったこの独裁体制も、早々に崩さねばこの国はどちらにせよ滅ぶ」

「……どういうことでありましょう？」

「人とはどのような賢人であろうとも、脆さを備えておると言うことだ。王妃はお主がおらぬようになってからだが……荒れに荒れた。おらなんだお主が知らぬのも無理もないが、王妃は権力に溺れ、そして肉欲に溺れ……今では幾人もの燕を囲っておるような始末だ。施政はその愛人の一人が好き放題にやらかしておる。それについて王子も憎らしく思っておるようだが、それでもあれ以来王妃を恐ろ

しく思っている王子に協力を仰げるはずもなく……」

気がつけば彼の人は神に仕える身となっていた――キースは成る程とここで合点がいった。

「だから外に力を求めたのか……」

自分が居なくなってから、まさかそのようなことになっていたとは思いもよらなかった。

ぎりりと歯を噛みしめ、拳をぐっと強く握りしめる。

「――別に押し売りはしておりませんよ？我らオルキスは請われたから応えただけです」

27（あの日あの時、何があったか）

メルヴィルはキースが内心、オルキスの所為だと声高に叫ぼうとした、その時に釘を刺すようにそっと言い添えてくる。

まるでこちらの胸中を透かし見ていたようなその動きに、キースはぎくりとした。

そしてそんな風に戸惑ってしまったことを知られたくなくて、キースはきっとメルヴィルを睨みつけた。

「おやめなさい、お二人とも！それよりも私が気になっているのはオルキスにどこまでを助力を仰ごうということか、ですよ。メルヴィル殿、オルキスはどうするおつもりなのですか？どこまで介入をするつもりなのですか？」

アイアンバッハがメルヴィルに追及を試みる。まさか魔石だけではなく、こういったエッレミアーラ内部への内政干渉まで仕事のうちとは聞いてもいなかったため、どこまで手出しをするつもりなのか、ここで聞きたかった。

するとメルヴィルは肩を竦めて言うのだ。

「それを決めるのはエッレミアーラの方です。私はシーヴェス様から『力を貸すように』としか言われておりませんゆえ」

それを聞くとキースとアイアンバッハは大臣の顔をちらと見上げ、そして面を伏せた。

そこにあったものはまさしく、決意を最早揺るがさないだろうと思うほどに、強固な意志を感じられる眼差しがあったからだ。

「メルヴィル殿――いいや、オルキスの使者殿。明朝我らは王妃を

討ちます。何卒お力添えのほどを……どうか、宜しくお願い致します」

頭を垂れる大臣を見下ろすと、かちゃりとメルヴィルは眼鏡のつるを押し上げて定位置へと戻すと、承りましたと特に気負うことなく請け負った。

「め、メルヴィル殿……まさか貴方お一人とこちらの……方々とで、出向くおつもりで？それは些か自身の力を過信し過ぎなのではないのですか？このエッレミアーラとて常勝不敗の国。その中枢に打って出るにしてはどうにも……」

心もとない数だと言いたいのだろう。

実際に王女達は三人でオルキスより出発し、今ここに二人残っているわけなのだが、メルヴィルに、大臣の用意した手勢のみで戦うには些か心もとなくはないかと苦言を呈するように言われれば、メルヴィルは心外であるとでも言わんばかりにやれやれと肩を竦め呆れたように言うのだ。

「一体なんのために私が重い荷物を持って離さなかったのか、分かりませんか？今日この時のために私は重い荷物をずっと持っていたのですよ？」

メルヴィルは私物を失敬と言いながらずらりと並べていくと、一つの石を見つけ、ふっと笑った。

なんだとアイアンバッハが首を傾げていれば、見てみますかとメルヴィルがそれを放ってくる。それをアイアンバッハは危なげなく受け取ると、その石を光に透かしてみたり角度を変えてみたりとしてみるが、どこにでもある石にしか見えなかった。

「これはなんです？」
「それはデュベルです。キース隊長もこちらのデュベルとは違いますが、同じ力が宿ったものを持っていますよ。確か……貴方のデュベルは小刀でしたね？アイアンバッハ殿を助けた際に使用したものですよ」
「……ああ！あの時の小刀ですか！？」

アイアンバッハは小刀と言われ思い出す。そうだ、あれを持っていたからこそ、あの場を切り抜けられたのだと言うことをすっかりと失念していた。
そう言えばあの時は大変助かったと礼を述べると、メルヴィルはそれでは足りないだろうと言うのだ。

「デュベルは持ち主の目印になるものです。貴方があの闘技場のど真ん中でデュベルを持っていた。恐らくですがデュベルにはこんな制約がかけられていたに違いないはず。

『使用者の生死がかかれば持ち主を呼ぶように』

そして

『持ち主の目印として常に輝くこと』
『そして持ち主を生涯忘れることのないように』

とね。だからこそアイアンバッハ殿は助かったのですよ。二重三重に重ねがけされた、魔法によってね」

キースはそれを指摘されてすっと視線を逸らす。けれどアイアンバッハはそれを許さなかった。

「き、キース殿！それは誠ですか！！」
「……知らん」
「私を……そんな……」

確かにキースから前もって聞いていた。自分は死ぬために身代わりになろうと躍り出たと。けれどまさか、あの時小刀を受け取った時にそんな何重にも予防線を張られた上で送りだされていたとは、露とも思わなかったのだ。

いくら悪かったと思っていたからと、罪悪感から来ることとは言え、嬉しかった。

そして、それと同時に申し訳なくて堪らなくなった。

自らを罰するがためにそうまでしてアイアンバッハを庇うなどと——アイアンバッハはぐっと喉に何かが詰まったようにして唇を噛みしめると、ややもたって絞り出すような声で告げた。

「貴方は……馬鹿です。どうせならば私に盛大に恩を着せてしまえばいいものを、そうしない。元から私を殺さないようにとするだけでもやっとだったということでしょう？身代わりと言うのは……本当の意味での身代わりだったのですね」

どういう手妻を使い、ああして現れたのか今まさに知ったわけだが、知って早々に苦しさと申し訳なさと——有難さで涙がじわりと浮かんできた。

「見知らぬ私のために、そうまでされて……貴方は馬鹿です。本当の大馬鹿者ですよ」
「……仕方ないだろう、私のためにただ巻き込まれて死なれるなんて……後味が悪すぎる」

ぽつりと零された言葉に、ああこの人は本当にどこまでも根っか

らの正直者なのだと知った。
アイアンバッハはキースの前に膝をつき、この借りは必ず返すと誓った。
キースはそんなもの貸した覚えはないと言ったが、アイアンバッハは聞く耳を持たなかった。

「やれやれ。私でしたら盛大に恩着せがましく、『じゃあいつでもいいから私がちょっと死んでくださいって言ったら死んでくださいね？』って言っておきますのに」

お優しいことですねえとメルヴィルが肩を竦めると、アイアンバッハは言った。

「安心してください。メルヴィル殿には絶対に借りは作りませんから」

怖くてそんなもの、作れるはずもないだろう。

＋＋＋

メルヴィルは広い場所を貸して欲しいと言うと、大臣に夜会などが開かれる巨大な広間を三部屋ほど借り受けた。どの部屋も有に五百人は入ることが出来るどころか、それだけの人数が入ったとしても可也の余裕があるほどだ。それが三部屋ということもあり、千五百人程度は軽く入ることの出来る空間を用意したわけなのだが――
メルヴィルは言った。

「さてアイアンバッハ殿。ここで質問ですよー？私はどうやってあ

の奴隷商人たちのテントから抜け出す事が出来たのでしょうか？さあ、答えてくださいねー」

そう言いつつもメルヴィルは用意された部屋の床に、等間隔で小さな釘のようなものを置いていく。それを手伝いながらアイアンバッハは唸りながら頭を捻って考える。

「なん、でしょう……なあ？」
「なあ、じゃありませんよ。私に聞かないでください。聞いているのはこっちなんですからね」
「いや、ですが分かりませんよ」

釘を丁寧に置いて行きながらアイアンバッハはメルヴィルを振り返ると、メルヴィルはしようの無い人だと告げて、くすりと笑う。

「デュベルですよ」
「デュベル……と言うことはもしや、メルヴィル殿もキース殿のように何かをお持ちでいらした？」
「ええ、その通りです。私はあのテントに入る前に小さなこの石を砂山の上に放ったんです」

にっこりと笑みを浮かべたメルヴィルの笑みは、どうしてもアイアンバッハには受け入れがたい、人の食えない笑みだ。
それを浮かべたメルヴィルは、石の使い方などはまた改めて教えますが、あの時あったことはこうでしたと、当時を振り返って語ってくれるようである。

28（少し、話しをしようじゃないか）

メルヴィルはテントに誘われた際に、これは怪しいと踏んだため、遠くの砂山に人目を盗んで光る小石を放り投げた。それはメルヴィルが一番最初に作ったデュベルであった。

王女とアイアンバッハが毒に倒れた時もそうだ、一人デュベルを使い逃げた。

デュベルは所有者を一度認識すると、生涯これを変更することはないという。

所有者、保持者などとそれは呼ばれるが、デュベルの持ち主としてデュベル自身に認識された人物に対しのみ働くそれにより、一番多い使用方法としては、移動に利用されているものだった。

デュベルは持ち主と認識した相手が、一つだけ指定した言葉を唱えれば、たちまちデュベルは反応し、デュベル側へと持ち主を引き寄せる。そんな属性を持っているのだ。

「ですから私はあの時、身の危険を感じましたので、デュベルに私を呼び寄せる様に命じたのです。――大変面白い見せものでしたね。貴方がたがあのテントから運び出されるまで砂山でじっと観察させていただいていましたが……本当に貴方がたは――アホですね」

頭から最後までを余すところなく見せていただきましたと告げるメルヴィルの顔は艶々としていてなんだか腹が立った。

「そっ、れなら助けてくださっても良かったではありませんか！！」

「いえいえ、そんな勿体無いこと……いえ。つまらないこと……いえ。違いますよね。面白くないことしませんよ」

「一番最低ですよそれが！！」

人として、だったが。
そんな訴えはさらりと聞き流し、メルヴィルは続ける。

「まあ、それは冗談としても、貴方がたは目立ちますし、意識をしていないようですが、勝手に事件のほうが貴方がたの方へといきますからね。放逐したほうが話しは早く進むかと思いまして、野に放ってみようかと思った次第です」

「放つ？！我々はメルヴィル殿の飼い猫ではありませんぞ！」

「そうですね。ですがシーヴェス殿下の飼い猫ではあるようです。――ですから私は貴方がたを遠くで観察しておりました。そうしましたら出るわ出るわ。エッレミアーラ潜入は半年はかかると思っていたことが、こうもまあ早くに片付きそうで有難い限りですよ。こちらの大臣の説得も、もう暫くはかかるはずだったんですが、王女が思わぬ働きをしてくれましてね？」

「……アッシュが？」

これもまた早く済んだとにっこりと笑みを浮かべるメルヴィルに、アイアンバッハは怪訝そうだ。よもや王女単体で何かあったのだろうか。

「ええ。王女殿下は王妃を見事釣り上げていらした。お陰で王妃が未だ狂人のままであると大臣は確信すると、早々に退場して貰うべきだとの話しの運びになったのですよ。まだ希望はあると思いたがっていた大臣の最後の希望を見事、あの方は打ち砕いてくださいましたよ――あの方は本当に、実に役立ってくださいましたよ」

大臣は最初、周辺国と繋がりを持とうかとも考えた。けれど周辺国はエッレミアーラと戦えるほどの軍事力はない。そして繋がりを持ったところでエッレミアーラに旨味はない国ばかりだ。

どの国もハイエナ並みにこのエッレミアーラを食い荒らそうと、いつ倒れるか、今倒れるかと、王妃の死去する瞬間を狙っているような国ばかり。

そんな折、シーヴェスがリニムの王女を保護した席で、その夜、夜会を催した。その席でエッレミアーラの席にもシーヴェスは出向いてきたのだが、そこで一人一人と歓談を楽しんで——最後に大臣の所へとやってきた。

最初は楽しんでおりますかとにこやかに話しかけられたものだったが、ええとてもと返すだけで精いっぱいだ。国の情勢が危うい中、こんな遠くの島国になど来ている暇などなかった。だというのに王妃に鬱陶しがられるようにして追いやられ、この席にいるのだ。心の底から本当に楽しいとは言えなかった。

王妃は国王が死んでから暫く、国を賢くまとめ上げていた。けれどいつからかそれは堕落したものに変わっていってしまったのだ。

まだそれは中央のみの域をでない。いや、実際は国のあちこちに支障が出てきてはいた。

だが、王妃を排するには王子が立たなければならないが、王子は先に王妃からとどめを刺されるようにして、もう心が折られていた。

絶望しかないか、それともこれから先自らで立つべきか、大臣はそのことで毎晩夜通し考えに考え続けていた。

そんな中、シーヴェスが言ったのだ。

「少し酔ったようです。どうです？少し夜風にあたりに行きませんか？夜景が美しい場所があるのですよ」

これに乗ったのは、本当にたまたまだった。

何とはなしに誘いを受けて広間から出て見れば、そこは満点の星空がある。実に美しい街並みも眼下に従えて、なんとこの国は美しい国だろうかと大臣は思ったほどだ。

だが、それと共に己の国を憂えたのもまた事実。

そんな大臣の胸中を見透かしたようにシーヴェスはがらりと口調を変えて口を開いた。

「単刀直入に言おう。オーレン大臣、力が欲しくはないか」

「力？」

大臣は唐突に何を言うのだこの男はと思った。けれどそんなことに気づいているのかいないのか、シーヴェスは続ける。

「エッレミアーラが今、荒れに荒れていることは知っている。王が崩御した後、王妃が治めていた国は、いつの間にやら瞬く間に荒れていき、国のそこかしこが酷く荒れてきているとな」

「……どこの情報ですか？そんな世迷言を。我らエッレミアーラは今も賢き王妃が治める平穏な日々を暮らしておりますよ」

大臣は素知らぬふりをしてさらりと嘘を吐きながら内心では冷や汗をかいていた。

どこの誰が漏らしたか知らないが、シーヴェスは知っているのだ。エッレミアーラの情勢を、それも事細かに知っている。

少し聞いただけでもそれが分かり、大臣はぞっとした。

大国オルキスがそれを指摘してきたからには、何かあると思ったのだ。

シーヴェスがくすりと笑みを零すと、大臣の声が聞こえていなかったわけでもあるまいに、こんなことを告げてきた。

「他国に潰される前に俺に話しを持ってこい。力を貸そう。その時は俺の兵士二千とリニムの魔導部隊を貸してやる。どれも精鋭だ、エッレミアーラの今の使えない近衛兵と兵士だったら、中央を制圧するくらいは容易い。ただしその時は、俺と同盟を組むことが条件だ」

「……同盟？」

嘘を重ねることが必要と後で気が付きはっとしたが、最早遅い。

大臣の言葉にシーヴェスはかかと笑うと、人の悪そうな笑みを口端にのぼらせる。

「俺が窮地に陥ればエッレミアーラは力を貸す。そして俺も、エッレミアーラが窮地に陥れば力を貸そう。それは今回の件だけでなく、他にも力を貸して欲しいことがあれば連絡を入れて貰って構わない。同盟国として名を連ねてくれるのであれば、な」

「……」

大臣は答えられなかった。自分が勝手に答えていい水準の話しではない。もっと上の者が答えるべき話だこれは。

力なく笑いながら私にそれが決められる権限がありましょうかと告げる大臣に、シーヴェスはこう返した。

「いいやどうかな？今のエッレミアーラの中に残った最後の良心、オーレン大臣。そしてアデル王子。この二人が一人でも欠ければ……恐らくは国は内部から崩壊していくとはもっぱらの噂だが、違うのか？」

「誰がそんな世迷言を」

「さあ、誰かな？ま、それはいいとして考えておいてほしい。『私』はいつでも待っておりますよ、オーレン大臣殿。では……」

ばさりと外套を翻し、広間へと戻っていくシーヴェスを見送ると、大臣は今まで考えもしなかった、王位簒奪という文字がちらりと思考の端に浮かび始めた。

29（不器用な男たち）

いや、実際に全く考えなかったわけではないだろう。今の王妃に玩具にされようとしている国を何度大臣は憂えたことか。アデルを何度たきつけたことか。

「王子、最早王子におすがりするしかないのです！！今こそ立つときです！王子！！」

けれど王位継承の儀は行われることは無かった。

王子は御子を失い失意にくれるあまり、僧衣を身につけることを望んだからだ。

あれから十年以上が経った。王子が御子を失ってから十数年。王子は未だ独身であらせられる。

確か御歳二十八だったかとアデルの年齢を思い出すと、ふいに自嘲気味な笑みがこぼれてきた。

王位を継ぐにはまだ若過ぎて、だからこそ妻を娶らせ、せめて御子だけでも設けさせようとしたはずだったのに、王妃は自らが賢帝と呼ばれるようになり、褒め称えられるようになってから人が変わってしまった。

人は容易く変わる。愚かしく溺れ、惑い、駄目になるのには時間など要らない。

王妃はいつからか、子に王位をと言いながら、その席を譲るつもりがなくなっているように見えた。

そしていつからかアデルのために用意すると後宮に女を籠めはじめていたが、おかしなことに気がついた。

アデルが御子を失ってから女に興味を持たない、示さないことは分かっているはずなのに、女を用意してはそこから出す事は無いの

だ。まるでそこは女の牢獄のようだとは、中にいる女兵士達からの言である。

「美しいと評判の女達が次々と籠められてはあそこで自殺に追い込まれております」

女達は花の盛りをあのような嫉妬渦巻く後宮で過ごすことに耐えられず、自殺に――もしくはその美しさに嫉妬され、イジメ殺されるのだという。

中には仲良く暮らすものもいるのだろうが、それでも大半はそうして死んでいく。悲しい女達の末路だ。

それを聞いてもまだ信じられずにいた折のことだ、大臣は王妃の寝所の方まで呼び出されたために出向き、国政に関わる重要な書類を献上に上がった。

その時に耳にしてしまったのだ。

「アラヤのところの娘まであそこに入れちゃったの？」
「いけないか？」
「いけなくはないけどさあ」
「ねえ？」
「うん」

少年の声が幾つも続き、後宮に籠めるなんてと囁かれると、王妃は甘やかな声音で鈴を転がすようにしてころころと笑いながら言う。

「そなたたちの視線を奪った罰よ。仕方なかろう？そなたたちは我のみを見つめておればよい。のう、そうであろう？」

これを最後までどう聞いてどう書類を手渡したのか、思いだせなかったが、大臣はその話しの内容を全て覚えていた。

王妃は美しいと評判の女達をあそこに籠めていたのだ。
表向きには「アデルが美しい娘ならばきっと興味を持つだろう」とのそら美しい言葉で飾り、けれど実際は「自分よりも美しい女達の墓場」としていたのだ。
そう、後宮は王妃のための女達の牢獄だった。
調べてみたところ、老いも若いも関係ない、後宮にあるのは娘という年齢の者から人妻であるものまで、実に多種多様であった。
兎に角王妃が気に食わなければ全てがここに入れられる決まりのようだ。
そうと知ればもう、御子をくびり殺したのも実は権力のはたてをむしり取られるのが怖くてだったのではないかとさえ思えてきた。
王子が可愛いあまり子を殺したというのが真実なのか、それとも権力を握り続けるためだったのか――どちらにせよ大臣の中にもう迷いは無かった。
王妃の元へ書類を届けに行ったその二日後に、大臣はオルキスへと向けて、密書を放った。
オルキスへそれが届いたのはそれから実に三日後のことであった。

＋＋＋

全ての事実を知っていたがゆえにメルヴィルは内心では苦々しいものを感じていたが、そんなものをアイアンバッハに語ったところでしょうがない。
全てを見ていた。王妃により、女達に殺されかかっていた所も。
余すところなくだ。
全て計算づくとはいえ、後味のいいものではない。
お陰で可也速足で全てが片付きそうであるため仕事が楽でいいのは助かるものの、何とも言えないものがある。

大臣の元をメルヴィルが訪ねた時、大臣はあのことから数週間も経っていたこともあり、頭が冷えてしまったのか、矢張りと躊躇うような言葉を吐き出していた。けれど王女の件を耳にして、意を決したようだった。

決断をくださせたのは、きしくも王女が窮地に陥ったことによるものであり、王女の功績によるものだったのだ。

メルヴィルはそのことを示してわざと煽る様に、焚きつける様に、「矢張り放っておいて正解でした」と言うと、アイアンバッハは案の定かっとなりメルヴィルに突進してきた。

そうだ、メルヴィルは全て見ていて、王女が窮地にあることも知っていて——あえて放っておいたのだ。

「……きっ、貴様ぁ！！」

襟首を掴み拳を振り上げるが、キースが止めろと背後から冷静な声を発してそれを止める。

「キース殿！何故止めるのですか！」

「そいつは罰されたがっている。それに乗るなんて愚か者のすることだ。罰されたがっているやつを罰してやるなんて……本当に優し過ぎるなお前は」

どういうことだと困惑していれば、キースはアイアンバッハとメルヴィルの距離を分かつようにすると、先ほどの仕返しとばかりに吐き捨てるように口を開いた。

「この人は私と同じなんですよ。仕事だからと放っておいた。そうすることが一番いいんだと思っていた。けれど……実際は違う、誰かに罰して貰いたい。自分はこうすることしか出来ないから。仕事だからと割り切ることしか知らないから。だから……罰する必要な

んてない」

メルヴィルはふっと笑うと何のことですかと言うが、いつもと同じように笑っているようでどこか、空々しく見えるのは気のせいか。

「メルヴィル……だったな？あんたは俺とそっくりだ。『私』と偽って仕事を優先的に行っていって――そして最後に気づくんだ。自分は他の奴と違って、欠陥品なんだって。だから俺は死にたかった。そしてあんたは……罰して貰いたくてそうやって他人様に喧嘩ばかり売るようになるんだろうよ」

「……」

メルヴィルは最早何も口にすることが出来なかった。

くるりと踵を返すと、そのまま床にまた、等間隔で釘を並べにかかる。それを見て、慌ててアイアンバッハは我もと同じように作業に戻るのだった。

床に一本一本置いていく作業は、床と見つめ合う作業でもあった。だが、ふいに頭を持ちあげてメルヴィルを見つめていれば、何か思いつめたような表情をしている。けれどアイアンバッハの視線を感じて面を上げたメルヴィルは、いつもの食えない表情に戻ると、「何か御用で？」と告げる。

「いえ……なんでも」

また元の作業に戻りつつ、アイアンバッハは考えた。この作業はとても思考するのに向いている。

本当にキースの言った通りなのだろうか。

メルヴィルは誰かに罰されたがっているのか。そもそもキースもメルヴィルも、どうしてそうまで生き方を仕事のみに固定し、それのみに固執するのか……アイアンバッハにはよく分からなかった。

だが、一つだけ思ったことがある。恐らく二人は誰かから命じられたからそうすることが正しいと信じているのかもしれないと。

何故そう考えたかと言うと、アイアンバッハ自身もまた、そうしたことに固執していた時期があったということだ。

あの頃の自分に、彼らは少しだけ、似ているかもしれない。そんなことを考えながら床に釘を並べていく。

「アッシュ……」

30（男は嫣然と笑みを浮かべた）

全て並べ終えたその釘の数はおよそ二千。その中にひと際輝く釘を見つけるが、それは何故か三十程の数しか見つけられなかった。

そして、それを囲むようにして一つだけ丸い石が見つけられたがこれはと首を傾げていれば、メルヴィルは下がれと告げた。

「あちら側からこちら側へと呼びよせます。そこでは危険ですよ」

「呼び寄せる？」

キースはまさかこれだけの数の釘を並べていたのはデュベルだったからなのかと叫ぶが、有り得ないと首を振っている。

「どういうことですか？」

「デュベルにはもう一つだけ使い道があるんだ。持ち主を呼び寄せるために持ち主側から働きかけるものの他に、もう一つ、持ち主側をデュベルを介して使用者がデュベル側に引き寄せることも出来る」

「では……この棒は、全てオルキス側と繋がっているのですね」

だからこそメルヴィルは片時もあの荷物を離そうとしなかったのか。

そう聞けばアイアンバッハは合点がいったとばかりに首肯して見せた。

一度だけ、重そうだとメルヴィルの荷物を持つと言ったことがあった。メルヴィル自身が疲弊していたようにも見えたし、完全な善意だった。けれどメルヴィルはそれはいらないと言い、むしろお前のところの姫君を見てやればいいと返してきて——あの時は馬鹿にするように言われ腹が立ったが、あれは彼なりにこれを渡せない事情があって、しかもものがものだけにアイアンバッハ達にも重そう

なその中身を打ち明けられなかったのかと分かった。
敵国ではないものの、リニムは未知の国である国である。メルヴィルからしてみれば、まだ数年の付き合い程度しかないそんな国の人間に、自国の交渉の要を渡していいはずもない。
今回のエッレミアーラ遠征目的の一つである魔石も確かに重要ではあろうが、それでも外交目的となればこちらのほうが重要性は余程高いものと言えるだろう。
だからこそ必死で一人であの大きな袋を担いでいたのかと理解すると、アイアンバッハは唸ったものだ。

「――だが無茶だ。こんな数を一度に呼び寄せれば、あんたに反動が来るはず。あんた……死にたいのか?!」

青い顔で叫ぶキースの姿に、アイアンバッハはただならぬものを感じてメルヴィルと叫ぶ。けれどメルヴィルはふっと笑って「私を誰だと思っているのですか」と言うのだ。

「この程度の数、ものの数にも入りません。私は殿下の片腕――メルヴィル・ブラントなのですから――《我が前方を覆い尽くす闇を払い、真実の姿を現わせ!我が呼びかけに応えよ、エルケムカーン!》」

メルヴィルがそう唱えた途端のことだ、釘が一斉に床からふわりと浮きあがり、その場に紫の光が溢れかえる。

「ッ!!」
「さあデュベルよお前の主を我が前へ呼びよせよ!解き放て、その力を!!」

むくむくと小さな棒状のそれは瞬くうちに膨れ上がると周囲を覆

わんばかりになっている光を更に増大させていく。声も出なくなるほどにそれは凄まじい光となってアイアンバッハ達を襲い、食らい尽くしていった。

「――随分と早かったな？メルヴィル」

外套をたなびかせ、光の中から現れた男はくっとその口元に笑みを刻んだ。

＋＋＋

頭から湯水をたっぷりとかけられれば犬のように湯を払うためにぷるぷると首を振る。

「うー……さっぱりするけど酷いな」

漸く声も出る様になったし髪もべったりとしてきていたのがさっぱりとして気持ちがいいのはいいのだが、妙に髪がかかる肩の感覚が違う気がするのだ。さらさらとしていて、つややかな髪がするりと落ちてくるのが気にかかる。

おかしいなと思いながら髪を手で纏め、ぎゅっと王女はぞうきんを絞る様にして水気を絞り始めた。

「……フィーネ、そういえばこの浴室の明かりは綺麗だろう？色とりどりに輝いて」

「ああ、うん。そうだな」

喋れるようになった王女に心底嬉しそうに声を弾ませてアデルが

言うのを気の無いそぶりで気にも留めず適当に返事を返していれば、ほらとアデルが手を差し出してくる。

「なんだ？」

「こっちにおいで、フィーネ。ここから見える明かりが最高に綺麗なんだよ」

アデルは王女のてを引いていくと、上を見上げる様にと告げる。

上から降り注ぐ明かりは暖かく、水晶からの乱反射した光が王女の全身をきらきらと七色の光で染め上げていくようだった。

「ほら見て。フィーネの全身が光っているよ」

王女は見えないことを誤魔化す為に、綺麗に白く光っているなと言葉を紡ぐが、これでアデルは確信してしまった。

「――フィーネ、君はやっぱり、リニムのお姫様なのかい？」

「……ッ！」

「目が、やっぱり見えていないんだね。今はね、フィーネの全身は、青く、赤く、きらきらと輝いているんだよ？見えない？白くなんてないんだよ？」

王女は言葉に詰まった。

アデルの口調はとても残念そうに聞こえるが、王女はどうすればいいのか分からない。

そもそも王女自身が自分のことをフィーネとは一言も言っていなかったが、だからとはいえ、リニムの王女であることがばれているのとは全く、話しが違うのだ。

「アデル！俺は――」

王女が口を開いて何かを言おうとした時、唯一設けられた扉の向こうで、何かがごとりと落ちる音がした。そして程なくして扉が開かれると、そこに居たのは懐かしい気配で――

「救援に上がりましたよ、ルクレティアナ殿下」

31（それが娘の出した答えだった）

「アッシュ！ご無事ですか！！」
「殿下！」
「姫！！」
「お前達……」

王女を救わんがために駆け付けたのは、リニムの魔導部隊の一個小隊である八名と、メルヴィル、そして王女の片腕アイアンバッハだ。彼らは扉の向こうから現れると、王女の姿とアデルの姿をみとめ――皆一様に不自然なまでに咳払いを一斉に始めるのだ。

「なんだよお前ら。集団で風邪か？」
「……殿下、その……何があったんです？まあ、風呂場ですから分からなくもありませんし、……その、二人は結婚目前という立場であったようでもありましたので、それも自然といえば自然ですが」

些か犯罪の臭いがしますとメルヴィルに言われれば、王女は首を傾げてしまった。一体何を言われているのか、皆目見当がつかなかったのだ。

けれどアイアンバッハがアデルに掴みかかる勢いで突進してきたので王女は仕方なくこの滑りやすい浴室の中でアイアンバッハの足をスパンと払ってやると、アイアンバッハがなきを入れてきた。

「何故ですアッシュ！この男のほうがいいのですか！？」
「黙れ馬鹿！意味が分からん！！」
「は、裸の付き合いなど！今はそのような姿ですのに……危険です！排除すべきなのですよ、この男は！！」
「今はお前のほうが危険極まりないわ、ボケ！！」

素っ裸で二人でぎゃあぎゃあと言い合っていると、魔導部隊の一人がそっと進み出てきて王女に包みを差し出してきた。中身は衣類の様である。

「その、急場でしたので先ほどお召だったものしか用意出来なかったのですが……。こちらを身につけていただければと思います」

「ん？ああ、悪い。この国の衣装は着にくくてなあ……ついでだから着つけを頼めるか？」

アデルが唖然呆然としている間に、みるみるうちに身支度が整えられていく王女の姿に、益々アデルは混乱していく。そもそもこの全身黒ずくめの不審極まりない者達は一体なんなのか。そもそも王女と知り合いのようだが、王女が今、フィーネではないと知ったアデルは王女が何のために自分に近づいてきたのか――いいや、そもそもがハズルが差し出してきた王女は毒を盛られ、あのような状態できたのだ。策を弄して入ってきたようには考えられない。では何故、どんな理由でなのか――アデルは思考をぐるぐると巡らし続けるが、一向に答えはでない。

「アデル？」

王女が腕を引いてアデルを起こそうとするが「待ってくれ！考える時間をくれ！」と、そう言うだけで動こうともしない。

仕方ないなと担いでいこうと考えていた時だ。

王宮の前がにわかに騒がしくなってきていた。

＋＋＋

「お、お願いです王妃様！！イリヤを返してください！私を殺したいのであれば、私をどうか、どうか……殺してください！！」

ぶるぶると哀れにも全身を震わせて、全身を真っ白な衣装で固めた少女は王宮を前にして叫ぶ。

人々がざわめく中、少女はどうか王妃様を出して欲しいと涙ながらに叫ぶのだ。

「わたくしの名は……フィーネ！ハズルの娘、フィーネとはわたくしのことです。先日フィーネと偽って連れていかれたのは、我が友なのです！お願いです王妃様！彼女は何も悪くありません！フィーネはわたくしなのです！だから……お願いだから、わたしの友達を殺さないでぇ……」

鼻水と涙でぐしゃぐしゃになった顔を歪めて叫ぶ少女はフィーネだった。

あれから彼女なりに考えた結果、イリヤを取り戻したければ自分が代わりにならねばならないと考えたようだ。けれどそれがどれほど勇気がいったことか、それはフィーネの顔を見れば直ぐにも分かる。表情はがちがちに固まり、恐怖に歪んでいた。口の端からは歯の根が合わないのか、がちがちとした歯を打ち鳴らす音が常に漏れてきているような始末だ。それは恐怖からくる震えの所為だが、見ていて一層哀れに映る。

そんなフィーネを見て、そして話しを聞いていれば嫌でも先日輿入れしたばかりの『フィーネ』が思い浮かんだ。そしてそれが偽物で、フィーネの身代わりに友が輿入れしたこともだろう。

だがそれが真実そうであったならば、王妃の噂は本当だということなのだろうと人々は直ぐ様悟る。王妃がアデル王子の嫁を憎しと殺してしまう、それは噂ではなくまことのことであったのだろうと。

「おやまあ、ほんにめんこい女子よのう？そなたが本物のフィーネかえ？ハズルの娘の？」

あまりにも王宮の前が騒がしくなったからだろうか、騒ぎの鎮静化を図るために王妃自らが近衛兵を引き連れてやってきたようだ。王宮に続く大階段の頂上から、王宮前広場に跪き、涙ながらに慈悲を請うフィーネを見下ろし、笑っている。安心をさせようと笑みを浮かべながら一段一段とフィーネの元へと降りていこうとしている王妃の姿をみとめれば、フィーネは弾けるように面を上げて更に恐怖に顔を引き攣らせ、叫ぶ。

「お、王妃様ですか！？」

先ほどまでどうにか『お嬢様らしく』と振舞っていたが、ここにきて化けの皮が剥がれてしまったのか、フィーネは来てくれたとそれだけで感極まってしまいぐしゃりと顔を歪めてまた泣き始めた。

そして王妃はと言うとフィーネの声にその場に釘づけになってしまった。どれほど民衆の声を受けようとも、矢張り生でこうして慈悲を請う声を耳にするのとでは段違いに胸にくるものがある。王妃は鬼気迫るものを感じると、フィーネからたじろいだように一歩、二歩と後退していく。

「……お、おお、ほんに可哀想にのう。そなた、今までどうしていたのかえ？」

「お父様に、屋敷から出して貰えなくて……お、王妃様！それよりもイリヤは無事ですか！？イリヤは悪くありません！私の身代わりになっただけなのです！だから殺すなら私を殺してください！」

先ほどから俯いていてよく見えなかったが、よくよく見ればフィ

ーネは短刀をしっかと胸に押し抱くようにして抱きしめていた。
その短刀を震えながらに抜き放つと、冴え冴えとした刀身がフィーネの幼い顔にぎらりとした光を当ててくる。
フィーネは最早死を覚悟していた。そしてイリヤのためならば死んでも構わないとさえ思っていた。初めて出来た友人だ、仲良くしてくれた。そんな友人が自分の身代りに殺されようとしているのだ。まだ幼いフィーネが自分の罪だと言われ、自覚した罪を償う方法として唯一導き出した答えがこれだった。
花嫁衣装のようなまっさらな衣装が血に染まる。
これが最良の選択のはずだった——いいや、フィーネはそう信じたかった。こうすればイリヤは——友は、帰って来てくれるのだと信じたかったのだ。
フィーネとて、最悪の結果を考えなくはなかった。イリヤはもう殺されており、救うことなど出来ず、無意味なことも考えた。けれど矢張り諦められなかったのだ。

「お、王妃様……私が死ねば、イリヤは……死なずに済みますよね？ふっ、ふうっ……っく……そう、ですよね？」

何度もえづきながら苦しみながらフィーネは言葉を紡ぐ。腹に突き刺した短刀は少女の手から刺されたものであるためか、そうまで深く突き刺さってはいないようだ。
浅く刺されたためか、フィーネは浅く呼吸を繰り返してはいるものの、中々死ねず苦しみだけが長く続き——それと同時に長く喋り続けることが出来そうだった。王妃にとってはとても忌々しいことに、であるが。

「イリヤ、イリヤ……ごめんね、イリヤ。私が死ぬから……イリヤは殺されずに済むからね」

その頃にはあたりはしんと静まり返っていて、フィーネの声を遮るものは何一つなかった。そのため、王妃の悪行としてそれは一気にフィーネを取り囲む人々に伝染するようにして広まっていく。

王妃は止めにくればなんとか懐柔することも出来るだろうと安易に考えていたようだったが、これは無理だと悟ったようだ。これ以上フィーネに喋らせるのは得策ではないと思ったのか、近衛兵にあの娘を殺してくるのだと叫んだ。

今人々の目に映る姿はまさしく王妃こそが悪で、その犠牲になったイリヤと言う娘はここにいるフィーネの身代わりになった娘ということだった。

血に染まったフィーネは実に分かりやすく周囲にそれを伝えていった。

彼女達は悲しき犠牲者であることを。悲しき友情をまざまざと人の目に焼き付けさせていく。否が応にもそれは誰も彼もと無理やりに人の記憶を塗りつぶしていくように、人の記憶に一気に浸透していく。それはフィーネの――もしくは後宮の女達とも言えるかもしれないが、彼女達全ての忘れさせてやるものかとの妄執すら感じさせてくるようだった。

後宮に籠められ死んでいった女達の話しは最早エッレミアーラの首都フーチャルでは、当然のごとく知られた話しだったからだ。

忘れさせてたまるか、我らの苦しみ、悲しみをと、フィーネの背後に女達の妄執が見えるようだ。

正義と悪が分かりやすく目の前に出されたことにより、そして王妃が近衛兵に首を取れと叫んだこともあり、それは確たるものとして周囲の民に一気に駆け廻る。

その時だ、

「フィーネ!!……フィーネッ!!」

ハズルが王宮に出仕していたのだろう、王妃や近衛兵らをかきわ

けフィーネに駆け寄ろうとするが、王妃の私兵たる近衛兵に即座に取り押さえられ捕まってしまう。

近衛兵二人が階段を駆け下り早々に事態の鎮静化を図るため、フィーネにとどめを刺そうと槍を突き出しながら駆けてくる。

「悪いな、遅くなった」

32（リニムの魔女、降臨）

その声は天高くより聞こえてきたかと思うと、巨大な黒い雷がそれに続く形で降ってきたのだ。

地面を砕く勢いで落ちてきたそれは、石畳をやすやすと貫き地面に大穴をあけてしまうと近衛兵の行く手を阻みそれ以上フィーネへと寄せ付けない。

黒い雷と思ったそれは巨大な剣だった。

目の前に突き立ったそれを見て、フィーネは何かに導かれるようにして空を仰ぐと、そこには天使が舞い降りてきている最中のように見える。

綺麗……

黒い髪を翼のように広げた天使は、フィーネの前にふわりと舞い降りると、黒い巨大な剣を難なく抜き去り近衛兵を瞬く間に屠ってしまった。

血煙りが舞うその小さな背中は黒い髪をたなびかせ、裾のだぼついたパンツと金ものをしゃらりと鳴らし一つの小石を振り返りもせずにフィーネの方へと放る。それはデュベルだった。

デュベルが呼びだしたのはメルヴィルとアイアンバッハの二人だ。この混乱している最中では、自分を合わせ三人もいればおつりが出るさとは王女の言である。

「アイアンバッハ、メルヴィル、フィーネを」

「お任せを」

メルヴィルがフィーネを抱き抱えるとフィーネの手から短刀を取り去る。そして傷は深くないようだとその傷をさっと分析して、次

の瞬間炎を生み出していた。

「少し痛いですが、私の腕を噛んでいいので耐えてください」

「……何を」

ぼっと音を立てて炎を手のひらに吸いつかせるようにして生み出したメルヴィルは、フィーネの腹にそれを押し当てたのだ。途端、フィーネは先ほどまでは息も絶え絶えにぐったりとしていたのが嘘のように、アイアンバッハの丸太のような腕を噛んだままに跳ねまわりはじめた。

止血だ。腹を焼いて血を止めて、応急措置だったがなんとか上手くいったようだ。王女は王宮の膝もとで「私のフィーネに何をする！」と叫ぶハズルを見て笑う。

「無様だな――まあいい。この娘、リニムの魔女が貰い受ける。異論あるものは来い！相手になろう！！」

王女は面を目元だけ見える様に布で覆い隠しているためその容姿は窺い知れず、更には髪をそのまま出しているため、目も髪の色も周囲には見えていたため、これは効果が抜群だった。ひっと引き攣れた声をあげると王妃を囲んでいた近衛兵達がじりりと後退をし始めたのだ。

それに気付いた王妃は何をしていると叱咤するが無駄である。

「む、無茶言うな！俺は死にたくねえよ！リニムの魔女だぞ！！」

「に、逃げろ！魔女だ！！俺ぁ死にたくねえ！！」

「ひいいいっ！！」

当時との身長の差を埋めるため、王女はこの国では珍しい踵のあるオルキス製の靴を履いていたが、それでも矢張り可也の無茶があ

ったため、違うだろうと指摘される前に相手をはったりで追い払ったのだが、まさかここまで効果てき面だとは思わなかった。

「おー、おー、いいねえ、蜘蛛の子散らすってのはまさにこのことだな」

あれから数年もの時を経ていたのに、全くと言っていいほど風化していないリニムの魔女の伝説を目の当たりにして、当の本人のほうが戸惑うほどだ。

苦笑しつつ王女はくるりとフィーネをようやくそこで振りかえった。そこでフィーネを取り囲んでいたエッレミアーラの国民が、何故か自分に恐怖を多少なりと感じているようだったが、それでもなお逃げないでいることに首を傾げながらも、一つだけ、気になったことがあったため訊ねてみた。

それはあの王妃のことである。

「お前達はあんな国主でいいのか?」

昔は賢帝であったことや、本来ならば国主として国を統べる地位にいることすら間違っている者、それこそが王妃の姿である。けれど誰ひとりとしてそれを咎めることなくいるのだ。これはどう考えてもおかしいというものだろう。

なればこそ訊ねてみたかった。国主として相応しいと本当に考えているのかを。

すると暫くの間誰も言葉を返そうとはしなかったが、ふいに一人の子供が声を大にして叫んだのだ。

「――そんなの、嫌に決まってる!!本当はアデル王子がこの国の主になるはずなのに、後宮の主なはずなのに、女達は綺麗だと皆連れていかれて、殺されちゃうんだ!男だって綺麗だと皆王宮に連れ

ていかれて手篭にされるって……母ちゃん言ってた！そんな人が王であっていいはずがないだろ！？絶対間違ってんだよ！あんなやつ！！」

「そうだな、少年」

確かにそうだろう。そんな王が居ていいはずがないのだ。

国を食い物にし、私物化する、そんな国主、あっていいはずがないのだ。

王女は巨大な黒い剣を背に刺すと、子供に言った。

「今は混沌とした夜の時代なんだよ、少年。けれど明けない夜はないはずだ。違うか？だからな、直にこの国の夜明けもくるだろう。だから少年、もう少しだけ待つといい。夜明けはもう直ぐだ」

顔を覆った布の下から王女は笑みを浮かべると、子供はややもあってからぱっと弾けるような笑みを浮かべた。

「お姉ちゃんがこの国を救ってくれるの！？さっきみたいに悪い奴らをやっつけてくれるんだね？！」

その声につられるようにして大人達の声が続く。

「ほ、本当か！？リニムの魔女が助けてくれるのか！？」

「な……なら、リニムの時も本当は、滅ぼうとしていたリニムを救いに降臨したんじゃ……！！」

「だったら、エッレミアーラも救おうとやってきてくれた……？」

好き放題言い始めたエッレミアーラの民に、王女はおいおい、ふざけたこと抜かすなと言うものの、誰ひとりとしてそんな言葉なんて聞こうともしない。

それを見ていて治療の済んだメルヴィルはというと、こういうときの常套句は知っているかといつも通りの笑みを浮かべて言うのだ。

「こういうときは逃げるが勝ちというのですよ」

「……だな。そうに違いない」

王女達はフィーネを連れて、魔導部隊の元に置いてきたデュベルによってその場に光を残し、忽然と消え失せた。

33（愛する者だけの存在する世界、そこで生きていた男）

「俺が救世主って柄か。そんなのありえねえっての」

自嘲気味に王女は笑うと、目の前に広がる巨大な空間に視線を向けた。

目の前にあるのはエッレミアーラの魔石と、そして所在なさげにたたずむアデルの姿。その傍らにはキースの姿までであった。

「フィーネ……君は一体……」

「聞くなよ王子様。俺は俺だ、何者でもないさ。それよりもやることがあるんだ、力を貸して欲しい」

その空間の中央に位置するその魔石は、巨大な円盤の中央に据えられ、冷たい光を覗かせている。

その冷たい光のみがこの空間での唯一の明かりとなっているが、何故だかそれを見つめていると、妙に落ち着かない気持ちになる。

視界のない王女だけがそんなものとは無縁だったが、アデルはざわつく胸に違和感を抱きながら、王女の元へと歩を進める。

「さ、やるか」

気負うことなく呟かれたその言葉に、メルヴィルだけが冷たい目を向けていた。

リニムの王女だといえど、初めての作業である。これが上手くいかないようであれば無駄に飼う必要はないとメルヴィルは考えていた。

駄目だったらこのままここに置き去りにするか――それくらいに考えていたが、王女もアイアンバッハも、そんなことなど露とも知

らず作業を進めていく。
主であるシーヴェスはあれは役に立つとは言っていたものの、メルヴィルにはまだはかりかねていた。リニムという未知の国も、そして、その国の遺児である王女のことも。
役に立たねば切り捨てるだけです。
そう、それでいいのだ、それで。
メルヴィルはシーヴェスの邪魔になるようであれば王女を――とも考えていたが、暫しこの場は見守ることにしたようだった。ただし、そっと胸に隠されたほんの飾りのような小さな短刀はそのままに。
魔石を囲む円盤に、王女は無造作に腕を突きいれると、この三年もの間、うんともすんとも鳴かなかった魔石が唸りを上げ始めた。
「……そんな馬鹿な」
有り得ないこととキースは呻き声を上げると、アイアンバッハがキースに言った。
「我らはこのためにきたのですよ。貴方がたの国の魔石を芽吹かせるために」
「そんな馬鹿なことがあるか！！魔石は一度死ねば無理だ！生き返るはずもない！リニムは滅んだ！魔石も！……だから滅ぶはずなんだ！！」
アイアンバッハの言葉を否定するその声に対し、王女はキースに魔石から魔力を吸い上げられつつだったが、静かに告げた。それは

何とも心震え立つような、力強い声で、少女の声だというのに、どこか男の張りのある力の籠った声に聞こえた。

「リニムは滅びねえよ。リニムは蘇る。リニムの魔女と共に……何度でも蘇るさ」

リニムの魔導部隊は王女のその言葉に、静かに頭を垂れていく。

そうだ、我らは滅びない。何度でも滅ぼされようが蘇って見せる――彼らの心の内が、今、アイアンバッハにも見えたような気がした。

馬鹿なと頭を振りたく思ったが、だが、なんだかそれを見て、分かったような気がするのも事実だ。

王女が何故ああもリニム再興に尽力しようとするのか、その理由こそがそれなのではないかと思ったのだ。

「リニム再興……」

夢物語と思っていたそれは、リニムの者達の中では、いつも、いつまでも現実だった。

悲しいまでにそれは彼らの確かな願いで――それを知ったアイアンバッハはつっと涙をひと筋流す。

どこまでも気高く、どこまでも悲しい者達よ。

彼らはいつまででも魔石というものに縛られ続ける哀れな民だった。

＋＋＋

ハズルは娘を失った悲しみに打ちひしがれていた。だが、そんな

ことに構うほど王妃には余裕もなければ構う必要性も感じられなかった。それは当たり前だ、ハズルは王妃をたばかったのだから。

「ハズルを捕らえるのだ！あやつめ、八つ裂きにしてくれるわ！！」

ハズルはせめてフィーネの亡骸を手に入れたかった。娘が呻き苦しんでいたところにとどめを刺したのはメルヴィルだと思いこんでいたのだ。

だからこそメルヴィルを殺そうとハズルは自らを抑えつける近衛兵どもを薙ぎ払うと、伸びてくる腕に構うことなく遮二無二駆けた。

フィーネがからくも生き延びたことも、そしてメルヴィルの力によって救われたことも。ハズルは知る由もない。

矢を射かけられようとも槍を放たれようとも、魔術を向けられようともハズルは駆け続けた。娘を救わなければならないと、その一念のみで駆け続けた。お陰でハズルの身体は上から下まで小さな傷から大きな傷まであり、ぼろぼろだ。動いているのがやっとという有様になれば流石に追う側としても不気味さを感じ、その攻撃の手は緩み始めていた。

「フィーネ……フィーネや……フィーネやぁ……」

妻が残してくれた忘れ形見、それがフィーネだった。遅くして授かったというだけではなく、妻が自分の命をかけて産んだ命、それがフィーネだ。どうしても守らねばならないとハズルなりに考えていた。必死だったのだ。

だが王妃から評判の娘を嫁に寄越せと言われ、どのような扱いを知っていたからこそ、散々ごねたものの、それも無駄と分かった。だからこその身代わりだったがフィーネはそれを良しとはしないであんな暴挙に出てしまったのだ。

悔しかった、そして悲しかった。

どうしてハズルの愛を受け入れようとはしなかったのか、どうしてハズルの庇護の元にいようとしなかったのか、ハズルには分からない。

「はぁ、ひぃ……はぁ、はぁ……」

気づけばハズルは王宮の地下深くに足を踏み入れていた。

そこはきしくも王女や傷を負ったフィーネ、そして憎きアデルとメルヴィルの姿と共に、更におぞましいことにキースの姿まであったのだ。

「き……きぃすぅうううっ！！お、おのれぇえええ！！」

ハズルはキースの姿を見つけた途端、フィーネをあの日、置き去りに姿を消したという、にっくき思い出が蘇ってきた。そしてアデルを見つけてはお前の所為でと怒り狂わんばかりに血を吐き叫ぶ。

そうだ、全てはこの二人さえいなければ、フィーネはイリヤのことを知らずにただただ屋敷で今まで通り楽しく暮らせたのだ。フィーネは明るく、生きて――だと言うのにフィーネはもういない。死んでしまったのだ。

ハズルは叫んだ。喉が裂け、血が出るほどに叫び、吠える。

「貴様らの所為で！！フィーネ！私のフィーネは死んだのだ！！フィーネを……娘を返せぇえええええっ！」

何かあっても大丈夫なようにと、警戒を万全にするために各所に魔導兵士を散らしてあったが場所が場所だけに迂闊に攻撃することも出来ないでいるようだ。

「姫！お逃げください！！ここは我らが盾になり……」

部下が叫ぶのを聞いて王女はと言うと、それを遮るようにしてハズルへと叫んだ。それも最悪なまでの一言を。

何を考えて王女がそんな言葉を発したのか、キースにもアデルにも分からなかった。ただ分かったのは、王女は自分が全てを引き受けるつもりなのだということだけだ。全ての悪意を飲むつもりなのだ。

「ハズル！俺はここだ、イリヤはここにいる！キースではなく恨むなら俺を恨むがいい！！そして身代わりに選んだ娘が俺のような半端ものだと気がつかなかったお前の眼鏡を恨むがいい！！」

王女はハズルにそう言い放つと魔導部隊の兵士達がハズルが王女に標的を変えて駆けてくる。その駆けてくる道すがら、ハズルは落ちていた金ものを拾いあげると、それを掲げて王女へ向かって一気に駆けだしたのだ。

「イリヤ……貴様、生きていたのか！！フィーネを……身代わりになってくれるはずだったお前が生きて、何故フィーネが死んだ！？イリヤ！お前が死ねばフィーネは……！！」

王女はそれを受け止めるため剣を抜き放つかと思いきや、仁王立ちのまま構えようともしない。

だが、構えられるはずもないのだ。

王女は今、魔石を開いていた。魔石を包み込んでいる鉄とも銀ともつかぬ素材の金属の円盤に腕を突き刺し文字通りそれを開き、周囲に展開させていたのだ。

まるでそれはオルゴールのように王女の声に、熱に、血に反応し、音を奏で出す。

美しい調べを響かせる中、ハズルは王女に奇声を上げて足音荒く

駆けていく。

王女はここまできたのだから、それもまたいいと考えていた。ここで死ぬのもまた運命。そして、もしもここでハズルに殺されなければ、それもまた王女の運命なのだ。

それこそこの世界に王女がまだ必要とされているのだという、運命。

未来を占うためにというわけではないが、王女はハズルに自らの元へと来させた。部隊の者達は王女には何か秘策でもあるのかと見守るだけでどうしようともしない。確かにこんなにも狭いところで、それも魔石のある場所でなど魔術を使用出来ないのもあるが、けれど何をする必要もないものと考えてもいたのだ。

相手は王女だ、何かあるのだろうと皆、勝手に思い込んでいた。

ゴウンゴウンと音を奏でて王女が魔石の殻に取り込まれつつあるところにハズルが一気に肉薄するほどに迫ると、嫌らしい笑みを浮かべて死ねと叫んだ、その瞬間だった。予想もしていなかった出来ごとが起こったのだ。

「――いや、予想もしていなかった人間が動いたとでも言うべきかな？」

アイアンバッハが上半身裸の男に背後から声をかける。だが、その声はどこか、気遣わしげな声だった。

「キース殿……」

キースはずるりとハズルの背から曲刀を抜き去ると、蒼白な面で元主の名を呼び、泣いた。

「フィー……」

ハズルはがくりと膝を落として地に伏せるようにして倒れ込んだ。
その瞳から徐々に光が失われていくのを見ながらキースは嘆くように言った。

「愛した者だけで作られた世界では、人は生きられないのですよ、ハズル様……」

34（最誕）

ハズルの瞼をそっと閉じてその亡骸の上に雨が一つ、二つと染みを作り出す。

彼は今、彼が愛した者だけがいる世界に、いけただろうか。

けれどそこにはまだ、彼の愛する娘はいけない。彼の愛する娘は未だ死地に赴いてはいないからだ。少女は未だ眠りの淵に腰かけているだけで、現実世界には戻っていない。

けれど戻ってきたからとてどうだというのだろうか。少女の愛する父は既にこの世にはなく、そしてこの愛する国もまた、これから戦火にまみれようとしているのだから、このまま戻ってこないほうがいっそ、幸せなのかもしれなかった。

「眠りなさい、安らかに」

アイアンバッハは略式ながらその場でハズルのために葬儀を上げてやると、キースの顔をそっと窺うようにしてみる。有難う、ただそう言いたくてだったが、キースの目は――焦点があっていない。

「私は……私は……」

「キース……どの？」

私はまた、罪を犯した。

＋＋＋

一度目の罪は半分は濡れ衣で、半分は自分の落ち度だったとキー

スは考えていた。結果としては貶められたとも考えられるが、そんなことはもう、半ばどうでも良くなっていた。

何をどう言いわけしようとも、キースの部下が死んだことに変わりはなく、そして自らの戴いていた王もまた、それにより失ったことは紛れもない事実なのだから。

死のう、あの日そう考え曲刀を取った時、ハズルが現れこう言った。

「要らぬ命であれば、私が貰い受けてもいいね？」

その日から、温室で暮らすぬるま湯の中に浸かるような生活が始まった。

穏やかな生活もいいものだ、そう一時は考えていた。国が疲弊していくのを横目で見ながら気づかぬふりをして。あたかも私には最早関係のないことだとそしらぬふりで言いわけを続けていく。

だが知っていたのだ、本当は。キースがいなければいけない場所はこんな場所ではないと。

「王を失った後の王妃の嘆きは凄まじかった。私は逃げたのだ、王妃からも、王子からも。重圧に耐えきれなかった。皆私を責めない。だが実際に私は王を守れなかった！その妻である王妃の前に身を置くことなど出来ようか！出来るはずがなかった！どんなに必要だと縋られようが無理だった！だから私はあの日、重圧に耐えきれず死のうと考えた！」

だが、その曲刀はハズルにより、切れぬ錆びた刃物にされてしまったのだ。

ぬるま湯の中に浸かり、生きていく日々は確かに心地よかったのだろう。だが、自分は武人なのだと今、キースは真に理解したのだ。

「恩人であろうとも、私は切ってしまった。主を裏切り……あまつさえ切り殺した。そうすることが正しいとは確かに理解している！だが……だが……これでは……」

王宮から逃げ、王妃から逃げ、全ての重圧から逃げていき、漸く辿りついた先でこうしてまた罪を犯した。

最早自分は生きているべきではない。

王の片腕と言われ、若い頃からずっと目をかけて貰っていたにも関わらず、何一つ出来ず追い落とされ、辿りついた先ではこうして主を裏切り、背中から切りつけるような真似をしてしまう。こんな男に果たして、生きる価値などあろうものか。いいや、ないに違いないのだ。

「キース殿、貴方はアッシュを救ってくださっただけだ！貴方は何も悪くない！」

アイアンバッハは取りみだしたように叫ぶが、キースの心に何一つ――それこそさざ波の一つさえもその言葉は立てることが出来なかった。

穏やかな声でキースは言葉を紡ぎ出す。

「それでも矢張り、私は駄目だと思う。一度目は愚かにもはめられ、主をあのような形で失った。二度目は自分で切り殺したのだ。それも裏切って……殺した。このような者に生きる価値などないだろう」

「駄目です！！」

アイアンバッハが叫ぶのにはわけがあった。キースがまだ新しい血に濡れたばかりの曲刀を、自らの首にあてていたからだ。

曲刀を取りあげようにも首に押し当ててあるため、下手に掴みとろうとすれば首をその勢いで跳ねてしまうため、どうすることも出

来ないでいればそうすることしか出来なかった。ぎちりと音を立てて刃が突き立ったのを見てアイアンバッハは叫ぶ。

「お待ちなさい！貴方はまだ、生きなければならない！！」

キースはさもおかしいものを見たようにそれを聞いて笑う。

「生きる意味などとうに失っている。一度目の――王を失った時に私はもう、失ったのだ。だからもう……私は……キースという男が今、生きていることそのものがもう、嫌なんだ」

さあ死のうとキースは瞼をそっと閉じ、曲刀を支える腕をすっと引こうとした時だ。ふいにぐっとその刃が重みを増した。なんだと閉じた瞼を開いてみれば、そこにあったのは苦悶の表情を浮かべるアデルの顔だ。

アデルは辛そうに表情を歪めながら許さないと叫んだ。

「何を……」

そこでキースははっとなって首につけた刃の先を見て見れば、そこには血を流す指があったのだ。

ぷつぷつと小さな丸が新しく生まれてはそこから赤い筋を垂らし、キースの喉へと垂れ来る。

「おやめ下さい王子！指が落ちてしまいます！！」

「構うものか！キース、何を勝手に死のうとしているんだ！！生きろ！君は生きなければならないんだ！」

「何をそんな……」

アイアンバッハの声には全く表情を動かしもしなかったというの

に、アデルの声には心を強く揺さぶられているようだった。それはその面影に亡き主の面影を見たからかもしれない。

「お前は生きなければならない！死ぬことは……許さない！！君はあの時の濡れ衣で追われた者だろう！？私はまだあの時、幼くて……お前を庇えず……済まなかった！だが、あの時のやるせなさを私にもう一度、味あわせないでくれないか！……もう目の前で人が傷ついたり死んだりするのは嫌なんだ……キース……ねえ、キースお兄ちゃんなんでしょう？」

アデルの乳母の息子であったキースとは、幼いころから仲良くして貰っていた。強く逞しく、誰よりも自分を理解してくれていた兄。それがいつしか自分の父の片腕になり、国を守る仕事に従事する姿はとても誇らしかったのをアデルは覚えていた。

だが、いつの日のことだったか、国があれに荒れたことがあった。その時、父を失い、それと同時に沢山の人が死んだのだ。

そして、何がどうなりそうなるのかは分からないものの、兄であるキースにその嫌疑がかけられ——嫌疑は次第に解けていったが、それでも矢張り、王を守れなかったことを責められ、キースはいつの間にか王宮から姿を消していた。

「もう二度と目の前の誰かを失いたくないんだ！！」

「アデル……」

キースは腕から力を抜くと、済まないと小さく言葉を発して、目の前の僧衣を纏ったかつての弟の身体を抱きしめた。

カランと音を立てて曲刀が石畳の上に落ちると落下した勢いのままに、血の軌跡を描いて床の上でくるりくるりと回って、次第に力を失いそれも止まった。

「キース、君の命は今日から僕が預かる。そのままの名が嫌なら私が新しく名を与えよう。だから生きて欲しい」

「生きる？」

「そうです。キースは今、この場で私の血を受けて死にました。ですから今私の目の前に居るのは新しく生まれなおした男……そうですね――エリオルヘイメース……いや、エリオルヘルメスか。ヘルメス、君がハズルを命の恩人と主であると慕うならば、私が君を恩人と慕う気持ちも分かるはずだ。だから私のためにこれからは生きてくれるね？」

暁を指すその名を示されればキースは自分の目から涙が溢れ出て来るのが分かった。

そう訊ねられればキース――いや、エリオルはアデルの前に頭を垂れて跪いた。

「貴方のためにこの命、捧げましょう――永久に続く誓いを持って」

35（旋律を奏でる石）

魔石の殻に完全に取り込まれた王女は、己の中に流れる血と魔力を持って魔石を従わせている最中だった。

その殻は王女を取りこむとその形を変え、今はまるでオルゴールのようにその円盤の先に無数の突起を生やして、まるでそのためにあるかのようにして音を奏で始めた。

音が響き始めれば、今度は円盤が幾つもの輪に分かれだし、中央の魔石部分を取り囲むようにぐるりぐるりと輪が一つ一つ意思を持って回りだす。

王に――この肉体の父親から聞いた伝承が本当ならば、俺の魔力を少し食わせるだけで、後は勝手に自己修復を始めるはずなんだよな？

王女は魔力の解放とやらをやったことは一度もなかった。というよりもやり方が良く分からなかったのだ。周囲に向けて魔力をどうすれば放てるのか、それが分からないためどうにもやりようがない。

早々に音を上げたくなったものの今回ばかりはそうも言ってはいられない。兎に角やらねばならないのだ。何としても。

呼吸を深く、そして浅くと変えていき、目の前に対面している円盤から張り出したようにおさめられているそれに腕を突き出す。

腹の底に一度ためこんだ力を、腹を通り、腕を経て、そして体の外に押し出すようにして外に押し出し、魔石に送りこむ。一番近い感覚で言うなれば、それは熱を感じることだと言われたことを思い出し、王女はやってみる。けれど、中々どうして、一度では上手くいかないようだ。魔石には何ら変化は見られない。

「クソッ！！」

一度、二度、三度とやり、焦燥感に追い立てられていれば、身体の内側から腕が持ちあげられるような感覚がして驚いたものの、それに身を任せてみれば魔石が急激に王女の身体から魔力を貪り始めたのだ。

ただ、拍子抜けしたことに、王女は魔力を食らわれたというのに、全く疲労もなにも感じていない。指先がぴりりとした程度くらいの感覚しかないことに違和感を覚えたものの、まあこんなものか、とも思った。

だが、魔石は王女の魔力をきちんと食らったのだろう、魔力を吸いあげた魔石が唸りを上げ始めたのだ。

ズズズズズ、ズズズズ

「な、何事ですか！？」

それは魔石のある、この地下迷宮ごと揺さぶるほどに大きな揺れだった。

天井からは砂埃が落ちてくると床が波打つようにしてごんと音をたてて歪み始めた。一体、何が起きているというのか。

「まずい、天井が崩れるかもしれない！！」

エリオルはアデルの腕を引いて、そして横たえられたフィーネの身体を拾い上げてアイアンバッハ達に逃げるぞと叫ぶが、彼らは一様に動こうとはしなかった。それもそのはず、王女は未だ魔石に取り込まれたままなのだ。

「我々は後から参ります！お三方は先にお逃げください！」

「いや、しかし！」

三人が出口から上へと上がろうとしていたが、他の者達を残してなどいけるはずもない。アデルもエリオルも迷っていれば、ハズルの元来た道の方から追ってがやってきたようだ。といっても、これはハズルへ向けた追ってだろうが。

敵の侵入ということもあり、メルヴィルもアイアンバッハも部下に号令をかけ、魔石を守りにかかった。

「ルクレティアナ殿下の作業が完了するまでここを死守します！いきますよ！」

「承知！！」

アイアンバッハ達が武器を取ったのを見て、エリオルは居てもたってもいられなくなった。

だが、自分にはアデルを守る使命がある、どうすればいいのかと眉根を寄せて苦渋の表情を見せていれば、アデルがふっと笑って告げるのだ。

「いってくるといい。そして、私達を守ってくれるんでしょう？…お兄ちゃん」

「……ああ、そうだったな。私は……いや、俺はお前たちを守るんだ！」

そう、今度こそ。

エリオルは落ちたままの曲刀を取りに駆けるとそれを拾った勢いそのままに、エッレミアーラ正規軍へと踊りかかった。

「アデル皇太子が剣、エリオル・ヘルメス、参る！！」

＋＋＋

魔力を解放した途端、凄まじい勢いで魔石がはめ込まれた円盤からがたがたと今にも飛びだしそうなほどに暴れ始めた。それはまるで生き物のように蠢き、暴れ回る。初めてそれを見たならば、いっそ恐ろしいと悲鳴を上げてしまいそうなほどにそれは不気味な光景だった。

「なんなんだこれは!!」

たったこれだけの動作で済むはずだったのに、円盤の外にどうやったら出られるというのか。王女は周囲に忙しなく視線を走らせて行くが、どこにも穴のようなもの一つ見つけることが出来なかった。

「……なんなんだよ……お前、はっ!!」

ごんと拳を魔石にぶちあて苛立ちを紛らわせようとすれば、散々暴れ回っていた魔石がそれにより大人しくなったのだ。どこぞの国だか地方ではないが、叩けばなおるを実践したような状況である。

「あ、れ?」

こんなもので落ちつくとはまさか思いもよらなかったわけではあるが、うっすらと淡い光を放ちながら魔石が落ち着きを取り戻していくと、そのまま円盤は奏でていた音色を荘厳な音の調べへと変化させていく。

正常に作動し始めたようだと首肯すると、王女はとりあえず「殴ればいいのか……」と自分の中で結論づけた。というよりも、他に何が理由で魔石が落ち着いたのか、分からなかったのだ。

魔石の埋まった円盤が奏でる音色は次第に外にも漏れ聞こえ始め

ることとなる。

「――これは」

アイアンバッハが巨大な長剣を薙ぐようにして敵兵士を寄せ付けないでいれば、それは耳に最初は微かに――次第に大きな旋律を奏で始めるのだった。

王女は旋律が周囲を満たし始めた途端、次の作業に移りだす。

魔石にぴたりと手のひらをあてると、魔石と対話し始めた。

力の滞っているところを見つけ出せ。

詰まりだ、そこを取り除いて新たな魔力をそこに流し込むんだ。

王女が触れた先から円盤に光の筋が入りこむと円盤がばくりと口をあけ出した。そしてそれはいくつも筋を描きだし、円盤はみるみるうちにその形を変化させていくのだ。

「い、一体何が起こっているのだ!!魔石が!!我らの魔石が……失われてしまうというのか!?」

アイアンバッハ達と剣を交えていた兵士達は恐慌状態に陥った。それもそのはず、魔石を失うということは、この国の中枢が死ぬことを意味する。そのため、魔石が――それを包む円盤が変化し続けているその様子を見て、崩壊しているととったのだろう兵士達は、何をしてくれたのだと恐怖につんざく様な悲鳴を上げた。

「貴様ら、あれが何か分かっているのか!!魔石だぞ!!大陸に十も存在しない、希少なそれを……全員生け捕りにしろ!!王妃の元へこやつらを全員、連れて帰るぞ!!」

兵士達の目標が、逃亡者ハズルからこの時、アイアンバッハ達へと変更された。

ものがものだけに敵も相当に怒り心頭なのだろう、先ほどまでとは違い、何故このような場所に侵入者がという驚きからの攻撃ではなく、それは明確な意思を持ったことにより力を得たようだ。酷い剣さばきではあったものの、それでも凄まじい勢いで繰り出される剣に否応なしに追い詰められる。

「アッシュ、まだですか！！」

36（食らう漆黒の瞳）

聞こえるとは思ってはいなかったものの、アイアンバッハは力任せに特攻をしてくる敵を抑えながら叫んだ。

円盤は今、まるで鍵盤楽器のように、オルゴールの盤面のように、その形を幾つもの輪を連ねたような形に変えて自らをすり合わせることにより音を奏で続けている。王女はその中央にある球体の中に囚われているようにそこにいた。

輪は王女を中心にして位置を何度も何度も変えていく。それは王女が魔石の力の滞っている塵を細心の注意を払い取り除いているからこそ起こる、言わば作業工程上起こりうる現象といえるものだった。

塵はそれこそ数え切れないほどのものがあった。何をどう使用していればこうまで摩耗するのか分からないほどに、それは凄まじい汚れが内部に詰まっているのだ。過酷な使用環境だと塵は酷いなと言われたことを思い出す。

「エッレミアーラはそうか、水を湧きあがらせるために使用していたっけな……」

この砂漠の国で中央のみこうまで水不足に悩むことなく発展を遂げ続けていけている理由はひとえにそれがあるからこそだろう。魔石により水が確実に得られること、これによる恩恵ははかりしえないものがある。

だからこそ魔石がもう、なくてはならないものになってしまっているのだろう。

使用限界をとうに超えて使用し続けた結果、こうなったのかと思うと何とも言えないものがあった。

王女の目の前にある魔石は、つい先ほどまで完全な沈黙状態にあ

ったのだ。それでも何とかこの国のために尽くそうというのか、魔石は虫の息で活動をし続けていた。それはなんと勤勉なことかと思うほどだ。

王女は完全に塵を全て取り除いてしまうと、そこに新たな血を流しこむようにして自らの魔力を流し込み始める。

「何が起きているんだ！？」

魔石の外から見たそれは、途轍もないことになっていた。

がりがりと輪がこすれ合う音も確かに響きはするものの、目の前で起きているのはそんな音など聞こえなくなってしまうほどに凄まじいものだった。

音の洪水だ。音の洪水が地下空洞を一気に駆け廻っていくのだ。

鍵盤が凄まじい勢いで奏でられていくと、それを儚げな印象を与えるオルゴールの調べが続く。音と音とが響き合い、奏であうとコーンと最後に甲高い音を上げて輪が元の位置に戻っていく。

「はい終了っと。お疲れさんでした、俺」

王女はにっと笑いながら魔石を軽く叩いてやると魔石は軽く震えを返した。それはどこか、嬉しげに笑い返したようにも見えた。

＋＋＋

何をしたのかは分からないものの、弱弱しい動きしかしなくなっていた魔石が、急激に力を取り戻し、一気に力を供給し始めたのを見れば兵士達は驚いたようだ。

けれど困ったことに魔石の暴走と取られたらしいそれを、咎めら

れて怒りをぶつけられたのはなんと言ったものだろうか。

「呆れたもんですねえ……直ったんですから素直に喜べばいいものを、暴走させて壊す気かって。ほんっとにこの国の連中は面倒でなりませんよ」

メルヴィルが岩を地面より突出させる魔術を使い敵を貫きながら言えば、アイアンバッハがその背に迫り来る敵を圧倒的な剣さばきで寄せ付けない。

「あれで……本当に元に戻ったのでしょうか？」

元を知らないだけに何とも信じがたいものがある。だが、それはだれしも同じ気持ちだ。

そんな中、ふいにその場を割って入ってきたのは待ちわびた声だった。

「遅くなった、悪い」

「アッシュ！！ご無事ですか！？」

未だ魔力を解放状態にあるのだろう王女の姿は魔石の円盤から分離され、吐き出されるようにして外に飛び出ると敵の気配を感じ、そちらへと武器を構えながら首を巡らせた——瞬間のことだった。どさりどさりと音を立てて王女の視線を向けた方角に居た者全てが倒れ伏していくのだ。それも、敵味方の区別なく。

王女はさあやるぞと構えていただけにこれには面喰った。

「なんだ？」

気配があったかと思いきや、唐突にそれが消え失せたのだから驚

くのも無理はないだろう。
だが、王女を待っていたのは更なる驚愕の事実である。

「なんっ……！！これは、どういうことだ！？」

王女の魔力の解放によって、それは力を取り戻したかのように色を取り戻す。

「目が……また見えるようになってる？」

またもや王女の目玉は息を吹き返していたのだった。

魔導部隊の者曰く、これは王女の魔力が解放されたことによる後遺症のようなものだろうということだった。

「一体それはどういうことなのですか？」

メルヴィルが訝る様にして訊ねるが、王女は何とはなしに分かるような気がした。
部隊の者が語るには、こういうことのようである。

「ルクレティアナ殿下は元よりも凄まじい魔力を有しております」
「それは……そうでしょう、リニム王家ですからね。それは十二分に承知しておりますよ」

メルヴィルが今更何をとばかりに言うのを受けて、王女は苦笑し

つつ揶揄するようにというわけではないが、茶化すように付け加える。

「済まんが俺は自分じゃ魔力を調節して解放することが出来ない。お陰で生まれて直ぐに母親からうとまれて生活してたんでね。リニム王家のつまはじき者の俺に、その常識とやらを当てはめて考えて欲しくはないな」

そのため魔力を持っていないと暫くの間考えられていたため、不遇を強いられてきた王女ならではの皮肉ったこの物言いに、魔導部隊の面々は苦い顔を浮かべている。

「アッシュは一度、国王陛下より処刑されようとしていたことがありまして……」

「処刑？……ですが、……では、何故リニムの魔女と称されるまでの魔力を……？」

「だから、あの時もミシェルが言ったはずだ。俺の魔力は弟が引きだしていたんだと。だから……俺は弟が現れてその力を引き出してくれるまで、単なる置物以上の価値のない、無駄飯食いだったのさ」

目が見えず苦労は確かにあるものの、最初から視界は無いものと切って捨てるようになってから、そんなものは気にならなくなった。けれどただ浪費するだけの暮らしをしていた事実はどうあっても消えることはない。

そして、弟がいなければ何も出来ない、何をすることも出来ない無駄な存在であったことを思い出すたびに王女は思うのだ、今は出来ることがあるのだから、全力でこれにあたるべきであると。動けるなら動け、あるけるならやれるはずだ。前に進めるのにどうして進まない。

それは王女の存在を証明するために必要なことなのかもしれない。

別世界からやってきたがゆえに、この世界での視界が零ということもあってか、ここは王女にとって虚構の一部のように未だ感じられる世界だ。

そこでの無駄であった生活を無駄としないために、その時を決して忘れたいと願わなかった。むしろそれを思い出しては戒めとする。

全身で感じろ！

全身で生きろ！

何のために足がある！腕がある！

目が見えないからと諦めることは王女の辞書にありはしない。あるのはただ、全力で己の価値を示す事、それだけだ。

逃げないと誓ったのだ。あの日国を失った時から。

「ルクレティアナ殿下は今回、魔力を放出出来るようになったようですが、そのかわりに副産物を手にした様子」

「副産物……」

それこそが今回のこの事態を引き起こしたのだという。

目の前にずらりと並ぶ倒れた敵兵士達を眺めつつ、先ほどまで同様に倒れ伏していた部隊の数名が口を開いた。酷い眩暈でも覚えているようで、くらむ頭を振りつつ呻くようにして口を開く。

「殿下は恐らく、我らの魔力を食ったのです」

「食う、ですと？」

37（突きつけられた現実、その言葉）

メルヴィルは流石に驚いた様子だ。

「ティセリウス殿下から与えられていただけと、同等の大きさの魔力を食うことで恐らくは……眼が一時的にですが、見える様になっているのだと思われます。そして、魔石に魔力を流すことにより、もしかしますとですが、殿下の魔力を流す道のようなものが組み立て上がったのではないかと……」

もしかすればだが、これからは魔力を自在に操れるようになるのではないかと言われれば、王女は沈黙してしまう。それは王女の望んでいるものではなかったからだ。特に不自由なく暮らしていたため、要らなかったのだ。けれどどうやら今後、王女の魔力は王女のものとなるようである。ティセリウスがいずともこれが自分で使用できるようになるのかと思うと何やらどうしたものかという、多少もてあまし気味というのが実際のところだった。

「――ああ、他者の魔力を食らう。そうか、そういうことだったのか」

初めて見た光景が、確かにそうだったと王女は思い出す。

目の前に転げ落ちた棒きれのようにして、ごろりごろりと幾重にも人が重なり倒れていたことを思い出し、唸る。

「処刑場で目が見えるようになったと同時に確かに人が倒れていたっけな」

あれは王女が目の前の人間達の魔力を食っていたからだったのか

と気づくと同時に、もしかしたらこれはとんでもなく面倒なことになってきたのではないかと思った。

「殿下がもしもこれから魔力を暴走などした場合、我が軍はそれこそ全滅しますよ……」

「だな……笑えもしないがそうらしい」

近年で一番笑える冗談だ――そう呟くと王女はアデルとエリオルを振り仰いだ。

そこにあったのは不気味な物を見つめる不愉快な目が二対。それをみとめれば王女はくっと笑みを口元に刻んだ。

「行くぞ、アイアンバッハ。シーヴェスが向こうで待っている」

王女は二人に話しかけることはせず、そのままその脇をすり抜けるようにして狭い穴倉のような道を行く。

アデルはその孤高に映る背を、ただ見送ることしか出来なかった。

＋＋＋

血の交代劇を演じなければならないのはこの国の次代の王となるべく生まれたアデルだ。けれどここにその姿はまだ、ない。

シーヴェスは自軍を率いて大臣と話しをしているところに、飛び込んできた小さな姿に軽く目を細める。

「ルクレティアナ、来たか」

「悪い、遅れた」

「手間取ったようだな」

「まあな。初めての作業だったからというのはいいわけだな。あとでいくらでも叱られてやるから状況を教えてくれ」

目が見えているうちに、早くその位置を全て頭に叩き込まねばと王女は二人が覗きこんでいる地図に視線を落とす。そこにあったのはまさしく、エッレミアーラの首都、フーチャルの中枢を描いたものだ。その全ての要所がびっしりと書き込まれた地図が、余すところなく広げられている。王女はそれらを目を皿のようにして一気に情報を頭の中に叩き込んでいった。

シーヴェスは丁寧に地図上にあるものを説明してやろうとしたのだが、それをメルヴィルが押しとどめた。

「今現在、ルクレティアナ殿下の目は見えております」

「……何？」

眉をぴくりと跳ねあげたシーヴェスに、メルヴィルは時間が惜しいと後で説明はすると伝えたきりで語ろうとはしなかった。そしてシーヴェスも聞こうとはしない。時が惜しいのは互いに分かり切ったことだったからだ。

アイアンバッハも自軍がいつの間に手配されていたのか、駆け付けてきていたためにこちらも部下と共に実戦配備の位置を確認など、忙しなく動いている。それも当然である、シーヴェスから告げられたことは開戦しかかっているという情報だけだ。けれどその情報はこれ以上ないまでに切羽詰まった事態になっていることの現れと言えるだろう。そして先ほどハズルを追いかけてきた兵士達と一戦交えたものだったが、よくよく考えて見れば上が騒がしかったからこそ、下まであまで血気はやった状態で兵士達が駆け付けてきたのかもしれないと合点がいったものである。

「そ、外で何が起きているのですか！！」

アデルが地下迷宮より這い出てきて、開口一番叫んだ言葉がこれだった。

迷宮より上がってくると、そこに待っていたのは何故か戦地である。まだ本格的な戦闘は行われてはいないものの、完全な臨戦態勢を両陣営が構えており、両者一歩も引かずといった様子を見て、アデルは王女達の居る天幕に入るなり止めさせなければと叫ぶ。

だがしかし、シーヴェスはぴしゃりとそれを切り捨てた。

「今更引けるはずもないだろう」

「何を馬鹿なことを!!戦争など愚かな行為です!それも……これはオルキスの政治介入ではありませんか!皇太子としてこのようなこと、断じて許すことは出来ません!大臣!!」

大臣とシーヴェスが組んで事に当たっていることは直ぐにも知れたが、アデルはまだ、気づいていない。最早その段階の話しはとうに超えてしまっていることを。

王女が視線はそのままに淡々と口を開いた。

「アデル、お前はいつまで目を背け続けるつもりだ?」

「なんだって……?」

突然のこの言葉にアデルは王女へと視線を向ける。けれど王女は地図へと視線を落したまま、動こうともしない。

「お前が責務を全うせずに逃げ続けているために、一体何人の国民が犠牲になったんだ」

アデルはこの言葉に頭から冷水を被せられたようになる。だが、王女は構わず続けた。

「この国の中であの王妃が国を食い物にしていることを知らないのはもしかしたらお前だけなんじゃないのか？……いや、知っていて知らないふりをしているんだよな。そうだろ、アデル皇太子？」

「……」

38（我が奴隷に命じよう）

「お前は知ってる。けど逃げてるだけだ。そりゃ怖いよな、殺されるかもしれないんだからな。でもな、そのお陰で俺よりチビな小僧がこんなことを言ってきた。『本当はアデル王子がこの国の主になるはずなのに、後宮の主なはずなのに』ってな。皆待ってる。お前を待ってるんだよ、アデル」

王女はすっと机から面を上げていくと、アデルへとひたと視線をあて、静かに見つめて言う。

「いつまで逃げるつもりだ、アデル」

「……私は」

「お前の責務を、果たせ」

「責務など……」

王女は言葉を待たずに歩き始める。天幕を跳ねあげると、顔を覆った布をそのままに、この場が城下町を見下ろせる高台であるのをいいことに、すうっと息を大きく吸い込むと、腹の底から声を出して叫んだ。

「アデル皇太子は生きているぞ！！我らが希望は今ここに！！」

王女が叫んだ途端、城下町ではわっと割れるような声援が上がった。

「な、なんですか……」

びくりと肩を震わせて何事かと怯んだアデルの背を、シーヴェス

は押して天幕を共に出た。

「これが答えだ」

「……そんな」

アデルの目の前には、首都を攻め落とせと叫ぶ、エッレミアーラの民がわんさと居た。どれもこれもがその表情によくぞ生き延びたと書かれているが、一体これはどういうことなのか。

「王妃が先ほどのそこなご令嬢の動きに触発されたらしくな、アデルを謀反人といちゃもんをつけてきたようだ。国民も直ぐに王妃がただアデルが邪魔だ、今すぐにでも殺してしまえば何とかなると踏んだと分かった。だが、分かったとしてもどうなるもんでもないことがある――それは、アデル王子が生きていなければいけないってことだ」

国民はずっと待っていた。アデルが正式な国王の座にのぼることを。

だが王妃がそれをずっとそれと分からぬようにして、直接ではなくじわりじわりと手を伸ばして王子からその座を遠ざけていたのだ。

そんな中の謀反人としての処罰を触れとして出したのだ。これに国民が怒りを覚えないはずがなかった。

「国民は決起した。それも、アデル王子、貴方のためだ」

アデルはシーヴェスの言葉にごくりと喉を鳴らす。眼下では国民がアデルアデルの大合唱を奏でている。恐ろしさに膝が竦みそうだった。

「我らが御旗はこれにあり！！正義は我らにあるぞ！さあ民よ、立

て！我らの国を取り戻すのだ！！」

王女の演説に国民は割れんばかりの声を上げる。凄まじい力を感じてアデルは膝がかくりと砕けてその場にぺたりと座り込んでしまった。

砂埃を薄く立てながら、エリオルと大臣がその両脇に立つと二人同時に跪く。

「何を……！？」

「お立ちください、王子」

「我らに忠誠を誓わせていただきたいのです」

「お前達まで馬鹿なことを！！母上だって、きちんと話せば誤解も解けるはずだ！それを――」

あくまでも皆の気の迷いだと言うふうに王子が現実逃避を続けるのを、二人が肩を揺すぶって止めた。

「目を覚ましてください！！確かに貴方は大変怖い思いをなされた！」

「御子を殺された折、赤子をくびり殺した手のままで自身を抱きしめられたことは確かに恐ろしいことでありました！一人目の妻の時もそうでした。二人目の妻の時もそうでした……ですが……ですが、では一体、今まで何のためにやってきたのですか！！」

「……」

王女は流石にこれには驚いた。妻は一人だけだと聞いていたためまさか二人もいたのかと思ったのだ。

けれど二人も殺され、更には子さえもくびり殺されたとなれば、確かに辛いだろうと唸る。

妻を、そして子をと身近な人間を殺され、なのに殺した人間は笑

顔で自分に近づき「お前が愛しい」と言ってくる。これで気が触れなかっただけでも大したものなのかもしれなかった。

だが――それとこれとは別なのだ。

この国はもう限界だ。王妃を排斥しない限り悪政がずっと続く。そのことに国民はもう、ついていけない。

だからこそ後は王子の言葉一つが必要なのだ。それさえあればもう、直ぐにも開戦出来るのだから。

「王妃の醜い立ち居振る舞いに幻滅もされたことでしょう！けれど、それでも今まで勤めを果たし続けていたではありませんか！！」

王子はこの言葉を受けたと同時に俯いてしまった。

どんなに恐ろしくとも王宮に居続けた理由とは一体、どんなものだったのだろうか。

僧職に身をやつし、王妃に私は逆らわぬと言外に告げていても、追い込まれ続けたアデル。駆け引きがどれほど続けられたことか、最早その長さを語ることなど出来はしまい。それほどの長きにわたりそれは続けられてきたからだ。

全てはアデルが国を思うがためだった。

一人また一人と国の忠臣として仕えてくれた者達が王妃に消されていく中で、なんとか踏ん張り続けてきた理由はそれだった。

我が子であろうとも殺されるのではないか、いつか改心してくれるのではないか、何度も考え続けてきた言葉だ。

前者は未だに頭の中にある声で、そして後者は希望だった。幼い頃よりも遠くの人物であった母の姿が近くなったと同時にこのような結果になったわけだったアデルからしてみれば、それは当然の気持ちなのか。いつか触れたいと願っていた母のそれは、生来の姿であったのか、それともこれは一時の気の迷いなのかといつまでも、いつまでも考え続けていた。

そこに答えなどありはしない。

アデルはまだ、王妃に何一つ聞けていないのだから。

「……ッ」

一度だけ、本当に微かにアデルが頷いたことによりエッレミアーラ首都フーチャルでこの日、玉座奪還――血の交代劇が開幕した。

十十十

「命令だ、王妃を殺せ」

シーヴェスからの命が下されたと同時に、王女の首輪が一瞬熱を帯びた。首輪が主の命令を感知したのだろう。

王女はこれを受けて視線を交わすことなく首肯すると、王妃を殺せばアデルが助かるんだろうと訊ねた。

「なんだ、やつに惚れたのか？」

「違う。その王妃に俺も動けなかった間に殺されかかったんだよ。自分の仇は自分で討つが――俺を助けたアデルに、借りは返さなくちゃならないからな」

なるほどそういうことかと頷くと、シーヴェスはくすりと笑みを零す。

「色気も何もない理由だな。つまらん」

「抜かせよ。――兎に角、王妃を殺せばこの馬鹿馬鹿しい政治劇も終了。俺もお前もオルキスへ戻れるんだろう？なら、即効で片付けてやるさ」

ぱんと拳を叩いて告げる王女に、シーヴェスは頼もしいことだがと言うと、王女の目の前までやってきてぺろりと胸元だけを隠している布を捲って首を傾げた。

「なんだ、もう全部落ちたのか？布に隠れている部分まで全て落ちているようだな……。案外消えるのが早いんだな。ということは、もうアデルにはバレているんだな？」

「なななな、何をしていらっしゃるのですかシーヴェス殿下！？」

「確認している」

「変態行為を受けている」

王女とシーヴェスが同時にこう告げたのを受けて、メルヴィルが一言、こう言った。

「認識の差が痛いですねぇ……」

39（エッレミアーラに住まう善良なる市民に告げる）

王女は首や耳から飾りを全て取り外すと、そこに新たに手甲――といっても手枷といった程度の小さな鉄の輪と、ほんの申し訳程度の胸当てを取りつけ紐で固定をし始めた。甲冑は重すぎてつけられないため、王女なりに考えだした武装である。

実は守りが何もなしで行くことも考えたが、この武装を持ちこんだ部隊の者に話しを聞くとこれは武装というだけではなく、魔力を抑えるためにもあるのだという。

「なんだそりゃ？」

「殿下はまだ力が目覚めたばかりです。それを少し調整しやすいようにするための術式がその中に組み込んであります。本来の使用用途もそういったものでして……甲冑をつけないということでしたら是非ともそちらをつけていって欲しいのです」

武装をしないのであれば腕も足も剥きだしだ。ならばそこに魔力制御の手甲をつけてもなんら問題はなかろうということだ。自分の部隊の者と言うこともあってか、疑うことも勘ぐることもなく王女はそれに首肯すると、それらを腕や胸に当てて見せた。すると、奇妙なことが起こり始めたのだ。

「なんだ……？」

自分の中から溢れ続けていたそれが、魔力制御の手甲と胸当てをつけた途端に行く方向性が見えたように、真っ直ぐに道がぴたりとはまったようになった。

言わば氾濫し、暴れ狂うように川から土砂と共に水が溢れかえっていたところを、綺麗に堤防を築きあげたとでもいうべきか、それ

らは荒れ狂うことなく綺麗に王女の手元にある。
そこに確実に魔力があるのが分かると、今度は面白いことが分かった。

「俺の目か……なるほどな」
「目、とは？」

手甲をくれた男だったが、王女は自分の目を指さしてこれだと告げる。

「一体なんです？」
「俺の目はどうやら特別仕立てらしい」

といっても、それに関しては先ほど部下の口から説明を受けてはいたものだった。ただ、まさかそれが目だったとはという驚きはあったが。

王女が魔力の道筋を意識すれば、それは目に集まっていた。それも、魔力が先ほどまでは全身からだらだらとむやみやたらと垂れ流していたものを、今は腕から綺麗に一本身体の中から線を引かれたように湧きだしているところを、これはそれとは別に――それも勝手になってるらしく、王女が制御できないようだった。

自分の意思で制御出来ないこの目は恐らく、この手甲を外せばまた簡単に周囲の人間の魔力を食い荒らすようになるのだろうと思うと、王女は嘆息を零す。

厄介なことに、魔力を真っ直ぐに放出することが出来るようになると、それとは別に自らの肉体、その欠損部医を補おうとこの魔力は働くようなのだ。

今までを振り返り良く考えて見れば、確かに王女が『見た』者達が倒れていたように思う。それも、魔力を食いつくされて倒れていたのかもしれないと、今更ながらに気がついた。

初めて見た処刑台の上の光景、後宮での女達の倒れ伏した姿、そして先ほどのあれもそうだ、それを思い出せば自然と理解出来た。

「俺の目はどうやら他人の魔力を食らって見える様になるらしい」

苦笑気味にそう告げてやると、目の前の男は絶句してしまう。そしてややもたってからごくりと喉を鳴らし、知らず後ずさりをしてしまったようで、それに気づけば王女に申し訳なさそうに詫びたものだった。

だがそれを王女は責める気にはどうしてもなれなかった。

王女は黒髪黒目の異端というだけでなく、魔力を食らう瞳を持った更なる異端児だったのだ。これで怯えぬ者がいるほうがおかしいだろう。

異形とも言えるその能力に怯えぬものがいようはずがない。この世界では魔力が欠片も存在しない者などいないのだから。

それこそアイアンバッハのように、異世界からやってきた者以外は。

「――じゃあ俺は一体、なんなんだろうな？」

自らの手のひらにそっと視線を落としつつ考える。

この身体は何で、どこから来たのか。そしてどこへと行くのか。

同じく異世界からやってきたというのに、何故かこの肉体には魔力が宿っている。その理由を王女は考えてみたが、止めた。ろくな考えが浮かばなかったのだ。

「ルクレティアナ殿下、参りましょう」

「ああ……分かった」

見えるのに見えない、先行きが不安になりつつも王女は前を歩き

だした。視線の先にはメルヴィルと――そして同じく不安そうな面持ちのアデルがいて、なんだかそれを見た王女は、あいつも俺と同じく迷子なんだなと感じ、笑ってしまった。

アデルはこの国で、そして王女はこの世界で迷子なのだ。

＋＋＋

「後宮の女達も考えてみれば可哀想なものですよ。王妃に籠められ、あそこから出されることなく死んでいくんですからね。彼女達も被害者と言えば被害者でしょうね」

まあ王女からしてみれば多少恨みもあろうものだが、それでもだ、彼女達も悲しき運命を背負っていたのだからあまり責めてくれるなと言っているようにそれは聞こえた。

王妃のもう一つの狙いは自分よりも美しい貴族の娘達や奴隷の娘達を後宮にこめて出さないことだったらしいと聞く。ただ、それが事実どうかは王妃自身に聞いてみなければ真実は分からないものの、人妻さえあそこにこめてしまっているということで――その容赦のなさからより一層、後宮の中で女達は絶望の中に身を置いていたのだという。

皇太子妃の座など要らぬと言っても誰も後宮入りを阻止することは出来なかった。それこそ、ハズルのような変則的な方法を持ってでもしなければ無理なのだろう。

その悪夢も王妃を弑することが出来れば――ということか。

「……王妃の首を一つ取れば終わるんだな？」

この国の悪夢は。

「ええ」
「因みにこの戦で俺達リニムは得をするか」
「ルクレティアナ殿下、貴女も案外抜け目ないですねぇ……。まあいいでしょう。シーヴェス様がここできちんと働けば褒美をくださるそうですよ。なんでも、リニム特区をオルキス領内に作ってくださるとか」

ただし、非公式ではあるだろう。リニムの者達は既に王女以下二名以外死んだものとなっているのだから。これで特区を大々的に打ち出すことなど不可能だ。ではどうするのかと訊ねれば、メルヴィル曰く、王女の連れてきた部下二人――アイアンバッハとミシェルの職とされている文官、この職を使用するのだという。

シーヴェスはもうこの時、全軍の指揮を執って闘っていたが、王女がそうした提案をしてくることは計算のうちであったようだ。呆れながらもメルヴィルがシーヴェスからの案を提示してみれば、王女はなるほどとリニムの者達にもその働きに報いようということかと頷いた。

「文官を、ねえ？」

おおよその見当はついたため、なるほどと王女はにっと口元に笑みを刻んだ。その笑みは戦の真っただ中にあるシーヴェスに向けた笑みだった。中々どうして、食えない男だと王女は思った。

それが見えたのかは分からないものの、シーヴェスは徐に面を上げて全軍を鼓舞するような声を上げる。

「エッレミアーラに住む善良なる市民たちよ！我はオルキスが第一王子、シーヴェス・オルク・ウルジェンキス！そなたたちの悲痛なる叫びを受けてオルキスより参った者！そして我はそなたたちの同

盟者なり！

悪政によりこれまで苦しめられた者達に告ぐ、我らはこれより王妃の首をとり、そなたたちを解放しよう！！

我に続け！オルキスの勇者たちよ！エッレミアーラの民よ、力ある者はどうか立ちあがって欲しい、そなたたちの国を、これよりそなたたちで新たに生み出す戦にいざ、共に参ろうではないか！！」

39（エッレミアーラに住まう善良なる市民に告げる）（後書き）

シーヴェスの今までのあまりの空気っぷりについて
存在感がなかったのはどうしても話しの都合でそうなったんですが
あまりにも寂しかったですね
ここでようやくーと思うんですが少しでも格好良さ?というか伝わ
っていればいいな!と思いつつ書きました

40（愚か者達のハレム）

今は隠れ住むようにしてひっそりと暮らすリニムの民たちも多くいた、そんな生活を強いられてきていた民も居場所が出来るとあってか、王女の目がきっと前を見つめるものにかわった。リニムにとっても悪い話ではない、そしてこの国の民にとってもそうだ。悪い話しではない。オルキスとの同盟関係も、そしてこの政治交代劇も。

その上この国の圧政を肌で感じ、憎しみすら抱いた王女はそれを打倒することに何ら罪悪を抱かないまでに、もうなっている。

その上他にも王妃を討つ理由があった。

アデル……

王女は目を眇めるようにして前方を望む。背中に挿した大剣が、王女を後押ししてくれるような気がした。

「俺の部隊はあの八名だけじゃないだろうな？」

王女の部隊――というよりも、リニムの兵士が今回どれほどこちらへと出向いてきているのか知りたかった。するとメルヴィルは首肯しつつ部隊の数を並べていく。

「勿論。彼らの力なくては今回の遠征は成り立ちませんでしたからね。あちらにおりますよ」

小隊が二、そしてアイアンバッハの部隊が半数も揃っている。これだけいれば十分だ。

王女は腹の底から声を上げる。

「聞け、同胞たちよ！俺はここだ！俺に力を貸せ！！これよりこの戦は俺達の戦となった！」
「アッシュ！」

アイアンバッハが前へと進み出てくる。ぼろきれのようなあの闘技場の奴隷衣装より一転し、銀細工の武骨ながらも美しい装飾の施された鎧甲冑に身を包んだアイアンバッハを見て、王女も満足げに頷いた。

「アイアンバッハ、これは今から俺達の闘いだ。――オルキス領内にリニム特区を作るため、王妃の首を取る！魔導部隊前へ！俺を補佐しろ！」

王女の声で立ちあがったリニムの魔導部隊が王女の脇を固める。

「済まないが少しその魔力を食らっても構わないか？」

その異端の能力を見せつけるのもあまりいい気分はしないものの、それでも仕方がない。やらなければならないのだから。

王女は魔力を兵士達から微量ずつ食らい、補充すると、次第に目に力が戻ってきたのを感じる。

矢張り弟一人とは比べるべくもない魔力の薄さに、王女は息が詰まりつつも暫くはこれでなんとか目が見えるかと安堵の吐息をもらした。

前へ足を踏み出し、補佐を頼んだ魔導部隊へと告げる。

「暫く魔力が枯渇していく一方で辛いかもしれないが、補佐の方を宜しく頼む」

微量に食らいはしたものの、見えなくなりつつあればまた近くの

者から食らわねばならない時もあるだろう。敵兵士から奪えなければそうするより他ない。
けれど部下は凛として真っ直ぐに王女を見据え、こう返してきた。
「いえ、姫様、我らのことはお気になさらず」
「すまないな」
王女はすらりと自分の身の丈とそう変わらないような大剣をなんなく抜き去ると、それを手にぶら提げ、何を考えたのか天幕の前に用意された一つだけしっかりとした椅子に腰かけたアデルの元へと出向き、声をかけた。
アデルが何をとうろたえた様子でいる中、王女が口を開く。
「悪いな。俺を恨んでくれて構わない。お前の母親……あいつをこれから殺してくるよ。だから、戦争の所為じゃない。お前の母親が亡くなる理由は俺が殺したからになる。だから……お前は俺を恨めよ。じゃあな」
何故かそれが今生の別れのような言い方に聞こえて、アデルは椅子から反射的に立ちあがると、王女を追って駆けだした。けれど王女がそれを追わせてくれるはずもなく――
「フィーネ!!」
追いすがるようにして伸ばした手は、何も捕まえることも出来ず、中空をからぶったに過ぎない。
王女は部隊の者を引連れ、霧の中に消え失せたようにいつの間にかその場から忽然と姿を消していた。
けれど、どこから聞こえてくるのか、王女の声が砂漠の中だというのにどこから聞こえてきたのか分からないほどに、周囲に木霊し

てその位置を悟らせない。

「フィーネ！戻ってきてくれ！フィーネ！！」

どうしても先に行かせたくはない。当たり前だ、王女はまだ十一と幼いのだ。そんな幼い身で何が出来ると言うのか、アデルには何も出来ないだろうとしか思えなかった。

実母を殺すと言われても、信じられない。というよりも王女の身の方の危険しか考えられもしなかった。王女が死んでしまったら、その心配しかアデルには出来なかったのだ。

それは幼い身を危険に晒すことへの不安なのか、それとも――と考えるが矢張り、答えは出ない。

「フィーネは死んだ。ここに居るのはただの亡霊さ」

フィーネをああまでも追い詰めたのはある意味では王妃だ。王妃がハズルを追い詰めなければフィーネはあそこまで追い詰められ、自害の道を選択せずとも良かった。

フィーネ自身には恨みがなかったためか、ただただ王女は王妃が憎く思う。

それもメルヴィルの話しを聞けば尚更だ。完全な独裁政治、それも自らのためだけに振舞われる身勝手な行いに、王女はただただ嫌悪を募らせていた。

「アイアンバッハ、前へ出ろ！」

「はっ！」

「お前の部隊は俺の部隊の脇を固めろ！行くぞ！全軍、俺に続け！！」

＋＋＋

王妃はまさか大臣が王子を旗手に掲げ反乱を興すとは夢にも思っていなかったため、寝耳に水と近衛兵士たちと逃げだすが、近衛兵士たちはキースが居なくなった後、全く機能しなくなっていた。

それも当たり前だろう。キースが居なくなった後は全て王妃の好みの若い男、それも容姿が整っているという条件のみで集められた、使えない、兵士とは名ばかりのものだけしかいない。

そのため王妃が「守れ」と命じた際、彼らは真っ先に逃げだし、王女に無残にも切り殺された。

命乞いの見苦しいあり様を、金ぴかの傷一つない新品同様の鎧を身に付けた、見目麗しい男が王女へと這いつくばってしてくる。それを王女は怜悧な瞳で射ぬくように見つめていた。どれもこれもが王女の漆黒の瞳に見つめられた途端、竦み上がるようにして首を縮めてどうか命をと請い願う。

「た、助けてくれ!!俺は王妃にただ連れてこられただけで……!!見逃してくれよ!」

「今まで散々甘い汁吸っといて何甘っちょろいこと言ってやがる。お前、王妃になんだかんだと言いつつ仕えてたんだろうが」

それもいやいやではなく、優雅な暮らしを堪能して。

「つ、仕えていたっていっても、ただ侍っていただけで……!ああそうか!こ、これからはきちんと仕える!!アデル皇太子に仕えさせていただきます!!」

「……王妃の傍にありながら、悪政を正す事も出来ず、こうした状況になったらなったで逃げ惑うだけか。これからのエッレミアーラにも同盟国のオルキスにも、そんな臣下、いらねぇんだよッ!!」

リニムの幼い魔女は容赦なかった。
大剣を王女が一線させると、綺麗な弧を描いて男の首が飛び、それにやや遅れて鮮血が舞った。

「あーあぁ、くっだらねえ戦だなあおい？」

王女は胸が悪くなるようだと薄布一枚だけで覆われた薄い胸を掻き毟る。けれどそんなことくらいでこの胸のむかつきがおさまるはずがなかった。

「随分と頭に花が咲いた様な連中だけで構成された場所だったのですね」
「ははっ、確かに、アイアンバッハが言うのが正解だ」

誰も彼もが周りを見ようとはせず目を塞いで生きてきた、そうして出来あがった宮殿なのだろう。

「……だからこそ、胸糞が悪くなるんだがな」

41（伝説の再来）

王妃の悪政を助長した無能な愛人達を一人また一人と切り殺す。ぱたぱたと血が数滴頬に額にと被ってしまったが、それすらも王女を美しく飾り立てているようだった。

目の見える王女に敵など居ない。破れかぶれと突っ込んでくる敵兵士を一振りで薙ぎ払うと、相手の槍を突きいれてきたこれを掴み、奪ってしまう。そしてそれをそのまま相手の腹に見舞ってやればじりじりと敵方は後退していった。

相手は王女の華奢で小さな体躯を鎧込みではあるが、ゆうにふたまわりも大きくしたような姿だ。腕の太さだってひとまわり以上も違う。その細うでで、一体どこにそんな力を隠し持っているというのか、王女はぶんと相手の腕力をはるかに超えた力を出してその胴をやすやすと一太刀のうちに叩き斬っていく。

王女の背後に迫りくる敵を突如地面から生えてきた獣の牙にも似た岩が貫くと、その魔術を発動するために詠唱中、無防備になる背中を守りにアイアンバッハの部隊の者が勇猛果敢に戦った。

「流石、大陸髄一と謳われるだけあるな！リニムの魔導部隊は！」

放たれた矢を剣で払い落しながら敵に頭から突っ込む王女は実に嬉しそうな顔を浮かべている。それが敵には不気味で恐ろしく映ったのだろう、及び腰になっている兵士の姿が見てとれる。事実そうなのだろうが、それだけではなくその有り得ないほどのごうりきを見せつけられれば当たり前に身がすくんでしまったのだろう。誰もが戦いたくないと逃げを請うのがあまりにも無様で――王女は心底あきれ果てた。

散々傍若無人な振る舞いをしてきたというのに、何故今になり、市民の怒りが頂点に達し攻勢に出られたとなれば逃げを取るのか、

甚だ理解出来ない。
まあ今言えることは――
「部下が使えるのはいいことだ」
ということであるが。
「ええ、本当に……ッ！！」
ぶわりと風切り音が耳に煩いと感じれば、アイアンバッハが魔力の付与された自慢の剣で大きく振り被って地面を叩きつけるようにして切ったのだ。文字通り大地を切ったアイアンバッハは、敵兵士の足元まで亀裂がびしりと走ったのを見ると、魔導部隊にちらと目配せをする。魔導部隊はその合図を受けて、その亀裂の底から水の大蛇を生み出した。
「み、水の大蛇！？」
「嘘だろ！？なんてでかさの蛇だ！どんな魔術師なんだ、いったい！？」
魔術師の力は呼び出す事の出来る妖精、精霊の姿、その大きさに尽きると言っても過言ではない。通常この大陸に居る魔術師で、水場でもないのに水の精を持つものを呼び出そうとなると相当な魔力量を要するため、水の蜥蜴、もしくは水の蛇や、小さな龍程度は呼び出す事が出来るだろうが、人の身の丈ほどの大きさなど、到底呼び出す事は適わない。にもかかわらずに今呼び出され、敵兵士をその身の中にぱっくりと飲み込んでしまった大蛇の大きさは、大の男が三人、腕を繋いで輪になったくらいの大きさの胴回り。そしてその頭部にいたっては樽を楽々飲み込んでしまえるような顎を持っているのだから相当な大きさだろう。敵兵士をぱくりと咥え、ひょい

と持ち上げてごくりと飲みほしてしまったのだからそれも分かると言うものである。
なんて大きな魔力を持っているやつがいるんだと敵兵士が怯むが、それが恐ろしいことに一人でないことに気がついたようだ。
水だけではなく、火龍が巨大な炎を敵方に向けてまきちらし始めたのだ。

「わあああ！！」

悲鳴がそこかしこで上がる。一体こいつらは何者なんだ！？エッレミアーラ近衛兵の間に激震が走る。彼らの中に――いや、オルキスの中に、異様に強い部隊がいる！
そしてそれを率いているのはリニムの魔女であるという事実。これは敵陣をおおいに揺るがす事に成功した。

「リニムの魔女だ！」
「こ、殺されるっ！！」
「勝てっこねえ……勝てるはずがねえんだよ！！あんな化け物どもに、……こ、殺されてたまっか！！」

リニムの魔女の伝説は今もこの大陸に根深く残っている。
白い装束を纏い、射干玉の髪と揃いの漆黒の瞳。装束とかわらぬほどに白い肌。そこに一たび戦が始まると、血化粧を全身に浴びて美しく紅色に輝くのだという。
流石に誇張もあるだろうが、一個大隊を壊滅に追い込むのにかかった時間はそうはないとも言われている。
剣を二度とふるえないように両腕を落とされた男が語る実際のリニムの魔女は、それはそれは美しい乙女なのだという。
リニムせん滅のあの戦より、その存在は確認されていなかった。
いや、実はリニムが消えたことを偲ぶ旅人や、芸事をして街を点々

として生活をしている芸人達が、面白おかしく脚色した話しでリニムを美化して語っているのだとも思っていたことだろう。リニムが滅ぶその前に、そうした鬼神のごとき乙女が舞い降り、戦ったのだと。リニムは最後まで戦い、そして滅んだと、小説のように語り口を広げてみただけに過ぎないと誰しも考えていたところがあった。

だが今、その伝説を目の当たりにすれば誰もがあの男の語った姿はまさしく本当だったのだと思うことしか出来ない。

嘘なんかじゃない、物語でも単なる伝承でもなく、リニムの魔女は存在したのだと。

血化粧を纏った王女が飛翔する。

「勘違いするなよ？誰が逃がしてやるって言った」

逃れようもない恐怖の中駆けていた男は、甲冑に初めての傷をつけられ呆気なく死んでいった。

噴き出した血を浴びる前に王女は前へと突き進む。

誰にも振りかえられることなくただ無残にも殺された男は、誰に看取られることなく、この後、大量の他の死体と共に葬り去られることとなる。例え身元が分かったとしても、王妃の悪政を止めなかった者として身内からも逆賊扱いを受けたため、そうするより他無かったのだ。

「神よ、今日、貴方の元へ沢山の迷い子が参ります。そこには罪深き者も多いでしょう。ですがその者達をどうか導いてやって欲しいのです。……皆、哀れな者達なのですから」

アデルは祈った。何も出来ず、何一つ今まで責務を果たせなかったことに気づき、そしてそんな己を恥いった。

「その者達は私と一緒です。母を正しき道へと導くことが敵わなか

った、もう一人の私なのです。どうか、どうか神よ……彼らをその懐にて優しくお包みください」

味方も多く死ぬだろう。だが、王妃についた者達の死はそれ全て、避けられぬものである。

ならばより多く死に、その死すらも国民の受け入れて貰うことさえできないだろう死に、せめてアデルだけは受け入れ、祈ろうと思った。

アデルには、そうすることしか出来ないのだから。

42（四人の王妃）

無駄にだだっ広い通路を幾つも通り抜ければ巨大な扉が見えてきた。

この宮殿の中で一番大きな扉――それも一番派手に作られ、他国の者の謁見すらもここで行う、だからこそ一番大きく、一番豪奢な扉がそれだ。

間違いない、あれこそが玉座の間に続く扉だろうと王女とアイアンバッハは観音開きの扉の左右に割れて扉の影に身を顰める。

「居るな」

「……ええ、中に人の気配があります。少なくとも、誰か一人はおりましょう」

ちゃきりと剣の持ち手を握り直し、いざ――と腰を浮かせたところで追いついてきた者があった。シーヴェスとメルヴィルである。小隊を連れて内部へと潜入したようだ。他の隊は全てこの宮殿内を捜索に当たっているのだという。

「ほう。見事に傷一つ負っていないか。流石だな、リニムの部隊は精鋭ぞろいで羨ましい限りだぞ」

「お褒めにあずかり恐縮だな。で？俺がやっていいんだろ？」

王妃の命のやりとりを、実に気軽に王女は訊ねる。するとシーヴェスは誰がやっても同じだろうから構わんと一言だけ告げた。

「では、突入しますか」

こちらも実にのんきな言い草をすると内心部下達は呆れたものだ

ったが、本人はこれで普通なのか、メルヴィルはアイアンバッハと共に扉を蹴破った。

扉が勢いよく開くと、そのまま王女とシーヴェスが先陣を切って突き進む。それを追って全員が玉座の間へと雪崩れこんだ。

「これは……」

アイアンバッハが息を飲んだのが分かった。

「こ、殺さないでくださいまし」
「堪忍してくださいませ」
「無礼であるぞ！こ……ここを、なんだと思うておる！！」
「助けてたもれ」

玉座から身を隠すようにして女が四人、そこには居た。

＋＋＋

どれもこれも女達は煌びやかな衣装を身に纏っているため、衣装の差で誰がとは見分けがつかない。ついでに言うなれば女達は皆一様にただただ怯えまどうだけで王妃はどこにいるか、などの問いにも答えることが出来ないのだ。

「いや、そもそもこの中に王妃は居るのか？」
「居る」

断言するは王女である。

「その心は？」
「あのいやな気配がするからだ。俺は一度会ったことがある人間の気配は忘れない。それが例え、目の見えない間のことであろうとも、意識が半ばないような状態であろうとも、覚えているさ」

半覚醒であったことが良かったのだろう、王女は王妃の気配を覚えていた。だが、こうまとまって怯えているだけで、更には他の三人が王妃はこいつです！との告発もないのでは、王女以外に王妃を見分けられようはずもない。

シーヴェスはふむと口元に手をあてて考え込むと、ああと何かに気がついたように声を上げる。

「どうかしたのか？」
「いやな、分かったんだ」
「何が？」
「恐らく他の三人は知らんのだろうな。王妃の姿も、声も形も全て。だからこそ王妃が分からんでただの哀れな女が一緒にここに籠められていると思っている」
「ああ……道理で」

他の女達からの密告のような真似もないわけだと王女も首肯している。単に怯え惑っているにしては、確かにおかしいものは感じていたため皆得心がいったようである。

だがしかし、ならばなおのことどのようにすればいいのかと女達を取り囲んだ部下は戸惑う様な視線を向けてくる。

「……安心しろ。俺があぶり出してやるから」

王女は微笑みを浮かべて女達の方へと足を向け、一歩を踏み出した。

「なっ、何をするつもり!?」
「近寄らないで!!」
近づいてきた王女に全員がびくびくと怯えた様子で声を上げる。
「まあそう怯えるなよ。話しがしたいだけさ」
そう言いつつ王女は一人の手を取り立たせると、いい香水の匂いだなと告げた。
「え……ええ、これは、……この国の今流行りの物だっていただいたものなの」
「そうなのか」
王女は愛想よく頷きながら腕を引いた女をそのままアイアンバッハに渡す。
次に腕を引いたのは玉座よりも一番遠くの女だ。通り抜ける様にして置き去りにされた女二人が王女を見つめ、そして一人は直ぐに視線を外した。
「綺麗な髪をしてるな。――ああ、そう怯えなくてもいい。戦場を駆けてきたからな、血がついてるだけだ。でも、後宮の女達を助けるために駆けてきたからなんだ。だから好きでこんなところに俺は居るわけじゃないんだぞ?」
無害そうに王女がそう告げれば女は本当にと目で問うが、王女は戦場で大剣を振りまわしてでも居ない限り、誰も間違っても敵をああも軽々と吹き飛ばすほどの強力の持ち主には見えない。だから女も直ぐに納得した様子で頷きを返した。

「お前、後宮から連れて来られたんだろう？」
「ええ」
「怖かったろう、もう大丈夫だからな」
王女はそれだけ言うと、そのままシーヴェスへとこれも預けてしまう。
そしてまた腕を伸ばして一人の女を引き寄せると、その美しさを褒め称えつつ、あまり怯えないで欲しいと悲しげな眼差しで訴えた。
「お前を害しにきたわけじゃない。信じて欲しい」
目だけでもそれと美しい少女と分かる王女の姿に、女は心揺り動かされる。
美少女が悲しげな訴える様な瞳で見つめてくる姿が、なんとも心に響いたのだ。
王女は三人目をメルヴィルに手渡すと、残る女をじっと見据えて口を開いた。
「いい香水をつけているな。いや、……それとも白粉の匂いかな？」
「……高級なものを、賜りましたので」
女はぎしりと音を立てるほどに爪を立てて玉座の手すりに力をかけた。
玉座から手を離そうとしない女を見て、王女は目を細め、冷たく見下ろした。
「名前は聞いていなかったんだよな。あの日も、それからアデルからも」

女はアデルの名に、肩をびくりと揺らす。

「個人ではなくて『王妃』としてしか認識されていないわけか。中々悲しいな、お前。けどな、暫くの間、面白おかしく生きれたんだから、いいよな？今更命乞いなんてしないだろう？」

「何を言っているのか、分かりませんが」

女はぶるぶると震えながら口を開くが、それは怯えからくるそれではなくて、怒りからくるそれのようである。女の頬が紅潮していくのを王女は静かに観察していた。

「お前の顔を知らない女を三人も連れてきて、あわよくば自分はそいつらに紛れてトンズラか？世の中そんなに上手くいかないんだぞ？――アイアンバッハ、王妃は玉座から必死になって手を離そうともせず、醜くもしがみつき続けているこの女だ。他はいらん。女の前で殺生をするのは気が進まんからな、さっさと連れていけ」

「御意」

アイアンバッハは息を飲む三人をよそにそのままこの場を後にすると、王女は王妃と思しき女を前に何か言うことはと訊ねた。すると女はこう言うのだ。

「私が王妃!?そんなはずないわ!ほ、他の三人かもしれないじゃないの!?もっと良く調べることがあるでしょう!?」

早く他の三人を呼び戻せとばかりに金切り声で叫ぶ女に、王女は溜息混じりに答えてやった。

「あんた、フィーネを後宮に一度、連れていったことがあったろう？その時の記憶が俺にはうろおぼえだがあるのさ。香水の匂い、そ

れに混じった体臭、そしてその気配。ああそうだ、その声もそうだな。いくら取り繕ってどうにか口調を変えてみたとしてもな、一度聞けばその声は忘れることはないだろう。美しい声の中に女特有の棘のある声。女にしては低く、そして艶のない――耳障りな雑音混じりのその声を、俺はよく覚えている」

「まさか、お前は……」

女が驚愕に目を剥いて叫ぶ。

「お前、お前はフィーネなのかえ!?」

わなわなと震える女に、王女はそこで漸く顔を覆う布を取り払い、改めて挨拶をしてやった。

「こうして口をきくのは初めてだな。はじめまして、エッレミアーラの王妃。先日ハズルの娘、フィーネの身代わりで無理やり連れてこられた『イリヤ』だ。そして初めましての挨拶もそこそこにさよならだ」

王女はそれだけ言うと、じゃきりと剣を王妃の首に当ててこう聞いた。

「――何か言い残す事はないか?」

腰が砕けた女――王妃にそう訊ねると、王妃は歯をぎしりと鳴らしながら叫ぶ。

「この、化け物めが!奴隷の分際で……!!消えりゃ!!」

言い終わらぬうちに王女は王妃を切って捨てた。

そして剣を鞘へと仕舞う際、自嘲気味に王女は笑って言った。

「そうさ、俺は化け物さ」

43（思い出だけ残して）

今度こそ王女は返り血を全てその身で受けると、戻ってきたアイアンバッハの気配を感じ、短く一言だけ、「帰るぞ」と告げた。アイアンバッハはその頬から血のりを拭うとそのまま王女について玉座の間を後にしだす。部下達もそれに続くが、それを慌てて追ってきたのはシーヴェスだった。

「おい、ルクレティアナ」

「ああ……そうだ、お前、……お前もアッシュって呼べ。なんかお前にルクレティアナって呼ばれるの、面倒だ」

「……よく、分からんが――兎に角これを巻け」

シーヴェスは外套を肩から外すと、そのまま王女の全身を包むようにして巻きつける。大人しくされるがままでいた王女は、全身を包むシーヴェスの匂いに苦笑すると、「妙な感じだな」と言った。

「妙でも構わん。そのままのお前を歩かせていいとは俺も思っていないということだ」

「なんだよ、それ」

シーヴェスはそれには答えず王女を足元からすくい取るようにして持ちあげると、そのまま腕の上に抱えて歩く。王女の髪も瞳も、今は外套の中にすっぽりと覆われてしまっていて、その色は見えない。

「ルクレティアナ……では、ないんだったな。アッシュ」

「なんだ、シーヴェス」

「そのシーヴェスと呼ぶのを止めろ」
「……じゃあ、何て呼べば？」
「シヴァだ。メルも二人きりの時にはそう呼ぶ。お前の名と交換だ。お前も俺をそう呼ぶといい」

これはシーヴェスなりの好意の示し方か、それともこちらからの提案に対する、彼なりの誠意の示し方なのか――それは分からなかったが、王女は有難く受け取っておくことにした。

「シヴァ、これでお前には同盟国が一つ出来たことになるわけだな」
「ああ。それと、隠れ蓑の確保も一つだが、出来たことになる」
「エッレミアーラはこれで何とかなると思うか？」
「さあな。それはあの皇太子次第だろう。だが、何とかなるだろうと俺は確信しているぞ？」
「へえ……いやに意味深な発言だな。根拠はあるのかよ？」

王女が訊ねれば、シーヴェスはそのまま歩き、宮殿の扉を開け放ち、城下街を見下ろして顎をしゃくってみせた。
眼下に広がる景色は、人々の喜ぶ顔、嬉しさに咽び泣く親子の姿――そして交代劇を済ませたばかりの皇太子と大臣がもろ手を上げて歓迎されている、その光景が広がっていた。
シーヴェスはそれを王女に見せると、あれが答えだと口を開いた。その言葉が、どこか自慢げに聞こえて、王女は声を上げて笑ってしまった。

「まるでお前の国のような言い草だな」
「俺のものではないが、それでもこれは、俺達の戦果だ。そうだろう？アッシュ」
「……ああ、なるほどな。それなら違いない」

この勝利を間違いなく勝ち取ったのは、王女達オルキスの者なのだから。

＋＋＋

全てが済んだ後、シーヴェスも王女もこの後の手続きやなんやかんやはある程度済ませると、今後の復興に向けた外交には関わらずということのようで、メルヴィルとその補佐を数名残し、オルキスへと帰ることになった。

「あちらもそう長くは留守に出来んからな」

「違いない。いい加減にセネカにかけた魔術も効力が薄まっているはずだからな。そっちも心配だし、俺も早く戻りたい」

影武者をやらせっぱなしでひと月近くもオルキスにいるセネカのことが心配で、王女は本当は一人ででも帰ってしまいたかったが、そういうわけにもいかず――結局シーヴェスの仕事がある程度済むまでは待ち、それから戻ることになった。

因みに帰りはデュベルではなく、使用するのは地下にあるリニムの超古代遺産を使用するが決まっていたが、これこそがシーヴェスが先日言っていた『隠れ蓑の確保』にあたる。

魔石は全て地下で繋がっているのだが、詳しい話しはさておいても、これを利用することにより、魔石と魔石を繋ぐ線上であれば、移動が自由に出来るのだ。けれどこれが自由にというわけにはいかない。列記としたリニムの魔石技術者である、直系の子孫――つまりはリニム王家の者のみが使用できる魔術の一つがこれなのだ。

王女は宮殿の中庭にオルキスの配下を全て集めると、メルヴィル達のデュベルを懐にしっかと携え帰りは安心しろと告げた。

帰り道はデュベルとは別で用意はしてあるものの、それでも何かあれば呼び出す必要性もあろうということで――これは所謂保険、だった。

「ええ。それは勿論ですよ。殿下が呼びよせてくださるのでしたら安心ですから」

「お前達も大変かもしれないが、オルキスとエッレミアーラの同盟のために、頑張ってくれ」

「ええ、この身にかえましても」

ではと王女がオルキスに帰る者以外を中庭より下がらせると、中庭の中央――花が咲き誇る地面に拳を突きいれた。すると周囲に見た事もない文字が突如として浮かび上がり、輪を結び始める。それは次第に王女達全員を包み込むほどの巨大な輪となり地面に描きこまれていき、足元から青白い光がきらきらと眩しいほどに溢れだしてくる。

さあ帰ろう――王女が魔力を更にこめて全員を転移させるべく力を放とうとしたその時のことである。中庭にアデルが飛びこんできた。

「待ってください、フィーネ!!――その、何と言ったらいいか……まだ、分からないことだらけだが、君は」

口ごもりながらも必死で言葉を紡ごうとする様は、何故か妙に痛々しくも映り、王女は何故か悪いことをしてしまったような気がした。けれど未だに自分のことをフィーネと呼びかわすアデルに、王女はどうすることも、そして何をすることも出来ない。

「エッレミアーラの王子――いや、もう国王陛下と呼ぶべきか。これは俺の物だ。欲しくば自力で取りに来い。アッシュ、やってくれ」

「……勝手なことを。俺は物かっつーの」

そう言いつつも王女は陣を更に細かく調整に入った。移動先をオルキスにするために、大陸中の魔石の位置を読みとっていく。だが、これが存外簡単なことだった。オルキスの魔石、そしてエッレミアーラの魔石、そしてリニムの魔石以外には、どこも最早死にかけているため、他の反応が薄い。そのためオルキスの位置を特定するのにそこまでの時間を要しなかった。

王女は言った。

「フィーネは幻だったんだよ。それに、お前のフィーネは死んだ。もうどこにもいない。忘れろ、アデル。それにな、縁があればまた会うんじゃないか。お前とはそんな気がする」

「おい、アッシュ」

シーヴェスがくいと顎をしゃくるのを見て、王女はもう済ませると頷く。

「お前ならまた子供を授かれる。大丈夫さ。きっと今度こそあの最悪な婆に負けない強くてお前を優しく包んでくれるくらい、器のでかい嫁さんが現れるはずだ。今までの嫁さんは皆心を病んでたみたいだが、今度こそどうにかなる。きっとお前なら大丈夫――だから、フィーネのことはもう忘れろ。じゃあな」

「忘れられっこないだろう、フィーネ！」

アデルが王女の元へ駆けてくるが、それよりも早く王女は陣を使い、オルキスへ向けて飛んでしまった。

後に残されたものは、何一つ――それこそ塵一つない。

「……君は酷い人だね」

思い出だけを残して、いってしまうだなんて。

４４（ハレムの王は魔女を所望す）

「いいのか、アデル」
「いいって、何が？」

執務中に話しかけられ机に張り付いていた視線を引きはがすようにしてあげてみると、そこにあったのはなんだか辛そうに見える目だった。

「エリオル？」
「早く嫁を娶れって話しだよ」
「……よく、意味が分からないんだけど」

確かに縁談はあれからひっきりなしに持ち上がっているし、早く後継ぎをと大臣達からもせっつかれてはいる。けれど直ぐにそんなものを決めて、また面倒なことにならないとも限らないため、中々決めあぐねているわけなのだが――それを知っていてその発言はないのではないかと首を傾げれば、重苦しい溜息が返ってきた。

「いや、いいよ。俺が悪かった」
「？」

アデルが首を傾げていれば執務室に来訪を告げる鐘が鳴らされる。

「誰だろうね？」

待っていれば入ってきたのはメルヴィルだった。

「執務中申し訳ありませんが、オルキスへ我々もそろそろ帰りまし

ょうかと思いましてね。お暇を告げるために参上しました」
「あ、ああ……」
「つきましては門を固定化させていただきますので、その許可を先日いただいたものの写しと……そして我々の方の写しを持って参りましたので、保管なさっていただければと思います」
「門の、固定化……」

一体何の話しだったかとアデルが内心で首を傾げていれば、エリオルが額をぴしゃりと打って呪いの言葉を吐き捨てた。

「お前、説明を受けたろうが！！」
「い、一応、聞いたはずだけど」

オルキスの名が出ると、どうしても駄目だった。何故か言葉も、文面も、頭の中に入ってこなくなってしまうのだ。
項垂れるようにしていれば、メルヴィルが愛想よく答えてくれた。
門の固定化とは、オルキスとエッレミアーラの行きき自由に出来る入口を作るというものである。王女の力により地上にそれを作ってしまう。そこからは自由に移動が出来、何十日もかけて移動をせねばならないこの両国間の移動を、完全になくするということだった。

「ただし、我々も少々こみいった事情がありまして……国同士で行きき自由といいますよりも、我々のシーヴェス殿下とこちらの王宮とを繋ぐ道ととっていただければ構いません。それと、魔石が調子が悪い際なども、ルクレティアナ殿下にも直通で繋がっておりますので、即座に対応をしていただけることにもなりますし、そういった観点からみてもそちら側には悪い話しではないということでした。ただ、これは大前提ですが、我々の有事の際の要請に関しましても、同様に即座の対応をしていただければと願い出るための門の固定化であ

りますので……」

ここまで話しを聞いて、アデルはがたんと音をさせて椅子を倒すと、メルヴィルにどこに門はあるのかと迫った。

「それは……玉座の、裏の……入口に作ると」

アデルはそこまで聞くと駆けだしていた。

「アデル」

「何！？」

執務室を鬼気迫る表情で飛び出していこうとしている弟に声をかけると、エリオルは何かを放り投げてよこした。アデルはそれを受け取ると、首を傾げてそれを見つめる。

「三日で戻ってこい。ちゃんと口説き落としてくるんだぞ？」

「あ……ああ！分かった！」

執務室を脱走したアデルに、メルヴィルはやれやれと肩を竦めて見せる。

「お若いですね」

「まあな。三十路過ぎてたかどうだかは分からんが、中身は実に青臭い」

「そのようです。――それはいいとして、先ほど何を投げたんです？」

「ああ、あれか？」

王女は手足を覆う男もののはき物を纏って紅茶を啜っていたところで、突如室内に飛び込んできた男を見て、あんぐりと口をあけてしまった。

「お、まえ……どうしてここに?!」

ぜぇはぁと息も絶え絶えに男は言った。

「きちゃいました」

それだけ告げると男――アデルは王女の足元に跪き、周囲の目も気にせず先ほど受け取ったそれを手渡し、告げる。

「口説き落としにきましたよ」

「ちょ、ちょちょ、ちょっと待てよ!だから、俺は身代わりであそこに入れられたんであってだな!というか、まともな女を嫁にしろよ!」

慌てふためきながら王女はそう叫ぶも、アデルはいっかな引こうとしない。

「だって貴女は言ったじゃないですか。『今度こそ強い嫁が現れる』って。ね?あなた以外に居ないですよ。私の運命の人は貴女です」

差し出したそれは小さな化粧箱に入れられた、美しい宝冠だ。それは国王の脇に侍る、妻の額を飾るもの。

「お、おおおおおい、シヴァ!!何とかしろ!」

「お断りだ」

ずぞぞと紅茶を啜りながら窓の外の景色は最高だと棒読みで告げるシーヴェスに蹴りをくれると王女は今度はアイアンバッハに向き直る。

「アイアンバッハ！助けてくれ！」
「実に……美しい宝冠ですねぇ……」
「何うっとりしてるのこの人！？」
「姫様、この額当て可愛いですね～。たぶん姫様にすーっごく似合うと思います」
「天使の微笑みを浮かべていらっしゃる！？セネカさん！？俺に嫁にいけと言うの！？」
「もういただけるものだけいただけばいいんじゃないんですかね？」
「一番腹黒いこと言ってるのがミシェルだと誰が思うだろうか！」

俺が居ない一か月の間に随分とすれたなと王女が言うものの、ミシェルは素知らぬ顔をして紅茶を楽しんでいる。
そんな慌てふためいている王女を眺めているアデルの顔は、暫くぶりに見る晴れやかさだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1436w/

亡国の奴隷王女

2011年12月18日12時49分発行